

Lv.0の魔道士 re

蓮根畠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——特典貰つたけど困難に正面衝突するL.V.Oの魔道士

1

次

L V. 8	L V. 7	L V. 6	L V. 5	L V. 4	L V. 3	L V. 2	L V. 1	L V. ?
不幸	一難去つて？	反逆	何かがおかしい	初クエスト	決着	歓迎会（物理）	冒險の始まり	いつの日か
80	71	58	49	39	31	16	8	1

幽鬼の支配者編

バトル・オブ・フェアリーテイル 編

L v. 3 5	L v. 3 4	バ トル・ オブ・ フェアリーテイル	365	L v. 3 3	L v. 3 2	334	L v. 3 1	L v. 3 0	L v. 2 9	L v. 2 8	292	
サボリ魔	小休憩	編		決着	再確認		終わらない戦い	挑む者		静かな意志		
				∞ キャラクター説明の会！			コンビネーション					
377	369					355	344			323	314	304

L V. 4 6	L V. 4 5	L V. 4 4	L V. 4 3	L V. 4 2	L V. 4 1	L V. 3 9	L V. 3 8	L V. 3 7	L V. 3 6
開闢の星	決死決戦	目的	撤退	黄金の男	結集	次の始まり	天災	力の差	竜に愛された少女
472	464	455	448	438	431	421	413	384	
406	398								

L V. 5 6	エ ドラ ス編	L V. 5 5	551	L V. 5 4	543	L V. 5 3	L V. 5 2	L V. 5 1	L V. 4 9	L V. 4 8	L V. 4 7
次へと向かうその前に	罪			竜は踊り星は瞬く		希望の炎は闇へと潜る	狂乱の宴	何度でも	再び	覚醒	黒獣の咆哮
565											
533	521	513	502	492	483						

星帶遡行 フリンガル

黄金に燃ゆる黒

L V. ? いつの日か

いつぞやの夕べ。

もはや恒例と化したナツとグレイによる「突撃！ジョニイの晩御飯！」は今日も行われていた。グレイが買ってきた酒を飲み、少しほろ酔い状態になつたせいかこんな質問をしてきた。

同じタイミングでも妖精の尻尾の女子寮にて、ジョニイのように突撃されたわけでもないがお菓子やジユースを用意してエルザ、レビィ、ルーシー、サクラ、カナ、リサーナ、ジユビアなどなど、キヤツキヤツウフフと話を盛り上げていた。そして女子といえば恋愛トーク。時計の針は12時を超えて深夜テンションというのか、カナが頬を赤く染めた状態で勢いよく質問した。

「なあ、ジョニイはサクラのことが好きなのか？」
「ねえ、サクラはジョニイのことが好きなの!?」

一方は、口に含んでいた酒を垂らしながら。
もう一方は、キヨトンとした顔で。

「・・・は?」

同じ日、同じタイミングで同じ質問、同じ返答。これを運命と言わず何というか。
この話は外伝と呼ばれるもの。物語に綴られることができなかつたもう一つの物語だ。

星帶遡行 フリンガル
黄金に燃ゆる黒

「我々は長く生きすぎた」

どこか知らない暗闇。

そこを照らすのはホコリかがつた大理石の机の上に一本だけ佇む蠅燭のみ。その蠅燭も蠅はほとんど溶け、支えとなつていて皿にほとんど流れ、あと1分も経たずに消えることは明らかだつた。暗闇を照らすには少なすぎる光量。一寸先も見えない闇の中から傷だらけ、そして歳によるせいか皺が入つた手が蠅燭を支えている皿を持ち上げた。蠅燭の火が近づいたお陰で皿を持ち上げた腕の持ち主の顔が見えた。その顔は腕と同じように傷だらけ、皺だらけ。目は病によるものか瞳が白に変色していた。眉毛や鬚はろくに手をつけられていないのかボサボサに生え真っ白。何も知らない人から見たら100歳をゆうに超えているだろうと思うだろう。本当に100歳を超えているとは誰も思わないだろうが。

「この蠅燭も人も皆『命』持つている。蠅燭は蠅のなくなる瞬間まで、人は寿命を迎えるまで・・・」

老人の手が蠅燭に近づく。すると時間が巻き戻るかのように皿に流れ落ちた蠅が、蠅燭を辿り戻つてゆく。近づけた手を離す頃には残り2cmもなかつた蠅燭が15cm

程に。火をつけた時のほとんど同じ状態に巻き戻っていた。

「例え時を巻き戻してもそれは同じ。同じように限界が来る。我々と同じように」

時間遡行。それは竜と人の戦いにおいてウルティアが使った時のアークと全く同じ。対象だけを巻き戻すことによって、巻き戻した分だけかかる負積を軽減したのだ。しかしそれでもおかしい。ウルティアは1分巻き戻すのにほとんどの寿命を使つたりのに対し、老人は対象を一つにすることで5分の時間を巻き戻したがそれでも負積は重い。100をゆうに越えている老人であれば使つた直後に即死もあり得るというのに。だがそんなものは気にせんと言わんばかりに老人は話を続けた。

「我々は計画のために長く、長く長く生きた。人間が使つてはならぬ薬を使い、未知の鉱石を使い、魔法を使つた」

蠟燭の灯りが老人の魔法により大きくなつた。闇を照らし机を囲んでいた人影の姿も露わになる。

一人は片腕と片目をなくし、腰に吊り下げた鎧びた二刀の短剣がかつて冒険者だつたと思わせる老人が。

一人は両目を潰され、体全体に切り傷を負つた老人が。

一人は片脚をなくし、胸に鎧びた黄金のペンドントを付ける老婆が。

一人は叡智を思わせる目をした、白い鱗を持つた竜人が。

一人は両脚をなくし、車椅子に乗りながらも目を爛々と燃ゆる悪魔が。

「魔法とは何か？私が思うに魔法とは正を目指すことを言う」

炎が辺りを照らし、物を焼く力を持つように。水が生きるために使われるよう。土が作物を育てる力を持つように。風が正しき道を照らすように。

「魔法とは正を重んずることだと、長年思つた。だが我々にとつて正なる魔法とは何か」魔法が正を行くもの。ならば寿命をとつくに通り過ぎたものにとつての治療の魔法とは何だろうか？妖精の尻尾の魔導師の一人であるウエンディ・マーベルは世にも珍しい治癒魔法を使えるが、それはこの老人とて出来ること。治癒とは体に負った傷や、病気が治ることを言う。

「そう。君達も気づいているように我々にとつて正なる魔法とは安らかな死なのだ」

限界を超えて死を無理矢理超えてしまったものには安らかな死をもつて苦しまずに死を迎えることが何よりも正しい。だがそれではダメだと老人は見た目からは予想できない力で机を叩いた。

「我々は計画を成功させるまでは生きると決めた。その為ならどんな悪逆でも染まると決めた」

こんな所で死ぬわけにはいかない。

弱々しい言葉と裏腹に、魂にこびりつくような熱を感じた。

「妖精の心臓フェアリー・ハートではダメだつた。魔力は足りるが、アレを発動するためには一度に多くの魔力を注ぎ込まなければならなかつた。それから考えて考えて考へた。が、何も思ひ浮かばなかつた。まさしく絶望。だがついに神は我々を味方した」

老人はおぼつかない手で纏つたローブの中から黒い丸薬が入つた瓶を取り出した。

「我々は正に行くことはもう出来ない。ならば負を行くだけだ。だがこれを飲むのには覚悟して欲しい。正が癒しであるなら、負は痛みだ。この世のありとあらゆる苦痛を飲んだ瞬間に味わい、負の命が尽きるまで続く。発狂死してもおかしくはないだろう。だが!!それでも!!己が願い、悲願を死を超えてでも望むと言うのならば!!」

——私に付いてくれ

5人が無い足を使い、千切れた腕を使い丸薬に手を伸ばす。

「我々は道は違えど願いは同じ。ならば拒む理由は一切なし。その身が尽きるまで汝に付き合おう」

暗闇を照らす蠟燭によつて一枚の写真が照らされた。過去に撮つたものなのかな少し

黄ばんでいるが顔は見て取れた。絹のように白く滑らかな髪。瞳は本人を表しているかのような明るい黄色。腰には赤の鞘で包まれた刀を差し、腕には紋章が刻まれていた。

鉄の森 編

L v. 1 冒險の始まり

俺はバカみたいにデカいリュックと、キャリーケースを持つてとある国まで來ていた。

マグノリアと呼ばれる国はある漫画のファンならピンと分かるほどの国である。

人口は6万人と小規模だが町の賑わいは元俺が住んでいた東京にも負けない。

飲酒は俺が元々住んでいた日本と違い「15歳からオーケー」と言うが前世から「お酒は二十歳から」というのが頭に染みつき未だに飲んだことはない。というかあまり好きじゃない。

さて、俺がマグノリアに来たかというと目の前にそびえ立つ木組みで作られたギルド。

名前を「妖精の尻尾」という。

俺は一度大きく呼吸をし、ギルドのドアに手をかけた。

中からは喧騒が聞こえてくる。

正に原作通りだな、と口元は笑っているが内心、心臓はバクバクとドランゴールのようになっていた。

履歴書はちゃんと持つている。大丈夫、完璧だ。

と言つても原作を見た限りだと履歴書もなにもいらぬそうちだつたが……ああ、そうだ。

説明し忘れていたが、この俺、「ジョニー・アルバート」は転生者というやつだ。

俺の説明をしよう。

俺は一度死んだ。比喩ではない。マジだ。

死因は覚えていないが日本の何処かの県に産まれて、のんびりと暮らしていた。それなりの人生を送つていた俺だつたが、いつの日か真っ白な部屋にいた。

あの光景は鮮明に覚えている。

そんな白い世界の中に凄く偉そうな人が俺の前に立つていた。

それはとても美しい人だつた。

モナリザという作品があるがそれを遥かに凌駕する美しく、綺麗だつた。

そんな美しい人は俺を見て一言言つた。

「——お前は死んだ」

でしようね。

と同時の俺は思つた。

そりや、こんな白い世界にいたら誰でも死んだと思うわ。

俺は何か突つ立てるのも何だか恥ずかしかつたので正座して話を聞くことにした。
で5分間ぐらい話を聞いてわかつたのが

・真っ白な世界は死と生の境目の世界

・目の前にいる人は神様

・お前は死んだ。

・死んだ理由? んなのどうでもいいだろ

・情けで何かやるよ。3つぐらい。

・お前が行くのフェアリーテイル世界

・前世の記憶は消される

・・・つつこみみたい箇所が10箇所ぐらいあつたが堪えることにした。
何故フェアリーテイル? と聞いたらサイコロで決まつたとの事。

結構軽く決め

ちやつてるのね。

どうしようもないでの仕方なく納得し、特典とやらを決めようと思つた俺だがフェアリーテイルの単語をふと思い出して頭を悩ませた。

フェアリーテイルって死亡率高くね?

フェアリーテイルは週刊少年マガジンに掲載されているバトル漫画である。

滅竜魔法を使う主人公、ナツ・ドラグニルとその仲間たちの笑いあり、涙あり、時にはポロリもある熱い冒険だ。

——しかしだ!

フェアリーテイルはれつきとしたバトル漫画である!

そんな世界に前世で帰宅部所属の俺が行けばどうなるか? 答えは簡単、死ぬ!

まあ、主人公達がいるところに行かなればいいのだがバトル漫画の定番として最終章に突入したらだいたい世界が巻き込まれてしまつたため隠れても無駄なのだ。

その為俺はありとあらゆる漫画知識を総動員させジャンプとヤンジャン、そしてラノベに至るまでに出てきた技や魔眼、魔剣などを思い出した。

その結果、考え付いたのが……

- ・写輪眼

- ・神様が作つた凄い武器
- ・すこぶる丈夫な体
- という3つ。

何故この3つを選んだのか説明しよう。

写輪眼：相手の技をコピー（ただし出来ないものもある）、先読み、目を見ただけで相手を幻術に嵌めたり出来る超高性能の目である。目がえぐられたら即終了だが……ついでに元ネタはナルトという漫画だ。

別作品ではあるが相手の死の線を見たり、目にに関することならなんでも出来る目があつたがデメリットが大きいので却下させて貰った。

そして武器。この武器であるがこれは神様頼りだ。だつて神様が作つた武器つて強そうだし。俺だつてエクスカリバーとか「〇〇斬リツツ！」と叫んで見たいお年頃なんだ。

そして3つめ。丈夫な体。

F A I L Y T A I Lの人たちの体は金属かなんかで出来てるんじやないのか？というぐらい丈夫。顎殴られても立つてからね？もう人間超越してるよあいつら。

というか3つだけじゃなく異世界チートの主人公並みの力が欲しかったなあ・・・！

そして無事転生した俺は名前がジョニイ・アルバートと名付けられていた。ジョニイと聞いて某奇妙な冒険のように爪飛ばせるか試したが何も出なかつたことは地味にシヨツクを受けたりした。

転生してからも困難が続いた。生前帰宅部だつた俺に秘密結社の戦いや、世界をかけた死闘なんてもちろんなかつたのでヒヨロヒヨロだつた。

そしてその二。魔力が少ない。

これに関してはびっくりした。主人公ナツよりもはるかに少ない。

俺よりルーシイの方がおそらく魔力が高いとか言う悲しい真実。

神様ア・ もつとサービスしてくれよ。

しかし死亡率高めのフェアリーテイル。

俺は死ぬ気で頑張つた。

俺の住んでいた家から近い実戦形式に近い格闘術を教わり、結構上の方の魔法学校も卒業した。

魔法学校を卒業した俺は親の意見を押し切りフェアリーテイルに入団することに決

めていた。

黒魔道士ゼレフだつたかな？そいつが攻めて世界を滅亡させるような話までは見たらそれまでに力をつける。その点日頃から争いごとが多いフェアリー・テールがうつつけというわけなのだ。

日本のことわざでいうならあれだ。虎穴に入らずんば何たらをえず、ということだ。
⋮
きつと意味が違うだろう。

そんなこんなで俺の回想は終わりだ。

神様のミスか記憶は保持していたが別段困つたことはなかつたため良しだ。
さて、いい加減このドアを開けよう！

かつとビングだ！俺エ！

「おじやまし「ざけんじやねえ！」

ドアを開けた途端、怒号と共に何か影が見えた。
顔を上げてみると意外！それは人だツた！！

「——え？」

名前も知らない人が俺の顔面にぶち当たつた。全てがスローモーションの錯覚を覚え
る。この時俺は前世でみたマンガのセリフである鋭い痛みをゆっくりと、というセリフ

を思い出していたりする。
そして俺は気を失つた。

L v. 2 歓迎会（物理）

「——酷い始まり方だ」

「そうね。私もここで暮らして長いけど貴方みたいなケースは初めてよ」
につこり、と微笑むのはこの世界のファッショントレンドで有名なミラジエーン・ストラウスさんだ。

原作初登場の時は瓶の破片が頭に突き刺さるというある意味すごい人だつたが本気になつたらサタンモード（？）になり、敵を殲滅する恐ろしい人である。

つまり怒らせたらヤバい。ということだ。

さて、顔面にストライクショットを叩き込まれた俺だが転生特典の一つである頑丈な体のおかげか鼻に絆創膏はるぐらいの怪我で終わり、現在はギルド内のカウンターに座り肘を机につきゲツソリとした様子でミラジエーンさんと話していた。

「あ、これ履歴書です」

「え？ 要らないわよ？」

「ですよねえ…」

やつぱり無駄に終わつた履歴書を空中に放り投げ、炎属性の低級魔法をぶつけ消し炭にした。

そういうえば説明していなかつたがこの世界には大雑把に分けた八つの属性がある。

光、風、海、水、闇、土、雷、火

この上記八つだ。

ナルトの世界より結構多い。というか何だよ海属性つて？と思う方もいるだろうがどうかこらえて欲しい。

これら八つを自分で努力して覚えるのが「能力系」と呼ばれ、アイテムを使ってする魔法の「所持系」だ。

使う属性は主に風であるが、五つの系統から外れた身体能力向上系の魔法なども使う。

主に風と言つているが一応全属性は使える。

一番風の属性が俺にあつていると、言われたので努力した結果俺は風属性使いになつたわけだ。

「そういえば何故貴方はフェアリー・テールに入ろうと思つたの？」

「え？ えーと、それは……」

災厄が来るまでの鍛錬です☆

なんて事は言えるわけがない。

しかし嘘なんてついたら妖精の尻尾のマスターであるマカロフに気づかれて某海賊漫画のギア3じみた巨人の鉄槌が落ちて来ること間違いなし。

うむ、困ったものだ。

「雑誌で見て面白そうだなあと思つて…… そういうえばこのギルドにいる滅竜魔法使いナ

ツ・ドラグニルはどうしたんですか？ 見てないんですけど……」

「ああ、ナツね。2、3日前に出かけるつて言つてから帰つてきてないけどもうそろそろ帰つて来るんじやないかしら？」

「へー、そうなんですか」

維持と気合いで話をそらせた。

そういうえばここにはルーシイの姿も見えない。

クエスト中なのかもしれないがそれならミラジエーンさんは「仲間と一緒にクエストに行つた」とか言うはず。

つまり原作2話の地点なのか？

うん、考えたところでよく分からん！

そんな事は気にせずミラジエーンさんと仲良くティータイムだ！

「ここから始まる俺のラブストーリー！」

俺の青春は始まつたばかりだ！

「帰つたぞーーー！」

ドガン！と何かが吹つ飛ぶ音と共に人が乱入してきた。

反射的に振り返ると意外！目の前にあつたのはドアだつた！！

「前回と同じパターンだと!?」ひでぶつり？

ラブストーリーは突然に（終わる）

ドアの角が俺の顔面に打ち付けられ俺は椅子から転がり落ちた。

細部まで覚えていないうがドアなんて飛んでいたか？

というかちよつと痛がつてゐ間に喧嘩始まつてんだけど何なのこれ？

戦闘狂か!?？目の前を通り過ぎたら反応して来るポケモントレーナーとかじやないのかこいつら？

「だ、大丈夫？すごい音したけど…」

「大丈夫です… 痛いですけど…」

鼻のみならず額にも絆創膏をつける必要がありそうだ。

その時ふと隣に誰かの気配。

横を見て確認すると金髪で巨乳（大事な事なので二回言つた）な女の子、妖精の尻尾のヒロインであるルーシイ・ハートフィリア。

凄く大きい（何がとは言わない）。

思い出したけど原作通りだと「幽鬼の支配者」が攻めて来るんだよなあ……さつき自分で鍛錬しに来たとか言つてたけど凄く嫌だなあ……

「…大丈夫ですか？ 手貸しますよ？」

「ああ、それはどうも…」

という事で一方的に知つてゐるルーシイの手を掴ませてもらい立ち上がつた。手が凄いスベスベだつた。もう一生この手洗えない。

「助けてくれてどーも。あ、俺の名前はジョニイ・アルバート。好きに呼んでくれ」

「私の名前はルーシイです。新人ですがよろしくお願ひします！ ジョニイさん！」

「いや俺も新人だし…」

ポカンとしたルーシイの顔。

「私と同じなんですね：歴戦の勇者みたいな顔だからつい…」

「俺そんな顔してるのか…」

確かに俺の顔はお世話になつた道場の師範代にぶちのめされた時の傷が至る所に

残っている。

あの師範代絶対ヤ○ザだろって言いたいぐらい酷かつた。

何だよ「感じるな、感じろ」って、おもいつきり矛盾してゐるじやねえか。

「火竜の——」

「アイスマスク——」

「接收——」

「王の光——」

つて後ろ見たら凄い事なつてるぞ!!?

いや、マカロフさんが来るから大丈夫か。

「つて何呑気にコーヒー飲んでるんですかジヨニイさん!!?」

「大丈夫だつて。ワムウの神砂嵐が飛んで来るわけでもないし。あ、さん付けじやなくていいよ」

「今はそんな事言つてる場合ぢやないです!」といふかワムウつて誰!!?

ズズツと一口。

美味い。

「止めんかバカタレドもオ——!!」

スピーカーから放たれる音を直接くらつたような大音量の声が響き渡った。
声の主を見ると予想通り巨人化したマカロフさんが圧倒的迫力で全員を黙らしてい
た。

原作知つてたけど素直にびびつた。

「でかああああああ!!」

おお、ルーシイのツッコミが炸裂した。

周りがシンと静まっている中ナツだけは両腕を組み高らかに笑つた。

「だ一つはははは！みんなして黙りやがつて！この勝負、俺の勝——」

ブツツ、とスナック菓子を碎く感覚でナツがプレスされた。

体が下敷きみたいに薄くなつてそよ風に流されたナツは俺とルーシイの足元に落ちた。

「む、新入りかね…？」

巨人化したまま俺とルーシイを見る……というか睨みつけた。本人はそう思つては
ないだろうが…：

俺はともかくとしてルーシイは目を見開き口をパクパクさせ、何も言えなかつた。

「フンヌウウウウ…」

すると空気が抜けた風船のようにマカロフの姿が小さくなり、俺よりも身長がかなり
低い老人となつた。

「よろしくね」

「あつ、はい…」

ペコリと頭を下げた。

どう！と声を出しカッコをつけたいのか跳躍しながら回転し、二階の手すりに着地しようとして案の定失敗し頭をぶつけた。

しかし何事もなかつたように懐から大量の紙を出した。

「まゝゝたやつてきてくれたのう貴様ら、見よ評議員から送られた文書の数を」

ペラリペラリとめくる紙はゆうに100を超えていた。

それを面倒くさげな様子で一枚手に取り読み上げた。

「まずはグレイ。密輸組織を検挙したのはいいが、その後素っ裸で街をふらつき、挙げ句の果てには干してある下着を盗んで逃亡…」

「いや、裸じやまざいだろ」

「まずは裸になるな」

ナイスツツコミだと思う。

「エルフマン！貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行。カナ・アルベローナ、経費と偽つて某酒場で飲むこと大樽15個。しかも請求先が評議会。口キ、評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所から賠償請求が出ている」

もう疲れたという様子で読み上げているが次の一枚を見て更に溜息を吐いた。

「そしてナツ…デボン盗賊一家を壊滅させるも民家を4軒壊滅。チューリイ村の歴史ある時計を半壊。ルピナル城一部破壊。ナズナ渓谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオンの港半壊…」

やつと読み終えふう、と一息ついたがまだまだ請求書の紙が有り余っていた。
「アルザック、レビイ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ… etc… 貴様等ア…
ワシは評議員に怒られてばっかりじやぞお…」

「だが、評議員などクソ食らえじや」

マカロフが空中に投げ捨てた請求書が全て燃やされた。

「よいか、理ことわりを超える力はすべて理ことわりの中より生まれる」

「魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある“氣”的流れと自然界に流れる“氣”の波長があわさりはじめて具現化されるのじや」

「それは精神力と集中力を使う。いや、己おのが魂すべてを注ぎ込む事が魔法なのじや。上から覗いている目ン玉気にしてたら魔導は進めん。評議員のバカ共を怖れるな」

「——自分の信じた道を進めエい!!それが妖精の尻尾の魔道士じや!!!!」

響く歎声。

これこそが妖精の尻尾だということを実感した初日だつた。

「さあ!始まりました!今回のチャレンジャーは新人のジョニイ・アルバート!そしてその対戦相手は我がギルドの問題児!ナツ・ドラグニル!」

「「「「オオオオオオ!!!」」」

どうしてこうなつたのだろう。

いや、説明するのはとても簡単だ。

10行以下で終わる。

ルーシィ「ジョニイってどのくらい強いの?」

←

ナツ「戦えば早い」

エルフマン「男は拳」

俺「お前何言つてんの?」

矢印含めても6行で終わつたよ……。エルフマンあとでぶん殴つてやるからな。
俺はやりたくないと言つたがやろうやろうと騒ぎ立てる始末。マスターであるマ力
口フも外でやるならいいぞい、なんて事を言つてやがる。止めてくれよ（切実）。

「なあ、本当にやるのか……？」

「あつたり前だ！食後の運動も含めてな！」

ナツの打ち合わせた拳から炎が噴き出した。

やる気前回だよ。こんな展開某鍊金術漫画のオマケで見たことあるよお……
チラリヒルーシイを見たら本当に申し訳なさそうに俺に手を合わせていた。

「ルールは簡単よ！ 気絶したら負け！ あとは降参しても負け！ 以上！」

ちなみに審判はミラさんがしている。

何でこの人こんだけウキウキしてんだよ。

あ、この人確かドSだつたわ。

「それじや開始！」

ミラさんの腕が下り、試合が始まつた。

「火竜の——」

「ん？」

ナツが大きく呼吸をし肺に酸素を貯める。

口から今か今かと炎が溢れ出す。

「——咆哮ツツ！」

ガスバーナーの100倍くらいの勢いで口から火が放たれた。もしかしたら100倍では足りないかもしだいぐらいだ。炎は放射状に放たれ簡単には避けられない——が。

「そう簡単にやられるか……！」

地面上に手を当て魔力を流す。

土系統の基本魔法である地面の操作を発動し、俺の前方に土の壁を作り出した。

衝突、それと同時に熱気が体を襲う。直に直撃はしてないものの魔力をかなり練りこんでいたので相当の熱さだ。

ちなみにこの火力を出そうと思つたら俺は魔力切れで倒れる。

「防ぎやがったぞあいつ！」

周りのヤジが大声で叫ぶのが聞こえた。

しかしそれを聞いて嬉しく思つてゐる暇はない。

「火竜の——」

舞い上がつた土煙の中から赤い光が見えた。

魔力を軽く流し腕にのみ強化をかける。

全身に強化をかけていれば魔力が少ない俺が全力で戦えるのがおよそ10分。その点一部のみの強化は魔力の消費が少ない。

「——鉄拳！」

炎を纏つた拳がナツの姿と共に現れる。

目で捉え回避、そして反撃の一撃を頭で瞬時に構築する。

迫る拳の前腕を左手で払いどけ、左に回るそのまま使い一度回転し裏拳気味に右手を放つ。

ドゴッ、と皮膚と骨に拳が当たった感触が直に伝わった。

「いってえなあ……！」

ナツは攻撃をくらつたが初めて戦う相手に興奮しているのか口元に笑みを浮かべた。しかしこれはれつきとした戦いだ。

油断も隙も与えん。

「——三頭龍」

左腕に更にもう一段階上の魔力を流す。

音速一步前の速度を打ち出すことが可能になつた腕が三つ、ほぼ同時に放つ。

「なつり？」

ナツから見たら驚きの光景だろう。

何せ左腕が三つに分かれて見え、それらが襲いかかつて来るのだ。

しかし、流石主人公。迫り来る三つの拳の内二つを両手で弾かれたが、残り一つは鳩尾を的確に捉えた。

人体の急所を突く「三頭龍」。この技を生み出すきっかけとなつた某ギリシャ神話の筋肉の必殺や人斬抜刀斎のように神速の9連撃にしたかつたが、今の俺では最高で3連撃。

しかし、この技は人体の急所を突く技。どれか一つでも当たれば致命傷になる。

鳩尾に拳を叩き込まれ後ろに下がつたナツが息苦しさにむせたがそれも一瞬。再び攻めに転じる。

「お前強いな！んじや、ここからは俺も本気出してやる！」

「今までも本気じやなかつたのかあ！」

「るつせえ！」

ヤジに怒りの声をあげるナツ。

しかし本気じやなかつたの？勘弁してくれよ

「ま、こつちにはまだ残つてゐるけどな…！」
目に魔力を込めると赤く光り、静かに胎動した。

L V. 3 決着

盛り上がる試合の中ミラジエーンの目はジョニーを捉えていた。

体のいたるところに炎を纏わせ、回避すら困難な攻撃をかすり傷はあるが、大きな一撃を受けず捌ききっていたのを見て思う。

(上手い……)

初めてギルドで見た時、言つてしまえば弱そうというイメージがあつた。

魔力が少なければ戦闘においては不利、しかしその現実を乗り越えてみせた。そして何より――

(体術においてはエルザにも負けないんじやないかしら……?)

S級魔道士からも惚れ惚れする動き。

あのナツが未だに一撃も与えられないのは珍しい。(尚エルザを除く)

「何者なのかしら……?」

「あれ？ミラちゃん知らないの？」

昼間から酒を飲んでいるのか頬を少し赤くしているマックスがズボンの中に丸めて入れていた雑誌を取り出した。

「でも知らないのも無理ねえか…あんまこういう雑誌読まなさそうだもんな」マックスが手に取っていたのは男二人が殴り合っている表紙が描かれている格闘技の雑誌。

その中の見開き1ページをミラの前に出した。

「えっと…流派別格闘技大会？」

「そ、魔法や魔力の使用を禁止した純粹な戦いの大会。参加人数も多いけどいかんせん魔法がないから派手じやない、つてことであまり大舞台に立つことはないけどな」

ミラは続きの文章を読み続け目を見開いた。

「ジョニー・アルバート…優勝!!?」

「そ、多くある流派の中ただ一人だけの出場となつた『無流』の使い手それがあいつだ」「いや…ちょっと待って！だってこの大会…」

「そうそう、雑誌には出なくとも有名な大会だからな。そりや人も来るつてもんさ」

「それでも…」

余談ではあるが今年度の流派別格闘技大会の出場人数は5万弱である。

写輪眼——俺がこの世界に来た際神さまにお願いしてもらつた目。

体術、魔法、幻術と言つた全てを見抜きコピーすることができ、相手の動作を未来予測のように予測することが出来る。

とは言えどもだ——

「火竜の鉄拳！鉤爪！」

「暴れすぎだろ……！」

ハハハハハ！と笑いながら攻撃をしかける姿はちょっとしたサイコパスだ。

炎さえ纏つていなければ関節を決めるなり、なんなり出来るが炎を纏われちゃ触れることが出来ない。

それに魔力の消費も激しい。

写輪眼は消費魔力が少ないものも、それを継続していればもちろんその分減ってしまう。

継続していく戦闘はおよそ2分弱。

ナツがいつまでマジモードを続けられるのかは分からないが魔力的にまだまだ余裕がありそうだ。

今の状態のナツは先読みが出来る写輪眼があつてなんとか、というところだ。

「ちょっと危ないが行くしかないか……！」

ナツの蹴りおろしに合わせ、身をかがめ回避と共に、炎の放出が消えた足を両腕でしつかりと抱え、ハンマー投げの要領で一回転しナツを空中に放り投げた。

「——制限突破」
リミット・オーバー

体の中、正確には脳に魔力を回す。

人間の力というのは常時制限されており20～30%の力までしか引き出せない。

それを魔力を流すことで無理やり限界を超えた力を引き出す。しかし、この魔法は完全装置を壊して力を出すため使用後は激しい痛みが襲う。

「くらいやがれえええ!!」

空中で体制を整えたナツが両手に火炎弾を作り打ち出す。

軌道を確認し、足に力を込め、駆ける。

一步、瞬間移動じみた速さで駆け抜け火炎弾を回避し、ナツの真下から上空に向かって飛び上がる。

空中に飛び上がった時に遅れて、地面がえぐれて陥没した。

「オオオオオオオ!!」

声をあげ、ナツの腹にめがけ拳を振るう。

甲高い音が響き、拳がナツの手のひらに阻まれた。

しかし、それは読んでいた。読ませていたというべきか。阻まれた拳に魔力で生成した糸を付ける。

「行くぞ……！」

魔力の糸をナツの体全体に巻きつけ身動きが取れないようにし、ナツを抱きかかえた

まま地上に高速回転しながら落ちて行く。

某忍者作品に出てきたこの技は出てきた回数自体は少ないものも超強力であり、
リミット・オーバー制限突破との相性もよかつた。

地上まで3メートル。

本来ならば頭から叩き落とすが、あくまで試合。背中から叩き落とそうと考えた時
だつた。

「――火竜の咆哮!!」

ナツは地面に炎を勢いよく噴出した。

地面に叩きつけられた炎は上空から叩き落す威力を和らげる。

「んなのありかよっ！？」

叩き落としても意味がないことを悟った俺は魔力の糸を切り、ナツの側から離れる。

激痛、制限突破の反動が体を襲う。

体が震えて、うまく動かせない。

「もらつたあああああああああ!!」

致命的な弱点。

そんなものを見逃すわけがなくナツは俺の顔めがけて拳を振るおうとしている。まずい、と思い足を動かそうとした瞬間カクンと足の力が抜けた。それが幸いしたのか、体が崩れナツの拳が当たらなかつた。

「あぶねええ!!」

まだ少し残つていた魔力を体に流し、足を支える。もつて30秒…いや20秒。10メートルの差を即座に詰め、互いに殴り合う。防御は最低限。拳も入るのでそれなりの痛みがあるが気にしてはいられない。

「火竜の——」

今までで一番大きな炎が拳に灯る。

捌き切れないと分かつた俺は拳に風を纏わせた。

両者射程距離、魔力では不利だが足の打ち出し、腰のひねり、拳を打ち出す速さでパワーしてみせる。

「——鉄拳ツ！」

「——風巻ツ！」

炎と風がぶつかり合い、熱風が荒れる。

魔力がぶつかり合つたせいか周りの地面も少し荒れてしまつていた。
ナツはニヤリと笑みを浮かべてきたので、俺も負けじと笑い返して両腕をあげて言
う。

「参つた。魔力切れだ」

なんとも情けない結果ではあつたがなんとか俺の実力でも付いていけそうと感じた。

L V. 4 初クエスト

「うーむ」

ギルド「妖精の尻尾」

その片隅で俺、ジョニイ・アルバートは腰に手を当て悩んでいた。

視界の先は雑に紙が貼り付けられたクエストボード。ギルドに入りある程度落ち着いたところで行こうと思つたのだがどれもこれも微妙である。

しかし行かねば金が稼げない。俺が借りた家は月6万。それに水道代やらガス代 etc。

家を出る時は親の反対を押し切つて飛び出したので支援も何もあるわけがなく、高校時代に稼ぎに稼ぎまくったバイト代のみ。

それも家具を買つていたら6割消えた。解せぬ。

「ん〜〜〜ん?」

雑に紙が貼られているせいで見つけづらいがある一枚の紙を見つけた。

依頼主はとある集落の領主。依頼内容は家に忍び込んでくるコソ泥の確保。しかも50万と報酬がかなり高い。

「これしかねえ・・・！」

50万を手に入れた想像をする事で、クエストへの意気込みを高める俺であった。

マグノリアから記者を乗り継ぎおよそ3時間。そこから徒歩で更に小1時間。森の中をさまよいながら歩いた先には小さな集落。家の数はおよそ50と少し。集落の奥には領主のものと考えられる一際大きな家が建てられていた。

とりあえず依頼主である領主に会おうと思いなんの疑いもなく領主の家っぽい所に行き案内された結果・・・

「お～よく来たよく来た！我が集落にようことガーハツハツ！！」
「・・・どうも」

油がテカテカで太っている大柄な男。

悪人キヤラAみたいな人だつた。

「しかしあの『妖精の尻尾』から来ると聞いてどんなやつが来るかと思つたら、思つたよりヒヨロリとしてるなア」

「ハハハ……」

口から食べカスてるから、ちゃんと飲み込んでから喋れよ。
と出会つて早々愚痴を言いたくなつたが喉の奥に抑えておく。というか何でそんな団体してんのに女抱けるの？この集落では金が全てなの？俺も金さえあれば……
「この依頼が終わるまではこの家に寝泊まりしてもらう。おい、案内しろ」

領主の右腕に抱かれていた女が雑に前に突き出されたせいか転んだ。しかし女は何事もなかつたかのように起き上がり生氣のない目で「分かりました」と呴いた。
「あ、それとこの家の出入りはやめてくれ」

「？」

なんだか嫌な気配がして来たな……。

この依頼盗人よりも重大なことがあるんじやないか？

「案内します」

「ああ、お願ひします」

屋敷の中は豪華だった。

至る所に装飾品が飾り付けられ、ピカピカと目に悪そうな光が上から降り注ぐ。案内してくれる女はペースを変えず、話すことなく淡々と進む。

「あ、あの・・・名前はなんと呼べばいいでしょう？」

「・・・」

無視。辛い。

「この集落つて総人口どれくらい?」

「・・・」

再び無視。それどころか見向きもしない。

コミュ症の俺が必死に話しかけても見向きもしない女にイラツと来た俺は調子に乗つてみた。

「おいコラ、それ以上無視したらその胸千切つてやるぞ」

「・・・」

嘘だろ・・・言つた俺が馬鹿みたいじやないか。恥ずかしい。穴があつたら入りたい。

俺が顔を隠してゐる間に部屋には無事着き、女は俺に一瞥をくれることなく元来た道を同じペースで帰つていった。

「ふむ・・・」

部屋の窓から外を眺める。

領主の家の周りには槍や剣を持つ兵士が50人。幾ら何でも厳重な対応をし過ぎではないのだろうか？

確かに盗人が出るのは嫌な話ではあるが、こんな小さな集落で盗人が出るのは珍しいような気がする。俺の頭の中では小さな集落とかは知らない顔がいない、みたいな感じなのだが・・・。

しかし依頼内容は盗人の確保だ。それで50万もくれると考ると他のことは気にしない方がいいのかもしれない。俺の気のせいかもしれないしな。

取り敢えずは盗人が来る夜まで待つとするか。

深夜。眠気を抑え盗人が来る食料倉庫の前で見張りをしていた。

辺りは暗く目を凝らさなければ50cm先も怪しく、月明かりだけが光源だった。

結局外に出ることはなく無駄に豪華な飯と風呂に入らせてもらい今に至るわけだが

まだ何も起きてはいない。

そもそも食料倉庫前にドンと座つていてるのに突撃してくるやつもいないだろう。

「・・・」

——いや、来るか

上のダクトが開きそこから黒い影が落ちて来る。準備していた刀を握り直し、黒い影——黒マントを羽織った人影の銀に光る刃に狙い合わせて振るつた。

金属音が鳴り響く。黒マントは身軽に飛び直径30cmほどの短剣を前に構えた。「なるほどな。侵入経路が分からないと聞いていたけどダクトの中を通つて来ていたのか。そりや気づかないわけだ」

「・・・」

「ん? 何で気づいたかつて聞きたげな様子だな」

ジリ、と音を立て間合いを図る黒マントに対し、あえて俺は何も構えないで油断しているのを演出した。

「音だよ。マントが擦れる音が聞こえた。まあ気づくやつなんてそういうのが残念だつたな。諦めて早く捕まりやが——」

銀に輝く短剣が投擲された。

肩に狙つて放たれた短剣を左半身になることで回避。黒マントがいた方向を見直す

とそこには誰もいない。

投げられたナイフの先を見ると俺が短剣に目を取られた隙に移動し、自分で投げたナイフを自分で回収していた。

肩を狙つたことから殺意はないとは思われる。

その証拠に短剣は的確に腕や足を狙つていた。

小型のナイフや短剣において手足の斬り付けは非常に対処が難しい。受けに失敗すると斬り付けられ血を流すことになるし、斬られた箇所が多いと血の流しそうで最悪死ぬ可能性だつてある。

——ではどうするか？

「刀劍變化」 オーバー・エッジ

手に持つ刀がグニヤリとスライムのように溶け落ち、元の形状を失う。

溶けた刀は俺の腕に巻きつく、指先から前腕までを守護する装甲となつた。

「それが……」

どうした、とでも言いたいのだろう。

しかし舐めてもらつては困る。

短剣を突き出すその一瞬前、俺の蹴りは正確に黒マントの脛を捉えた。

「ツツ・・・！」

脛というのは知つての通りかなり痛い。

短剣を持った相手には足のリーチもあることで有効な一撃となる。

しかし脛一撃で倒れるほど相手も甘くない。

「この程度・・・！」

再び距離を詰める。

俺は再び蹴りの準備をする。

射程距離に入つた瞬間、横一線蹴りを放つ。

「同じ手にかかるか！」

「いや、違うね」

蹴りを停止させる。

脚を斬りつけようとしたナイフは見事に空を切り裂く。

「——なつ」

「ほーら、隙が出来た」

伸びきった手を掴み、もう片方の手で肘の関節を決めながら相手を背負うように回転しながら沈みこみ、腕を引き体全体を回す。

背負い投げの凶悪バージョンだ。

肘関節を極めながら投げるので一度決まれば回避不能。

地面に背から叩き落とされグフツと声を出すと打ち所が悪かつたのか気絶していた。

「こいつを突き出せばこれで50万だが……」

どうもこの集落は怪しい。

聞く相手は間違っているだろうがこの屋敷に住んでいる人に聞いても無反応。ならばやむなし。

装甲となっていた刀を更に形状変化させ、今度は縄にし、黒マントをぐるぐる巻きに

し肩に担ぎ、俺は何事もなかつたかのように部屋に帰るのだつた。

L V. 5 何かがおかしい

「何をする!?:」

「何をするじゃねえよ。確かに肘関節極めてぶん投げたのは悪いと思つてるけど突き出してないだけ感謝して欲しいわ」

「この下衆が・・・！」

場所は変わつて自室。

黒マントは意識を取り直した途端暴れたが金属製ロープに縛られているせいで身動きが取れない状態だつた。

「下衆でもなんでも結構。取り敢えずそのフード外すぞ? いいよな? いいか」

「なつ!?: 外すな!」

抵抗むなしく黒マントのフードは見事に剥がされた。そこから出てきたのは月明かりが反射して銀に光る長い白髪。

童顔を残しつつも、やや大人びた顔をした女。美少女である。

——美少女である（重要なことなので二回言いました）

「見たな・・・！」

「女だったのか・・・」

かなり驚きながらも冷静を保つ振り。

女子と話したのいつぶりだろ・・・あ、最近ルーシィと話したわ。今頃ナツのクエストにでも付いて行ってる頃だろうな。泣き顔が容易に思い浮かぶ。

「それで、何でこの屋敷に侵入した？」

「・・・敵に言うか」

「ふーん。そう言うこと言つちやうのかー。なるほどー」

換装、と言う魔法をどこ存知だろうか。

S級魔道士のエルザ・スカーレットがよく使う魔法である。

簡単に言えばドラえもんの四次元ポケットみたいなものだ。欲しい時に欲しいものが取り出せる。

とは言えでもそんな都合よく出来ているわけもなく換装専用の倉庫を借りて月に1

「3万ほど払つて使える魔法だ。

俺も一樣使えるのだがエルザみたいに鎧を入れてるわけではなく、くだらないものも
収容している。

その中の一つ、高校時代の友人からいらないと理由で貰つたアイテムの一つ——
「な、なんだそれは……」

俺の手には緑色のドロドロしたスライムが乗つっていた。

見るからに怪しいこのスライム。

なんと驚きの効果を持つている。

「やめろ！ 近づけるな！」

黒いマントにスライムを少し付ける。

するとシューと音を立てながらマントを溶解させていった。

そしてこのスライムの名は——

「——纖維溶解スライム——（某青獣の声）」

服を溶かすためだけに生み出されたスライム。友達が工口本買つたら付いてきたと言つて無理やり手渡してきた大人なおもちやである。．．．まさかこんな場面に使えるだなんて。

「服を溶かされたくなかったらこの集落で何が起きているか教える」
自分でも最低な脅し文句だと思つている。

「そ、その程度で．．．」

「ちなみに俺の友達さ、工口本作る会社に就職してんだけよねー。それでさ、もし緑色のスライムにドロドロにされた女の子が写つていてる写真が送られたらどうするかなー?」
「ヒツ」

女ドン引きである。

まあそれもそうか。変な男に服溶かされるつて脅されてるもんな。

「あーあ、スライム垂れそ——」

「あああああ!!?教えて!教えてからあああ!!」

「うう．．．変態．．．痴漢」

「バーロオ。男っていうのはみんな変態だ」

「絶対違います！」

涙を浮かべた黒マントに言われた。

だが現実つてそういうものよ？

「それで名前はなんていうんだ？」

「・・・サクラ」

「おつけーサクラね。俺はジョニー・アルバート。ジョニーでもアルバートとでも呼んでくれ」

「じゃあ変態で」

「H A H A H A ・ ・ ・ てめえぶん殴つぞ？」

閑話休題。

「で、この集落なんなんだ？色々とおかしいぞ」

「・・・前まではごく普通に暮らしていました。けどあの領主が来て何もかもがおかしくなりました」

「急におかしくなつたのか?」

「ええ、財は税金と言われ取り上げられ、集落から出ようとしても兵に止められ、村の女の子達は私を除いて行方不明になりました」

「はあ・・・どうりで嫌な気がしたんだよな」

超絶太つていて、依頼の内容を飯食いながら話すやつなんて大抵ヤベエやつだよな。

「ん? 待てよ。女の子が行方不明つて俺領主の側で見たぞ」

「!?:本当ですか!」

「あ、ああ・・・2人」

「・・・何で」

「洗脳とかされてたりしてな」

「充分ありますね」

「ああ、なんたつて領主があれだしな」

ドンドン、と部屋のドアが叩かれた。

ドア越しから「何をしている!早く門番に戻れ!」との事だった。探すのが早い。まだ食料倉庫を離れて10分も経つてないのにもう部屋に戻つてることが分かつたのか。

「とりあえず今日は帰れ。俺は明日屋敷を調べるから明後日に同じくらいの時間帯にこ

の部屋に来てくれ。窓は開けておく」

「……信頼していいんですね？」

「お前人疑いすぎだろ。まさつきのはやり過ぎたけどさ。いいから早く行け」

「……分かりました」

フードを付け直し、窓から飛び出す。

忍者の一族かなんかじやないかな……？

翌日、部屋に刀取り忘れたと言い訳をつけなんとか誤魔化した俺。

朝食を終え、夜が来るまで屋敷の掃除でも手伝つとけとクソッタレ領主に言われたので雑巾片手にスイスイ。

屋敷の中の構造を頭に叩き込む。

そして生きる人形と化している女の子の目の前で手を振つたり、肩をポンと叩いたりしてみたがやはり無反応だつた。

洗脳をかけられている可能性があるので写輪眼で解除できるか試してみたかったが周りには兵士が24時間体制で見張りに付いている。そう易々とは出来ない。

昼食後は自由時間なので屋敷の中を調べてみた。が、なにも見つからない。そう簡単に見つかる場所に置くとは思ってはいないが……ん?

突つ立っていた場所から一歩くとガタンと何かが動く音がした。
敷いてあるカーペットをめぐり上げるとなんと不思議、隠れ扉になつており地下に続いていた。

「これは……いよいよだな」

周りに人がいないことを確認し地下に潜る。その際めくつたカーテンを戻すのを忘れずに。

足音を消しゆつくりと降りる。光源は壁に備え付けられているランプのみで、あまり環境がいいとは言えない。

音の反響を頼りに進む道を探していると遠くから笑い声が聞こえた。
念のため隠密魔法をかけ限界まで近づく。

「団長! 今回も上手くいきそうですねえ!」

「ああ! あと10日もしないうちにこの村の全てを手に入れたらあとは全員殺してまた次よ! ガハハハハ!」

「しかしあの小僧気にしなくて大丈夫ですかね？気づかれたら色々と厄介ですよ」

「んなもん気にするな！大事な武器を取り忘れる馬鹿がこここの事態に気づくわけねえよ！」

「それもそうか！アハハハハ！」

ビンゴだ。

いきなりと大当たりとは思つてもいなかつたが・・・取り敢えずやつらはこの集落の全部をぶつ壊す気なのだろう。ということはやつらは闇ギルドか盗賊。外にいる兵士も含むだろう。

「取り敢えず欲しい情報は手に入つたな・・・」

気づかれないうちに移動すると先ほどの部屋からあまり遠く離れないうちに牢屋があつた。中には大勢の女・・・というか全員女。数は20と少し。全員正気を失つた目をしていた。

「決まりだな・・・」

元来た道を辿り屋敷の中に戻り夜を待つ。

何でこんなクエスト受けてしまつたのだろう？と自分に問いかけながらただひたすらに時間が過ぎるのを待つた。

L v. 6 反逆

「・・・ということだ」

「分かりました。しかし地下室とは盲点でした」

「俺も見つけたのは奇跡だつたけどな」

日も暮れて夜。

う。

見張りに来る兵士の首をトンし気絶させ、約束どおり部屋に来た黒マントもといサク

今日はフードを被つてないため素顔が見える。

「んで敵の数はおよそ80・・・魔法も使って来るぞ。お前の方は誰か戦える奴はあるのか?」

「戦える人がいれば最初から反逆しますよ。それに洗脳されててみんなあいつを領主
と思い込んでます」

「そうだよなあ・・・というか何でお前は洗脳にからなかつたり、暗殺者じみた動きが出来たんだ?」

「生まれつきです」

「嘘やろ・・・」

生まれつきで洗脳はからないし、暗殺者じみた動き出来るとか異世界チートの主人公かよ。もつと俺に才能寄越せよ神さま。

「どうか洗脳が効かないのって生まれつき関係あるのか?」

「けど反乱起こすにしろ俺とお前だけで100人近い相手っていうのもなかなか難しいだろ」

「それは・・・頑張つてするしか」

「無茶言うな。領主は俺が相手にするからお前はなんとか集落の人達を纏め上げてくれないか?」

「なんとかつて・・・あ、伝えるの忘れてたんですけどあの領主のせいで包丁や鍬といった凶器になりそうなものの全部取られてます」

「もうちょっと早く言つて欲しかつたなあ・・・!」

「流石に素手で殴り込みというわけにはいかない。どうしたものかと思い外を見ているとあるものが目に付いた。

「これだ！」

作戦当日

「いやいやいや、ちょっと待ってください」

「？」どうした

「どうしたじゃないですよ。今日作戦当日なんですよ。武器が丸太つてどういうことで

すか馬鹿なんですか死ぬんですか?」

「バーロー。丸太は対吸血鬼兵器で竜巻を起こせて柱にもなる。これのどこがおかしい?」

「何もかもです。そもそも私たちが戦うのは吸血鬼じゃありません。竜巻も起こせません ん」

「・・・?」

「なんで私がおかしいみたいになってるんですか!!?」

いやだつて丸太だぞ?

このサイトだつてちよつと前異世界転生した主人公が丸太をもつて無双するみたいな話の広告してたぞ? (メタ)

つまり丸太は強い (確信)

「逆に丸太以外の武器があるのか?」

「いやまあのないですけど丸太つて・・・」

「異議がないなら行くぞ! 丸太を持てええええええええええ!!」

「ああ! どうなつても知りませんからね!」

「頭ア！ あいつら反逆起こしやがつた！」

「何？ やつらにまだそんな余力が残っていたのか・・・兵を出せ。殺しても構わん。どうせあと1ヶ月もいないしな」

盗賊団ルルチヤスは集落や村を狙うことで有名な盗賊団であり、その名は闇ギルドには劣るが悪名が絶えない。

手口は闇市で買った洗脳をかける魔法道具。それで民に自分が領主だと認識させ、金を取り女を奪い売り払うといったまさに下衆の極み。

そんな彼らが目につけたのはこの集落だつたが、一つ予想外な事があつた。

サクラの存在である。今まででは全員洗脳に成功してきたのに洗脳が効かない。そして盗んだ食料を奪い取る。これに困つたルルチヤス一行はクエストという事で、正義のために暗躍していたサクラを悪人として捉えようとしていた。

ここでさらに悪い事が起こる。

魔法道具によつてこの村に入つた瞬間から洗脳はかかるはずだつた。

しかしジョニー・アルバートは幻術の耐性は嘘幻を見抜く写輪眼のおかげですこぶる

高かつた。

さらに悪運は重なる。

それなりの魔法高校を卒業したジョニイは幻術の解除方法も知つてゐる。領主の洗脳にかかりサクラに集められた集落の民達は洗脳が解除され——

「「「「「「うおおおおおおおおおおおおオオオオオオオオ!!!!」」」」」」

怒号が響き渡る。それと同時に屋敷が大きく揺れた。

「何だ!? ?」

「だから反逆です！やつら丸太を持つて来やがりました！」

「ハア!? ?丸太!? ?ふざけてるのか?」

「しかし丸太が思つたよりも手強く中々抑えられません！それにあのジョニイとかいう小僧も反乱しています！」

「あいつまさか分かつていたのか？

チツ、少し早いが全員殺してしまえ

「了解！」

「無理して前に出るな！隊列を崩さず突撃しろ！」

「「イエツサー！」」

屋敷の中で男達の声が響きあう。

丸太は思いの外役に立ち負傷者死亡者ともに〇という驚異の数を叩き出していた。
「こうなつたら魔法で・・・グアツ！」

魔法の予兆を見逃すほど甘くはない。

既に背後からサクラが奇襲し意識を刈り取る。

「サクラ！前に出過ぎだ！魔法なら俺が撃ち落とすからお前は守りを固めろ！」

「でも早くしないとあいつが！」

「落ち着け！早とちりは死につなが——」

ザツザツと足音が響き渡る。

その数約30といつたところだろうか。

「多いな・・・サクラ、一回守りを」

「私が先に行つてあいつを倒して来ます！」

「なつ？？？おい！」

焦つて いるのか サクラは俺の指示も聞かずに先に行つてしまつた。連れ戻したいが今ここを離れては死人が出る可能性がある。サクラの無事を祈るのが今の精一杯だ。

「くそツ……全員とつと片付けるぞ！」

「ハア、ハア……！」

屋敷の中を駆け抜ける黒い影。

その正体は黒マントを被つたサクラ。

潜入した時に記憶した道を辿り一直線に領主の道を目指す。

サクラは生まれた時から両親が分からず、集落の入り口に捨てられていたが、己を拾つてくれたこの集落の民が大好きだつた。

人の優しさに触れ、すくすくと成長し、並外れた体力で日々充実しているなか盗賊団が訪れた。自分以外全てが洗脳にかかり、格闘大会というなの見せしめや金の徴収。盗賊として一人戦つていたがそれも限界だと思つた時希望が湧いて來た。今しかない。その思いがサクラの中を占領していた。

最後のドアを蹴破る。

部屋の奥にはこんな状況にも関わらず椅子に座っている領主。そしてその周りに兵士が4人。

「ツ！ やれ！」

4人の兵士が同時に駆ける。

サクラは短剣を逆手に持ち右手を前に構える。

羽織つていたマントを相手に被せるように放り投げ視界を遮り、マントの上から心臓の上を叩くように柄で突く。

一人が崩れ落ちる。二人目に向かい短剣を投げ肩に突き刺し、足を払い地面に転がし足で踏みつける。

残った二人は顔を掴み地面に叩きつけた。

4人を倒すのにわずか5秒足らず。

並みの人間なら恐れるはずだが領主は何一つとして驚かなかつた。

「あとは……お前だ！」

「はっ、小娘が意氣がつておるわ。

どれ一つ躊躇をしてやろう」

「ふざけたことを！」

2本目の短剣を取り出し、領主に向かつて駆け抜ける。

領主は太つており見るからに動けなそだつた。これで終わる。そう思い最後の一歩を踏み出し短剣を突き出したが――

「――甘いわアアアアア!!!」

領主の拳が短剣を簡単に碎き、サクラの華奢な体を正確に捉えていた。体はくの字に曲がり後ろに吹き飛び、壁に大きな亀裂を入れた。

「カハッ――」

サクラの誤算。

盜賊団の領主が弱いわけがない。

そんな当たり前のことを忘れていた。

今となつて思い出すジョニイの言葉。しかし助けは来ず朦朧とした意識の中とらえたのは気味の悪い笑みを浮かべる領主だけだつた。

どれくらい時間が経つただろうか。

体は既に動かず、呼吸するたびに痛みが体を走る。

「さてと、お前が盗んだ飯分は今まで終わりだ。お前とも遊んでやりたいがあいにく仕事が残っているんでな・・・死ね」

領主の拳が地に倒れているサクラに近づく。
もうダメだと思った——まさにその時

「はいはいちょっと失礼」

近づく拳を払いどけ見事に捌いた男が一人。

「貴方は・・・」

「お前ボロボロじやねえか。ちょっと休んどけ」
やる気があるのかないのか分からない態度のジョニイ・アルバート。
サクラの方を担ぎ壁際に座らせた。

「んで? よくも俺の盗賊を傷つけてくれたな。覚悟は出来ているか?」
「はっ、残念ながら出来てないな。倒される気がないからな!」
指の骨を鳴らし、近づく領主になんの怯えもしないジョニイ。

「あいつは・・・強いです。だから——」

「逃げろってか？ここまで来たら逃げも隠れも出来ないだろ？それに女を傷つけるのは許されないことだぞ」

「でも——」

「それにな——」

「——俺は無茶とは言つたが無理とは言つてないんだぜ？」

そう言いジョニイは指を領主に突き出し、笑みを浮かべて言う。

「おいブタ領主。一発でぶちのめされるのと、百発ぐらいぶつ叩かれるのどっちがいい？」

「俺が一発で仕留めてやるから関係ないなああああああ！」

領主が体型に似合わない速さで近づく。
一步で間合いを詰め拳を振りかぶる。

あの一撃の重さを知っているサクラは咄嗟に逃げて、と叫ぼうとした。
しかし――

「――遅い」

ドゴンツツ!!、と鉛のようなものが人体に直撃したかのような音が響く。直後暴風が吹き荒れ領主の背後にいる全て、屋敷共々外に吹き飛んだ。

領主は拳を振りかぶったまま固まり、白目を向いていた。

そしてゆっくりと重力に従い地に伏し、1ミリたりとも動かなかつた。

「いやあ、上手く当たつてよかつたよかつた。外れてたら死んでたかもしないしな!」

ハツハツハと笑うその姿は、サクラの脳は追いついて来なかつた。

L V・7 一難去つて？

お手柄！妖精の尻尾！

最近問題しか起こさなかつた妖精の尻尾！しかしこの度指名手配されていた盗賊団ルルチャスを取り押さえることに成功！

しかもその後騒動も起こさず良いことしかしてない！

これは何かの前兆か・・・!!?

「ワシは猛烈に感動しておる!!」

「はあ・・・どうも」

集落で盗賊団を引き渡し、250万という大金を受け取つた俺はクエストも無事(?)

終了し、ギルドに顔を出すとマカロフに号泣されていた。

「久しぶりに雑誌に良いことが書かれて……何ヶ月ぶりじや?」

「何かの前兆か?とか書かれてますけどね——よつと」

背後から回転しながら飛んできたワインボトルの持ち手を取り机に置く。

恐ろしいことだが背後から何か飛んできても普通に掴めるようになつてしまつた自分が怖い。

「お祝いのボトルだ!受け取つてくれたか?!?」

「ちゃんと受け取つてやつた——よ!」

お礼に食べていた枝豆を指に引っ掛け全力で弾く。真っ直ぐと飛んで行つた枝豆はワインボトルを投げたやつの額に当たり見事撃沈した。ヘッドショットである。C O Dだつたら150ポイントもらつていた。

「枝豆で仕返しする辺り優しさを感じるのお……」

「まあしないのが一番ですけど」

枝豆と一緒に頼んでいたビール……ではなくジュースを飲み干し机に置く。

250万の使い道をゆっくり決めた後に買い物にと考えた時だ。

「そうそう、ここで呼び止めたのはクエストのことともう一つあるんじや」

「?」

「おーい、来てくれー」

マカロフに呼ばれ姿を現したそいつは――

「——私を弟子にしてください」

「取り敢えず理由を教えてもらおうか」

溜める必要もなかつたがクエストに行つた際色々あつた仲であるサクラだ。

何故ここにいるのか？そして手に入つてゐる妖精の尻尾の印らしきものは何なのか？と聞きたいことがあつたが俺の弟子してくれというアタマの中が1145141

919810回転したに違ひないお願ひに対しての疑問を聞いてみた。

「以前領主と戦つた時私は思いました。私は弱いと」

「終始圧倒されたもんな」

ピキリとサクラの額に青筋が見えた気がした。見間違ひだろう（すつとぼけ）。

「そこで私は思いました。あの偽領主を一撃で仕留めた貴方に教えて貰えば強くなれる

と

「それ俺じやなくともよくね?」

「いえ! そんな事はありません! 偽領主を倒す時の腰の捻り、早さ、正確に打ち出す技術……言うのは癪ですが完璧でした。だから貴方の弟子に……」

「――悪いけどそういうのパスで」

「なつ!?!?」

席から立ち上がり面倒にならないように早歩きで立ち去る。

すぐ後ろから立ち上がる音が聞こえたがそれでも進む。

「待つてください! 何故ダメなんですか?!?」

「やだよ面倒くさい。俺の通つてた所の場所教えてやるからそこ行けよ」「私は! 貴方がいいんです!」

言われて嬉しくないことはないが面倒8割、怠い2割が俺の中を占領していた。

早く帰つて今日は豪華な食事にでもするつもりなのだ。こんなところで時間を取られるわけにはいかない。

「こうなつたら実力ギヤツ!」

ズルリとサクラの足が滑り、地面に大の字で転げた。

「落ちてたバナナの皮を見えなくしてた。俺を師匠にするなんて考えは早く捨てて、

ナツ辺りに頼めよー」

そうして俺は無事脱出するのであつた。

Q・貴方はジョニイさんに対してもう思っていますか？
Lさんの場合

「ジョニイのことについて知りたい？うーん、でも私知り合つて間もないしめちゃく
ちゃ仲がいいってわけじやないのよ。でもなんていうのかな・・私が初めてこのギル
ドに来た時にいきなり魔法の打ち合いが始まつたり巨人（マカロフ）が現れたんだけど
ね、その時ジョニイは驚きもせずにポケーって見ていたわ。格闘大会の優勝者つてみん
なあんな感じなのかしらね？」

Mさんの場合

「ジョニイ？ジョニイはねえ・・死んだ魚見たいな目をしてるけど以外と馬鹿なことを

するのが好きなのよ? 飛んで来たワインボトルを打ち返したり、ナツが戦えつて言つた
時は面倒だつたのか飛びかかつた瞬間脛を蹴つて悶絶させたのよ。それに——」グサツ
↑ガラスが刺さる音

Gさんの場合

「ジョニーについて知りたい? もの好きだなあんた。一度あいつの家に(勝手に)行つた
ことがあるけどよ案外綺麗だつたぜ。あと飯も美味かつたな。ん? そういう事を聞き
たいんじゃない? となるとそうだな・・・ああ、そういうえば俺の使う魔法のこと教えた
らなんか羨ましそうにしてたな」

E L F M Nさんの場合

「やつは男の中のおと(以下略)」

買つてやつたぞ高い肉！

いつもなら店の前で物欲しそうに見てているだけだつたが今日はそんな肉をなんと1K買つてやつたわ！流石に1日では食べないが・・・取り敢えず帰つたらステーキである。

ンツン♪ 実に！スガスガしい気分だッ！歌でも一つ歌いたいような イイ気分だ
♪♪フフフハハハハ！

「ただいまー！」

「よつ、待つてたぜ」

「早く肉焼いてくれよ！」

前言撤回。やつぱりスガスガしくない。

目の前には当たり前みたいに居座つてるナツとグレイ。きつとルーシイはいつもこんな気分なのだろう。

そもそもこの二人はいつ何処で俺が肉を食べると予想していたのだろうか？ナツに至つては既にフォークとナイフを待ち構えている。

「あのねえ君達……不法侵入つて言葉知つてる? 犯罪だよ?」

「生憎とそんな言葉は俺の脳みそにはないな」

「そんなことより早く作ってくれよ! 俺もう腹ペコだ!」

「なんでお前らに振舞うことが前提なんだよ! つておいグレイ! 貴様が読んでいる本はまさか?!?」

「ああ、ベッドの下に見つけてくださいと言わんばかりに置かれていた工口本だな」

グレイがニヤニヤとした目を向けてくる。

は、腹がたつぜ……!

写輪眼で幻術かけて真夏の○の淫夢でも見せてやろうかこいつ……!

「ちなみに早く作らないところいつが氷漬けになるぜ?」

グレイが持っている工口本は俺が見つけた特上品。それとステーキを天秤にかけた時……

「地獄に落ちやがれお前ら……」

人は工口本を取る。

「いやー食った食った！サンキューなジヨニイ！」

「ナツ・・・お前明日ぶつ飛ばしてやるからな」

「1Kあつた肉の塊はほんんどナツの口の中に消えて行つた。俺とグレイで大体250gぐらい。さてはこいつ遠慮つて言葉知らないな？」

「そういえばジヨニイ。お前を弟子してくれつて言つてたやつどうするんだ？」

「弟子になんかしねえよ。面倒な」

「なんだよ！面白そujeやねえか！」

「面白いわけあるか。俺の睡眠が削られるんだぞ？そもそも俺は師匠つて柄じやない」

「お前なあ・・・」

「というか弟子にしてくれと言うが、俺が師匠から受けた修行つて全部試合だからな・・・練習やら技とか学んだことがない。」

「ならお前らが師匠になれよ」

「面倒くさい」

「よしお前ら、ちょっと表出な」

L v. 8 不幸

「それじゃアルさん！今日からお願ひします！」

「お前来世まで恨んでやるからな」

キラキラした目で俺を見るサクラ。

こうなつたのには訳がある。

サクラ「私を脱がせようとしたのをバラします」

俺「すいません許してください！何でもしますから！」

サクラ「ん？今何でもするつて言つたよね？」

最悪である。

この一言に尽きる。

呼ぶ？ そして調子に乗つたサクラは俺のことをアルさんアルさん言う訳だ。何故そつちで

一
はいはい

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「アルさんってあれですよね？ 確か無流なる流派を使って格闘大会に優勝したと聞いたんですけど無流ってなんなんですか？」

「お前つてやつは・・・はあ、まあいいや。無流っていうのはな——」

無流。

流派とは本来何かしらの技や型があるものだ。しかし無流には決まつた技や型がない。その理由は他人に教えられた技など自分の技ではないとのこと。他人に教えられたものは自分の最適解ではないこともある。極論無流とは使い手により切り方も異なるれば技だつて違う。流派ではあるがこれではただの我流なのだ。

「へえー・・・じゃあアルさんはどんな感じで相手を倒すんですか?」「俺はアレだ。相手の弱点や関節ばつか狙つてるな」

「酷いですね・・・」

「うるせえ」

「俺みたいな卑怯者は弱点を突くしかできないのだ。」

「取り敢えずだ。何でもいいから俺を殺す気でかかってこい」「は？」

「ああ、心配しなくて大丈夫だ。こっちからは攻撃はしない」

「いやそうじやなくて何でいきなりそんな事を？」

「え？ だつて俺初めて道場行つた時今と全く同じ事させてもらつたけど・・・」

「・・・」「」

俺の師匠つてやばかったんだな。

「ま、まあそれはいいとしてかかつてこい」

「ほ、本当にいいんですか？」

「ああ。あーでも殺す氣がないやつに殺す氣でかかるつてのも難しいよな。 それじや

地面上に落ちていたいい感じの木の枝を2本取り、1本をサクラに渡す。

「これでいいだろ？」

「これでしたら・・・」

逆手に持つて構える。

対して俺は木の棒を前に突き出す。

サクラも本気になつたのか目がヤル氣だ。

「んじや始め――」

目の前からサクラが消える。

相変わらず速い。

振り返るとそこには木の棒を突き出そうとしているサクラ。サクラの手首の関節を瞬間に木の棒を離す事で空いて手を使い払うと同時に掴む。前傾姿勢になつたサクラの下に潜り込みそのまま背負い投げ。

「二度も食らうこととはしません！」

以前俺の背負い投げで痛い目を見たせいか対策はバツチリだった。空中で俺の手をほどき前方に飛び出し木の棒を投げた。

胴体に投げられた木の棒を、空中に放置していた木の棒を回収し飛んできた木の棒を叩き落とす。武器がなくなつたがここからどう動く？

「ハアアアア！」

着地した途端に駆け出し、回転し、その勢いを乗せた蹴りが放たれた。足で太ももを抑え、手で足先と脛に当て威力を殺し、足を掴む。

「このままじゃ関節やられるぞ？」

「知つてますよ！」

俺が足を掴んでるのをいいことに、腹筋の力を使い上体を起こし足元に落ちていた木の棒を回収し、袈裟斬りに振るう。片腕を離し、手首を抑える。

「まだ、まだ！」

片方の手足がそれぞれ拘束されているなかさらに身を捻り足を叩き落とそうとする。

俺の両手はふさがりもはや防ぎようがない。しかし、それは悪手なのだ。

腕を円を描くように回転させ、蹴りをかわしそのまま遠心力を用いて地面に優しく落とす。

「王手だな。まあ前よりかは上達してるな」

「いけたと思つたんですけどねえ・・・」

手を差し伸べ立ち上がるさせる。

「と、いうような感じで色々な長さや重さの武器で試していく。今日はそんな感じだな」

「別に倒してしまつても構わないんですよね」

「お前それフラグだからな？」

返事がないただの屍のようだ。

とはこのことだろうか？

俺の横には1ミリたりとも動かないサクラが倒れ込んでいた。

「鬼です……鬼」

「じゃあこれを考案し、なおかつエグい修行をさせた師匠は魔王だな」

そんなサクラとは対称にのんびりと空を見上げる俺。そんなぼけ一つとしてる俺の耳に草を踏む音が聞こえた。

誰だ？と思いつつ見てみるとルーンサーイーがこちらに駆け寄つて來た。

「ジョニイちよつとお願ひが……つてなんでサクラが死にかけてるのよ？」

「知り合いだつたのか？」

「昨日道の端で一人膝抱えて泣いていたから泊まらせてあげたのよ」

ルーンサーイーよ……何故放つて置かなかつた……さすれば俺がこんな面倒なことに…

!

「へ、へえ。そうなんだー。ところでお願ひってなんだ? 家賃貸してとかは嫌だぞ」「そんなこと言わないわよ。それでね、お願ひって言うのは——」

「私と一緒にクエストについて来て欲しいんだけど···」

悲報、厄介なことがまたしても増えそう

L V. 9 呪歌の始まり

私もついていきたい！と言い張るサクラに「落ちてくる木の葉一枚も落とさずに千枚切れたら連れて行つてやるよwww」と言い、留守番させた俺はこの漫画のヒロインであるルーシーと乗り場で待っていた。

「なあルーシー。ナツとグレイ組ませるつて正気の沙汰じやないとと思うの。水と油だよ？」

「そんなことわかつてゐるわよ。でも仕方ないでしょ？」

「そうだよなあ・・・S級魔導師直の指名だもんな。ん？じやあ言われてない俺は帰つていいんじや・・・？」

「それはやめなさい」

「ひたすら愚痴る俺。

話して5分ぐらい経つた頃かナツとグレイが喧嘩しながらやつて來た。

「相変わらず仲がよろしいことで・・・」「よくねえ！」

心の声が読めるほどいいんだな（白目）

しかしこの二人の喧嘩を仲裁するのは巻き込まれるため非常に危険である。
最悪焼き焦げた後に氷漬けにされる可能性がある。

「早く、ねえかなあ・・・」

と呟き現実逃避をしていた。

ララバイ編についておさらいしておこう。

闇ギルド「鉄の森」が黒魔道士ゼレフの呪われた道具の一つである呪歌（ララバイ）を使
い正規ギルドのギルドマスター達の命を狙うのを阻止する話だ。本来であればナツ、
グレイ、ルーシーそしてエルザの4人であつたがルーシーの希望により俺が追加さ
れた。解せぬ。
「うつぶ・・・おええ・・・」

「こつちに向いて吐いたらマジで電車の外に放り出すからな？ 吐くならグレイにしてくれ」

「わ、分かつウツ」

「なつ…？ ジョニイお前！」

グレイが咄嗟に前に突き出した袋に、ナツの火竜の咆哮（ただのゲロ）が炸裂した。

「つてめえジョニイ！ 何で俺なんだよ！ ここはルーシーだろうが…？」

「そう言う問題…？」

「ふつ、仲がいいな」

「いや、ただゲロ押し付けただけですけどね」

席の配置は俺、ナツ、ルーシー、グレイの4人。そして隣の席にエルザが巨大な荷物と相席してゐる状態である。

ドラゴンスレイヤー特有の乗り物酔いによるブレス（ゲロ）攻撃を避けるためにグレイに押し付けたが…チツ、かからなかつたか。

「おい、お前。かかつて欲しかったみたいな顔してんじやねえ」

「してねえよ…してねえよ（重要な事なので2回言つた）」

「ウツ、吐k——」

再びブレスを行おうとしているナツに無言の腹パン。彼女は瑠璃ではない（突然）。

氣を失つたナツはブレス攻撃を中断しそのまま深い眠りに入った。

「よくまあそんなこと出来るわね」

「いやこれが一番楽かなと」

「ジョニーがしなければ私がすることだつた」

「あんたら脳内似てんな」

あれからエルザ達と話していたら眠くなつた俺は「駅に着いたら起こしてやるよ」と
言う言葉に甘えて寝た。

しかし次に目を開けた時に写っていたのは顔に蹴りを入れられているナツ。
気のせいと思つて目をつぶつた。しかし目を閉じても、耳から入つてくる音が現実と
いうことに叩きつけた。

というか何で3人いなの？俺ほつていかれたの？いくらなんでも酷すぎじゃね？
取り敢えず見てしまつたものは仕方ないと立ち上がりなんか某ニンジャ漫画のめん
どくさがりみたいなやつの背後に立つ。

「おい」

「あ？なんだテメエ？ガキは黙つて——」

直立状態から瞬時に体制を変え正拳突き。

踏み込みの力と腰の捻りが技のキレを上げ、加えて魔力も少々練りこんだ。ドンツツ！と一瞬車両が揺れた後に名前も知らない敵は先頭車両まで座席を壊しながら吹き飛んだ。

「おお！ナイスジョニー！うつ···」

「この時ぐらい何とかしろよ···」

『先程の急停車は誤報によるものだと確認出来ました。間も無く発車します』
「ヤツベ！ジョニイ後は任せた！』

「はあ!?ちよ、お前！」

俺の言葉を盛大に無視し窓ガラスから外に出た。

事態があまり飲み込めないが取り敢えずさつきぶん殴ったシカマルみたいなやつを黙らせればいいのだろう？

「ハエがあ···！『鉄の森』に喧嘩を売ったことを後悔させてやるよ···！

「生憎とウチのギルドは喧嘩売つてばつかだからな今更怖気付きやしねえよ」
シカマルもとい敵の影が伸びる。

蛇のようにうねり、二次元的な動きから三次元的な動きを可能にした影は、地面から飛び出し無数に枝分かれした。

「——換装」

魔力を込め呼び出すのは神様からもらつた刀。馴染んだ重さが手に伝わるのを感じる。刀を手で3回回し、飛来する影を叩き落とす。

しかし影を使う本体を倒さないことにこの無数に迫る影がどうにもならない。
「ちよこまか動くんじやねえ！」

「動かなきや当たるだろ・・・！」

影が増える。

4本だつた影が8本に。

そろそろ限界だつた俺は写輪眼を発動し軌道を読む。
逸らし、叩き落とし、時には避ける。

地面から足元を狙つた影を避けるために空中に逃げて後退する。

「——馬鹿が」

敵が笑う。

着地を狙い7本の影が身体を囲うように配置されていた。

「死ね！」

先端が尖った影が迫る。

逃げ場はない。このままだと俺の体は穴だらけになるだろう。だが誘っていたのは俺の方だ。

「ば、馬鹿な・・・体が・・・！」

俺を囲う影は痙攣を起こしたようにピクピクとするだけで俺の身体を突き刺さない。そしてそれは敵も同じ。

「貴様何をした？！？」

「下見てみな」

「こ、これは・・・！」

「俺の足元から伸びた影は、無数に飛び出した影を通り抜け、敵本体の影に引っ付いていた。

「お、お前も俺と同じ魔法を・・・」

「いや、コピーさせてもらつた。と言つてもお前のとはちよいと違う使い方だけどな」

人が動くと自然と影も動く。

ならば影が動かないはどうなるか。それはもちろん影を作り出す人も動けない。

「影縛りの術だ、覚えとけ」

「貴様アアアアア!!」

最後の抵抗か俺を囮んでいた影が一つ動く。

それをたやすくかわし、敵の腹に一発打ち込み、上空に打ち上げる。

「お前の弱点は影が出ない空中では何も出来ない、だ。そしてこれでもくらつとけ！」

大きく呼吸をし、肺に空気を貯める。

魔力と酸素が混じり合う。

口元から炎が今か今かと漏れる。それを拡散させるのではなく、一点集中。ナツの使う火竜の咆哮、ではなくあくまで参考にした新技。

「——火竜弾ツツ！」

「巨大な火の玉が迫り、それをなすすべなく受けた敵は空中で、大爆発した。
『汚ねえ花火だ……！』

それを見た俺はちょっとだけカツコつけてみたい。

L V 1 0 予想外

空中で焼き焦げたあと汽車に落ちてきたシカマルもどきをロープでグルグル巻きにし、ポケットに雜に入っていたララバイを奪つた俺は椅子に座りぼんやりしていた。

「これ壊せねえのかな」

リコーダーっぽいララバイの先端部位を片手で持ち、壁に叩きつけたり、地面に叩きつけた（大変迷惑なのでやめましょう）。

しかし硬い。鈍器かよ。

「そうだ。切つてみよう」

そんなことを思いつく私はきっと戦闘脳。

置きつ放しにしていた神様のくれた刀を持ち上げる。神様のくれた刀は何かの嫌がらせか何も切れない。しかしこれに何かしらの属性、例えば風を纏わせると岩すら両断する刀の完成だ。

「よし、と。んじや——」

手に持つていたララバイを軽く投げる。クルクルと回りながら落ちてくるのに合わせ風を纏つた刀が迫る。

しかし次の瞬間ララバイから黒い煙が俺の顔めがけて噴出された。

『調子に乗るな小僧！』

ララバイに付いていた髑髏の部分が喋り出した。煙を追い払うのに集中していた俺はいつのまにか近づいていたララバイに気づかず、胸をどつかれ汽車の一つ先の車両に飛ばされた。愉快と言わんばかりに髑髏の口元を上げ器用に汽車の連結部分を取り外した。

「なつ！待ちやがれ！」

咄嗟に手から魔力の糸を出し、走る汽車にくつ付けようとしたがおしくも射程外。

最後に見たのは大笑いした髑髏のリコーダーが再びシカマルもどきのポケットに入つて行くところだつた。

どうする？と考えた矢先、背後から何かが唸る音が響いた。

何だと思い振り返ると、魔導四輪を使い煙を巻き上げ交通違反なんてなかつたかのよ

うな大爆走を繰り広げるエルザ達の姿。

「ジョニイ！乗れ！」

「難しいことを言うなあ・・・！」

指先から魔力の糸を放出し、魔導四輪に引っ付ける。風魔法を足元から放出し空中で軌道を修正しながら時速150kmを超える速さの魔導四輪の上に着地した。

「どういふか俺の座席は!?」

風がもう当たり、顔がとんでもないことになつてゐる気がする。俺の質問に対してもエルザは冷たくこう言い放つた。

「悪いなジョニイ。この魔導四輪、4人乗りなんだ」

「ふざけるなあああああ！」

「おろおろおろおろおろ」

口からキラキラを出す俺とナツ。

ナツは乗り物酔い、そして俺はジェットコースター気分を20分近く体験した気持ち悪さで嘔吐していた。

「もう絶対魔導四輪なんて乗つてやらねえ！」

「まつたくだ・・・！」

「というかエルザの運転が荒——おろおろろ」
キラキラが口から溢れる。

なんとか歩き、エルザ達の後を追う。

途中原作であつたヘッドバットされた警備員達が何人か倒れていた。
ナツと互いを支え合い、駅のホームにたどり着くと鉄の森の魔導士達がわんさかとい
た。

そのかずおよそ100と言つたところだろうか。

「丁度いい！ナツとグレイはボスを追え！ジョニイとルーシーは残つて倒すのを手
伝つてくれ！」

「えつ！？私残るの！？」

「俺もかよお・・・」

その場でジャンプし酔いを醒ます（醒めたとは言つてない）。腰にぶら下げていた神
様のくれた刀を取り出し握りしめる。

「無の極みと言われたお前の実力。見せてもらうぞ？」

「はっ、別に全部倒してしまつても構わないのだろう？」

「よく言った！任せたぞ！」

「ちょっとー！私はー！？」

「頑張れ！」

「それだけー!!?」

俺とエルザはそれぞれ逆の方に走る。

丁度敵の数も半々だ。

「馬鹿が一人で勝てると思うなよ！」

「言つてやがれ！刀劍変化オーバーエッジ、双剣！」

神様のくれた刀が2つに分離する。

片手に一本ずつ持ち敵の中心に駆け抜ける。

「後ろがガラ空きだ！」

背後から振り落とされた戦斧を体を半身にして避け、手首に一撃と鳩尾を柄で叩く。態勢の崩れた敵を蹴りつけ後続の敵とぶつける。

——双剣を振るう

手数が増えたことにより敵を叩きやすい。

14人目の顔を蹴りつけて吹き飛ばす。

「調子に乗るな！」

敵の一人が腕に炎の球を浮かせる。

咄嗟に双剣を投げつけ一瞬の驚きを誘い魔法を失敗させる。

「しまつ——」

「遅い」

あらかじめ魔力の糸を繋いでいた双剣を、引き戻し帰り際に敵の体に巻きつけ双剣のついでに敵も引き寄せる。

戻つて来たところを膝蹴りを食らわせ気絶させる。

「な、なんだこいつ！バケモンじやねえか！」

「うるせえ。人のことをバケモン言うな」

エルザの方を確認すると敵をちぎつてはなげちぎつてはなげていた。
負けてられない。

「さあ、続きをしようか」

「「「「ヒイイイイイイイイ！」」」」」

僅差でエルザの方が先に仕留めた。

ドヤ顔可愛かつた結婚してくださいお願いします何でもしますから（なんでもすると
はいつてない）。

「しかしジョニイもバケモノね・・・同じ人間なのかしら？」

「君それしつと酷いこと言つてるからね!!?」

ルーシーの冷たい一言にツッコミを入れながら気絶させた敵の目を開かせる。

「何するの？」

「俺の目はちよいと特別製でな。相手を幻術にかけて情報を取つたり出来るんだよ」

「へえー便利ねえー」

写輪眼を発動し幻術にかける。

気絶しているせいで抵抗力がないためスルスルと情報を抜き取れる。

と言つてもこら辺の内容なんとなく覚えてるので盗み出す必要はあまりないの
だが・・・

「なるほどね。駄は廻で本命は定例会か」

「え!? それじゃマスター達が・・・」

「ああ、死ぬかもな」

「まずいじゃないそれ！早く行かないと！」

駆に竜巻が発生し、一時はどうしようとなつていたがハッピーが前回のクエストで行つた報酬（？）といふか盗んだ？王道12門の鍵の一つであるバルゴを召喚し地面をくぐりぬけた。

「魔力が心配だが……仕方がない！」

全員乗り込め！」

「また乗るのね……」

「仕方ないっちゃ仕方ないけど——」

ゾツ、と背筋に寒気が伝わる。

ほぼ反射的に刀を抜刀し空を切りながら迫る何かを切り裂く。

カラーンと金属音を立てて落ちたのは先端が尖つた金属。本来この世界にはあつてはならない銃弾だつた。

「馬鹿な……」

「魔導四輪を狙つたのか……危なかつた。助かつたジヨニイ」

「いえ……それほどでも」

銃弾があるということは自然と銃があるということだ。

となれば俺と同じ転生者？しかしながらまたこんなことを？

「あーあ、バレちゃしようがねえか」

ザクザクと砂を踏む音が聞こえた。

見るとそこには黒いマントを被り、肩に担ぐように銃を一丁構える男がそこに立つて
いた。

L V. 11 間合い

めんどくさそうな顔をしながら歩いてきた男の手には前世では映画などで大活躍した銃。

おそらくそれで狙撃してきたのだろうが問題はそこではない。

「お前……何者なんだ？」

ララバイ編にこんなやつはいなかつた。

少なくとも俺の記憶の中ではだが。

しかし実弾を使った銃はこの世に存在しない。銃自体はあるのだが使用するのは所有者の魔力を込めた弾丸。こつまりこいつは俺と同じ転生者かもしれない。

「何者つて言われても素直に教えるやつがいると思うかい?」

「だろうな。それじゃぶちのめした後に教えてもらうことにするわ。

エルザヒルーシーは先に行つててくれ」

「え……でも」

「頼む。多分俺だつたらなんとか対処出来るはずだから」

「……分かつた。頼むぞジョニー」

エルザがルーシーを連れ魔導四輪に乗り込みエンジンを蒸す。

「させるかよ——」

撃鉄を起こし、弾倉が回転する。

狙いを定め放たれた7・62mm弾は爆発じみた音を撒き散らし、火花を散らす。魔導四輪のタイヤに放たれた弾丸を刀で弾き飛ばす。

腕にとんでもない痺れが来るがエルザ達を行かせたのでまあよしとしよう。

「あーあ、行つてしまつたかー」

「残念だつたな。ここからは男同士仲良くやろうぜ」

「生憎と俺は一人が好きなんでね!」

俺は刀を、奴は銃を構えて戦いを始めた。

「ジョニイ大丈夫かしら……」

一方、エルザとルーシーは魔導四輪を使い平地を爆走していた。

魔力も切れ気味だというのに未だに100kを超えるのは流石S級魔道士というところか。

「どうだろうな……なんせやつの攻撃はほとんど目視できなかつた。それにだ……？」

エルザの顔が歪む。

「聞いたことがあるんだ。遠距離から一瞬で敵を殺す死神がいると
「ま、まさか……」

「違う可能性もある。しかしあまりにも早すぎた。無の極みと言われたジョニイで
も……」

晴れた空とは対照に、2人の心には暗雲がさしかかっていた。

「うおおおおおお!!??」

狭い部屋の中を走り回る。

振り返る暇などない。

どうせ地面やら壁やらが蜂の巣だらけなのだ。

「どうしたどうした？逃げてばっかりか？」

あくまでヘラヘラとしたやつは両手にマシンガンという火力馬鹿な装備で俺を追いかけ回していた。

背後からズダダダダダと地面を破壊する音が響く。きっと一瞬でも足を止めたら死ぬだろう。

「クツソ、ふざけたことしやがって！」

民家の家に（不法）侵入し、息を整える。

現時点では分かつたことだがやつの持つ銃は少なくとも10種類以上。いや、もしかしたら転生特典とかで現存するすべての銃を持っているかもな。それに加えて他にも特典があるという可能性も。

「俺も銃にしどきやよかつたかなあ」

ブーツが床を踏む音が聞こえる。

息を止め気配を殺す。

布の擦れる音、金属が体に当たる音、あらゆるものを感じる。

力チン、と弾が装填される。

隠れていたドアの隙間から覗くと、全長1・5mはあるであろうゴツいライフルが俺の方を狙っていた。

「ツツツツ!? オーバー・エッジ 刀劍變化・盾!」

刀がグニヤリと形を変え、薄く広い盾を作り上げる。

「喰らいやがれ」

その銃声は人の鼓膜を破壊するかのように叫んだ。その爆音にふさわしい威力はあつたようで盾は突き破られはしなかつたが俺の背中は壁に打ち付けられた。

弾丸は盾にはじかれた後背後の壁を突き破り、隣の家の壁までもが貫通していた。
「俺の持つてる中で指5本にはに入るぐらい威力が高いやつなんだけどねえ」

「そんなもん人に向けて撃つな!」

クソ、こつちからは手が出せない。

一発当たれば百発あたるようなものだもんなアレ。

遠距離では圧倒的に不利。となると近距離戦闘になるがそこまでたどり着くのが難しい。

「全く……なんてやりにくいやつなんだ」

とはいって、責めないわけにはいかない。

ちよいと魔力量の心配があるが気にしては置けない。ここからは俺の時間だ。

風呂場へと移動し、水道の蛇口を捻り水を出す。魔法を発動する際、発動する属性に似たもの、もしくわ発動する魔法と同じ物質が存在する場合魔力の消費がかなり少なくなる。魔法は何かしらを魔力にて生成、からの操作。似たようなものがある場合魔力で生成という工程はカットされるからだ。

例えは水魔法を使う近くに水を吹き出す何か——そう、蛇口から溢れる水とか。

「——行け！」

魔力を込める。

本来の俺の魔力では到底不可能な量の水が蛇口から放たれる。あつという間に床まで侵食し、近づいてきたヤツを飲み込み玄関まで押し流した。

怒涛の水に押し流されたヤツは鏡を手から離し咳き込んでいた。その一瞬の隙を狙

い風呂場から駆け出す。

残り10mの距離。俺は刀を握り直し、右脚を地面に叩きつけ加速の勢いをつける。一步、魔力を込めた走りは5mの距離を詰めた。

「うおおおおおおおお！」

だが敵も早かつた。

俺の姿を捉えた瞬間驚きもせずに、手に2丁の拳銃を出現させ確実に狙っていた。ここで刀を盾に変化させても遅すぎる。

迎撃するしか手がない。

写輪眼を発動し軌道を読む。

「俺の――勝ちだ！」

2丁の拳銃から弾丸が放たれる。

両腕に魔力を流し強化。飛来する弾丸達を最短距離で切り落とす。

「うおおおおおおおお！」

いつもよりも多く魔力を込めた俺の腕は音速の領域に達することを可能にした。迫り来る弾丸を全て叩き落とす。

「んな馬鹿な！弾丸を叩き落とすとかあんた正気かよ！？」

「いたつて正気だよ!!」

走りで生み出した速度を乗せたまま渾身の一撃をヤツに叩き込んだ。

L V. 12 ツーマンセル

一方、エリゴールを追いかけていたナツとグレイ。ナツはハッピーの翼を使い、グレイはそこらへんに落ちていたバイクを蹴りつけ無理矢理エンジンを起こした。（犯罪行為なのでやめましょう）

それにより二人はエリゴールに追いつき戦うことになつたのだが――

「火竜の咆哮！」

津波のような勢いで炎が放たれる。

しかしそのせいでグレイが作り出していた氷を見事に溶かしていく。更に氷が水となり炎の威力を低減させた。

「・・・」

ナツとグレイが向き合う。

二人とも無言で近づきあい胸ぐらを掴みあつた。

「おいナツ、お前ふざけてんのか？今のは俺が攻撃してたら当たつてたんだよ。熱で頭が逝かれたか？」

「お前こそ俺が火竜の咆哮使うの見えてたくせに攻撃するとかおかしいんじやねえのか？普段裸でいるから脳内までカチンコチンになつたか？」

「・・・」

「やんのかゴラア！」

注意：決してコントをしているわけではありません。

「テメエがいなきやあんな雑魚にもう勝つてたんだよ！どつか行きやがれ！」

「それは俺のセリフだ裸野郎！お前の方こそどつか行け！」

良く言えば喧嘩するほど仲がいい、悪く言えば水と油。

普段から喧嘩ばかりしている二人だが、それぞれが使う属性も真逆である氷と火だ。チームプレイをするにはあまりにも相性が悪すぎた。

「おいおい仲間割れか。ま、ハ工共にはふさわしいがな！ハハハハハ！……つて俺の言葉も聞こえてないのか」

エリゴールの話など無視である。

両者一步も引かず未だに言い争っていた。

「定例会までまだ時間があるとはいえるこんなアホどもに構つてはいられないな……早くしなければ」

クルリとナツとグレイの顔がエリゴールを捉えた。勿論お互い胸ぐらは掴み合つたままだ。

「おい、何で定例会が今出て来る？」

「お前たちはその理由も知らずに俺を付けて来やがったのか……まあ貴様らなどすぐに殺せるから教えてやろう」

一瞬呆れた顔になつたが、待つてたと言わんばかりに邪惡な笑みを浮かべた。

「俺の狙いは正規のギルドのマスター達だ。ララバイで全員殺して、俺たちが正規のギルドになつてやるんだよ！ギヤハハ！」

「・・・」

二人は互いの胸ぐらを離しあつた。

おや？という目を二人に向けると憤怒の表情を浮かべていた。
「じつちやん達を殺すつていうことが・・・」

「いい度胸してるとと思うぜお前。おいナツ、今回だけは共闘だ。しくじるんじゃねえぞ」「はつ、誰にもの言つてんだよ！」

ナツが勢いよく走り出す。

今までとは流れが違う。そう認識したエリゴールは周囲に風の刃を発生させ、ナツにむけて無造作に放つた。

「アイスメイク 槍騎兵^{ラングス}」

グレイの周囲から氷の槍が発生する。

一直線に飛んで行つた槍はナツを狙つていた風の刃を迎撃した。

空中でぶつかり合った風と刃と氷の槍は互いを破壊しあい氷の残骸が宙に残る。その隙間を走り、エリゴールに近づいたナツは地面から少し飛び上がり空中でグルリと一回転し、炎を纏つた脚を叩き落とす。

「――火竜の鉤爪！」

ゴウ！と風を切り迫りくる竜の爪をエリゴールは体ずらして躱した。

ガラ空きになつた胴体に風魔法を打ち込もうとした時、ナツの胴体がグルリと回り、もう片方の足に火が灯る。

「――二連撃！」

攻撃体制に入つていたエリゴールは完全な回避には失敗し頬を少し焼かれた。

エリゴールは軽く舌打ちをし、再び風魔法を手の中で生み出す。連続して技を発動したせいで空中での身動きが取れないナツは回避が不可能。しかし、そうはさせないとグレイのアイスマスクによる氷の剣が飛んで来る。

「小賢しいわ！」

小さな嵐が爆発した。

風の軌道に乗った剣達は全てエリゴールから外れる。だがそれを功を成してかナツもエリゴールの間合い内から風に乗ることで逃げることに成功した。

「あぶねえ！」

「ぼやいてる場合か！次だ！」

広げた掌に、拳を重ねアイスマイクと唱える。グレイの魔法アイスマイクメイクは自身の手元のみならず、少し離れた場所の空気も凍らせる。

エリゴールの頭上に巨人でも殺すのかと言わんばかりの戦鎧が仕掛けられる。

「——大槌兵！」

巨大な戦鎧が落とされる。

戦っている場所が汽車のレール上だというのに大胆な策だ。

戦鎧が落ちて来るのに合わせナツが走つて来るのが見えたエリゴールは余裕を持つて躲し、反撃のための魔法を用意する。

「喰らいなア！」

圧縮された風が放たれた。

グレイは即座に自身の前方に氷の盾を作り出して防いだ。だが風の玉は次々と放たれ盾を作り出すのが間に合わず後ろに弾き飛ばされた。

「ハーアハハ！ 滑稽だなア！ フエアリー・テイルの魔道士さんよお？？」

「——後ろ、注意だぜオツサン」

エリゴールの視界が暗くなる。

背後を見るとグレイの作った氷の戦鎌を振り下ろそうとしているナツが——

「くたばりやがれええええええええ！！」

肘から炎を出すことで勢いがつき、戦鎌がエリゴールに叩きつけられ、軽く数10メートルは吹き飛び地面に背を強く打ち付けた。

起き上がるうとした時には逃げ場所を封じるかのように左右に氷の剣が突き立てられ、その正面には大きく呼吸をする一匹の火竜。

「今だ！ ナツ！」

「火竜の——咆哮！」

左右の剣に逃げ道を阻まれ迫り来る炎に対してエリゴールは逃げも隠れもせずにニヤリと笑みを浮かべた。

炎が吹き荒れる。氷の剣もろとも燃やし尽くした後に残っていたのは風を纏つたエリゴール。

「残念だつたな。生憎と炎は効かない」

「そうか。ならもつと力込めてその風引き剥がしやいいんだろう？」

「ナツ、作戦がある」

グレイはナツの耳元で自身の作戦を伝えた。最初は聞くだけのナツだつたのか、その作戦が気に入つたのか笑みを浮かべた。

グレイの周囲の空気が凍りつき10を超える剣や戦斧、大剣などの多種にわたる武器が浮かび上がる。

それと同時にナツの両手にも火玉が浮かび上がる。

「行くぞグレイ！しくじんなよ！」

「お前に言われたくねえよ！」

火の玉と氷の武器たちが飛来する。

火の玉は風の鎧が弾き、氷の武器は風魔法によつて軌道を逸らされた。軌道を逸らされた炎と氷は空中でぶつかり合い煙をあげる。

(何を考えている……?)

やつらはさつき教えたことまで忘れるほど馬鹿なのか?)

煙がエリゴールを包み込み、やがて煙は視界が完全に効かないほど湧き上がった。

(まあいい。魔力を使うが最大威力の風魔法を――)

パキッ、そんな音が耳に聞こえた。

同時に自分の体が指の一本すら動かせないのに気付いた。

「何が起きたか自分でも分からないつて顔だな? いいぜ、教えてやるよ」

「氷と炎。互いがぶつかり合うと水蒸気を起こすだろ？ま、簡単に言えばそれを凍らせただけだ。でもいい策だと思うぜ？」

「なんせ策に気づいた所で逃げるのは難しいし、更にお前は風を作り出せる条件じやなかつたら魔法を発動出来ないからな。例えば氷の中とかな。そしてだ・・・」

「これで終わりだ」

エリゴールを拘束していた氷が空高く伸び上がり、レールを外れその横の崖下に向けて真っ直ぐに落ちる。

「――」

声が聞こえた。

目線をあげると太陽の光を浴びながら何かが高速落下して来る。

ハツピーの翼により加速をつけたナツは全身から火を噴出させる。

例えるならジエット機、いや隕石だろうか。

エリゴールを崖下に落とす氷の上を走り更に勢いをつける。

「こいつはオマケだ！受け取れ！」

氷の魔力がナツを纏う炎に絡み合い、赤の炎は、青に変色した。

炎と氷。反作用しあう二つが一つになり、互いの力を強固なものにした。

(ば、バカな・・・!これは――)

二人の魔道士による別々の魔法を一つにして威力を高める高等魔法。本当に息が合つたもの同士でなければ実現は不可能である魔法の名を――

(――合体魔法だと！？)

「ナツと合わせるつてのがちよいと癪だが・・・そうだな。名付けて『双竜の剣』つてと
こか？」

「これが妖精の尻尾の魔道士だあああああ！」

氷の中に封じ込まれていたエリゴールを氷ごと破壊し地面に叩きつけると、氷の炎が
暗闇を青く染め上げた。

L V. 13 妖精の尻尾の魔道士

ギギ、ギギギと金属が擦れ火花が散る音が聞こえる。

俺の渾身の一太刀を奴は直撃する前に出したショットガンを横にすることで防いだ。

「大人しく倒されよ……！」

「悪いけどそれは出来ないっすね……！」

刀をショットガンの内側に入れ込み切り上げるとショットガンは奴の手元から離れ宙に舞う。その隙を狙い右脚を軸に回転し、その勢いを乗せた蹴りを叩きつけた。大きく後ろに吹き飛び地面に転げる。

蹴りの威力を殺そと手で防いだが生半可な防御では到底威力を殺せやしない。

「つたく、手加減つて言葉を知らないっすか？」

「生憎と俺はバカなんでね。そんな言葉は知らんよ！」

今度こそ仕留める。

刀を前に構える。狙いは銃を握れないように腕を——

「やられてばっかりじやないつすよ」

換装で呼び出したのは一丁の銃剣。

何をするかと思うと銃剣をそれぞれ銃と剣に分け、銃の方を投げ捨てた。
剣の長さはおよそ40cm

銃使いのやつが剣にも秀でるとは思いたくないが、一撃がほぼ認識不可能な弾丸に比べれば優しいものだ。

「——シツ！」

ボツ！と顔のすぐそばを剣が通る。

その勢いも銃弾の如く速い。一発貰えばそこに穴が開くことは確かだ。
しかし剣術においては負けるわけにはいかない。

「何で、お前そんな傭兵みたいなことしてんだ？！？」

2発の突きが放たれる。

一つは刀で捌き、もう一つは体を捻り避ける。

カウンターで放った俺の突きを同じく体を捻り躱された。

足に力を入れ飛び上がりつたヤツはサブマシンガンを呼び出し、俺めがけて乱射する。

即座に土魔法を発動し、壁を作り上げる。

土の壁を背にし防御する。すぐ近くからダダダダ！と壁を穿つ音が聞こえるが対戦車ライフルのような貫通力はないため壁を少し破壊するぐらいに留まっている。マガジン分全て撃ち放つた事を確認し、作った壁に魔力を流し操作する。

「これしか、なかつたんすよ！」

魔力によつて壁となつていた岩は形を変え、人間の拳のようになり、真っ直ぐにヤツに伸びる。

そんな攻撃なんて呼んでいたと言わんばかりにショットガンを取り出し撃ち放つ。

ヤツが放つたのは散弾の中でも、ひときわ強力であり、熊や猪を狩るためのスラッグ弾。

轟音、岩が簡単に砕け散る。

「あんたに生まれた時から人を殺す魔法しか持つてない奴の気持ちがよく分かるか!!」

?

その言葉は今まで飄々とした態度と違い、本気の叫びだつた。

銃は人を殺すための武器だ。

ヤツも転生者だとしたらきっと前世では銃好きで、神様特典も全ての銃が欲しいとう願いだつたらのだろう。

しかし、それは記憶あつてのことだ。

「小さい頃から不気味がられたよ・・・『あいつは人殺し』とか『殺人鬼』とかね・・・そんなやつが真っ当な職につけると思うかい？」

引きつった笑みを浮かべたヤツはハンドガンを握り、銃口を俺に向ける。

「残された道はこれだけだ。

だから俺のために死んでくれ」

残された道がこれだけ。

ヤツとしてはこのような傭兵に付くのは嫌だつたのだろう。
けれどもだ――

「これしかないなんて――違うだろツ！」

刀を振り抜く。

銃口から放たれた弾丸は俺の心臓に真っ直ぐ飛んできていた。

俺の刀は最短ルートを走り、飛んできた弾丸は両断し背後に飛ばした。

「人を殺すだけの魔法か。確かにそうだ。銃つてのはそのためにある。けど世界つても
んは広いんだ。偉そうな事を言うがこれしかないなんてありえない。それにさ――」

「ライフルやリボルバーをそんな巧みに使えるやつが銃が嫌いなことなんてない」

記憶にはなくても体が覚えている。

ヤツが前世で銃を触れたのか、この世界で初めて触れたのかは知らない。

けど初めて撃つた時に体が喜んだ筈だ。

望んで手に入れたものが嫌なわけがないからな。

「違う！これしかなかつただけだ！」

「魔力で銃を取り出してるんだろう？仮に他の魔法が使えなかつたとしても魔法道具でもなんでも買えばいいだけじやねえか」

「・・・」

刀身の先をヤツに向ける。

この隙を狙い倒すのは簡単だ。

けれど、あんな迷つて いるヤツを捨て置くのは俺の方針には合わない。
「お前の持つ全部を使え。

今まで使つたのが全部じやないだろう？

それを全部使い切つてからお前が自分のつかう魔法が好きか嫌いか判断しろよ」

「・・・たく、敵に何言つてるんだか」

ヤツの両手に青い光が走る。

右手には見た目がゴツゴツした軽機関銃、左手にはグレネードランチャー。

そして両肩から腰にかけて弾丸が十字にかけられていた。

「そういうことなら全力。出させてもらうつすよ？」

「・・・はつ」

やつぱり調子乗つて言うんじゃなかつた。

勝てるわけがない！

戦いは過激を極めた。

エルザ達に追いつくように残しておいた魔力を総動員させ、体全体に魔力を流すことで弾丸を捌きに捌き続けた。

機関銃100発をかすり傷で済んだことはほぼ奇跡に近いだろう。

飛び散った空薬莢が辺り一帯の地面を覆い尽くしているのが証拠だ。

「ハア・・・ハア・・・どうだ？」

「これで何となく分かつただろう・・・？」

「思い出したよ・・・初めて撃つた時に体に伝わった喜びを・・・」

ヤツも一度の消費魔力は少ないものも換装を使い続けたことにより魔力は空に近い。だがヤツの顔はどこか晴れたように見える。

手に持っていた拳銃を空間にしまい、俺に背を向けて歩いて行く。

「おい、何処に行くんだ？」

「やめだ。依頼は断らない主義だが金よりも重要なものをくれたんだ。

コイツらを使って他に出来ることを探すつすよ」

敵意がないことを確認した俺は刀を腰に吊り下げ、一呼吸する。

魔力はもう既に空に近い。使えても後一度だろう。到底エルザ達に追いつくことなど出来やしない。

「．．．ん？」

どうしようかな？、と思い顔を上げた先に空中をノロノロと飛ぶ飛行物体が。

目を凝らすと、ゴミなどではなく『鉄の森』のリーダーであるエリなんとかさんだつた。

——ここでとてもなくゲスな方法が思いついた。

エリなんとかさんを捕獲し賞金首を頂くとともに、エルザ達に追いつく画期的な作戦。

「おい、ちょっとといいか——」

「あのハエどもが……！」

夕暮れの空をフラフラと彷徨うのはギルド『鉄の森』のマスターであるエリゴールだつた。

ナツとグレイの合体魔法により氷漬けにされ、どうなることやと思ひきや、同じギルドのカゲヤマがララバイを回収し、定例会に向かつた。

少し遅れてエルザが魔導四輪を使つて追いつきナツとグレイを乗せて過ぎ去つたのを確認した後なんとか脱出したがカゲヤマの後を追う魔力もないため全てを任せて一人先に撤退していた。

「クソッ！次に会つたら殺して——」

タアン、と遠くから甲高い音が響いた。

何だ？と反応するよりも早く何か重たい衝撃が肩に伝わりそのまま右肩を貫通した。

「アアアアアア！」

味わつたことのない痛み。

激痛が右肩を襲う。浮遊するための魔力など維持することが出来ず落下する。

「馬鹿な……！何も見えなかつた……！」

地面を這いつくばる。

肩から溢れ出した血が体に着く。

しかし何としてでもここを逃げ出さなければ、そう思い一步踏み出した時だった。

ザツザツ、と土を蹴る音。

顔だけを動かし見てみると、肩に銃を置いてこちらに歩く一人の姿。

「写輪眼とライフルの組み合わせって結構やれるもんだな。これくれよ」

「ダメに決まってるでしょ」

エリゴールを見下ろすのはハエと馬鹿にしていたフェアリーテイルの魔道士であるジヨニイ、そして金を払つて足止めを依頼した男。

打たれた痛みよりも、怒りが込み上げる。

「貴様ア！裏切ったのか！」

「すいませんねえ。こちらの方により多くの物を貰つたんで。ほんと、申し訳ないです」

「ふざけ！」

轟音が響くと同時にエリゴールの目の前に突如何かが打ち込まれた。

顔を上げると赤い目をしたジヨニイが冷徹な顔で見ていた。

「俺はナツやエルザと違つて甘くはない。だから早く答えろよ。

俺を乗せて定例会の場所まで運べ。

答えは『はい』か『YES』だ

「なつり？ そんなの答えが一つしか――」

再び轟音。

次は当てるという意思が身にしみて伝わる。

だがこれでも闇ギルドのマスター。

維持と気合でもここは否定をしなくては――

「ま、幻術かければ済む話だからな」

その言葉を最後にエリゴールは意識が何処か遠くに行くのを感じた。

『カカカ・： どいつもこいつも根性のねえ魔術師どもだ・：』

夜になり、空には雲がかかり闇の一色。

エルザ達はララバイの笛を追跡して、各ギルドマスターの定例会場に着いた時には鉄の森のカゲヤマはララバイの笛を手離していた。

そこに響いたのは地獄からの使者のような低い声。

声の元凶はララバイの笛からだつた。

先端についてあるドクロから黒い瘴気が空に舞い上がり寄つて集まり異形の怪物と化していく。

『もう我慢できん‥ワシが自ら食つてやろう‥貴様らの魂をな‥』

瘴気が收まる頃には高さ10メートル、横5メートル程の悪魔が産まれていた。ララバイは吹くことにより人の魂を食らう化け物。死にたくても死ねないゼレフが自らを殺すための悪魔の一端。

「いかん！吹かせたら近辺にいる住人が！」

誰よりも早く行動を始めたのは妖精女王のエルザだつた。

白銀に光る天輪の鎧を纏い、自分の周りに10の剣を出現させると剣を円状に並べララバイに向かい放つ。

高速回転しながら迫る剣はララバイの人間で言うところの脇腹に直撃し大きく体を抉つた。

「うおおおおおおおおお！」

ナツはララバイの体を伝い頭にまで近づく。

こんなに早く登るのは可能かと誰もが思つてしまふが人間のクライミング能力は猿

よりも優れている。

「左手と… 右手の炎を合わせて…！」

炎と炎の相乗効果。

両腕に灯った炎は片腕のおよそ2倍。

「火竜の煌炎!!」

バンッ！と手を打ち鳴らすと膨れ上がった炎がララバイに直撃し、ララバイを大きく動かした。

『小癩な!!』

ララバイが腕を振るうと呪いが込められた魔弾が放たれた。

属性も何もないただの魔力がこもつた一撃であるがララバイの魔力故に非常に強力だつた。

その弾丸は無秩序に放たれ近くにいたギルドマスターの方へと飛び、直撃すると思つた時だつた。

『アイスマスク——大盾！』

シールド

グレイが前へと飛び出し、魔力を氷へと変換させ前方に縦2メートルの集めの盾を作り上げた。

魔弾が爆発。

しかし氷が多少砕けただけでグレイやギルドマスターには傷はない。

ルーシィはゼレフが生み出した魔物と戦う3人を見て圧感に包まれていた。

「ナツ！グレイ！次で決めるぞ!!」

「おう！」

ナツは先よりも巨大な炎を、グレイを氷を、エルザは無数に舞う剣達を――

「火竜の――」

「アイスマスクイイザ――」

「舞え！剣達よ――」

これが――

「煌炎!!」

「アイスマスクイイザ!!」

「氷欠泉!!」

「サーカルソード循環の剣!!」

――妖精の尻尾の魔道士！

多大なる魔力を持つララバイも大きすぎるダメージを止めきれず、その行動を停止しようとしていた。

自重に従い崩れる先には定例会場——

「定例会場があああああ!!」

妖精の尻尾のギルドマスターであるマカロフの頭に定例会場が壊れた後のことがふと思ひ浮かんだ。

書かされる始末書、修復代、そして「あれ？ これって評議会に呼び出されるんじやね？」と。

散々問題を起こしてきた妖精の尻尾。

ついに呼ばれるのかと涙が溢れそうになつたその瞬間だつた。

遠くから何かが高速接近し、ララバイに黒い斬撃を無数に斬りつけた。

「すいませんマスター。遅れてしまつて」

疲れを露わにし謝罪するのはジョニイ。

何故か剣を持つ反対の手にはグルグルに紐で巻かれたエリゴール。

「なんかヤバそうだつたんで切つたんですけど大丈夫ですよね?」

その言葉を言つた途端ララバイはバラバラに崩れ落ちた。

「スゲー!! おいジョニイ・今はどうやつたんだよ!!」

マカロフとジョニイの間に入つてナツがドカドカと入り込んで来む。ララバイが一瞬にしてバラバラになつたのだ。そりや誰でも気になる。「えつ? ただ早く斬つただけだけだけど?」

「早すぎじやない? ?」

「正直私にも見えんかつたぞ」

「どうかそんなに動けるなら俺と戦つた時手え抜いてただろ!」

ジョニイが妖精の尻尾に入った初日にナツと戦つた。

その時は相打ちとなつて終了していたがこれだけ早くは動いていなかつた。

「いや実はこれ体の負担が? ?」

言葉の途中、ジョニイは電池の切れたロボットのように地面に倒れこんだ。咄嗟にナツが体を支えたがその途端にジョニイが叫び声をあげた。「どうやら相当体の負担がかかるようだな? ?」

「そう思うなら早く助けて」

L V. 14 曲解

後日談。

というには短いかもしねない。

ララバイは無事破壊し、被害にあつたものは幸運にも誰一人いなかつた。ん？ エルザがヘッドバットした駅員はどうしたつて？

・・・忘れる。

原作では跡形もなく破壊されたが俺がエリゴールカーに乗つて疾走し、倒れるララバイをなんとか微塵切りにしてやつたので被害が出なかつた。

マスターには号泣されながら握手した。

人生での時ほど感謝された事はないだろう。

フェアリー・テイルは何かしら問題を起こす。

それを防げたのだ。定例会場の立て直しの分の金も払わなくて済んだし w_i_n — w_i_n だ。

エリゴールは留置所にぶち込んだ。

奴の首には250万の懸賞金がかかつていていたため俺の懐か暖かいどころか暑すぎるぜ！

エリゴールを8割ぐらい倒したナツとグレイには内緒である。

そして――

「エルザー！ やつちまえー！」

「ジョニイー！ お前にかけたんだぞ！ ぜつてえ勝てよ！」

俺とエルザが戦う状況になつていてる。

キングクリムゾンで時を飛ばしたわけではない。

こうなつたには訳がある。

という事で時戻し、発動！

今日は大爆睡しようと思つてた矢先、クソつたれ弟子により叩き起こされ、朝から稽

古に付き合わされた。

昼になり飯を買いに行こうとしたら何やらギルドの方で騒ぎが。

嫌な予感がしたから無視しようと思つたがやはりここでもクソつたれ弟子。無理やり連れて行かされた。

騒ぎの中心にいたのは踏みつけられたナツと、踏みつけているエルザ。ナツの頭にアニメでよく見る3段コブが。

「あー、そうかー」

ここで納得の俺。

本来ならばナツとエルザの試合の途中に評議会が来るが、今回俺が定例会場を守つたため来なかつた。そしてその為原作では途中で終わつた試合が最後まであつたと・・・まあ結果は見ての通りだが。

「なんだよナツー。お前にかけたんだぞー」

「金返せーー！」

「うつせえ！じやあお前ら戦つてみろ！」

ヤジに対し口から炎を少量漏らす事で怒りを表すナツ。

まあエルザの炎帝の鎧？とかいう炎耐性の鎧つけられたら不利だよな。

「おいジヨニイ！そんなふざけた顔で見るぐらいならお前が次やれ！」

「——は？」

何故、俺？

俺の周り見てみろよ。グレイとかエルザとかエルフマンとかエルフマンとかエルフマンがいるだろう。

「そうだー！ やれー！」

「もつと楽しませろおおおお！」

「漢オオオオオオオ！」

「エルフマンお前登場してからそれしか喋つてねえぞ！（メタ）」

背中をグイグイ押される。全力で後ろに抵抗しているのに御構い無しだ。
おいグレイ！そんな爽やかな顔してグツドラツクとかいうな！

こいつら全員絶対★裏切り★ヌルヌル！（語彙力崩壊）。

抵抗むなしく気づいた時にはエルザの前。

冷や汗が垂れる。

「いや、そもそもエルザがいけるかどうか——」

「私は問題ない」

「」

おワタ／（^。o^）＼

と脳内で流れたのはまだいい方なのだろうか。

「俺はエルザにかけるぜ！」

「俺ジョニイに！」

勝手にかけ始まつてるし。

コンナハズジヤナイノニイ！

「あ、俺腹が痛——」

「——ジョニイ」

俺を静かに呼ぶ声。

グレイが俺にしか見えない角度でニヤリと笑う。

まさか俺を逃してくれるのか!!?

そう期待を込めた眼差しはことごとく打ち破られた。

「なつ!?!?」

グレイの手に握られているのは俺の聖書（エロ本）。そしてそれを炙るかのようにナ

ツの手が本の下に置かれていた。

しかもとつておきのとつておき、机の中にネズミ捕り5個、粘着テープ10箇所。さらには番犬がわりの悪霊を入れておいたのにどうして!!??

「すり替えておいたのさ！」

「貴さマアア・・・すうう！」

呼吸を落ち着かせる。

とにかく、あれはとつておきだ。

ここで燃やされるわけにはいかない。

「——来い！」

掛け声なんぞいらんが気を込めるために叫ぶ。

空間が裂け、黒い刀がゆっくりと現れる。

柄を持ち刀身を一回転させエルザに向ける。

「ほう、やる気だな」

エルザは少し笑みを浮かべながら腕を横に伸ばす。

シンプルな西洋剣がエルザの手に握られる。

「無の極みと言われたお前の実力、見せてもらう」
辺りが静寂になる。

剣の気が周りを侵食する。

最後にチラリとグレイとナツを確認する。

ニヤニヤと顔に笑みを浮かべながら工口本をちらつかせてやがる。あいつら帰つたらぶん殴つてやる。

「行くぞ——！」

動き出したのはエルザからだつた。

ナツと戦つた後だというのに疲れを全く見せない。俺とエルザの間にあつた距離 10メートルを瞬時に詰める。

唐竹で振り落とされた剣を刀を横にして受け止める。

エルザの剣の衝撃で砂が舞い上がる。

「重つつ・・・！」

魔力を込めてないのに早く、重い。

数発も受ければ腕が痺れるだろう。

「甘い！」
腕に魔力を流し力を上げる。無理矢理剣を弾き攻撃に移るが——

弾いたはずの剣が瞬間移動じみた速さで移動し俺の刀を弾く。
化け物、と思う暇もないほど攻撃に転じる隙がない。これがS級の魔道士。

「けど——」

こつちも一様武闘大会のチャンピオンの意地がある。

例えS級魔道士が相手だろうが最初から負ける気で行くわけにはいかない。

「行くぞ妖精女王。無流の真髓を見せてやる」

L V・15 妖精女王と無の極み

あれほど騒がしかつた声は試合が進むにつれ声がなくなる。それは決して試合がつまらないというわけではない。

寧ろその逆。目の前の戦いに見惚れ、叫ぶことすら忘れてはいるのだ。

「ハアア！」

エルザの気合が籠つた一撃が振り落とされる。

それに対しジョニイは真正面から受けのではなく、刀を剣が振り落とされる方向にずらすことで力を逃し、振り終わりを狙い一撃。

そんな攻防が1秒間に4合。

「すげえ・・・あのエルザとまともに戦つてやがる」

「流石王者だな・・・」

側から見れば互角に見えるかもしれない。

しかし戦っている本人から見れば――

(攻めに転じれない・・・!)

防戦一方である。

捌き続けてようやく1回の攻撃ではラチがあかない。このままではいずれか突破口を見つけられる。

そう思つたジヨニイは温存していた魔力を稼働させる。

〔影縫〕

影が二次元から三次元へ。

飛び出した影は4本。先端が銳利に尖つており、鎧など簡単に貫くだろう。

——しかし

〔足りん!〕

影を踏みつけ、拳で殴り、剣で2本吹き飛ばす。しかしこれで終わりではない。影というものは正確な形を持たない。

固定されていた影が流動方へと化す。

しなやかな鞭とかした影はエルザの剣を絡み取り、手から奪う。

「胴体ガラ空き——！」

影でつかんでいた剣を遠くへと投げる。

換装するには時間が足りない。

刀を空中に置き去りにし、拳を握る。

足を一步前に出し地面に叩きつけるように落とす。

震脚、足に伝わる衝撃を体に流し拳に——

「うおお！」

拳を回転させながらの正拳突き。

魔力が籠つてないにしろその一撃は壁すらも容易に破壊するだろう。

拳が迫る。がエルザの顔は焦りを浮かべていない。

バキッツ！と何かが割れる音がした。

骨の割れる音ではない。

まさかと思い音の発生源を見ると拳が当たっていたのは大剣。

(幾ら何でも換装が早すぎる——!?)

「ハアアアアアアア！」

大剣が振られる。

風を巻き起こしながら接近する大剣。ジヨニイは咄嗟に腕をクロスして防ぐが勢いは殺しきれず大きく吹き飛ばされた。

(本当化け物……!)

視界の端で銀に光る物体を捉えた。

空中で体制を整え、目を向けると剣が雨あられと降り注ぐ。

ジヨニイは咄嗟に刀を魔法で手元に回収し、自身に向かう剣の群れを弾き飛ばした。

エルザを見ると、白銀に光るドレスのような鎧を纏い、神々しいとも言える姿をしていた。

——天輪の鎧

エルザが着て いる鎧から発する磁力を魔力を使い操ることで、金属である剣を無数に使いこなすことや、投げ飛ばすことが出来る。

「私もそろそろ本気を出すとしよう」

むしろ今まで本気じやなかつたのか、とジヨニイは内心ツッコミを入れた。

しかしその言葉に偽りはない。

表のエルザも当然強いながらも、エルザの強みは圧倒的な魔力量を持つて行われる無数の効果を持つ鎧の換装。

その片鱗を今味わうことになる。

「——舞え、剣達よ」

エルザの周りを浮遊していた剣が一斉にジョニイへと向く。エルザが持っていた剣を振り下ろすと、それが合図になり無数の剣がジョニイ目掛けて飛来する。

ジョニイは一度呼吸をした。

肺に酸素を送り込み、全身へと流す。

慌てず、落ち着いて対処する。

まずは3本。

一本を躊躇し、残り2本を刀で弾く。

次は4本。

それぞれが飛んでくる速度が異なるためタイミングが難しい。——が

「——おお！」

裂帛の声を響かせこれも全て弾く。

一度に飛んでくる数が増える。

ついで5本。

2本を叩き落とし、3本目は足で跳ね上げる。

4本目を刀で打ち返し、5本目に衝突させた。

——しかし、これで終わりではない。

空を見上げると太陽の光を浴びたエルザの姿が。その姿もはや戦神。

「——天輪・三位の剣！」
トライニティソード

エルザの持つ剣に加え、浮遊する剣2本が同時にジョニイに襲いかかる。
数という点では先ほどには劣るが、飛んでくるのは刺突ではなく斬撃だ。
という選択肢はない。

ではどうするか——？

弾く、
躱す

「——三頭龍」

選択したのは迎撃。

渾身の一撃を叩き込むべく魔力の大半を腕に流し、限界を超える。

超高速の3連撃が放たれた。

あまりの速さで同時に3発放ったかのように見えた斬撃はエルザの全ての剣を受け止めた。

「防いだ——！」

「いや、違う!?..?」

観客がどよめく。

エルザの周りには更に2本——

「——五芒^{ペンタグラム}星の剣！」

3本から5本へ。

ジヨニイの使う連撃は3発が限界だ。

——しかしそれがどうした。

限界ならば更にそれを超えろ。

「制限突破」
リミット・オーバー

身体強化を使用しながらの制限突破。
脳の制限を無理やり開く。

「四・五頭龍」

黒い光が空中に伸びる。

銀の光と黒の光が衝突した時、甲高い音が5回響き渡つた。

「やるな！だがもつとだ！もつと私を楽しませろ！」

「んなこと言われても……！」

今のでジョニーの腕は当分使えない。

腕が使えない以上刀も握れない。

刀を落とし、両腕がブラリと下がつている。

骨が折れた訳ではないが強敵を相手にするには危険すぎた。

「どうかバーサーカーかよ……！」
身のこなしだけで剣を躱す。

エルザはこの状況が楽しいのか間髪入れず攻撃を与えてくる。だがジョニイの得意としてる戦い方は素手による戦いなのだ。

「もらつた！」

ジョニイが体制を崩したところにエルザの剣が迫る。

体は死に体。普通であればここで終わりだろう。だが、エルザも普通ではないがジョニイも大概普通ではない。

「——シツ！」

剣が当たる直前、蹴りを手首にぶつけ弾く。

咄嗟の判断力に優れているからこそ出来る技だ。

更に続けてその場で軽く飛び、体を捻り逆の足を叩きつける。が、換装で呼び出した剣に阻まれる。

なんとかして時間を稼ぐ必要があるジョニイはエルザとの距離を詰め、ひたすら足で攻撃する。

下段、上段、向きや方向を変えるがそれら全て対処される。

「よし——」

完璧とは言えないが、腕の調子が戻ったジヨニイは一度エルザから離れ、刀を呼び寄せた。

一呼吸し、精神を整える。

魔力の残量はもう少ない。ならば一撃に全てを——
「そうか、ならば——！」

エルザの周りに無数の剣が浮かび上がる。

これが最後という事が肌に伝わる。

見守る観客も思わず汗が垂れてしまう。

会場の緊張がクライマックスになつた時、両者一斉に動いた。

「——天輪・繚乱の剣ツツ!!」

エルザは最大の手数を持つ技で——

「——嵐ノ刃」

ジヨニイは自身が得意とする魔法を乗せた一撃を——

決着は一瞬だつた。

両者の位置が入れ替わるように移動し、振り終えたままの状態で固まる。

「どうなつた・・・?」

観客の疑問に答えるようにエルザの剣の一本にヒビが入つた。
次第に二本、三本と数が増えエルザの剣は全てヒビが入り、破碎音を響かせながら地面に落ちた。

「流石、無の極みだな・・・が」

振り終えたままの状態だつたジヨニイの体が揺らぐ。

そのまま声もなく地面に崩れ落ちた。

「——私の勝ちだ」

L V. 16 剣を作ろう

「いてて……」

「すまん。やり過ぎた」

ギルドの一室。全身に包帯グルグル巻きにされているものも、筋肉痛と軽い擦り傷だけという軽傷で済んだ。

もつともマスターによると「腕の方は無茶し過ぎたからいつも通りに動かせるには4日ぐらいかかるの」と言われた。しばらくは某海賊料理長を見習つて足技を主体にするしかない。

と言つてもアホ弟子の訓練をサボる口実が出来たため不幸中の幸い?

「あそこまでやる必要あつたのか……?」

「久しぶりでつい……」

エルザは俺の隣でシュンとしていた。

疲れ過ぎたことを後悔しているらしい。

まあその通りだと思う。だつて腕四日ぐらいまともに動かせないし、俺気絶するし、タカキも頑張つてるし！俺も頑張らないと！（言いたかつただけ）。

「詫びと言つてはなんだが身近なことの手伝いでもしよう」

「ん？ 今何でも——」

「言つてない」

対応が早い。

「あー、でもそうだ。俺の（自称）弟子に、代わりに訓練つけてもらえたりしたらいいかなあ、と」

「訓練？ 私にピッタリな願いじやないか」

訓練どころか殺しかねない雰囲気を発しているがなんとかなりそうだ。

じやあなサクラ。お前のことは俺の記憶の中に刻みつけておくよ。

その日の夜はエルザとの激闘もあり、お腹が空いていたのでお弁当を大量買いした。今日は久々にナツやグレイも来なかつたので一人豪遊気分で飯をくらい、ダラダラし

て寝た。

——それが、安眠の最後とも知らずに。

ちなみにグレイが勝手に持っていた俺の至高の聖書（エロ本）は無慈悲にもナツに焼かれて塵となつて消えた。

チュドオオオオオオオオオン!!!

「ホワツツツツツツ!!!!????」

爆発音が聞こえると共に、家が少し揺れた気がした。

思わずベットから跳ね上がり部屋の窓を開ける。

家が立ち並ぶ先に見えるのは大量に舞い上がった土煙。

家の屋根に立ち、煙の発生源を見てみると俺とサクラが訓練所として使つてゐる公園からだつた。

よくよく目を凝らすと、土煙の中に二つの人影が見えた。

嫌な予感がするなあ、と思いながら土煙が晴れるのを待つと予感的中。エルザが軍服

のようなものを着て、サクラに鍛錬を行なつていた。

——よし！いいぞサクラ！次は50本だ！

——はい！

「マジで殺しかねないな」

任せたとは言え思わず顔が引き攣る。

昨日の俺とエルザと戦い以上に派手じやね？
まあ俺関係ないからどうでもいいけど・・・

「——寝よ」

思考のたどり着いた先は二度寝だつた。

疲れていたのもあるが、目のいい二人に見つかればめんどくさそうという理由だ。
ベットが醸し出す魔力に誘われ、俺はベットインするのであつた。

次に目覚めたのは3時間が経つた頃だつた。

外から金属音がぶつかり合う音や、チユドオオンと聞こえるが無視した。

大金があるとは言えども、それで自堕落するのは愚の極み。体を動かさないと鈍つて

しまう。という事で両腕が封じられていても出来そうなクエストがないかなと思いつくまで足を運んで見たが……

「何もねえな」

クエストがない。

いや、正確に言えばあるのだが「超大型冬グマの捕獲!」、「強盗グループの確保」などというちよつとレベル高そうなものばかりだ。

やはりここは大人しくしておくべきなのだろうか?

「あら? 行かないの?」

「あ、ミラさん。ここにちは」

話しかけて来たのはミラさんだ。

ニコニコとしているがこの人「魔王」とかいうとんでもない異名が付いていると考えたら世の中つて広いんだなって思う。

「いやー、簡単そうなクエスト探してたんですけどなくて困ってるんですよ」

「そう? 探せば行けそうなの一つや二つ……例えば」

そう言つてミラさんが手に取つたのは「デビルボルケーノハリケーンタイフーンキヤツトの討伐」と書かれたクエストの紙だつた。

そもそもデビルボルケーノハリケーンタイフーンキヤツトとは何か果てし無く気に

なるが、問題なのは昨日の試合を見たであろうミラさんがニコニコとした顔で何の冗談もなくデビルボルケーノハリケーンタイフーンキヤツトとかいう絶対にヤバイであろうクエストを進めて来たことだ。

「これなんてどうかしら？」

「いや、ははは・・・」

魔王だ。

俺は苦笑いを浮かべるのに精一杯だ。

目線で助けを訴えるが皆見て見ぬ振り。

あいつら後でぶん殴つてやるからな。

「あ！そのクエスト前にエルフマンが行きたいって言つてたなー！（棒）

「そうなの？じやあこれは保留ね」

そう言つてデビルボルケ（略）の紙をボードに戻した。エルフマンは犠牲になつたのだ。犠牲の犠牲にな・・・。

「じゃあこれなんてどうかしら？」

「ん？」

そう言つて変わらずニコニコとした顔で俺に見せてきたのは「サンシャインアイスジャンボロイヤルドック」と書かれたいかにもヤバそうなクエストだった。

俺は引きつった笑みを浮かべるわけでもなく、助けを求めることもなくにこやかにこういうのだつた。

「そのクエストもエルフマンが行きたいって言つてましたよ？」

なんとかミラさんの地獄のクエストから離脱することに成功し、外へと逃げ出した俺。

出ようとした際背後から漢の悲鳴が聞こえたが氣のせいだろう。
と言つたものもすることがなくて困つた。

やはり安静にしておくべきなのだろうか？

「あつ！いたつ！」

慣れた声が聞こえた。振り返るの嫌だなあと思いながら見て見ると案の定といふ
サクラが駆け寄つて來た。

エルザとの鍛錬があつたので服や顔には砂が付着していた。

「取り敢えず話す前に付いてる砂落とせ」

「あつ、本当だ。付いてますね」

パンパンと服を軽くはたき、顔に付いてる砂は手の甲でぬぐい落とす。
「で、何があつた?」

「実は・・・」

若干の悲しみを込めた声で見せて来たのは半ばから折れた短剣。一度その短剣で殺されかけたことがある俺はすぐに理解した。

「ああ、折れちまつたのか」

「そ、うなんですよ・・・結構大事に使つてたのに・・・」

鈍く光る短剣はその年季を表す。

むしろ俺との鍛錬や、前のクエストで倒した盗賊団の首領とも戦つたというのに短剣一本でここまで持つたのが奇跡である。

「どうかそれで俺にどうしろと? 武器屋を教えるのは大丈夫だが、それを打ち直せて言わても俺は鍛冶屋でもないから無理だぞ?」

「あ、そういうわけじやなくてですね・・・コレです」

そう言い手渡したのは一通の手紙。

丁寧に便箋までつけていたので裏返すとエルザスカーレットの文字。何もここまで

しなくても・・・

「えーと、何々？ジョニイへ――

『まずは一言謝つておく。すまない。手加減したつもりだつたがサクラの短剣を折つてしまつた。私が新しい武器を発注しても良かつたのだが、タイミング悪くまたナツがやらかしたのでそれを捉えに行くことになつた。

そこでジョニイに頼みたいのは私の代わりにサクラの新たな剣を買うのを手伝うのともう一つ、私の鎧の修理を頼みたい。以前のS級クエストでだいぶ傷が入つたからな。資金に関しては気にしなくてもいい。鎧を作つている会社がスポンサーとなつてるから私の名前を出すだけでいい。頼んだぞ』

・・・なるほどなあ

一番下の段にはエルザの換装する際に使用しているゲートの番号と武器屋『ハートクロイツ』の行き方を示した地図だつた。まあめちゃくちや汚いけど。

「確かにここならいいもんが揃つてるな」

「そんな有名なんですか？」

「ああ、『ハートクロイツ』っていうのはエルザの鎧を作つている会社だぞ？」

「へえー」

「ま、その分高いけどな」

「え？」

以前何かの雑誌で見たがエルザの天輪の鎧は150万と書いていた。そんな鎧が何着もあるから恐ろしい。

「でも『ハートクロイツ』があるパンクストリートはその手の店が多くあるからな。サクラに合う安くていいもんが買えるかもしねんな」

「へー、詳しいですね」

「・・・まあな」

パンクストリート。

そもハートクロイツがあるパンクストリートは前作のRAVEで登場した街だ。RAVEを全巻読破していた俺はなんとなく覚えていた。

「ま、エルザの頼みと言われちや仕方がないか。あんま体動かすようなもんじやないし」「本当ですか!!やつたーー！」

「元気だなお前・・・」

となれば早速容易だ。

取り敢えず財布と替えの服とか持つていけば大丈夫だろう。

「んじや明日の朝出発な?」

「分かりました！それじゃまた明日ー！」

スキップで帰つていくサクラ。

それを見届けたあと俺も帰路を目指す。

明日も惰眠コースなはずなのに何故こうなったのか・・・というかさつきの文面からするとナツ達もうガルナ島向かつたのかよ。行動力の化身だな。

L V. 17 剣を作ろう2

パンクストリートについて早々にエルザの鎧の修理を頼み込んだ俺とサクラ。超絶大量の修理の量を見て店員が軽く白目向いていたけど俺は何も見ていない。きっと店員は白眼でも使つて俺の経絡系を見ていたのだろうな。

その後ざつと市街を見て回ったがサクラの手に馴染む武器がなく、逆に面白そうな武器を躊躇なく買う俺。ありがとうエリゴール。君の賞金首がなかつたらこんなことは出来なかつた！

「つて！これ私の買い物ですよ！アルさんばっかり買つてるじゃないですか！」

人がごつた返すレストランの中、サクラは控えめに机を叩きそう言つた。

俺はオレンジジュースを摂取する事で脳内を冷やし、冷静に言葉を返す。

「だつて全然見つからないもん。仕方ないよね」

「そんな言い方してもダメですー！」

「どうか何買つたんですか?」

換装の空間からさつき買つたものをランダムに取り出す。手元に落ちてきたのは小さな手裏剣のような形をしたナイフ。

「何だつけこれ」

「何で自分が買つたもの忘れているんですか」

まあ、投げれば分かるだろ。という事で街中で配られた小さな雑誌を軽く宙にあげ手裏剣を投げる。空を切りながら進む手裏剣は雑誌に当たる直前に無数のヤイバに分裂し雑誌に突き刺さった。

重力に従い落ちてきた雑誌を受け取り、手裏剣の核になつていてる場所を引き抜き魔力を込めるごとに散らばつていた無数の刃が戻り、手裏剣の形に戻つた。

「やべえ、めちゃくちゃオサレ」

「何言つてるんですか」

チュー、と冷めた目でりんごジュースを飲むサクラ。やはり武器が変形するのは男のロマンなのだ。

「しかし本当どうするかだな。このままじや見つからない気がするが・・・」「オーダーメイドだと高くなりますよねえ・・・」

打つ手なし、二人揃つてため息をつく。

「俺帰つていい？」

「殴りますよ？」

ニッコリと怖いことを言うサクラ。

その途端、サクラの背後のテーブルからワインボトルが落ち盛大な音を立てて割れた。

サクラの霸気が伝わったのかと思いきや、そうでもないようで酔つたじいさんがフランとした足つきで店を出ようとしていた。

「酒だー。酒をもつてこーい！」

一様観光街でもあるから昼間から飲むやつもいるだろうがいい年して何やつてんだ
よじいさん・・・

内心ため息をつきながら通り過ぎるじいさんに目をやる。
酒のせいか頬が真っ赤になり、足取りも覚束ない。

「大丈夫なのか・・・?」

不安は的中し、じいさんは「おつと」と言いながら地面に受け身もとらずに倒れた。ゴツンと音がしてそのまま動かないで不安になつた俺は仕方なくだが救助に向かう。

「おい、じいさん大丈夫か?」

「おお・・・すまんなあ」

じいさんは俺の手に捕まり覚束ない足取りで立ち上がつた。

「最近の若い者は優しいのお・・・」

まあ緊急事態だつたしな。

そう胸で思いながら、ふと視線を下げるところにめぐり上がつたのか服の袖が上がり腕があらわになつていて。それだけならば何の問題もないのだが腕に刻まれているタトゥーが心に残つた。8分音符の後ろに十字架が刻まれているかのような形だ。

「あれ?」

見覚えがある。

が、それが何だつたかは思い出せない。

「すまんのおー・・・」

「あ、はい・・・」

気が晴れないが、じいさんも大丈夫そудし席に座りなおした。

「なんだつけなあー・・・」

「なんだつけじやないですよ。私の武器の話ですよ」

「いや、それは覚えてるんだが・・・」

そう、武器。

じいさんの件は早いとこ忘れて、サクラの武器を手に入れなければならぬ。
とは言つてもサクラに似合う武器がないというのが問題だ。もういつそのことオーダーメイドで作つてもらつた方が・・・

「あつ！ そうだ！ 思い・・・出した！」

「何ですか？」

俺は急いで席を立ち上がりさつき出て行つたじいさんを追いかけるのであつた。

「ガレイン・ムジカ？ 誰ですかそれ？」

じいさんの家に着き、早々に呴いたサクラ。

「まあ そうなるのも仕方がない。儂が名を轟かせたのは 30 年以上も前だからな。そこの坊主が知っている方がおかしい」

ガツハツハと笑うじいさんの名はガレイン・ムジカ。FAILY TAIL の前作である RAVE の序盤に登場した鍛治師。主人公の使う 10 に変形する剣を生み出した張本人である。

「まあ、そのタトウ一見たら思い出したんだよ」

「このタトウ一見たら儂の一族しか知らないはずなんだが……」

「めんない。前世で漫画見てなかつたら記憶のかけらにもありませんでした。」

「まあ、いい。それで儂を引き止めたには理由があるんだろう？」

「あー、実はこいつの武器を作つて欲しいなー、なんて思つたりして」

「ほう……嬢ちゃん、ちょっと腕前に伸ばしな」

「あ、はい」

言葉通りサクラは両腕を前に伸ばす。

じいさんは伸ばされた腕を約 10 秒間ほど見つめた。

「なるほど……今まで使つて来たのは短剣つてところか。けど嬢ちゃんには短剣はあわねえな。もう少しがつしりとした武器の方がいい」

「凄い……腕を見ただけでそんなことまで分かるんですね！」

「いやー！それほどでもねえなあー！」

ガツハツハと笑いながらちよつと照れているのか頬が赤い。久々に孫に会ったおじいちゃんかよ。

「それでお願ひがあつて……」

「剣を作れ、と？」

「そう、それです」

この流れは作つてもらえるんじやね？

やつたぜ、と思つたの一瞬。

「それは無理」

「へ？」

「はあ・・・はあ・・・不幸だ！」

クソツ！帰りたい！」

「文句言わないでください！私も疲れているんですから！」

場所は変わり、街の外に飛び出し、とある山に登つていた。

何故こうなつたのかというと「ワシ筋力ないから剣なんてつくれないボ」というシンプルな理由を突きつけられたからである。

それでは申し訳ないという理由で山で一人剣を作つてゐるヤツがいるという噂を聞き、ここまで歩いて來たが道は悪いし、変な化け物が出るわで最悪だつた。

「こんな所に人住んでんのか？」

「世界にはこんな所に住むもの好きな人もいるでしそう」

生い茂る草木を払いのけ前に前に進むが、依然として景色が変わらない。

こんな場所に住む奴はよつほど変なやつか、人嫌いに違ひない。

「あー、終わりが見えねえ」

一度足を止め深呼吸をする。

すると先程は草木をかき分ける音が立つていていたため気づかなかつたが、どこか遠くから金属を打つ、かん高い音がかすかに聞こえた。

「アルさん！」

「ああ！これは近い！」

ゴールが見えたら人はやる気が出てくるものだ。あまり音を立てないように音の鳴る場所に近づく。

歩くこと10分。山を登っている最中に崖があり、その麓に大きな洞窟があつた。金属音はそこかは鳴り響いているようだ。

「やっぱり人嫌いだろこれ・・・」

「集中したいだけかもしれませよ?」

さあ行きましょう!』

疲れ果てた俺を放つてサクラは洞窟内に駆け抜けていった。

俺も少ししてから歩き始める。洞窟内は薄暗く、目を凝らさないと真っ直ぐに進めない。ただ分かれ道がなかつたのが幸いか、迷わずに進めたのは楽だった。

少し歩くと大きな空間があつた。

そこにはパチパチと燃える火と、少し大きいテントが1組。そして何故かサボテ○ダーミたいなポーズで停止しているサクラ。

「お前何やってんの?」

俺が近づいてもピクリともしない。

鍛治師を見てビックリしたショックで立つたまま気絶したのか?とバカみたいな考えをし、サクラの正面に立つ。

「ア・・・キ・・」

「？」

よう顔を見たら麻痺でもさせているのか微かに震え喋ることすら困難そうであつた。何かいる、そう確信した俺は写輪眼を発動させて周りを見渡す。

薄暗く洞窟の中、写輪眼によつて照らされたのは赤い魔力を散らす人影。

「竜人奥義——黒竜三絶」

黒い残光を残しながら目の前を竜の爪が通る。完全な不意打ち。サクラがこうなつていなかつたら俺も同じようになつていただろう。

「この技を見切るか」

「生憎不意打ち対策は慣れてるんでな！」

魔力を腕に流す。エルザとの戦いで腕への負担が大きかつたが使えないわけじやない。ただいつもより抑えて——

「——二頭龍」

いつもよりは弱めだがそれでもほぼ同時とも言える拳が肉体の弱点部位を狙う。が顔の見えない敵は両腕を使い、止めるのではなく払いどけた。

「甘いよ」

ヤツは一步踏み込み拳を放つ。

その一撃はゆっくりで魔力も込められてもいなかつた。当たつてもさしてダメージはないだろう。

しかしヤツの顔が見えなくともやろうとしていることは分かる。

「——シツ！」

伸ばしてくる腕に足を当て上に無理やりそらす。

闇の中で薄く光る目が驚いたように見えた。

ヤツは俺と距離を取ると、腕を組み軽く頷いた。

「変な奴が来たと思ったが……そこそこやるようだね」

「そりやどうも。で？まだするのか？」

「いや、いい。付いてきな。後ろの子ももう動けるだろ？」

サクラを見ると、確かに麻痺が取れたのか不思議そうに動く自分の体を見ていた。「どうするよ？」

「まあ・・・行くしかないですよね」

少しの不安を残しつつ、俺たちはヤツの後を追うのであつた。

L V. 18 剣を作ろう3

闇の中、唯一光る焚き火を俺、サクラ、そして山に住むと言われる鍛治師とで囲むようになつた。俺は、さくらの隣に腰を下す。

「まずは自己紹介からしようか」

そう言い、ヤツは今まで顔を隠していたフードを取り下ろした。フードの中からは火に照らされ輝く銀髪に、人間離れしたような絶世の美女というのが第一印象だ。そして気になつたのは猫のように瞳孔が縦になつていた。

「グラディウス・シェラだ。ここで剣を作つていてる」

「もしかしてあんた……」

「あんたは気づいていたようだね。そう、私は竜人

「竜人……初めて聞きました」

「まあ初めて聞くのも仕方がないか。いいか竜人っていうのは——」

——竜人。

世界の何処かにある怪異と呼ばれる者が存在する魔界。魔界と言えども美しい自然に囲まれている幻想の場所だ。その中に住んでいる種族の一種。見た目は人間にして中身は竜。爪は地を裂き、一つ鳴けば世界を轟かす。後の話になるがエルザの母のように体に竜の因子を移植したわけでもなく、ナツのように育ての父がドラゴンというわけでもない。

「ど、まあこんな感じ?」

「へえー、初知りです。そんなこと何処で知つてたんですか?」

「・・・学校の図書館」

「へえー」

学校の図書館というのは嘘であり、その知識は同じく真島○○作のRAVEである。

「それで、竜人のシェラさんは何でここにいるんですか?」

「私の祖先が剣に関係するからさ」

そう言つて一度席を離れ、テントから一冊の縦横両方に長い本を華奢な足の上にドンと起きペラペラと捲る。

優に500ページを超える本の半ばの1ページを俺とサクラに見せるように開いた。

それは文章ではなく両開きに描かれた巨大な竜。透き通った青い目を持ち、体は剣のようすに輝く銀。なるほど祖先と言うだけあって竜と人の形をしているが特徴は引き継いでいる。

「私の祖先、剣竜『グラディウス』。名の通り剣を自在に操る竜さ」

「剣竜・・・ナツさんの火竜だけじゃないんですね」

「どうとか剣竜つて・・・一体どんな攻撃するんだよ」

体から剣が生え、それを放出するという描写が思い浮かんだ。一発食らつただけで死にそうだ。

「さあね。攻撃の方法まで載つてないからね」

パタリと、ついさつき持つてきた本を閉じた。わざわざこれだけを見せるために重たい本を持ってきたシエラは意外と優しいのかかもしれない。

「さて、本題と行こうか。剣を作つて欲しいんだろう?」

「あれ・・・私言いましたつけ?」

「竜人は目も耳も人間に比べると遙かにいいからな。聞こえてたんだよ」

「なら話は早いな。作ってくれるのか?」

「ああ、作つてやつてもいい」

といい静かに燃える焚き木を一本取り出し、ひよいと投げた。くるくると周り落ちた

先には腐つて崩れかけた白い物体が大量に積み重なっていた。

「おいおい……あれって」

「？」

「あんた達と同じように私の元まで来たヤツが今まで何十人かいる。が、全員作つてやれなかつた」

積み重なつた物は全て骨。しかも人のものだ。隣のサクラが息を漏らしているのが聞こえた。

「剣を作るのにお前と戦う必要でもあるのか？」

「そうではない。時にサクラ、武器に重要なものはなんだとと思う？」

「へ？ それは・・・切れ味や重さとかじやないんですか？」

「それも確かに重要だ。けどな、それ以上に重要なものがある」

シェラが右手を真っ直ぐに伸ばす。

すると作りかけだった剣が生き物のように飛び跳ね、シェラの手めがけて真っ直ぐに飛び、手に収まつた。

「——意志だ」

「意志、ですか？」

「そうだ。戦いの際に悩みや考え方をしていては剣の腕が鈍る。集中していない時に

作った剣と同じだ。脆く、壊れやすい。だが——

地に転がっていた岩を軽く投げる。

それを作りかけ、しかも刀身も少し不安定な形をしているのにも関わらず切り裂こうとする。岩が弾かれて終わり。誰もがそう思うであつただろう。

しかし、目の前には真つ二つに切り裂かれた岩が転がっていた。

「この通り。雑念が籠つていらない剣は、真つ直ぐに伸び、壊れにくい」

「なるほどな···で、それが剣を作るのにどう関係するんだ?」

俺がそう言うとシェラはポケットから赤に輝く宝石のようなものを俺に投げた。

「これは···?」

「それはここでしか取れない特別な鉱石でね。持つた者の魔力を込めるとある種の精神世界にいける」

「そんなもん取れんのかよ。で、その精神世界はなんなんだ?」

「過去のトラウマ、悲劇を呼び起こす」

「ヤベエじやねえか」

「トラウマを乗り切り、純粹な気持ちの魔力が籠つたその鉱石を使うことで、使い手に最も使いやすい剣を作る···のだがやつたヤツら全員死んだからな」

ふとサクラを見ると、少し青ざめているようにも見えた。そりやそうだ。剣を作ろう

と言うのに死ぬ可能性があると言われるのだ。

「どうするサクラ？俺は正直な気持ち人が死ぬのは見たくねえからこんな危ない綱渡りしなくていい気がするぞ」

「私は……」

これに関してはサクラの気持ち次第である、街に帰つて剣を探していたらいつかは手に合うものはあるだろう。しかし、ここで作る剣は真に使い手にあつた武器だ。悩んだ結果サクラが選んだのは――

「――やります」

「本当だね？その気持ちに偽りはないね？」

「ないです。私は強くならないといけませんから」

「……そうかい」

シェラはそう言い、赤く輝く鉱石をサクラに渡した。

「魔力を込めた瞬間スタートだ。何が成功で、何が失敗かは入れば分かる」

サクラの手の中にある鉱石が強く握られる。

「サクラ……まあ、あれだ。まだまだお前には教えないことがあるからな。

死ぬんじやねえぞ」

「なんですかアルさんいきなり気持ち悪い」

「お前！師匠として応援してやつてんのにそれはどうなんだ!?」

「冗談ですよ。それでは行つてきます！」

赤い鉱石に魔力が流れ、暗い洞窟を一瞬だけ赤に染めた。光が収縮し、鉱石内で小さな宇宙のように輝き始めると、意識を失ったサクラはゆっくりと倒れていくのをシェラが支えた。

「死人は私も勘弁だからね。死ぬんじやないわよ」

シェラは赤い鉱石を握りしめたままのサクラはテントの中に入れ、横に寝かせた。

「・・・ところで何が成功で何が失敗なんだ？知ってるんだろ？」

「戦いにおいてもつとも重要視される意志。鉱石の精神世界でトラウマが呼び起こされるわけだが、簡単に言えばそのトラウマの対象の相手と戦い勝つてもらわなければならない」

「負けたら？」

「心が折れ、碎ける。体は生きてても精神は死んでるから、生きながら死んでいるな」

白く、水面のように歩くたびに波紋が浮かび上がる場所にサクラはいた。辺りを見回しても白。世界に取り残されたようだつた。

「ここが精神世界……」

現実の世界と体の動きや重さはなんの変わりはない。

何が起きるのかと緊張をしている、少し先から黒い泥が噴出した。ボコリボコリと不快な音を立てながら徐々に大きくなる泥はやがて人の形に近づいてきた。

鬼が出るか蛇が出るか、何にせよ全力を出すまでと覚悟を決めたが、泥で出来た人間の形がよりリアルになるにつれ、サクラの顔は青ざめた。

「嘘……でしょ……」

それは自身の村を標的にした盗賊団のボス。自分が死んだと思つたほど実力の差を見せつけられた相手だった。

盗賊団ルルチャスの首領。

サクラの怯えなど待つ間も無く、ルルチャスの首領は巨大な腕を振り上げた。

L V. 19 剣を作ろう 4

「はあ・・・はあ・・・！」

水面が舞う。

行先も分からず、思考も定まらないままただひたすらに走り続ける。

背後からは水面を派手に散らす巨体が迫る。

脳内には敗北一色。故に逃げるしかない。

?????????
——
!!

言葉になつていかない叫びを上げながら巨体の腕が振り上げられる。

脳裏に蘇るのは、あの日嫌という程思い知らされた実力差。

「来ないでッ！」

喉が張り裂けんばかりに声を上げた。

巨体は動きを止めない。

しかし、日頃の修行が功を成してから条件反射で魔法を発動していた。
水を操作し、固定させ、槍とさせる。

魔法のまの字すら知らなかつたサクラに教えたのは複雑なものではなく、シングルア
クションに近い魔法。消費魔力も少ない上に簡単、ということで教えられたが、実際そ
の通りで、精神世界ではあるが地面として存在する水は魔力を受け、槍と化し、巨体な
体の胸を貫いた。

「やつた・・・？」

彼がいたら必ずこう言うだろう。

「それフラグ」と。

巨体は泥で侵食された口角を上げる。

水の槍が体を貫いていることなど御構い無しでゆっくりと足を進めた。

「何で・・・？」

巨体は腕を振り上げた。
声に恐怖を滲ませながら呟いた言葉は誰にも届かず。振り出しに戻つたかのように

「ただ殺すだけじゃダメってどう言うことだよ？」

サクラの意識がなくなり30分。

シェラは剣を打ちながらも剣の作製に必要な精神世界での話をしてくれた。
というか剣を作るには完全に集中しなければならないウンタラカンタラ言つてたのに話しながらやつていいのかよ。

「ああ、精神世界では過去のトラウマと対峙し、それを乗り越えなければならぬがただ殺すだけでは乗り越えたことにはならない」

「錯乱して殺したなどと覚悟を決めて殺したとじや意味は違うだろう？」とシェラは言つた。

「気づいていたらそうなつた」、なんてのは私は許さない。覚悟を持つものこそが剣を持つのにふさわしい

「切るやつは切られる覚悟があるやつってか。なるほどな。というかこれ何日ぐらいか

かるんだ?」

「さあねえ・・・今までの平均は2日つてところだな」

2日間眠りっぱなし。中で何が起きているかは分からんが、俺に手伝えることは何もない。せいぜいここで生きて帰つて来るよう願うだけだ。

「おい。何俺の仕事は終わりみたいな顔をしてる? あんたには手伝つてもらわなきやいけないことがたくさんあるんだよ」

「ん?」

あれ? 俺つて見守るポジションじゃないんすか?

「取り敢えず街まで降りて食料の補充をしてくれ。それが終わつたら飯を作つて、風呂も――」

「おいおいおいおいなあなあなあ!」

思わず某奇妙な冒険に出てくる人みたいなことを言つてしまつたがこれはびっくりしたためしようがない。

「それただの雑用じやねえか!」

「あの子が意識無くなつている間誰が体を拭いたりするのが誰だと思つている?」

「ぐつ・・・」

手は止めず、ただ淡々と言われる。

正直言つてすることもないのに行つてもいいのだが、この道を往復すると考えると途轍もなくめんどくさい。

「それとも何か？お前が体を拭くか？」

「……拭きま_s」

「死ね」

「この後買い物に行きましたとさ。

ぼくかなしい（；ω；）。

閑話休題

1時間の往復を終え、思つた以上に疲れた俺は地べたということを忘れ横になつてい
た。

見上げても暗い天井ぐらいしかないとめ、暇も潰せない。

「そうそう、ちょっと気になつたことがあるんだ」

「何だよ？」

「あなたのその刀見させてくれないか?」

「……まあいいけど」

腰に吊り下げていた刀を無作法に放り投げる。刀は2回ほど空中で回転した後、シエラの手に綺麗に収まつた。

「この刀……一体誰に作つてもらつた?」

「んー……なんか気がついたら持つてたから知らんな」

「こんな材質見たことない……それに刀身と柄が分かれないとはどういうことだ」

そうなのである。この神様がくれた刀、俺が13歳の時に手に入れたのだが、ある日外を歩いていると目の前に何の予告もなしに空から落ちてきて地面に突き刺さつた。

しかも、普通刀というのは刀身と柄とで分かれているのだが、刀身と柄が合体しているのだ。最初見た時は刀ではなく、真っ黒で鋭く尖つた十字架が空から降つてきたかと思つた。

「それに刀とは言えんぐらい硬い。というか硬すぎる。硬さだけで言えばそこらへんの大剣3本纏めても敵わないぐらいの硬さだ」

「そりやどうも」

「しかし本当どうなつている?斬る機能が欠けている……これでは鞘に入つたまま振り回しているのと同じじゃないか」

「じゃあ斬れるようにしてくれよ」

「・・・はつきり行つて無理だ。この刀太陽にでも突つ込まないと形変えられない。太陽でもいけるかどうか・・・」

ええ・・・俺の刀の硬さ異常だろ。

流石神様特注剣。硬さが違う。

というか太陽にぶち込まなければならぬレベルって神様やりすぎだろ。

「それ大事にしろよ。その刀はおそらく世界でも群を抜いて珍しいからな」

「へいへい。大事にしますよー」

する事がないので体を横にして目を閉じて時間を過ごすことにした。

「――キヤツ!!」

巨体な腕が僅かにだが当たった。

だがそれでも充分威力を持つ。掠つただけだというのにサクラの体は宙に飛び上が

り、勢いよく水面に叩きつけられる。

アツ・・・！」

休む間もない。顔を潰そうと腕が迫る。

間一髪で首をひねり躲すことに成功したが状況は劣悪だ。何かがないとこのままでは殺される。

「あつ——」

極限の集中状態が続いたせいか、足がもつれた。グラリと体が一瞬揺らぐ。一瞬。しかし一瞬が命取りとなる。

そんな隙をもちろん見逃すわけがなく巨体は蛇というほどの速さで腕を伸ばし、サラの細い首を掴み上げた。

「ア・・・ツ・・・」

巨体の口角が引き上げる。

人間一人を持ち上げることなんて関係なしに、その腕を大きく振り上げ、真下に投げ捨てた。

水面が激しく舞うことを知覚することすら出来ず、深く深く体が落ちて行く。

剣を持つものは意志が大事だと言う言葉が頭にふとよぎった。

サクラが剣を持つ理由として一番最初にあつたのは支配された村を救いたいと言う願いだつた。

だが今はどうだろうか？

村は救われ戦う意味もないはずだ。

なのにどうして剣を取る道を選んだのだ？

あの日、月明かりを浴びながら大丈夫かと微笑んだ彼の姿が思い浮かんだ。

憧れた。助けを呼び声を聞きつけ駆けつけるヒーローのような存在に。

自分は何がしたい？ただ強くなりたいだけか？いや、違う。

——あの人をいつか超えて

遠のいていた意識が覚醒した。

口から空気が漏れた。酸素を求める水面へと急いで上がる。

水面に手をつくとはおかしな表現ではあるが、それが今の現実であるため正しい表現だろう。肺に酸素を純分に行き渡らせ、ゆつくりとだが立ち上がる。

巨体は欲しいおもちゃを見つけた子供のように、隠しもせずにその巨体を揺らしながら迫ってきた。

——不思議だ

つい30秒ほど前まで見るだけで動悸が上がったというのに、今は自分でも驚くほど冷静であった。

巨体が腕を振り上げた——

『いいかサクラ。力で負けているヤツに力で挑むようなヤツはアホだ。東洋の言葉で柔を持つて剛を制すと言う言葉があつてだな——』

はい。と脳内で返事をする。

巨体の腕が自身に近づくと同時に片足を踏み出し、巨体の腕に自分の添える。顔のすぐ横を大砲じみた威力の拳が過ぎ去り、風の音が耳に聞こえた。

伸びてきた腕の手首を掴み、もう片方の手で脇を掬い上げる。

踏み込んだ足とは反時計周りに回転し、腰を落とし、円を描くように投げる。

「——セヤアアア！」

柔道で言うところの一本背負い。

本来ならば足元に落とす技なのだが、あえて途中で手を離し、放り投げる。すると面白いぐらいに巨体の体が飛び、水面を跳ねた。

??????.

巨体が睨みつける。

だが以前恐怖はない。

——武器だ。武器がいる。

短剣ではダメだ。

あの巨体を相手にするのでは短剣はリーチが短いし、耐えきれない。

切れ味が高く、なおかつ耐久力が高いもの。

ここで一つの誤解が起きた。

普通耐久力が高い剣といえばエルザが使うような西洋剣が妥当だろう。

しかし日頃の彼の刀は無茶な受け止め方をしていてもなんの軋みもなかつたので、刀が耐久力に優れていると思つてしまつた。

故に、現れるのは刀。

ここは精神世界。つまりイメージによつては自分の欲しいものが具現化する。手を横に伸ばすと、まるで最初から握られていたかのごとく、刀が手に収まつた。理想の長さ、重さ、形に近づけ、それを真つ直ぐに巨体に向かた。

」

?????????????????
巨体が暴れる。まるで小さな嵐のように苛烈。
大きく呼吸をする。

体の中のスイッチが入る音がした。

——??べ。我らの??を??

ノイズ混じりの音が体内に響く。
鼓動が跳ねた。

知つてもいい情報が脳に詰め込まれたようだ。
いや、実際そうなのだろう。
脳の中で一つの言葉が反響する。

「武源解放」

手の平に桜の花びらの形に似た紋章が浮かび上がった。そして桜の花びらから成長する大樹のように、黒い刻印のようなものが腕に刻まれる。

巨体が声にならない叫びを上げる。

その距離20メートル。

???.だがやるべき事はまるで息をするのと同じように自然に理解出来た。

「武源解放——赤波」

片手に持つた刀を回転させる。

高速で回る刀身は空気摩擦の影響を受け、白銀だった刀身は、ものの数秒で真っ赤に染め上がった。

????????!!!!
距離 10 メートル。

真っ赤に染まつた刀身の先端を水面につけ、刎ねあげる。

水が捲れ上がる。壁から壁紙を引き剥がした時と同じような現象、水平だつた水が、垂直に、壁のようにそびえ立つ。ただその壁は薄くだが赤に染まつていた。

????????
. . . !

目の前に水の壁がそびえ立ち、一瞬止まる巨体。それを見越したかのようにそびえ立

水の壁から、同じく赤に染まつた水の槍が射出された。

????????
. . . !

水の槍はその見た目から想像できない俊敏な動きで躰された。

だがこれで終わりではない。

2本、3本と水の壁から次々と槍が射出される。
????????
. . . !!

慣れてきたのか、躰しつつも前へと進む巨体。水の壁を張つていたとしても巨体から放たれる高威力な一撃にはもたない。

完全に見切られ、もはや手の内がない。

勝利を確信した巨体はその腕力を持つて水の壁を粉碎する。

水しぶきが弾ける。その中に血が混じつて――

――いなかつた。

「??????
ツツ！？？」
かかりましたね」

氣付いた時には全てが手遅れだつた。

背後を振り向くと同時に真っ赤に染まつた刀身はいとも簡単に巨体を切り裂いてい

：：：！」

巨体の体が崩れる。

サクラが生んだ幻とはいえど、目を持つ巨体が最後に目をしたのは、1人の少女の背に、黒い和服に身を包んだ人影だつた。

幽鬼の支配者編

L v. 20 剑を作ろう 5

サクラが精神世界に入つて二日。

シエラによると今まで石を使つたやつは二日で死んだという話だが・・・

「まだかなあ・・・」

死んで欲しいわけではない。

まあ日頃めんどくさい所は何十点もあるが、可愛らしい所もあるのだ・・・多分。それにサクラが死んだりしたらギルドに帰つたらエルザやマカロフに殺される。ということでなんとしても起きてもらわなければならないのだが・・・

「ほれ、起きろ」

頬をペシペシと叩いてみるが一向に反応がない。

尚、これはセクハラではない。

セクハラではないのだよ！（重要なため2回言いました）

「・・・」

しかし反応なし。

もはや生きているのかも不思議なくらいだ。

実は死んでるんじゃないかと思う。

マジで怖くなつた俺は耳を近づけ呼吸音を確かめようとした。

その途端、頬に音速の平手打ちが打ち付けられ、俺は洞窟の天井に頭から突き刺さつ

た。

「正直なことを言うと帰つてくるとは思わなかつた」

「かなり危なかつたんですけどこの通り無事で・・・」

「どうか。それはよかつた。ところで何故お前は片方の頬だけ膨れ上がつてゐる?」

「何でもねえよ・・・」

片頬を真つ赤に染めらせながら虚しく返事をする俺。

サクラから殺意のこもつた目を向けられている気がするがそれを華麗に受け流す。

「ところで剣はいつぐらい作れるんだ?」

「ん?・今すぐにも出来るぞ」

そう言うと、シェラは桜の使った赤い鉱石をポケットから取り出し口の中に放り込んだ。

バリバリと飴を碎くように鉱石を飲み込む。

そして片腕を伸ばし魔力を込めると、バチバチと音を立てて、一本の刀が作られた。

「はい」

「はい、じゃねえよ! 一体どんな原理で刀が作られたんだよ!?!?」

武器とは5行で作られるものなのか。

というか某弓を使わない弓兵よろしくみたいな感じで手から武器作ってるけど、何で最初の鉄を温めるところから剣作つてんだよ。

「私の祖先である剣竜は一度喰らった剣を生成出来る。それと同じことをやつただけだ」

「でもあれって石ですよね? 何で作れたんですか?」

「あの石には使った者の記憶が籠る。あんた向こうの世界で何かしらの武器を使って勝つんだろう? その時の武器を再現しただけさ」

「あー、そういうことですか」

「一体全体どういうことだつてばよ」

1人だけ取り残されている感が半端じやない。

「ま、結局何がどうなつたのかは分からんがこれにて終了だよな?」
「そういう事ですよね・・・?」

「おつと、まさかタダでそいつを貰つて行く氣かい?」

「あ」

流れで作ろうみたいになつていたがオーダーメイドの剣はとてつもなくお金がか
かつたりする。

ちなみに俺はルルチヤスの首領やらララバイ編に出てきたエリ・・・エリナントカ君
のおかげで俺の懐は温かいため何本か作れる。

「ちなみにお値段とかは・・・?」

「そうだね・・・あの鉱石で作る剣は初めてだからざつと300万つてところかね」

3 0 0万。う〇い棒30万本分である。

もちろんサクラにそんな大金持つているわけがなく分かりやすく顔が青くなつた。
まあ俺は買える値段だけどな!

「と、言いたいところだが生還記念ということでくれてやる」

「えつ!? いいんですか!?」

「ああ」

シェラが刀を軽く放り投げた。

すっぽりとサクラの手の中に收まり、喜びを抑えきれないサクラは立ち上がり謎の踊りを踊り始めた。

「あれは放つておくとして、いいのか?

かなり貴重なんじゃないのか?」

「同じことを二度言わせるんじゃないよ。」

私がいいと言ったんだ」

本人がそう言うなら俺がいうことも何もないだろう。タダで済んでよかつたし。

「あんたといい、あの子といい武器の巡り合わせがいい。大事にするんだよ」

「俺のはいい武器つて言えるのか分からんがな」

肩をすくめてそう言うが、シェラは来た時と同じように感情の読めない目で俺を見つめた。

「それじゃ、そろそろ行くわ。サクラの刀が刃こぼれしたらまた来る」

「ああ、その時は金を取るからな」

謎の舞を行なつていたサクラにデコピンを食らわせ制止させた俺は、そのまま襟首をズルズルと引きずり、元来た道を引き返すのであつた。

暗い洞窟の中、シェラは龍神の歴史にまつわる本を開いていた。

ページ数は優に千を超えており、読むのには数日を用いるだろう。

ペラペラとページを進め、とある場所でその手の動きが止まつた。

「やつぱり……」

剣竜グラディウス。雄が多いとされる竜の中で、数少ない雌の竜であるが、好戦的であり、時に挑戦者相手には魔法を用い、人の身に化け戦うこともあつたと言われる。

その剣竜が竜人の起源とされているが、剣竜のつがいは謎に包まれている所がある。つがいの名をジョニイ・アルバート。闇の中でも赤く光る魔眼を持ち、剣竜と対等に渡り合うことでつがいになる事を許されたとされる人間であるが当時の年代においてそのような人間が生きていた証拠もなく――

「あいつが私の祖先？そもそも年代がずれているじゃないか」

偶然の一致なのだろうと判断し本を閉じた。

真実を目にするのはもう少し先の話だ。

「ジャーン！ 凄いでしょー！」

帰りの汽車の中、新しいおもちゃを買つてもらつた子供のように俺に刀を見せびらかして来る。これが人形やら鞆とかだつたら可愛らしげが一つや二つ

あるのだがいかんせん武器である。「あらー！ 可愛いー！」とは思えない。

あとすつごいストレートに言つて刀自慢されるの飽きた。それ見せびらかすのもう14回目だよ？

「はいはい、凄い凄い

「もつと言つてくれてもいいんですよ？」

ずいづいと見せて来る刀は確かに凄いの一言に尽きる。細身であるものも、その作りは並みの刀と比べると一線を凌駕しており、かつ美しい。刀身は緩やかに逸れており、俺の気のせいか薄くサクラに似た色が混じつていてる気がする。まさしく名刀。

だが14回も見せられたら飽きる。

それに――

「はあ・・・」

「どしたんです？ 急に溜息なんて付いて・・・
いや、なんもねえよ」

次のストーリー。幽鬼の支配者編と呼ばれるものを思い出して気が重くなる。

鉄の滅竜魔導師ガジルの初登場であるが、そんなものはどうでもよい。問題は俺は果たして生きれるのだろうか？ という疑問が浮かぶ。ララバイ編はまだチュートリアルつて感じがしたが、幽鬼の支配者編からは本編みたいなものだ。

「ぐおおおお・・・！」

「頭大丈夫ですか？」

「ああ、以前問題ない・・・！」

逃げてえええ！ 超逃げたい！

が、逃げれない！ これって辛いよね！

迫り来る問題に頭を悩ませつつ記者に播られること2時間。辺りは真っ暗になつた
が無事マグノリアに到着した。

「あー！ 久々の故郷つて感じですね！」

「中々にハードな旅だったからな。辛すぎだがゆえの懐かしさつてやつ」

サクラと俺の家までは途中まで同じなので二人して歩く。特に変わった様子もないが、どこか遠くから音が聞こえた。

「サクラ、お前聞こえるか?」

「微かにですが・・・何ですかこの音?」

「行きたくないけど行つてみるか」

「どつちですかそれ」

嫌な予感がするなあ、と思いつつも音がする方向に向かつて走るのであつた。

L V. 21 戦う運命

人気のない夜にソイツは獲物を狙う狼のように潜んでいた。

ジエット、ドロイ、レビイの3人でクエスト終わりで家に帰る途中にソイツは姿を現し、何のためらいもなく攻撃を仕掛けた。

まずジエットとドロイを1分も経たないうちに倒し、残ったのはレビイの1人だけ。レビイも優れた魔術師ではあるが使う魔法がどちらかというと中距離から遠距離。

それに対してソイツはバリバリの近距離で、相性も悪かつた。

レビイは戦っている最中にソイツの名前をぼんやりと思い出した。

ナツと同じく滅竜魔法の使い手、鉄竜の力を持つ男。ガジル・レッドフォックス。

「ギヒヒ…流石は弱小ギルド。弱エやつしかいねエなあ…」
圧倒の言葉に尽きる。

ただガジルの前にひれ伏すしかない。

魔力は切れ、傷を負い、立つ力もままならない。

「3人一緒に吹き飛びな。鉄竜の——」

大きく呼吸をする。

滅竜魔法の一つであるブレス。

ナツは火竜の力を持つため火のブレスを、ガジルら鉄竜の力を得てたためブレスをした時に金属片が混じる。それが高速で飛来する事で以上今までの殺傷能力を持つことになる。

「——咆哮ッ!!」

竜の咆哮が解き放たれた。一見すると竜巻が飛んで来るよう見えるが、その中には肌を切り裂く鋭利な鉄の破片が混ざっていた。

恐怖で目を瞑つたレビイの耳に力強く草を踏む音が聞こえた。

「——^{メル・フォース}真空の翔破！」

ゴウ！と暴風が一瞬吹き荒れ、ブレスと衝突し爆風を生み出す。木々が震え、地面にしがみつくようにしなければ吹き飛ばされる暴風は、竜の咆哮をかき消した。

レビイが目を開けると目の前に立っていたの闇の中でも分かる赤く光つた眼を持つ少年。

「ジョニイ……！」

「大丈夫……じゃないな。サクラ、頼むぞ」

「分かりました」

素早くレビイを肩に担ぎ、もう片方にジエットを。ドロイはまだ軽傷な方で何とか走れる状態だった。

「ジョニイ……そいつ、強いぞ……」

「サンキュー、ジエット。知っているけど頑張ってみるわ」

「それじゃアルさん。また後で」

サクラが素早く戦線を離脱する。

これでこの場にはジョニイとガジルの2人だけ。サクラを見送ったジョニイはゆっくりとガジルの方を向いた。

「悪りいな、待たせてしまつて」

「ギヒッ、お前強いな。匂いでわかる」

飢えた狼みたいだな、とジョニイは笑いを含ませた声でそう言い拳を構えた。

「あんまり退屈させんなよ。こつちはまだまだ余力余してつからよオ」

「そうかい——」

ガジルの目の前からジョニイが消えた。

緩急をつけることで知覚することが出来ず、気付けばジョニイはガジルの腹部に拳を打ち放っていた。

——が、

「ツツ・・・！」

鈍い音が短く鳴る。およそ人体に拳を当てた時になる音ではない。拳を当てたのはジョニイだというのに苦い顔をしているのは、これもまたジョニイだった。

「鉄竜ナメんな」

人間の皮膚から光沢を帯びた鉄へと変化して行く。ジョニイが拳を当てた時には既に体は鉄になっていたのだろう。

ゆっくりと拳が上空に伸ばされる。

鉄の拳を受けたらジョニイとは言えど傷を負うだろう。

「へえ、なら——いうのははどうだ——！」

放されたはずの拳から衝撃。

それは質量を持つた風が全身を叩きつけたかのようだ。体を支えきれず、後方に吹き

飛ばされたガジルは、立ち並ぶ木に衝突してようやく止まつた。

「・・・お前こそ、妖精の尻尾ナメんな。

来いよ、鉄竜。その鉄むしり取つて売つてやんよ」

「ハツ！ほざくなよ雑魚が!!」

カツコつけたものはいいものも負ける。

そう思つた。魔法なしの体術戦なら絶対負けない自信があるがこれは喧嘩のようなもの。ルールも何もない。ガジルは鉄竜の力を遠慮なく発揮するだろう。さつき殴つて分かつたが固すぎて俺の拳の方がもたない。

ナツは鋼鉄とかしたガジルの体に傷をつけることが出来たがアレはやはり滅竜魔法を使つているもの同士だから出来たことだろう。

とは言えどサクラ達が安全な場所に避難できるまでの時間ぐらいは稼がなければいけない。

「オラオラオラオラ！その程度かア!!」

鉄の棍が襲う。写輪眼による未来予知に似た洞察力を持つても躱すのが精一杯。

「準備体操してんだよ！お前こそこれで終わりか!?」

「ギヒツ、そう来なくちゃなア！」

棍が更により強く撃ち放たれる。

が、俺もただ避けてるだけじゃない。

ガジルの棍が俺に当たる10cm前で静止した。

「テメエ・・・！」

「悪いがお前が俺に熱心な間に糸を張らせてもらつた。そしてこれはジエットの分だ！」

木々が立ち並ぶ公園は、俺がよく使う魔力の糸が張りやすい。それを生かしてガジルの攻撃を一瞬ではあるが止めることができた。

そして一瞬あれば充分。ガジルの顔面めがけて拳を放つ。

「馬鹿が。効かねえって言つただろうが」

顔の皮膚が光沢を帯びる。

しかし俺も同じミスを二度繰り返す馬鹿じやない。殴れないなら、殴れるようなものを持つて来ればいいだけの話。例えば、鉄竜の肌とかな——！

「ガツ——！」

ガジルが派手に飛ぶ。

更にそこに糸が張り巡らされている。
糸を操作し体を縛り付ける。

「テメエ一体何しやがった……！」

「言つてたまるか。そしてこれがドロイの分」

蹴りで鳩尾を穿つように蹴る。

更に後方に飛んだガジルに魔力で強化した足で追いつき、頭を掴み地面に叩きつけた。

「これがレビイの分だ。ちつたあ反省したか……！」

ガジルは動かない。

地面に叩きつけた際に砂煙が舞い上がったため顔が見えないが、ガジルはまだ動けるだろう。警戒を充分にし、返答を待つ。

「嫌、全然」

砂煙が少し晴れ、見えた先には釣り上げられた口角。それに気づいた時には、返しが付いた剣が肩を引き裂いていた。

「お前……！」

「俺が素直に反省するようなヤツに見えるか？」
鉄の棍が、俺の腹を打つ。

熱が腹から背にかけて突き抜けたかのような痛さだ。内臓が傷つけられ、口から血が漏れた。幸いにして骨は折れていない。

「なるほどな・・・俺の力をコピーしたから俺を殴れた訳か」

ガジルも口の中に溜まつた血を吐き出す。

しかしあまり効いてないように見えるのは見間違いだと思いたい。
指の根元から先端までを鉄竜の力をコピーさせる。全身硬化などしたら一瞬にして魔力を持つていかれるからだ。

「あいにくと・・・勝つためには手段を選ばないんでな」

「いいねえ。俺と同じじやねえか。なら、こういうのはどうだ?」

ニヤリと笑い、腕全体を一本の剣と化す。

普通の剣と違うのは、チエーンソーのように先端が丸みを帯びているのと、切り裂くための返しが付いていることだろう。

「——鉄竜剣！」

剣の返しが回り始める。

これでは本当にチエーンソーだ。

鉄竜棍を受けるのはまだいい。だがアレを直に受けるのはヤバい。
即座に刀を呼び出し、横にし上空から襲うチエーンソーを防ぐ。

剣竜の子に太鼓判を貰つた刀だ。切れる能力を失つても、鉄竜の一撃を防ぐには容易い。

火花が俺とガジルの間に飛び散る。

腕にかかる負荷が大きすぎる。エルザとの戦いから数日経つては言えど、まだ完全回復ではないのだ。

「おおおおおおおおらああああ！」

声で不安をかき消す。

力づくでチエーンソーを弾き飛ばし、足を踏み込み、限界まで引き締めた突きを放つ。ガツ、と鈍い音が鳴るだけで貫くには至らない。

「——紫電！」

もとより貫けないのは分かつていた。

ならばそこに雷の属性を足すのはどうだろうか？鉄ということもあり感電することは確か、更に雷によつて貫通力を高めた突きならば——！

「慣れっこなんだよなア……鉄に雷が効くと分かつて対策しないのも馬鹿だろ……！」

貫けていない！

それどころか刀身を素手で握つてやがる。

雷対策はあらかじめしておくとはやりやがる。だがこれで終わりと思つたら大間違

いだ。

あえて刀を手放し、足に力を込め飛び上がる。空中で一度回転することで遠心力を乗せた蹴りを腹に叩きつけた。

「また俺の……！」

さつき指を硬化したように、足だけを硬化した。ガジルは空中から地面に叩きつけられた。

「さあ……まだまだ行けるよなあ？」

「テメエこそ……！」

ガジル・レッドフォックスは簡単に言うと退屈していた。

鉄竜の力を少し振るえば、周りの有象無象はペコペコと頭を下げるばかりだ。
面白みがない。たまに絡んで来るやつも一発殴ればすぐに終わりだ。

だがどうだ？ 目の前のコイツは自分が弱いと認識しながらも意地と気合だけで渡り合っている。

「鉄竜棍——！」

鉄の棍が迫る。

それを紙一重で避け、攻撃直後の隙を狙い3発。顔、腹、脚を襲う。これだ。求めていた死闘感。

今自分は戦っていると認識している。

「いいぜお前！もつと本気で来いよ！」

一方それはジョニイも同じだった。

最初は時間稼ぎのつもりだった。が男という生き物の運命なのか、試さずにはいられない。自分の今の力がどれだけなのか。

だから――

「――制限突破」
リミット・オーバー

限界を超える。

「こつからは本気だ。簡単にくたばるんじやねえぞおおおオオ!!」

魔力消費なんて関係なし。

全身から青いオーラを放ち、前に――

「ガツ――！」

ジヨニイが消えたと同時に暴風が荒れ狂い、突き上げるように下から腹部に拳が刺さつていた。鉄で纏われた体が空に浮かぶ。

そこに最初から仕掛けられたかのよう無数の投げ手裏剣が魔力を纏い待機していた。

「——影手裏剣」

サクラの買い物のついでに買っていた分裂する手裏剣。思わずところで役に立つたと内心少し笑つた。分裂後は自分で作り出した魔力の糸に繋げて操作することが可能。指をクイと下げるごとに、命令を受けた手裏剣がガジルの元に殺到する。

「——鉄竜の咆哮!!」

そんなものはなかつたと言うかの如く、竜の咆哮が放たれる。全方向から迫る手裏剣の大半を吹き飛ばした。それでも防ぎきれないのか体には少しだけ手裏剣が突き刺さつていた。しかし、これはガジルにとっては逆効果。より倒し甲斐があると力を込め

手裏剣を吹き飛ばした咆哮の矛先を、ジョニイに向ける。何かしらワンモーション置くはずだと思っていたジョニイは一瞬だけ反応が遅れてしまった。それでも回避できる時間であり、大きく後ろに後退した。

「クソッ！まだ足りないか……！」

「ごちやごちやうるせえなア！」

地面を滑空するガジルはジョニイにタツクルをぶちかまし、後ろにある木に叩きつけた。

鉄の圧力と木の圧力が一切逃げず、ジョニイの体を伝わる。

「カハッ——」

意識が一瞬遠のき、鮮血が口から溢れる。

意識が遠のくのを必死に？ぎ止め、タツクルをかまし背部が露わになつているガジル

に、リミット・オーバー鉄竜の皮膚で纏つた肘鉄を落とす。
制限突破も加わった一撃はガジルを地面に叩き落とす。

「おおおおおおおおおああああああ！」

そこを見逃すほどジョニイは優しくない。

脚を大きく振りかぶり、遠慮なしに叩きつけた。脚は腕の3倍以上の力を持つと言うが、実際その通りでガジルは木々を軽く10本以上へし折った。

(魔力が……!)

いつもなら分散させて使う魔力を、一度に使い切る。その分力は上がるが使える時間はかなり短い。あと30秒と言うところだろう。

これで倒してくれたらいいのだが

「今のは効いたぜ……!」

倒れない。顔が笑っている。

骨も折れているだろう。

それでも立ち上がる。

「全く……冗談キツイぜ」

纏つていた青いオーラを解除する。

今まで体にかかる負荷がどつと伝わり、吐く息の量も自然と多くなった。

「まだ……行けるよなア?」

鉄竜は笑う。

疲労はあるものもまだ戦えるのだろう。

それに比べジョニイに残されたのは30秒。

どうやつても勝てそうではない。

「残念ながら俺はそろそろ限界に近い・・・」

だから、と続きを言い体の前で腕を交差させた。

「一瞬だ。一瞬でケリつけてやる」

青いオーラが燃え上がる。

今までの比ではない。まさしく炎と読んでも過言ではないだろう。

溢れ出る魔力は周囲の細かな石を浮き上がらせ、塵にさせた。

「――
リミテッド・オーバー
臨界点突破」

その言葉が呟かれると同時に――

「!!!!?????

殴られた。殴られたことすら知覚出来ずに気付けば高速回転しながら後ろに飛ばされていた。足をつける余裕すらない。

視覚で捉えるのは完全に不可能だつた。ならば匂いで。

「——そこだ！」

匂いがした方に腕を振り抜く。

見えないものもそれは自分の目が追いついてないだけだと理解した上で止めることなく腕を振つた。

「遅い——」

乱打、乱打、乱打。見えない何かに叩きつけられている。鉄の鎧が無理やり剥がされ元の皮膚が露わになつていた。

「——トドメだ」

ジヨニイは青いオーラを全て右手に移し、目の前で腰を落とし構えていた。

「滅竜奥義——！」

最強の一撃には最強の一撃で返す他ない。

両手を合わせ、巨大な一本の大剣を作り出した。

「——衝竜拳ツツ!!!」

「——業魔・鉄神剣ツツ!!!」

2人の最大威力はぶつかると同時に爆風を生み出した。
小さな嵐が踊り狂う。その中で2人は互いの技をぶつけ合う。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

2人のぶつけた魔力が互いに混ざり合い、弾ける。
次の瞬間、2人の戦っていた公園が光に包まれた。

L v. 22 最も怒らせてはならないギルド

目を開けると見知らぬ天井だつた。

自然の香りと言うのか爽やかな匂いが鼻腔をくすぐる。

「・・・ここは」

「気が付いたかい」

声のする方に顔を向けると、鋭い目付きを持つたおばあちゃんが椅子に座っていた。
おばあちゃんつて言つたらぶつ殺されそうではあるが実際のところ歳をとつているので仕方ないだろう。

「ああ・・・なんだつけ・・・ええと、そう、ポールシカさん」

「私の名前はポーリュシカだ」

彼女の手に持つた本の角で軽くだが叩かれた。軽く叩かれたはずなのにそこから電撃が走つたかのように全身に痛みが伝わつた。

「いつつうう・・・!!」

「それに懲りたらあんまり無茶するんじゃないよ」

かろうじて動く顔を上げて体を見ると、全身グルグル包帯巻きである。ミイラみたいだ。

「筋肉断裂、肋骨3本の骨折、その他諸々の骨にヒビ！全く手間をかかせるんじゃないよ」

「そんな重症だつたのか・・・」

持ち上げていた頭を重力に従わせ、枕にボスンと落ちる。体が自分の元ではないかのような気がしてムズムズした。

「治るのに何日ぐらいかかりそうなんですか？出来る限り早く治してもらいたいんですけど」

「私は人が嫌いなんでね。早く治して追い出したいのは山々だけど、これは1週間近くかかるね」

1週間。レビイの代わりに俺が犠牲になりそこからギルド間の抗争が起きるわけだが果たして間に合うのかどうか。正直なことを言えばサボりたいのだが、先日のララバイの件でも何やら原作にないことが追加されていた。

それと同じように今回も・・・。

「とにかくだ。これからは臨界点突破？とかいう魔法は使うんじゃないよ！」

リミテッド・オーバー

そう言つてポーリュシカは木で出来たドアから出て行つた。

1週間。手も動かないため本も読めないし、介助なしでは食事も出来ない。

出来ることは眠ることだけ。しかしそれだけではただひたすらに時間が過ぎるだけだ。

回復した時に抗争が終わつてないことを踏まえて今から魔力を貯蔵することにしよう。うん、そうしよう。

・・・今更だけど重症なのに1週間で治るつてポーリュシカすげえな、おい。

幽鬼の支配者。妖精の尻尾の双璧をなしており、両方のギルドが好戦的であるせいかお互い仲が悪かつた。だからこうなることは遅かれ早かれ來ていたのだろう。

男たちの笑い声が響く、ギルド幽鬼の支配者の壁に突如轟音とともに巨大な穴が空いた。

なんだと思い投げ込まれたものを見ると、同じギルドに属する1人の男。気絶しているのか白目を剥き、口から泡を噴き出していた。

来たか、とガジルは笑い、席から立ち上がった。

「妖精の尻尾じやあああ!!!」

妖精の尻尾のギルドマスターであるマカロフの怒りの声が幽鬼の支配者中に響いた。それが試合開始の宣言だつたかのようにマカロフの後ろにいた妖精の尻尾の魔道士達がなだれ込んだ。

剣戟が、破碎音が、雄叫びが一つの戦争のように響く。

「ガジル！ 出てこい！！」

「ギヒッ、呼ばれなくとも出て行くぜ」

机を蹴り飛ばし、ナツに飛びかかる。

ナツは仲間がやられた怒りを拳に乗せて、全力で攻撃を仕掛けた。

「鉄龍槍！」

「火竜の鉤爪！」

互いの攻撃がぶつかり、一瞬の静寂。

次の瞬間、轟音と熱風が吹き荒れた。

ギルド内は2人の魔法がぶつかり合つた衝で椅子や机がまるで紙のように吹き飛ん

だ。

「お前のしたことは許されることじやねエ……全力でぶちのめしてやるよ……！」
「やれるもんならやつてみな火竜。お前もあいつと同じ磔にしてやるよ」

「いえ、なるのは貴方です」

ガジルは凜とした声に反応し、余裕を持つて振り返る。

刀を持つた女。数日前に襲撃した時にすぐにどつかに行つた女と記憶していた。

振り落とされる銀閃を腕を鋼鉄へと変化させ受け止める。

「お前……そうか！お前あいつの弟子か何かだな！あいつと同じ振り方だ！けどお前
は……邪魔だ！」

刀を弾き、拳を振り抜く。

すんでのところで回避されたがジョニイと違い、遅い。所詮は劣化版だなど心の中で
ほくそ笑む。

「アガートラム
武源解放——鉄塊斬」

サクラの腕に紋章が現れた。
竜の肌が何かヤバいと察したのか。

振り抜く刀を腕で受け止めるのではなく、体を逸らして回避した。鉄塊斬。名前の通り鉄を切るため一太刀は直接当たらずとも、その脅威を周りにし惜しみもなく晒した。

体を逸らしたまま、振り抜いた先を見る。

木製の壁が並ぶ中、自分の背後だけまるで何かに引き裂かれ中のように削り取られ、ギルドの背後の建物が見えた。

「はつ、思つたよりもやるじやねえか。遊んでやるからかかつてこい」「言われなくとも……！」

サクラが走りだそうとした瞬間、ガジルとサクラの間に氷の壁が発生した。

氷の魔法を使えるものなんて限られていると思い、サクラはキツと睨みつけた。

「グレイさん！ 何で止めるんですか！」

「落ち着けサクラ！ 竜に対抗するには竜しかいねえだろ！」

目には目を、歯には歯を、と言うように竜に対抗するには竜しかいない。

「けど……！」

「安心しろよサクラ。お前の分までアイツぶん殴つてジョニーの前で謝らせてやるからよ」

ニツ、と笑ったナツに少し落ち着いたのかサクラの目に幾らか冷静さが戻った。

深呼吸をし、跳ねていた心臓の動悸を落ち着かせた。

「分かりました。でもちゃんと約束は守つてくださいよ」

「ああ、分かつてる」

「よし！じやあサクラ！こっちを手伝ってくれ！まだまだ湧いて来るぞ！」

「はい！」

場所は変わつて幽鬼の支配者の最上階。

何もしていななのに、周囲を轟かせ進むのは妖精の尻尾のギルドマスターであるマカラフ。

感情が昂ぶつたせいなのか、魔力が体から漏れ出し周りの彫刻や柱を傷つけていく。

マカラフの目の先には幽鬼の支配者のギルドマスターであるジヨゼ。

マカラフとは真逆な顔をしており、楽しげにマカラフを見る……というより見下していた。

「ご年配でここまで来るとは中々元気ですね」

「下らんことを聞きに来たんじゃない……テメエがやつたこと充分理解してるのか？」

「理解？ええ、勿論してますとも」

「——なら分かつてはいるな」

マカロフは齢80を越しているが聖十大魔道10人の内の1人である。

普段なら絶対に見れない激怒の顔。

魔道士なら分かる絶対的な恐怖を目の前にしてもジョゼは薄笑いを浮かべるだけだつた。

「——貴様等は最も怒らせてはいけないギルドを怒らせた」

残像が残るのではないかというほどの速さで手が動いた。魔法をきわめたものだからこそできる極地。僅か1秒にして、魔法による巨大なレーザービームを撃ち放つた。

それに対し、ジョゼも腕を前方に伸ばし、魔法の障壁を発動させた。

極光が障壁にぶつかること5秒。

僅か5秒ではあるがジョゼの周囲はビームによつて吹き飛んだり、焼け落ちたりしていた。

「怖い怖い。私よりよっぽど年上なのによく頑張る」

「けつ、舐められたもんじや」

「舐める？ いいえ、舐めるどころか尊敬してますよ」

「——だからこそ策は練つてあるのです」

「ぶあ、と空気が裂けた。

マカロフが気づいて後ろを見ると丸い体型をし、目隠しをした男が自分に襲いかかろうとしていた。

(コイツ、気配がないのか!!?)

「お、おおおおおお!!」

歌うように男は叫んだ。

「私は悲しいいいい！」

男の手から空気弾が放たれた。

回避は不可能と悟ったマカロフが手をクロスさせ防御を測つたが、それは悪手だつた。

空気に触れた瞬間、体の力が抜ける感覚。

「ぬお!!? おおおおおお!!?」

空域・絶

空気弾に触れた相手の魔力を0にする魔法。

マカロフのみなぎつていた魔力はすでに消え、空気弾に押されて下に落ちて行く。
「これで・・・第一段階はクリアですね」

L V・23 妖精V S 幽鬼

普段は騒がしい妖精の尻尾が嘘みたいに静まり返っていた。誰一人騒ぐことなく諦めたかのように下を見つめる。

ガジルの鉄の棍によつてズタズタにされたギルドと今の雰囲気は悲しいほどに似合つていた。

「… これはマズイな」

「ああ、ナツがルーシィを助けに行つたのはいいがその後が問題だ。今攻め込まれたりしたら勝ち目が限りなく低い」

エルザの言葉に服を脱ぎながら話すグレイに対してもた何時ものかというような顔でギルド内の全員が見ていた。

「何だよお前ら… また俺が服脱いだみたいな顔して」「その通りなんだよ」

「はあ!? いつの間に!?」

気づけよと定番のツッコミを入れるがその後の笑いは起きない。

その中一人レビイがふと手を挙げた。

「どうしたレビイ?」

「あの… 前にジョニイがボーリュシカさんのところに運ばれる前に言つてたんだけ
ど、ファンタムのギルドはロボットみたいに動くって…」

「なつり!? 本当か!?」

「うん… しかも魔導収束砲ジュピターを搭載してるとも言つてた」
「どうか何であいつそんなこと知つてんだよ…」

魔導収束砲ジュピター。

もしそんなものがこのギルドに放たれた、ギルドのかけらすら残らずに焼き払われる
だろう。評議員の保有する超魔導精靈力、エーテリオンに比べれば幾分威力は落ちるが
木で作られたギルドを消すには十分過ぎるぐらいだ。

「そんなのからどうやつて守れって言うんだ!?」

頭を抱える。

幽鬼の支配者にはエレメント4と呼ばれるS級魔道士4名に加え、マカロフと同じ聖
十大魔導の一人であるジョゼ。

どうやつても勝ち目がない。

「いや」

「それを守るのがこのギルドのやり方だ」

そうやつて守り継がれたのが妖精の尻尾。

家族とも言える絆があるからこそ健在するギルド。

元より求めるとは無理難題。

エルザの目は本気だ。そしてその心は人の心を伝わり広がる。
先ほどの冷たい空気は何だつたのか。

「やあやるぞ皆！」

さらに場所は変わり幽鬼の支配者。

男の弱点であるゴーリルデンボールを蹴られ、更に仕事内容のルーライ・ハートフイリ

アまで連れ返されたジョゼは芋虫のように体をよじりながら顔に怒りを表していた。

「あんのガキイイイイイイ!!!」

溢れる魔力が部屋の中に飛び散る。

漆器や、ソファ、高いものややすいものに関係なく次々と壊れていく。
それ程までにゴールデンボールを蹴られるのは痛いのだ。

冗談でも蹴つてもいい場所ではない。

「ぶつ潰してやる……！」

そんな彼を見ているものが一人。

しかし誰もその存在に気づくことはなかつた。

戦いというのは突然始まる。

マカロフがポーリュシカのところに運ばれて1週間。外の空気を吸いに行こうとギルドの外に出たジエットが海をぼんやりと眺めているところに、遙か遠くに港から何かが突出した物体が見えた。

目を凝らして見ると、何やら蒸気を噴出しながら近づいて来る巨大な物体。1週間前の話を聞いていたジエットは一瞬で理解した。

「あれが……ファンтомの移動要塞！」

出て30秒も立っていないが、すぐにギルドへと戻り声を荒げて言つた。

「ファントムのやつらが攻めてきたぞー！」

みんなー！用意しろー！」

復興作業を行なつていたギルドメンバーが、手に握つていた土木工事の道具を捨てる
と、予定していた通りの配置についた。

「来たか・・・」

ギルドの前に立つのは緋色の髪をたなびかせるエルザ。銀の直剣を両手に持ち、地面
に突き刺す。マスターがいない今、代わりとなるのはエルザ。目を閉じ、肺いっぱいに
空気を込める。

一瞬の間を置き、目を見開き、巨大な敵に向かい怯むことなく叫んだ。

「お前達!!勝つぞツツ!!!」

ズシン、ズシンと離れたところから駆動音が鳴り響く。

その正体は巨大な鉄の城。

幽鬼の支配者の持つ最大兵器、ギルドそのものが一つの魔道士となる移動要塞ファン
トム。

莫大な費用をかけているため、内包される魔法も協力だ。

それに対するはF A I L Y T A I Lと描かれた木で作られたギルド。勿論問題ばかり起こして、修復代にお金をかけているためロボットに変形や、空を飛んだりなどしない。

鉄の要塞に潰されたらひとたまりもないのは明らかだ。

「——ジュピターを撃て」

ギルド内から見下すように見るジョゼはまるでお箸取つてと言うように簡単に、破壊兵器の発動を指示した。

部下がざわめいたが一睨みするとすぐに作業に取り掛かつた。

妖精の尻尾の後ろには勿論街がある。

ジュピターなんてものを放つたら一体どれだけの被害が出るか予測がつかない。

「ジュピター発射準備完了！ いつでも行けます！」

ニヤリと口元が歪んだ。

待ち望んだ破壊。正規ギルドがやつてはいけない事だと氣付いていながらも、掲げた腕を振り下ろした。

「撃てええええ！」

まるでそれが戦いの合図であり、同時に終わりであるような白い極光が放たれた。

『アイスマスク——氷床』

しかし極光はギルドから大きく逸れた。

「何があつた!?」

「前脚に氷が……！」

4つある脚の前脚部2本の下から氷の塊がギルドを持ち上げるように突き出していたのだ。

これによつて狙つた場所より上に向かつて撃つたため見事に外れたというわけだ。

ジヨゼが身を乗り出して下を見ると一人の男が地面に手を押し当てるのが見えた。

「流石に……この質量の氷を作るのはキツイな……！」

氷魔法の使い手であるグレイ。

彼一人でこのギルドを前脚を支えたのだ。

ファンタムの総重量は軽くトンを超える。

グレイ一人では当然持ち上げれるわけがない。では二人、いやもつと増やして十人ではどうだろうか？

グレイの他にも植物や、砂を操るものもいる。ならば一瞬だけでも持ち上garることは可能なはずだ。

「ジョニーが教えてくれなかつたら大変なことになつてたな。」

前脚を持ち上げていた氷や植物が重さに耐えきれず碎け散つた。しかしその甲斐あつてギルドは無傷。空に浮かぶ雲に巨大な穴がファントムのジュピターの威力を教えてくれた。マジで危なかつたなと冷や汗を垂らしながら呟き、首の骨を軽く鳴らした。

「さて、次はナツ達だな。俺も行かなきやいけねえけどな」

氷塊を消し、立ち上がる。

戦力も人数も負けているがなぜか負ける気がしない。口元にわずかに笑みを浮かべながらグレイは要塞に向けて歩き出した。

「おおおおおおおおおおおお!!」

その頃ナツはハッピーの力を借り、ジュピターが放たれた銃身からギルド内に進入していた。

ナツに与えられた任務は簡単に説明するとジュピターを発動する為に必要なラクリ

マを破壊、その後エレメント4を手当たり次第ぶつ飛ばせというものだ。

「燃えてきたアアアアアアア!!」

「あい！」

時速100kmを超えるのではないかと思うほどの速さで進入すると同時にナツの視界に真っ赤な何かが飛び込んで来た。

「うお！？」

クリーンヒットし、体勢を崩し地面に転がり落ちた。
ハッピーのその横でグデーンと倒れていた。

ナツが炎を飛んで来た方を見て見ると掌に炎を乗せた男が歩いて来たのが見えた。
名前は兎兎丸。サムライのような服を着ており口元には嫌な笑みを浮かべていた。

「おいおい……まるでこっちの秘密兵器を知つてたかのような迅速な対応じやねえ
か……つて……」

「うふ……」

「ダツハハハ！こいつ酔つてやがる！」

相手の弱点を見逃す程甘くはない。

ハッピーが「ナツウー！」と叫んでいるがファントムが動き続ける限りナツは酔いが止まらないのだろう。

「——青い炎！」

兎兎丸の手から青い炎が放たれた。

ナツは動けない限りに飛んでくる炎を食べることにした。

「ンガアアアア……つ、冷てえ炎だ、ウブツ」

「おまつ、炎を食うのか……」

口の中で炎を消すというのは大道芸人などがするのはよく見かけたりするが、炎を食べるのを見たのは兎兎丸は初めてだつた。直後にキラキラした何かをリバースしたのは見間違いだろう。

炎が効かないとなればどうするかと考えた結果、目の前で倒れこむやつに最も有効な策を思いついた。

「——橙の炎！」

「俺に炎は効か——くせえ！」

例えるなら牛乳を拭いた雑巾を放置して1ヶ月経過したかのような匂い。

そんな臭い炎がナツの身に襲いかかっていた。

「は、ハッピー……へ、ヘルプ……」

「分かつ——臭ア！」

「ハッピー！」

「臭い炎の中突っ込んだハッピーであるがあまりの臭さに魔法が切れ、地面に衝突した。

「ハハハハハ！これは飛んだ茶番だ！面白いから見てたいけどこれも任務でね。僕の最強の技を持つて消えてもらおう！」

兎兎丸が空中をなぞるように手を動かすとボボボボと7色の炎が発生し、合わさる。「喰らえ！7色の炎！」

炎を操り、炎に長けた兎兎丸だからこそ出来る技。

通常同一の魔法でも違つた属性を混ぜるのはとてつもなく複雑である。

更にそれが7個であるなら尚更だろう。

「は、ハッピーが……」

巨大な火の玉はナツとハッピーの中心に放たれていた。

炎に耐性があるナツなら大丈夫だろうが、ハッピーは猫だ。勿論毛に引火する。

「うおおおお……」

しかし酔いとは残酷なものだ。

ナツは動くたびに吐き気が襲いかかってくる。

火が届くまで残り5メートル。

ガコン!!と大きくファンタムが揺れるとその動きを止めた。
移動しなくなつたのだ。

「ふつかあああああっ!!!」

勢いよく立ち上がり、炎を前に立ち塞がり大きく口を開けた。
ミットに吸い込まれたボールのように、火がナツの口に入り、モシャモシャと口の中
で炎が噛み碎かれた。

「なつ…お前…」

「…もちもちしてたりネバネバしたりするな…けど臭工。お前橙の炎使うなよ」

少し顔を引きつらせ、飲み込む。

「止まつたならこつちのもんだ。かかつてきな」

「一度しのいだけで思い上がるなよ」

「へつ、俺に炎は効かねえからよ！一発でぶつ飛ばしてやるぜ」

「そうかい…じゃ、そうしてあげようか」

兎兎丸がポケットを漁り、黒い水晶がまるく削られたネックレスを首元につけた。

「何だそれ？また炎か？」

「いや、少し違うね。これは君みたいなヤツは一生お目にかかるない貴重なものさ！」

黒い水晶に魔力が込められ怪しい紫の光がぼんやりと辺りを照らした。
兎兎丸は片腕をナツに向け、その言葉を言った。

「——バレッテーゼフレア」

その言葉を言った途端、ナツがいる場所に突如爆発が起きた。

ナツがファンタム内に侵入する少し前。

エルフマンはグレイが生み出した氷を伝つて先にファンタムの中に入っていた。
エルフマンの目的は一つ。

ファンタムの動きを止めることだ。

その為に管理室に行かなければならないのだが……

「漢オオ——！」

隠密行動と真反対を現したかのようなエルフマン。

片つ端からぶつ壊し、ついでに管理室もぶつ壊すローラー作戦である。

エルフマンが腕を振るうたびに何人かがうわー、だとかぎやーと叫んで空に飛んでい

た。

そんな事があり侵入して僅か3分で管理室に到着していた。恐るべしエルフマン。
「かかる、若いとはいいいものだ」

「誰だおっさん」

「私の名前はソル。まあ覚えてもらう必要はありません。何故なら——」

「今から貴方は死ぬのだから!」

ソルという男が手を広げると岩が収縮し、エルフマンに向かつて飛びかかつて來た。
岩の弾丸が一斉に襲いかかり、土煙が舞い上がる。

終わつたと笑みを浮かべたソルだが、土煙の中に影が一つ。

「ティクオーバー、リザードマン」

ティクオーバー。

動物や、獸、更には悪魔や神までに至る存在の遺伝子を取り込み、一時的に自身の体
を変化させる魔法。

エルフマンがしたのはリザードマンと呼ばれる魔物。鋭い牙と爪を持ち、強靭な鱗を

持っている。

その鱗によつて猛スピードで襲いかかつた岩を防いだ。

「テイクオーバー使いですか？：珍しい」

「言つてろ。姉ちゃんには老人には優しくしろつて言われから一瞬で仕留めてやる」

L v. 24 妖精V S 幽鬼 2

「——ホオラア!!」

高速で動き回る事でゴウと音を立てて岩が襲いかかる。

エルフマンはリザードマンから速さのあるワータイガーと呼ばれる魔物に姿を変える事で迫り来る岩石を避けた。

体つきが大きいのに岩に当たつてないのは、それほどエルフマンが体を鍛えているからである。

普段漠しか言つてないイメージがあるが、エルフマンは頭がいい。戦略的な作戦も何個か思いついているし、ソルと呼ばれる男の使用する魔法も慣れれば避けられるものだ。

全く関係ないが見た目に反して料理も得意である。人とは外見で判断するものではない（重要）。

(ここは一気に仕留めるか——！)

「石膏の奏鳴曲！」

砂が舞い上がり、4つの拳となつた。

ソルが腕を前方に伸ばすと命令を受け取つた拳がエルフマンに迫る。

「行くぞ——！」

獣が最大速度を出せる体勢。

4足歩行から生み出される速さは一時的だが視認不可に近づく。

エルフマンが前に走り出した、その1秒後にようやく地面が割れた。

「黒牛——！」

ソルが気付いた時にはエルフマンは右腕を黒牛と呼ばれる鉄のように硬い皮膚を持つ牛を再現した黒い腕と化していた。

老人にはキツい一撃になるだろう。

「オオラア！！」

「——ジ・アース」

この現状を見ているものならエルフマンが絶対に勝つたと思つただろう。

しかしソルが言葉を紡いだ途端足元から先端が尖つた岩が飛び出し、エルフマンの鋼鉄の如き硬さとなつた腕をいとも簡単に突き刺した。

「ぐああ！」

「大地の力を舐めてはいけませんねえ」

追い討ちを掛けるようにエルフマンの真下から地面が突き出し、腹を打ち付け上空に打ち上げられ地面に落とされた。

「な……んだ、それは……」

「六星ダークブリング ジ・アース。まあ理解はできないでしようがねえ!!」

六星ダークブリング 「ジ・アース」。

ジョニイが聞けば目ん玉が飛び出すぐらいの反応をするだろうがその正体を知る者はこの場にはいない。

自然の力とは未恐ろしいものだ。コンクリートを突き破り、咲く花もあるのだ。

「アレを使うか……!?

いや、アレは……！」

「何をボソボソと一人喋つてるのですか！」

「グハア！」

喋る間も無く攻撃は続く。

エルフマンの言うアレとは、強力ではあるが自我が効かなくなる可能性があるテイクオーバー 獣の王。

全身にティクオーバーをする事で確かに今以上にパワーも速さも上がる。しかし全身ということはその生物の遺伝子を完全に取り組むということ。自身の魂も消失しかねない。

そしてエルフマンがこれをしない最もな理由は最愛の妹であるリサーナを亡くしたため。

「ジ・アース… いい能力です。いい実験台になりましたよ」

「…」

もはや言葉を返す力も残つてない。

もう無理だ、と諦めた時だった。

外から仲間の声が響いた。

「燃えて来たアアアアアア!!」

外なのにすぐ近くで聞こえるかのような大声で叫ぶ声。

途絶えかけた意識の中で鮮明に聞こえた。

「ジュピターの再装填まで残り15分。

何をしようがもう遅いことです」

「違う…」

「はい？」

力が入らない四肢を動かし立ち上がる。

魔力はほとんどなくなり残り一回のテイクオーバーが限界であり、ダメージも蓄積されている。

「みんなが戦ってるんだ……ここで一人倒れたら……」

「——漢じやねエ!!」

魔力を総動員させる。

体全体が入れ替わる感覚、魂が抜かれそうになつた。

「おお……おおおお!!」

額からは二本の角が生え、骨格が膨れ上がる。

身の丈は元から大きいのに、さらに大きくなり、体は獣の王へと変化した。
これこそエルフマンのテイクオーバーの奥義、獣王の魂。

「獣王の魂……！」

だがジ・アースの力を持つ私の前には無力!

「うつ……おお……オオオオオオ!!」

その声は獣そのもの。

一步踏み出すと地は割れ、雄叫びを上げると空間が震えた。

「穿て！ジ・アース！」

ソルの魔力がダークブリングを通じて発動され、床が動く。エルフマンを囮るように360度全てから岩が射出された。

た。 獣の王へと変化したエルフマンの口から放たれた声は、射出された岩を粉状に分解し

「ぬお!? 分解したのか!?」

五臓六腑に染み渡り、骨がキシキシと体の中から鳴るのが分かる。耳を抑えなければ鼓膜が避けるほどだ。

「しかし何と醜態な…まさしく獣だな」

ソルは鼻で笑う。

あくまで戦闘に華を求める彼にとつては獸という存在はまさしく害虫同然なのだ。エルフマンはソルの馬鹿にするような発言に怒りもせずただ一言。

「仲間のためなら醜態な獣にだつてなつてやる」

理性は残り、獣と化した体はエルフマンの精神によつて制御される。以前だつたら精神が飛んでいただろう。だが今は、守るべき仲間がいる。それこそが自身を動かす原動力。

「戯言を！・ジ・アース！」

悪しきもの程力が増大する闇の魔石、ダークブリング。

その中でも世界に6個しかない六星ダークブリングはそれぞれが強力である。ジ・アースは見た通り地面を操る力。

ソルの闇を糧として地面が抉れ、飛び交う。

「クハハハハ!!潰れろ潰れろオオオオオオオオ!!!」

攻める暇も見せないほどの一斉攻撃。

あまりの火力にファンタムの壁には穴が空き、外が見えていた。

「かけら一つも残さず散るとは・：：獣にお似合いだな」

砂埃が舞う。

その中に影一つ。

「馬鹿な・：：ま、まさか・：」

砂埃が晴れた先には腕をクロスさせ体を守るエルフマンの姿。

「あの中で生きていたというかの!?!?」

獣だな王とは言へど勿論体に傷はつく。

無限とも言える地の力によつて与えられたダメージは体に現れており、数え切れないほどの傷が体に刻まれていた。

「馬鹿な!!? どうやつて!!?」

一步踏み出す。

体力的にあと一発が限界だった。

「死ねエエエ!!」

エルフマンの前に巨大な石槍が現れた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

拳と槍が交わり——

——槍が碎け散つた。

「馬鹿な… 何故…」

「——死んでも守りてエものは自分で考えろ」

槍を貫いた拳は、そのまま直進しソルの顔に直撃し、派手に吹き飛ばした。

ザアアアアア・：

と雨が降り注ぐ。

雨のせいで目にかかる髪の毛を払いどけた。

「急に雨が降り始めたな」

グレイはルーシイガ拐われたという情報を聞いて隠れ家に向かってる途中通り雨に遭遇してしまい、雨の中走ることになってしまった。

降水確率は低めだつたがこういう日もあるだろうと考えてひたすら走る。

「フフ・：ふふふ・：」

走るグレイの耳元に女の声が聞こえた。

ブレーキをかけ、周りを見渡すが誰もいない。

「気のせいか？」

『いえ、気のせいじゃありません』

グレイの5メートル先に雨が奇妙にうねり、一定の集合体となり人の形となつた。

雨の降る中全般的に黒の服を着た女は傘をささず手をぶら下げていた。

「お前…それ…」

グレイがそれといったものは女の腕に巻かれた蛇の形をした銀に輝くブレスレット。グレイにも伝わるその魔力は怨恨や怒りという負の感情から来たものだと理解した。

「私ヲ…認めないのナラ…認めサセレバイイ」

「こいつは…ヤバイな」

グレイは服を脱ぎ臨戦態勢に入つた。

何故服を脱いだと突っ込んではならない。

L v. 25 妖精V S 幽鬼 3

グレイが戦っている最中に、エルフマンはソルを殴り飛ばしてファンタムの動きを止めたことによつて、酔いから目覚めたナツが兎兎丸を簡単に倒せるかというとそうは行かなかつた。

「あはははは！せめて美しく散るといい！」

「うお！」

六星ダークブリング バレッテーゼフレア
自分が視認した空間を爆発出来るダークブリングの一つ。
目に見えるのであれば距離、規模を自由に操作して爆破することが出来る。

ナツは火竜の力を使つて応戦するが、兎兎兎は炎を操作して、迫り来る炎を関係ない方向に吹き飛ばした。

「――火竜の咆哮!!」

「馬鹿の一つ覚えみたいに……効かないって言つてるだろ!」

迫り来る猛炎がくるりと軌道を変え、元来た方に向かいナツに直撃した。

自身の炎によるダメージはないが、熱さのせいかナツは徐々にイライラし始めた。

「クソツ！何で当たらないんだ！」

「ナツ……あと6分しかないよ」

ぐつたりとしたハッピーの言葉を聞き、魔晶石を見ると魔力がたまつて来たのか白い雷を散らしていた。

「考へてる暇なんてないぞ！」

ナツを中心にして、赤いラインが何重にも現れ球形になつた。

兎兎丸が掌をぐつと握ると赤いラインが一際赤く輝き爆発を引き起こした。

「がつ・・・！」

熱と衝撃で頭が揺られ、受け身もとらずに地面に転がつた。

「クツソオオ!!」

しかし、すぐに火を足にまとわせ、足の裏から噴出。
さながら口ケットのようだ。

しかしづつと放出してるので兎兎丸に操られ壁に叩きつけられた。
更にそこを狙つて爆発。

「おいおい…これじゃ俺一人でギルド制圧できるんじやないのか？」

ニヤニヤと見るだけでイラつと来るような笑みを浮かべた。

ナツはもう怒りが限界を超えていた。

ナツの滅竜魔法の特徴としては感情が具現化することだ。つまり今のように怒りの
感情があると――

「うるせええええ！」

炎がナツの体からこれでもか、というぐらい溢れ出る。

炎は床と天井を焦がし、周囲の温度をますます上げていく。

「暑苦しいね君…もう消えてくれ！」

バレッテーゼフレアが発動され、ナツの体を包むと同時に爆発が起きた。
しかし――

むしやり

「はっ・・・？」

ナツの体の周囲が爆発したと同時に大きく顔を動かし爆発を食らっていた。
爆炎は食えたものも、爆風は食べれなかつたのか髪の毛がアフロのようになつているが。

「爆発を食つただとおり?」

「最初からこうすればよかつたんだな」

ナツが一步步くと地面が真っ赤に染まりゼリーのように溶けた。

顔を見ると怒り一色。

エレメント4とはいえど兎兎丸だつて恐怖を感じる。

「ふ、ふん。それで強がつた気になるなよ!」

ピビピピと機械音が響くと同時にナツの周りに5つの爆弾が仕掛けられた。
ナツはその中をゆっくりと歩いていく。

何も怖じけずにゆっくりと歩いて來るのはある意味恐怖だつた。

「バレッテーゼフレア!!」

引き起こした爆発の中で、最も強力な爆発。

魔晶石の自壊すらあり得るほどの威力。

モクモクと煙が立ち上がり、地面には軽くクレーターが作られていた。

「はあ、やつと——」

「やつと、何だ？」

兎兎丸が後ろを振り向くと同時に振り抜かれた肘が綺麗に顎に決まっていた。
兎兎丸の頭が真っ白になる。

「人体で一番強いのは肘、だつたよなジョニイ？」

きつと銃で頭を撃ち抜かれたらきつとこんな倒れ方、と思わすほど兎兎丸は無抵抗に地面に崩れ落ちた。

ナツがしたのは実に簡単だった。

爆発する寸前に足の裏から一気に炎を放出し、天井を走つて兎兎丸の背後に回り込み、振り向きざまに顎に一撃。

「いいかなツ？ 拳は案外脆いから多々は禁物だ。肘を使え、肘を」とジョニイが言つていたのを思い出した。

肘は人体の中で最も強力な部位。

それが顎に当たれば気絶するのは当然と言えば当然だろう。

「後は魔晶石だな。よつと」

手から炎弾を放つと、吸い込まれるように魔晶石に当たり見事に破壊した。

「そうだ。一樣持つて行つていいくか。次も使われたら面倒だしな」

白目を向いて倒れている兎兎兎からダークブリングを奪い取りポケットにしまった。
パンパンと服についた砂埃を払いどけ、一度周囲の匂いを嗅いだ。

「上か・・・！」

ナツは足裏から炎を噴出し、もう一人の竜と仲間に会うべく、天井を貫いた。

「——私は悲しい」

エレメント4の最強の魔道士「大空のアリア」は腕を後ろに組み、階段の下にいるエルザを見ていた。

「まさか聖十魔道に続き、妖精女王まで倒す事になるなんて…」
ダン、と強く音を鳴らし階段を一段上がる。

手に何の飾りのない剣を持ち、階段の上に立つアリアに向けて剣を向けた。
「そう言うものは倒した後に言うものだ」

空中に緋色の髪をなびかせ走る。

アリアは照準をエルザに合わせ、掌に風を収束させる。

「——空域 絶！」

目に見えるほどの密集した風がエルザに吸い込まれるように向かい、爆発。纖細な作りのカーペットは引きちぎれ、木屑が宙に舞う。

「倒した？…いや、違う」

目を上に上げると、双剣を手にしたエルザがすぐ目の前にいた。

——飛翔の鎧。着用者のスピードを上げる鎧。効果は至つてシンプルではあるがこの鎧は写輪眼を発動していたジヨニイを置き去りにするほどの速さを与えたほどだ。上空に回り込み、双剣を振るう。

「ハアアアアア！」

「クツ」

一瞬の内に放たれた銀の剣尖が3つ。

アリアはギリギリのところで回避に成功し、少し服が切れただけだった。

エルザは再び動き、天井や壁を使って立体的な移動を可能にしてある。

「貴様の攻撃は魔力を0にするという恐ろしい魔法だが当たらなければ何の問題もない

！」

壁、天井を走るに連れどんどん速度が上がる。元より目の周りを紐で括つてあるアリアに見えるわけないだろうが、普通に見ても今のエルザが何処にいるかは分からぬだろう。

「ではその動きを止めさせましょう」

アリアの胸にぶら下がっている黒い水晶が怪しく光ると同時に、植物の芽が地面から100程生えた。

ゴゴゴと地鳴りを響かせ急成長する芽はあつという間に巨木と化し、無駄に広いだけの部屋が森のようになつた、

エルザは木が生えたことに驚いたが、直ぐに冷静を取り戻した。

(例え木が扱える魔法だろうと全てきり伏せればいいだけの話……！)

木の枝がエルザに向かい伸びてきたのでそれを伝い空に飛び上がる。そこを狙つてまた枝が伸びて来る。

「——換装！」

エルザの身に輝きが纏い、1秒もしないうちに天輪の鎧が換装された。

エルザは自身の周りに10本の剣を空間から取り出し、最高速度で一斉掃射。

銀の閃光が木々を切り裂くが、奥から更に湧いて来て焼け石に水状態だつた。

「——木の鉄槌！」

木の幹が音を立てながらエルザに迫る。

咄嗟に剣の腹で直撃を防いだが、木の幹は更に伸び続け背後にある壁にエルザを叩きつけた。

「ぐつ・・・」

壁と木に圧迫され全身の骨がミシミシと押し潰される。

持ち前の腕力で木を妨げるが思つた以上に力が強い。

「——空域 滅！」

ゴウと剛風が放たれ、壁は限界を越え破壊されエルザは壁の後ろにあつた大広間へと転がり込んだ。

「いかがですか？六星ダークブリング ユグドラシルの力は？」

「ダークブリングだと…？」

エルザには聞き覚えのない単語だつた。

剣を支えにし立ち上がり、剣先をアリアに向けた。

「太古にあつたと言われる戦争の兵器ですよ。もつとも知つたところで死ぬのですから意味はないのですけどね！」

アリアは両手の掌を合わせるとエルザを囲い込むように大樹が生えた。

生まれた大樹の表面に枝が形成され、一斉にエルザに照準が合わせられた。

「——王樹の刃！」

360度から枝という刃が射出された。

エルザは僅か数瞬で退路を見つけ出し、すぐさまそこに向けて飛び出した。

それでも迫り来る刃は換装で呼び出した2本目の剣で捌く。

「今のを避けますか！面白い！」

大広間が大樹に覆われる。

ただ広い空間が一瞬にして太古の森のような雰囲気となつた。

「部屋全体を…！」

「さあここからが本番です」

そう言つたアリアは目隠しを手で剥ぎ取つた。

L v. 26 妖精V S 幽鬼 4

場所は離れて街の中。

雨が降り続ける中グレイは上半身裸となつた。今更だから気にしてはいけない。

「よく分からんが… 邪魔をするなら退いてもらうぜ！」

指先までピンと伸ばした掌に、丸めた拳を置く。

アイスマイクの基本は両手を使うことである。

片手でも出来ないことはないがバランスが悪くなり、両手に比べても力が弱い。

「アイスマイク 槍騎兵！」

手から放たれたのは氷で出来た6つの氷の槍。

蛇のように宙でうねり、確実にジュビアに迫つていた。

「無ダメデス」

6つの氷の槍はジュビアに直撃したが、ジュビアの体が水と化し、氷の槍を直撃しても何のダメージも与えれずにいた。

「水になるのか……なら逃げ場をなくしてやる」

「ワタシハ……アメ」

「それはこれを受けてから言いな!!」

ドオオン!!

とジュビアを閉じ込める為に落とされたのは氷の牢獄。

そしてその周りには20を超える剣の群れが浮遊していた。

「黒ひげ危機一発みたいだなツ！」

グレイが腕を横に払うと命令を受けた氷たちが牢獄の隙間を縫うように射出され、閉じ込められたジュビアに向かい一直線に進んだ。

「——ホワイト・キス」

氷の牢獄に触れたジュビアが一言つぶやいた瞬間、腕に巻かれた銀の蛇の目が妖しく光った。

ジュビアを閉じ込めていた牢獄は銀の光を浴びる、メリメリと音を発しながら形を変える。

何の特徴もない牢獄が細長くなり、表面には一つ一つがキラキラとダイヤモンドのよ

うに輝く鱗。

その姿はまるで蛇。

手品師のように牢獄から蛇に変えてみせた。

手品師でも牢獄から蛇に変えることはできないとは思うが。

『?????——！』
蛇はジュビアに巻きつく。そしてその蛇の表面に20の剣が突き刺さり、地面に落ちた。

「驚いたな・防がれるとは思わなかつた」

触れられたらアウト。

その為氷の剣を手に持ち、構える。

ジヨニイの構えを真似たが、所詮は見よう見まね。

どこまで出来るかグレイも分からぬ。

「行くぞ！」

「——ホワイト・キス！」

支配権が移った蛇はジュビアの命令を受け入れ真っ直ぐにグレイに迫る。グレイは蛇と直撃する寸前に飛び上がり、回避した。

蛇は地面に衝突し、軽いクレーターを作る。

「元が俺の作つたやつとはいえ中々の威力だな…」

グレイは飛び上がつたまま剣を担ぐように構える。

蛇は再び狙いを定め目をグレイの方にピタリと合わせていた。

「さて… やつたことはないが一つやってみるか！——変換！」

グレイの持つ氷の剣が、青く輝き形を変える。

本来剣であつたそれは細く、長くなり一本の槍に変化した。

これがグレイのアイスマイクの応用編。変換である。

これを作るきっかけになつたのはジョニイがエルザと戦つていて、刀を変化させていることが参考となり生み出された魔法。

ちなみにこの魔法。新たに作り出すわけではないので魔力消費は凄く少ない。

「アイスマイク 飛翔槍！」

槍というのは突き、払いの他にも投げることで武器にも使える。

某青タイツもこのように使用していた例がある。

氷で作つた槍には因果逆転の呪いも何もついてはいないが武器として使用するには十分だ。

グレイの腕から放たれた槍は真っ直ぐにこちらに向かう蛇の口の中に入り、そのまま突き抜けた。

命を断たれた蛇は氷の残骸として地面に落ち、一本の槍が突き立っていた。

「… 次は… !!」

地面に降りると同時に槍を手にしくるりと一回転させ変換させる。

槍はいくつものパーツに分かれ、それぞれの先端が尖った。

「喰らえ!!」

風切り音を撒き散らしながらジユビアの元に迫る。

雨が降っているが軌道なんてまるで変わらない。

ジユビアは真っ直ぐに手を伸ばした。

自らの体をまた水にさせるのかと思ったグレイだつたが――

「――ホワイト・キス」

ジユビアの目の前に銀の盾が出来た瞬間驚きを露わにした。

「は?… 銀?」

この世界には銀術師なるものがいるが、銀術を使うためには手持ちの銀をグレイの交換のように剣に変化させたりすることで戦うことができる。

――しかし何もない状態から銀を作り出すことは絶対に不可能なのだ。

「あアあああアあああああ！」

「ツツ!! 大盾!!」

さつきのお返し……この場合倍返しと呼ぶべきなのだろう。

無数の剣がグレイの作った氷の盾に直撃し、ヒビを入れた。

「殺しテヤルウウウウウウ!!!」

「う……うおおおお!!」

一本の剣が突き刺さると同時に盾が破壊され、残っていた剣がグレイに殺到した。直撃は避けたが体の至る所に擦り傷が入り、滴る雨と同じように血も下に下に落ちて行つた。

「アアアアアウ……」

「お前……」

どう見ても正常には見えない。

出会つたばかりで何もわからないが考えられる要素が一つ。怪しく光っている蛇の首飾りだろうか。

「だつたらそれを奪い取るしかねえよな……」

「ああああああああああああああああああ!!!!!!」

!!!!!!

叫びが響くと同時に、あたり一帯の水が全て銀となり、鞭のようにしなりグレイに襲いかかつた。

銀の鞭が街を破壊する。

グレイはなんとか回避するものも一度でも当たれば大怪我は間違いないだろう。
「アイスマスク——^{ソード}剣！」

剣を生成しすぐさま放つが、鉄に叩き落とされ碎け散つた。為すすべがないとはまさにこの通りだろう。

「アアア……！」

蛇の首飾りが所有者の魔力を遠慮なしに吸い取っていくのが目に見えて分かつた。このままでは魔力の使いすぎで命すら危うい。

しかし今までは倒すこと以前に傷つけることすら不可能だ。

「なら、そう出来るようを作るしかねえよなあ……！」

氷の盾を精製し、それをグレイを取り囲むように設置し、グレイは一度深呼吸をした。今までは効かないというならもつと強く、絶対零度に勝る一撃を作り上げる。

「アイスマスク——」

一段の明るい青の光が辺りを照らす。

しかし暴走状態に入っているジュビアには思考を定めることが出来ずただ目の前に
る敵を殲滅することしか考えられない。

「????????????!!!!」

「もはや発す言葉は人の語ではなく獸に近い。

銀の鞭は、先よりも強力に盾を叩きつけ破壊しようとするが魔力をかなり練り込んだ
のかヒビは入るが、完全に碎けることはなかつた。

「もう少し……！」

青の光が更に輝く。

しかし、氷の盾は魔力を練り込んだものも銀の質量には勝つことが出来ずついに碎け
散つた。

「????????!!!!」

空から地に墮ちる雨が全て銀の弾丸となつた。視認することは出来ても、防御も回避

も不可能。

先に衝突した家は見事に蜂の巣となり、グレイも何かしらしなければ同じようになる
のは明らかだ。

「あのバカに礼言わねえとな」

「グレイの氷の魔法つてさ、絶対零度とか出来ないわけ？」

それはいつも通りジョニイの家にお邪魔（侵入）していた時の話だ。
夕食も食べ終わり雑談をしている時にふとジョニイが言つた。

「何だよ藪から棒に」

「いや、だつてさ。基本ナツと喧嘩しているわけだから属性的に最悪だろ？」

「ま、どうあがいても俺の方が強いってわけだな」

「殴るぞお前」

確かに言われてみればそうである。

何故考えてなかつたのか不思議であるが氷と炎では相性的に炎の方が有利だ。

生半可な炎では溶けない自信があるが、竜のブレスともなると流石に溶けてしまう。

「絶対零度か・・・そんなもんいちいち作つてたりしたら魔力持つて行かれるな」

「一発ぐらいなら作れんじやねえのか？」

「一発ぐらいなら・・・まあ出来んこともないな」

「じゃあ技を考案した俺が名前を付けてやろう」

「おい、まだやるとは言つてねえだろ」

「いいじやねえか。んー···そうだな。よし、色々とぴつたりだしこれでいいだろう。

その魔法の命名は——」

「銀の方舟」シルバーレイ

短く言葉が発せられた途端、ほんの一瞬ではあるが世界が停止したような気がした。魔法として完成されたそれは、顕現した直後に絶対零度の冷気を放出し、降り注ぐ銀の弾丸が全て凍りつき、碎け散った。

????? · · · !

青、いや銀の光が目に慣れようやく目を開けて初めてその手に持つものを直視した。槍だ。水からは到底生まれることはないであろう銀の光を放ち、極度の冷気を生んでいるのかグレイの周囲の地面が凍りついていた。

「全く、何がぴつたりだ。銀は分かるが何で方舟なんだよ」

まあ悪い気はしないけどな、と言い銀槍を片手に持ち走り出した。

槍が地面に擦れるたびに凍りつき、氷の道が作り上げられる。

????????????
感情に呼応して銀が暴れ狂う。」

頭を8つ持つた蛇がグレイの四方八方から襲いかかる。だがグレイは顔色一つ変えず冷静に槍を一度横に払つた。

青い光が銀の槍から放射状に放たれ迫る銀の蛇を緩やかにすり抜けた。直後、蛇の首が動かなくなり青い光が当たった場所から崩れ落ちた。

「冷気の斬撃だ。びっくりしただろ?」

???

あたり[?]?帶[?]の全ての水が上空に集められ、そらら全ては銀となつた。
球状に集められた銀は、孵化しかけの卵のようにドクンドクンと音を
いた。

「奥の手つてどこか・・・」

銀から作り出されたのはやはり蛇だつた。

しかし、その大きさは今まで作り出されたものよりも遥かに大きく、大きい。

鱗は鋭く尖つており、地面を容易に引き裂いていた。

グレイは槍を一度回転させ、前方に構えた。

「あんたが一体何者かは知らんが、その呪い俺がぶつ壊してやるよ」

蛇が轟いた。

音の衝撃波は家が吹き飛び、地面が捲り上がるほどの威力。

グレイは槍を持つ反対の手で、盾を作り上げ衝撃を防いだが、片手で作った分力が半減し一瞬で壊れた。

「行くぞ——！」

静かな意志を胸に宿し、走る。

蛇はその団体からは信じられない速さでグレイへと直進した。

地面を割きながら進む蛇にあたる直前、グレイは空中に飛んで回避した。

蛇の団体は大きく早いが、急な方向転換は苦手なのか、若干動きが鈍い。その隙を狙いグレイは大きく腕を後ろに引いた。

「もらつた——！」

銀の槍が体にあたるその直前。

蛇の鱗の一つがぐにやりと歪み蛇となつた。

まつすぐに伸びた蛇は空中で構えているグレイの腹部を容易に貫いた。

「がつ——」

驚きのあまり一瞬動きが止まつた。

しかしそんなものは効かないと言わんばかりに、槍を突き刺そうしたが、蛇の歓は一

度笑い次々と鱗を蛇に変え、突き刺した。

串刺しにされたグレイは銀の蛇に支えられ空中でその動きを静止させられた。

心臓も貫き肉体は痙攣を引き起こし体が動かなくなるのはもう10秒もかかるないだろう。

蛇の獣は笑い降り注ぐ血の雨を——

降つていなかつた。

「待つていたぜ、この一瞬が来るのを——！」

貫いたグレイの体が砕け散つた。

地に落ちたのは氷の塊。これは凹と気付いた蛇の獣は即座に振り返つた。

そこには腕を、悪魔の腕のようなもので包み込み、槍を構えるグレイが立つていた。

「言つただろ。槍つていうのはこういう使い方があるんだよ」

悪魔の腕から銀の閃光が撃ち放たれた。

——
!!

蛇が急速に動き槍を飲み込もうと突貫する。

だが悪魔の腕から放たれた銀槍は、蛇が飲み込むという動作をする前に、口の中に入りその体全体を貫き、青い光に包まれ爆散した。

蛇の獣が最後に見たのは、銀色に輝く閃光だった。

「う・・・んう・・・」

蛇の獣。ジュビア・ロクサーは重たい瞳を持ち上げると、目の前に半裸の男がいた。

「へ？」

「お、目が覚めた「キャアアア!!」——ヘブツ!!」

ジュビアの平手打ちがグレイの頬に突き刺さり空中で3回ほど回転したのち地面に転げ落ちた。

「いてえな！何すんだよおい！」

「それはジュビアのセリフです！そもそもあなた誰ですか?!?」
あ？と頭を悩ますグレイ。

よくよく考えてみれば自己紹介もしてなかつたなと考えたが、早く駆けつけて援護に行かないとギルドが壊されると考えたグレイは後ろに向き走り出した。

「わりいな！また今度するわ！」

「あっ！待ちなさ——」

い、と言おうとしたところでふと違和感に気づいた。

傘を手放しているのに体が濡れていないので。ジユビアは雨に愛されていたのか、いつどこに行つても雨が降る体质であり雨女と呼ばれ続けていた。

今日も銀の蛇のアクセサリーを貰うまでは雨だつたはず。そう思い空を見上げると空に輝く日差しが入り思わず目を閉じてしまった。

もう一度注意して目を開けると、空に輝く太陽と青く澄み切つた空が視界を覆い尽くした。

「あれが……」

生まれて初めて目にする太陽と青空を見て感動で胸が震えるのを感じた。

しかし何故急に？と思ひ疑問に思い前に向くと少し先で走るグレイの姿が目に入つた。

「もしかしたらあの人人が……」

雨空と曇つた自分の心を晴らしてくれた存在なのか、と。

グレイが見えなくなるまでジユビアはずっと見続けていた。

L v. 27 妖精V S 幽鬼 5

二つのギルドの総力戦。

男の叫びが響くたびに地面が、家が爆発したかのように飛んで行く。

押しているのは幽鬼の支配者。泥人形を魔法で作り出し、人員が欠けている妖精の尻尾にゴリ押しで勝とうとしていた。

だが妖精の尻尾も押されるだけではない。少ない人員で役割を分担し、泥人形を適切に処理していた。

この勝負はどちらが勝つか分か——

「動くな」

——移動要塞ファンタム。その頭部にあたる部分でサクラはそいつに薄く桜色に染まる刀身を首元に突きつけた。

軽く押すだけで首を容易に貫くというのにそいつは微動だにせず、ただファンタムの頭部でゆつたりと座っている。

黒いフードをかぶり顔は見れないが体格からして男だと判断した。

「あなたは誰ですか？どうして私以外に見えていないんですか？」

「——はあ、間違えたな。ちょっと変えたらすぐこれだ」

「一体何を——」

ザザツ、と世界が歪んだような錯覚が起きた。目を離してもいなのにフードの男は消えていた。が、すぐにジョニイから教わった気配の探知を使いすぐに居場所を確認した。

「しかし驚いたよまさかお前がそう来るなんてな。予想外だつた。うん、これ本当予想外」

フードの男は何かしらの魔法を使っているのか宙を足場として立っていた。

サクラが見上げる形となつているが顔全体が見えない。

「あなたはファンタムの手先ですか？」

「俺が？あんな小物に？いやいや、それはないわー。序盤の序盤でやられるやつのところに入るわけないよね」

「あなた何を——」

「けどこうやつて出会ったんだ。君にも活躍の場ぐらい上げないとな。そうだなあ・・・序盤の敵つてことで——」

黒フードの男が指を一度鳴らすと空に禍々しい黒い穴が空き、そこから黒が溶け出しファンタムの頭部を濡らす。泥というよりかは闇を具現化したかのような何かは人型となり、白銀の鎧を纏い片膝をついた状態で静止した。

「——灰の審判者 グンダ。

まあ世界一難しいチュートリアルだけど死なないように頑張ってくれ

白銀の鎧の胸にあたる部分に突き刺さった少し燃ゆり、捻れた剣を黒いフードをの男は抜き取り捨てた。

そして最後に口角を引き上げ、何処かへと消えた。

「！待て——」

遅かつた、と分かつていながらも黒フードの男のいた場所に手を伸ばす。

途端——

「ツツツツッ!!!!」

纖細な装飾が施された斧槍が前方を通り過ぎ、魔力で強化された移動要塞ファンタム
「?????岩石を吹き飛ばした。」

「?????・・・」

審判者は片腕一本で自身の倍はある斧槍を軽々と扱い、サクラへと近づいた。
「仕方がありません。取り敢えず貴方から倒してあげましょう」

首元から出る膿に気付かず、戦いは流れて行く。

アリアが目隠しを外した途端部屋の空気が変わった。

部屋一室が魔力で覆われるような感覚。

「私は普段目を隠すことで力を抑えているのですよ。あまりにも強大な力なのでね」

「・・・」

エルザは話を聞きながらも周囲に目を配させていた。

周囲には無数の木。この一室だけか森の中にいるような錯覚を覚えさせた。

だがそれは移動手段が増え、より立体的な動きが出来る。

「では改めて死んでもらいましょう」

途端エルザの乗つっていた木から枝が現れた。

「換装！飛翔の鎧！」

エルザは宙に飛び上がり剣を構える。それと同時に100を越える枝が飛来する。

枝がエルザのいた場所を通り過ぎて いる間に既に横の木へと移動していた。

木を伝い加速しながら落ち、そのまま走り続ける。

「種子砲」

ニヨキツ、と可愛らしい植物の芽が湧いた。

エルザはそれを目で見つつなお走る。

「ハアアアアア！」

双剣がアリアを捉えるまで50cm。

エルザの左腕に穴が空いた。

「ぐつ・・・！」

「空域 滅」

空気の衝撃が襲いかかり、大きく吹き飛ばされ木に背中から直撃した。

更に一瞬の隙をついて木の枝がエルザの体に突き刺さる。

「ツ…！」

大雑把に枝を抜き、すぐに立ち上がる。

傷は思ったよりも酷く、血が漏れ出した。

だが倒れるほどではないと思つた時だつた。

腕から木が生えた。

「は？」

「言い忘れていましたがユグドラシルは相手に傷を与えた時に傷口を媒介として相手の魔力を全て木に変換させます」

全身の脱力感が増えると同時に木がますますと大きくなり自分を飲み込もうとした。

エルザはとっさに腕を動かし傷口を大きく抉り出した。

そのおかげで木に呑まれることはなかつたが出血が激しくなつた。

「くっ…」

袖を千切り傷口に巻きつける。

血の出る勢いは収まつたが次に喰らえば後がない。

だがダメージを受けずに勝つことなんて出来るだろうか？

力の差では勝つてゐるが数の差が激しい。

「…」
流石に枝と種を全て叩ききれるかと言われると答えは曖昧になつてしまふ。

「…」
全ての鎧を頭に思い浮かべる。
妖精の鎧、煉獄の鎧も魔力が尽きかけのため換装は不可。天一神の鎧はもつとダメだ。

飛翔の鎧でも間に合わない。

「さあ、抗いなさい！」

撃たれる。

その度に腕に痺れが走る。

どうする!? どうする!?

エルザはひたすら自分の中で勝てる手段を考える。

(今の私では捌き切れない… もつと早く、強く… !)

太ももに枝が突き刺さる。

自分の刃を太ももに突き立て枝ごと抉り取ると太ももから足先にかけて血が垂れた。

集中力はすでに限界を越していいるのか少しづつ反応が遅れ始めた。

視界はすでに歪んでおり立っているのが不思議なぐらいだつた。

「これで最後です！ 王樹操龍！」

アルベルト・ドラゴティクス

木々がうねり一匹の龍と化した。

空間を震わせながら周りにそびえ立つ木々をなぎ倒し、エルザへと突き進む。

意識を無理やり覚醒させ回避しつつ龍の上に登りアリアに近づこうとするがその間

も枝は飛んで来る。

「うお・・・　おおおおおお!!」

直撃を避けながらも必死に迫る。

刃が届くまで残り一步。

「案外つまらなかつたですね」

下から突き上げるように出て来た樹木はエルザの腹を勢いよく叩きつけた。

そのまま上へ上へ伸び続け天井を破り、さらにその上の階の天井を突き破る。

更に突き破り続けギルドを突き抜けた。

体の中にダメージが与えられたのではないので体は木にはならないがダメージは計り知れない。鎧を着ていたとしても肋骨はいくつか折れ、更には出血多々。まだ生きてるのが奇跡。

アリアは樹木を伸ばしエルザと同じ高さまで近づくとおもむろに両手を開け、妖精の

尻尾がある方向に向かい叫んだ。

「妖精女王は私が打ち取つた！」

その後に高らかに笑う。

耳にこびりつく嫌な笑い声だ。

エルザはなんとか顔を動かして下を見るとギルドの仲間がザワザワと声を立てていた。

マカロフがいない時の最終兵器とも言えるエルザがやられた。
つまりは敗北。

「……だ……」

それは違う。

手も足もまだ動く。負けていたのは自分の心だ。
ギルドのため、この戦いだけは負けられない。

「——まだ、戦える……！」

エルザを突き上げていた木がバキイ！と純粹な握力で粉砕された。言つておくが握力で木を潰すなんてことはほとんど不可能である。「な……貴女まだ動けるというのですか？」「？」

木で作られた龍が再び舞い上がりエルザに迫る。

「邪魔だ！」

銀閃が光つた次の瞬間には龍は10当分にされていた。

アリアとしては心底驚愕しているだろう。

先程まで死にかけだった人間が明らかに強くなっているのだ。

「私はまだ戦えるぞ……！」

木が舞うと、剣が舞う。

剣が舞うと、木が舞う。

一種の美しさを持つた戦いは更に激闘を繰り広げていた。

アリアは以前変わらない魔力で木々と空気を操り、エルザは手に持った剣を修羅の如く振るう。

「何故動ける……！」

「仲間のためだ！」

背後からの枝もまるで見えてるのかのように対処する。

「仲間のためだと!? なんと見苦しい！」

「ぐつ……」

木の龍が同時に3体。

防御でダメージを受けた傷が開き血が漏れ出す。

「仲間なんていっても何も変わらない！」

「違う！ 仲間がいるから強くなるんだ！」

木をかいくぐり拳をアリアへと叩きつけた。

「私に傷を！ …… ユグドラシル！」

アリアの魔力を通して木々が――

「確か、これだつたか？」

生えなかつた。

ユグドラシルを使うのに絶対必須のダークブリングがエルザの手の中に収まつてい

た。

数秒前に殴った際奪つておいたのが功を成した。

「貴様アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ダークプリンスに固執した故に、自身が魔法を使えることを忘れてしまつた。過ぎた欲は身を滅ぼすというべきか。

エルザはただ走つてくるアリアに拳を構える。

「返せエエエエエエ!!」

弓を引くように大きく腕を引き、足を強く踏み出す。

「これが——」

緋色の髪が宙になびき、拳は真っ直ぐと伸びアリアの顔を直撃した。

空気の歪みを起こしふり抜かれた拳は、アリアを地上へと叩き落とし地面を陥没させた。

「家族の力だ。お前に私の大事な家族を傷つけさせやしない」

L v. 28 静かな意志

??????????
——！

銀に光る斧槍がグンダの頭上で回転し、風が巻き起ころ。

遠心力によつて増幅された一撃による横薙ぎの一撃がサクラを叩き潰さんとした。

グンダの体格上使う武器が大きいという点と、斧槍のリーチの長さが相まつて5メートルという距離を無かつたことにした。

「くっ！・・・うう・・・！」

刀身でなんとか斧槍の軌道を変えるのが精一杯だつた。サクラのすぐ横を通り抜けた斧槍は魔力で硬化された石など関係なしに粉碎する。

た。

直撃はしなかつたものも、大きく吹き飛ばされ移動要塞から足が離れ地上に落ち始めた。

「危なかつた……！」

ひと息つく間もなく、影が体を覆う。

頭上を見上げると片腕に斧槍を持ち、地面に縫わんと迫り来るグンダの姿。

地面をみつともなく転がる。視界が回つて見えなかつたが、すぐ隣でまた一つ大きな穴が空いた。

「サクラ!! ··· となんだソイツは!!?」

「離れてください！どうやらこの人思つた以上に強い——」

巨体の割に動きが速い。一息つく時間もないのだから、話す暇など更にない。

サクラのトラウマであつた盗賊ギルドの首領以上に速く、技が洗練されていた。
しかしあだやられるばかりではない。

『いいかサクラ。お前は俺の刀しか見てないから分からんかも知れんが刀っていうのは
めちゃくちゃ脆い。受け方を間違えただけですぐボツキリだ。だから出来る限り受け
る、のではなく捌くかパリイだ』

鞘に一度刀を収めた。

掬に手を添え、右足を一步だけ出す。
いわゆる抜刀術というものだ。

狙うは後の先。

極限の集中力により、迫り来る斧槍が少しだけゆつくりに見えた。

「——ハアア!!」

裂帛の声と共に放たれた一閃。

一瞬の金属音が鳴り響き、グンダの斧槍は巨大な体と同じように大きく後ろに弾かれ
た。

決まつた。後は刀身を突き立てるのみ。

今現状を見ている者は誰もが勝つたと思つただろう。

しかし甘く見てはならない。螺旋剣の鞘となり、人の膚まで宿したグンダであるが、彼は英雄なのだ。

「な——」

反り返った体を更に反り返す。

両手を地面につけ、腰のバネを使い足を持ち上げて迫る刀身を蹴りあげた。
1秒にも満たないというの相手の武器と自分の体勢を整えた。

(けどこの間合いじゃ斧槍は使えない!)

その判断は正しい。普通であれば斧槍という武器は間合いに入られたら触れない。
ただしそれが普通であればの話だ。

なんだも言うがグンダは英雄だ。このような対処は幾らでもある。

視界が揺れた。

一瞬だけ気絶していたのかかもしれない。

気付いた時には既に斧槍を容易く扱う巨体が浴びせられていた。

面白いように吹き飛び、飛んだ先にあるギルドの壁を貫いてようやく落ち着いた。

「ガハッ！・・・うつ・・・」

頭がガンガンして立ち上がることすら難しい。

だがそれでも動きを止めないのは、止めたら死ぬからである。

?????????—!

迫り来る英雄。元より剣を握り間もないサクラが相手にするのは無理な話だ。

エルザやナツの方がサクラより強い。だが彼らは彼らにしか出来ないことをしている。ならば自分はこのギルドを守るために出来ることをしなければならない。

鼓動が一際大きく鳴り響いた。

導かれるかのようにその言葉を自然と口にしていた。

〔アガートラム
武源解放〕

腕に紋章が絡みつくと同時に、体の底から力が湧き上がったかの感覚が伝わった。身体機能の向上ではない。まるで誰かに憑依されたかのように身体が動いた。一步、踏み出す。

最速に達した一撃をギルドから飛び出し、仁王立ちしていたグンダに刀身をではなく、掬頭を身体の中心に叩きつけた。

吹き飛ぶことはなかったが、大きく後退させた。

「一筋縄じゃ行きませんよね」

思わず笑みがこぼれる。

一撃ではあるが、それでも攻撃を入れたことには変わりはない。

ならば次も行けるはずだ。刀を手で一回転させ握り直した。

「もうちよつと速く進めないかのぉ」

郊外。平地をひたすら走り続けた。

謎にマカロフを背負つて。

俺は一度走るのを止め、疲れを噛み殺して言つた。

「無茶言わないでくださいよ。そもそも本気出したらマスターの方が200倍くらい早いじゃないですか」

「儂は力を温存しなければならん」
「それ俺も同じですからね？」

ポーリュシカの元で治療すること一週間。

ベ○一タとか悟○が治療に使つていたポツドみたいな元で過ごすとは思わなかつたがその甲斐あつてか、体調はすこぶるいい。

それに1週間使う機会がなかつた魔力を貯蔵出来たこともあり、普段の5倍くらいの力が出せそうな気がする。あくまで気がするだけではあるが。

「でも・・・」

「？」

原作通りではエルザがやられる直前でマスターが来たのだが、もしララバイの時みたいに何かの変化があつたりしたら？

もしサクラが殺されたりでもしたら・・・そんな不安ばかりが胸にのしかかつた。

「やつぱり本気出します。しつかり掴まつててください」

「無の極みの本気か。これは興味があるの」

「辞めてくださいその二つ名みたいなやつ。ちょっと恥ずかしいんですから」

溜め込んだ魔力を足に回し、全力で地を蹴つた。後ろで地面がめくれ上がりつたが、それを振り返つてみた時にははるか後方だつた。

アガートラム
武源解放

無限刃

腕が動き出した。銀の閃きがグンダの視界を覆い尽くした。ジョニーの三頭龍のよ
にほぼ同時に放たれる連撃ではないが、それでも視界を覆い尽くすのは脅威である。

しかしグンダも斧槍を器用に扱い銀閃を全て寸分違わず撃ち落とす。

試した技は既に10を超えたがどれも致命の一撃を入れるには足りなかつた。

戦いは5分を過ぎたがグンダの様子に疲れたの二文字は一行に見える気がしない。

正攻法で戦つてはキリがない。アホヅラした師匠の戦い方を思い浮かべた。

何度も目かになる斧槍を紙一重で躰し、距離を詰める。

斧槍の振れる距離ではないが、グンダには鍛え上げられた肉体がある。
それを先ほどサクラも身を以て体験したが、さらに前に詰める。

(ここだ——!)

手に魔力を集め、突撃するグンダに合わせ掌底を撃ち放つた。相手が突撃するところに合わせて放たれた掌底は見事にグンダの鳩尾を捉えた。グンダの突撃するタイミングで掌底を放つたので威力が一切逃げることなくグンダの体内に伝わり、骨が碎けた感触が伝わった。

グンダはフルフェイスの鎧の隙間から血を漏らしてその場に倒れた。

今の一撃は魔力を込めていたので威力の底上げだけではなく、他者からの魔力が直接体の中に流れると起こる拒絶反応により当分は立ち上がることすらままならないだろう。

「なんとか・・・なりましたか」

荒れる息を深呼吸で落ち着かせ、刀で体を支えてなんとか立つていられた。

戦闘が終わりアガートラムの紋章も薄くなり消えていった。少し休んだ後エルザ達の元

へ――

グチャリ、と耳に残る音が後ろで鳴った。

サクラはすぐに背後を向き確かめるが何もない。正確に言えば倒れたグンダと戦っている仲間達。

「ん……？」

ふと目をやると戦っている時には気がつかなかつたがうつ伏せで倒れているグンダの首元から奇妙な黒い触手のようなものが生えていた。

何かがヤバイ。そう判断したサクラは躊躇なく触手を切り落とそうとしたまさにその瞬間。

グンダの体を触手が飲み込み、黒い化け物が降臨した。

L V. 29 挑む者

その場にいる全て。

サクラも、妖精の尻尾のメンバーも、敵対する泥の人形ですら例外なしに動きを停止した。

見上げる先にいるのは闇そのものを纏つた奇妙な生き物。最も近い例えをするとネズミズミではあるがネズミとは比べる余地もない力を持つことが目に見えて分かつた。グンダと無理矢理融合させたのか上半身は完全に侵食されていた。

↓
」

グンダの歴戦の勇士を思わせる野太い声ではなかつた。

ガラスを指で引っ搔いた時に出る耳障りな音を数百倍にさせたかのような叫びが鳴り響く。高音によつてギルドの窓ガラスは容易に割れ、ファンタムの石壁にはヒビが入つた。

赤い目をしたネズミの獣は餌を物色するようすにすぐ目の前で今にも倒れそうにしているサクラを睨みつけた。

サクラは長く続いた戦いによつて動くことすらままならないといふのに、後一步のところで耐え、桜色に染まる刀身を向けた。

「まだ立つというなら・・・いいでしよう。何度でも倒すだけです」

無茶だ。そんなこと自分が一番分かつてゐた。それでも挑むのはここを守ると誓つた決意からだ。

しかしそんなもの御構いなしに、破壊の嵐が訪れた。

ネズミの獣が一度尖つた爪を振るうと、魔力が混じりカマイタチのように飛びあらゆるもの引き裂き、飛び跳ねるたびに地は崩れた。

—————！

目的もなくただひたすらに暴れる闇の獣は敵味方関係なしに傷つけて行く。
その余波はギルドにまで浸透し、ただでさえギリギリだつたギルドが音を立てて今にも崩れようとしていた。

「やめてええええええ！！」

最後の祈りも届かず、爪が振るわれた。

真っ直ぐに飛んだ魔力の刃はギルドに直撃し貫いた。木の崩れる音が響き渡り、不落であつた妖精の尻尾はどうとう崩れ落ちた。

ネズミの獣は喜んでいるかも分からぬ叫びを上げたがサクラの耳には入つてこなかつた。

「ああ・・・」

無力。

最初と何も変わらない。調子に乗つてやられて、師匠の敵討ちすら出来ずに、ギルドすら壊された。自分一人じや何も守れない。

力も出ずその場に膝から崩れ落ちることしか出来なかつた。

頭上で蛇の獸が巨大な口を開けているような気がしたがもうどうでもよかつた。

「——何諦めたつもりになつてやがる」

懐かしい声が聞こえたのと同時にネズミの獸が吹き飛んだ。

咄嗟に顔を上げると糸で固定された獸は引きずられるように空を飛びファンタムの石壁に叩きつけられた。

「ギルドがぶつ壊れるのはいつものことだとして……ネズミ如きが何調子乗つてやがる？」

その声が響くと同時に糸が導火線のように燃え始め、ネズミの獸に触れた途端巨大な爆発を引き起こした。

炎に焼かれ叫びをあげる獸に構わず、声の持ち主はサクラの頭に手を置いた。

「まああれだ。よく頑張つたな。後は任せろ」

普段頼りない声が、何故かとても頼れた。

ファンタムの石壁から飛び出し俺の目の前に降りて来たコイツの正体は知っていた。
炭の審判者グンダ。ダークソウル作品に出て来たボスの一人。待ち続けたせいで人の膾を宿してしまった一人の英雄だ。

この世界に出て来る訳は当然なく、誰かが仕向けたということになるが――

??????????????
!!!!

今はコイツの処理だ。

響き渡る絶叫ともいえる咆哮が衝撃波となり、辺りを破壊した。

しかし恐怖は感じない。何故なら今の俺はすこぶる体調が良い。なんせ治療は完治しており、更には1週間魔力を貯めたのだ。いつもなら不可能のことも今日なら出来る。と言つてもあんまり無茶しすぎたらまたポーリュシカにキレられるが。

「属性付与 炎」

刀身に炎を灯す。

もし何も変わつていないと人の膚の特性として炎が弱点というのも通じるはずだ。人の膚は俺の拳動を確認して巨大な腕を動かす。

「行くぞ」

地を滑るように走る。

人の膚は巨大な爪を振り回し、魔力の刃を無造作に放つた。

容易に地を裂く一撃を紙一重で避け続ける。

??????????!!

攻撃が当たらぬことに痺れを切らしたのか、人の膚は巨体を活かして突進を仕掛け

て來た。

脚に魔力を込め飛び上がる。

人の膾の上を行くことで突進を回避した。

「刀劍變化・槍」
[オーバー・エッジ]

刀がグニヤリと歪み、一本の槍となつた。

エンチヤントの効果は持続しているので矛先からは炎が溢れ出していた。
その槍を一度手放す。

「おおおお・・・！」

空中で一回転し、槍を蹴りつけた。

槍というのは投げるという選択肢がある。ならば手よりも脚を使って蹴ればさらに威力が上がる。

頭の悪い考へではあるが、威力は絶大。

炎に包まれた槍は人の膾に突き刺さり内包された魔力を爆発させた。
人の膾の絶叫が響き渡る。

「まだまだ・・・！」

「久しぶりに動くせいなのか体が喜んでいるのが分かる。写輪眼を発動していないのに相手の動きが手に取るように分かつた。

「投げた槍を回収し、元の刀に戻す。そして脚に魔力を込め動きを向上し、人の膾とすれ違うたびに斬り刻む。

炎の跡が空中に残り、それが1本、2本と数を増やして行く。

「炎の牢獄に閉じ込められた人の膾は脱出することも出来ずに叫ぶ。

炎の跡が20を超えた。俺は再び空に飛び上がり、刀を両手でしつかりと握った。

属性付与を切り替え炎から風に。刀身の炎が消え、竜巻のようなものが刀に纏わりつ

「炎派に反するが新技完成だな・・・！」

炎の牢獄に閉じ込められた人の膾は脱出する手段を持たない。

人の膾は俺を恨むような目で見て来たがそんなことを無視して、頭上から風の力を纏つた刀で叩き斬つた。

「——焰華」

刀身に纏わり付いた風が炎の力と混じり合い炎の竜巻を引き起こした。

人の膾は最後まで炎の檻から脱出来ずに余すことなく燃やされた。

?????

未だに動こうとする人の膾の頭に刀身を突き刺した。それを最後に動かなくなり霧散し、残つたのは倒れた炭の審判者だけだつた。

「ふー・・・氣分爽快。後はマスターだな」

と言つても一瞬で片がつくとは思うが。

久々に動いた疲れでその場に座り込み、静かに戦いの終わりを待つのだつた。

L V. 30 終わらない戦い

「妖精の法律 発動」

マカロフの掌が合わせられ、優しい極光が辺り一帯を飲み込む。

妖精三大魔法の一つ。妖精の輝きが単体への攻撃、妖精の球が防御魔法だとすると、妖精の法律は超広範囲攻撃。その正体は自分の認知した敵のみを殲滅する極光を解き放つというものだ。

敵対していたジヨゼはその光の正体に気付かず、聖なる光に身も心も裁かれた。たつた一瞬の出来事であつたが同じ聖十大魔導でありながらジヨゼとマカロフの差

は圧倒的なものであつたことを言葉なく証明していた。

「二度とギルドに手を出すな」

それだけ言つてファンタムから去つて言つたが、ジョゼに向けた目は次来たら殺すと訴えていた。ジョゼは極光によつて意識を失つてゐるがこの脅威は魂にまで結びついたであろう。

「やれやれ・・・変えてみたけどやつぱり変わらないものは変わらないね」

マカロフがいなくなつた直後、立つたまま氣絶して動かないジョゼの目の前に黒フードを被つた男が最初からいたかのように立つていた。

「ダークブリングも結構上位なやつあげたのにこのざまとは・・・クソ雑魚ナメクジかよ」
ケタケタと笑いながらジョゼの背を叩く。

氣絶したジョゼは気づかない。叩かれたと同時に何かが埋め込まれたのを。
体の中に入り、移植の何かが体を乗つ取つた。

「ギ・・・アギ・・・」

「まあこれは俺からのささやかなプレゼントだ。もうちょっと粘つてくれよー」
それを最後に黒フードの男は何処かへと消えた。

「ごめんなさい・・・私がもつとしつかりしていれば」

「アホか。あんなの本来一人でどうこうできるやつじやないわ」

戦いも終わり、崩れたギルドの木片に座っていたのだがサクラは土下座をせんばかりの勢いで謝っている。

ゲームじやないのにグンダ相手にあそこまで戦えたことを賞賛するぐらいなのだ。

「ま、俺だつたらそのグンダとかいうやつ倒せたかもな」

「お前は人の傷を抉るな」

隣で話を聞いていたナツの顔に向けて指先から水を顔にかけて発射した。少し塩分を添えて。

「うおおおおおお!!目がああああ!!」

「何やつてんだよこの馬鹿は」

地面にのたうちまわるナツを見てグレイが呆れた声を出した。

「空気を読まなかつた罰だな」

「なんだそれ」

ポロリとグレイのポケットから何かが落ちた。2バウンドして俺の近くに転がったので拾つてみたが何やら黒い水晶を巻いた蛇のネットクレスだつた。

「趣味悪いな。これを女にプレゼントするのだつたらやめとけ」

「この状況でするやつがいると思うか?」

「お前だつたらやりかねないな」

「氷漬けにするぞゴラ」

と言つたジョークをしながら（グレイの手に氷が集まつてゐるような気がした）ネットクレスを見るとなんだか見たことがあるようないような気がした。

「んあ? グレイもそれ持つていたのか」

「どういうことだよ?」

ん、と言つてナツが放り投げたのはグレイが持つていたのとは形が違うが黒い水晶が埋まつていていた。やはりこれも何処かで見たことがある。

「何だつけるれ···喉元まで出て来てんだよな」

「確かそれダーク···ブ、ブランゴ? とか言つてたぞ」

「ダークブランゴ?」

「俺と戦つたやつはそれ使つて爆発起こしてたぞ」

「俺のところは周りの物質を銀に変えるやつだつたな。一体どんな魔法だよな?」

ダークブランゴ・・・聞き覚えがないが何かが引っかかる。

だ。爆発は在り来たりだとしても、周りの物質を銀に変えるつていうのは中々効かない力

「ダークブランゴ・・・ダークブリング・・・違うなあ。ダークブリング・・・ん？」
ダークブリングで思い当たる節が見つかった。そして分かつた瞬間顔に血の気が消えたような気がした。

「そうだ！ダークブリングだ！お前らコレをやつらに渡したヤツを知らないか!?」

確かに貰つたとは言つてたな……けどそいつは見てねえ」

「そう言えばアルさん。黒フードを被つた怪しい男がいたんですけどそいつが・・・？」

「黒フード」？

ファンタム編を思い出したが黒フードの男なんていなかつたはず。そもそもグンダの時点で気付くべきだった。

誰かが物語を改変していることに。

遠く、崩れた移動要塞ファントムから壊れた笑い声が聞こえた。

その声はジョゼだと言うことに気づいたが、おかしい。本来ならジョゼは妖精の法律でとつくにくたばつていたはず。

まさかとは思うがこれもサクラの言う黒フードの男の仕業なのか？

「素晴らしい!!!どんどん力が湧いてくるツツツツ!!!」

ファンタムのギルドから赤黒く光る牙、というよりかは尾。何とも形容しがたい何かがファンタムのギルドの外壁を掴みジョゼを持ち上げた。尾と形容したのはあながち間違つておらずソレはジョゼの腰の部分から生えて來た。

「何だアレ……？」

グレイが見たままの感想を言つていたが、俺は知つていた。ダークブリング、グンダと関連性が分からなかつたが更に分からなくなつてしまつていた。

「赫子か……？」

赫子。東京喰種と呼ばれる漫画に出てきた喰種と呼ばれる人間を喰らう種族の持つ武器にも盾にもなるものだ。その正体は赫包と呼ばれる人間にはない臓器に含まれるRc細胞と呼ばれるものが体外に飛び出し固体化したものだ。その強度は包丁すら通

さない。

簡単に言つてしまふと「液状の筋肉」だ。

勿論この世界には登場しない。

「血だ・・・血を寄越せえええええエエアエエエエエ!!!!」

ジヨゼの腰から生えていた赫子が体内に戻り、代わりに肩から醜い揺らぐ羽が生えた。

赫子にも種類があり、羽赫と呼ばれる赫子は敏捷と遠距離の攻撃に優れている。

元々、聖十魔導師の一人として数えられるジヨゼの魔法の力とあいまつて、距離300メートルはあるファンタムのギルドから2秒で俺たちの目の前にいた。

「!!避けろツツツツツ!!!!」

一番近かつたサクラを押し、ジヨゼの間合いから逃す。弾丸と化したジヨゼはその速度のまま俺に突撃した。

後ろに引きずられながらも巴投げの容量で背で回転し、自分の受ける傷を軽減したのもジヨゼにマウントを取られていた。

「お前の血を・・・寄越せええエエエエエエエエエエエエエエ!!!!」
「お前・・・！」

完全に喰種になつてやがるな!!」

ジョゼの目は赫子と同じ赤黒く染まつていた。喰種の主食は人肉。言動からするに俺を殺すよりかは捕食するつもりなのだろう。だがそう易々と食われるわけにはいかない。

「がああああああああああああ!!!」

獣のように噛み付こうとするジョゼの口の中に鋼鉄とかした腕を捻りこむ。

いきなり腕を噛み碎かれたりはしなかつたが、それでも多少食い込んでいた。

「この・・・離しやがれ!!」

逆の手で頬を殴り抜く。

鉄竜の力をコピーしていたので、皮膚が歯にめり込んで無くなつてもいいぐらいの力であるが、頬に当たつただけで傷一つ付いていなかつた。

こうする間にも歯が腕にめり込む。このままだと本当に腕を噛みちぎられ――。

「火竜の――鉤爪!!」

炎が俺の鼻先を掠つた気がした。

ナツの蹴りによりジヨゼは大きく吹き飛び、赫子を地面に刺して体制を整えたがそこに追い打ちをかけるように呪文が刻まれた3つの柱がジヨゼを取り囲んだ。

「天照二八式——三神柱」

マカロフによる拘束魔法。本来ならば防御魔法として使われた魔法を、咄嗟に拘束するようを使うとはやはり凄い人だ。

「おいジヨニイ！大丈夫なのか!?」

「ああ・・・けど参ったな。予想外だ」

「ジヨニイ・・・あの魔法の正体を知っているのか？」

マカロフが厳しい目で俺を見てきた。聖十魔導師にもなると持つてる知識も俺とは桁違ひなはずなのに喰種の正体を知つてゐる俺に不信感を持つたのだろう。今ここで俺が言うと立場が怪しくなるが、命には変えられない。

「あれは喰種化・・・正確に言うと魔法ではないんですけど、人を食らう生き物となり身體機能を向上させ赫子と呼ばれる尾のようなものを使います」

「ハツ！ 要はいつも通りぶん殴りやいいんだろ？」

ナツは俺が何故喰種化の正体について知つてゐるのかは問わなかつた。
炎を足に纏わせロケットのように吹き飛び我先にと言わんばかりにジヨゼに突撃した。

「ま、あいつもあいつで思うことがあるんだろうけどよ」

グレイは倒れている俺に手を差し伸べ立たせてくれた。

一人で戦うナツを見てほんの少し笑つた。

「お前を信頼してゐるから何も聞かなかつたんじやないのか？」

もつとも信頼されてゐるやつが仲間を犠牲にするようなことはしないだろうけどよ」

信頼されている。

生まれて初めて言られたかもしれない。

何やら不信感を持たれていると考えていた自分が馬鹿らしく思えてきた。
「全く、カツコいいこといいやがつて」

「何言つてる？ 俺はいつでもかつこいいだろ？」

「はいはい、さいですか」

腕をを横に伸ばす。

魔力のつながりを感じた黒の刀が地面から一人で抜け、その刀身を回転させながら

俺の手に収まつた。

「んじや、行くか」

新たな脅威が訪れたと言うのに、何故だろうか。まるで負ける気がしなかつた。

L
v.
3
1
コンビネーション

火竜の咆哮

全てを焼き焦がす竜のブレスが放たれた。

辺り一帯を真っ赤に染めながら突き進む炎は鉄すらも溶かす勢いだ。ジョゼは近づく炎に逃げもせず体を大きく傾けた。

腰から生えていた赫子が体に収まると同時に、肩から生え出したのは大きく、分厚い2本の赫子だつた。鉄であれば簡単には曲がりそうでもない赫子を操作し、自分を取り囲み、竜のブレスが直撃する。石で出来た地面は少し溶けているというのに、赫子には傷もなければ、溶けてもいなかつた。

役目を終えた赫子が戻ると次は腰から4本の赫子が生えた。鞭のようにしなる赫子の表面には棘が付いており、もし当たりでもすれば大きな傷を受けるのは間違いかつた。

「そんな大振りな攻撃当たるわけないだろ！」

急に与えられた力で制御が完璧ではないのか、伸びてくる赫子は大振りで目で見てから回避する時間はあつた。

飛び交う赫子の隙を狙いジョゼに近づく。

前後から迫ってきた赫子をその場で飛んで回避し、足場にして更に近づく。

足の裏から炎を噴出し、加速する。

助走をつけた分に加え、その場で回転することで上乗せされた蹴りがジョゼを襲う。

「甘いわあああ！！！」

足場にしていた赫子から枝別れた木のように、更にもう一本赫子が生えた。

急停止することが出来ず、赫子に突きささるのを覚悟に攻撃しようとした瞬間。

「お邪魔するぜ——！」

口元に笑みを浮かべたジョニイが横から飛び入りしてきた。

黒い刀の刀身には白い旋風のようなものが纏わっていた。ジョニイの刀は神からの贈り物であるが切れ味はないといつても過言ではない。しかしそこに魔力を纏わせる

と名刀と化す。水は長い時間をかけて石を穿つように、風も鉄すらも両断する。

「一九二九年二月」

白い旋風が刃と化し、ナツを突き刺そうとしていた赫子を根元から叩き切つた。一瞬のアイコンタクト。秒にしては0・5秒も立つていなのが伝えたいことは伝わつた。

威力の低下は一切なく、猛炎の一撃がジヨゼの顔に叩き込まれた。

炎が空気の壁を叩き音を立てた。

渾身の一撃を食らつたジョゼは後方、つまりは海に向かつて飛んだがそれを防ぐよう

「貴様らああああ・・・よくも私の顔に二度も・・・!!」
水の壁には蜘蛛の巣状にヒビが入り、ジヨゼはその中心で壁にめり込んでいた。

「ならば顔以外は問題ないということだな！」

氷の壁の背後から、めり込んだジョゼを狙い白銀の槍が投擲された。

巨人が投げたかの如き一投は氷の壁を破壊したが、その前にジョゼは赫子を使い氷の

壁から抜け出していた。

「赫子の弱点は使い過ぎと再生で疲れることだ!!どんどん攻撃を打ち込め!」

ジョニーの声が響いた。

喰種というのは一つ飛び抜けた再生力と赫子を持つているが、それらはRc細胞と呼ばれるもので行われている。ゆえに使うたびにRc細胞が消費されるため、延長戦がいいのだが曲がりなりにも聖十魔導師のジョゼはおそらく短時間で赫子の使い方を習得するだろう。それを踏まえた上での短期決戦。出し惜しみはしない。

「リミットオーバー!
限界突破――！」

体に白い雷光のようなものが奔ると同時に駆け抜けた。空中で赫子を伸ばしていた
ジョゼは肩から醜い羽の赫子を生やした。

赫子には大まかに分けて4つの種類がある。

今ジョゼが出している赫子は羽赫と呼ばれるものであり、Rc細胞を固体ではなくガス状に噴出した様子が羽に似ていることから羽赫と呼ばれている。

それ単体の攻撃力は低いが、それを補うほど速さが特徴だ。ガス状に噴出している
赫子を固体化させて遠距離からの攻撃もすることが出来る。

ジヨゼは広げた羽から無数の赤黒い羽に似た棘を視界を埋め尽くすほどに乱射した。勢いを殺すことになるが刀を盾に変形すれば防ぐことは可能と判断した俺は黒刀に魔力を注ぎ込もうとした。

「武源解放——嵐薙」
〔アガートラム〕

薄く桜色に輝く刀身から嵐が解き放たれた。

迫り来る赫子の針を全てとは言わないうが吹き飛ばし、ジヨゼへの道の障害物をなくした。

「アルさん——!!」

いい仕事をやってくれる弟子だ。心の中で笑いながら刀身の変形のために流していった魔力をそのまま使い、雷を発生させた。

羽赫には防御がない。このまま行けば行ける——！

「なああああああめえええるなああああ！！！」

羽赫とは別に、硬く分厚い赫子が行く手を遮った。赫子の同時使用。戦い始めてから5分も立っていないというのに既に使い方が分かつている。だが止まるわけには行かない。

腕を大きく引きしぼり、刀を一本の矢と化す。雷で貫通力を極限まで高め、最高威力の一撃。石畳であろうがコンクリートであろうが容易に貫くであろう一撃は、金属音を撒き散らし、静止した。

(足りない・・・!)

赫子の隙間から覗くジョゼの顔は歪みに歪みきつてい。更に生えた赫子が俺を削り切ろうとしていたのが見えた。咄嗟に刀を引き抜き、伸びてきた赫子を受け止めた。

「ジョニー！大丈夫か！」

「ああ・・・けど思つてはいた以上に・・・」

ヤバいな。

あまりの成長の早さに笑つてしまつた。

「グ・・・才才才才才才才才!!!!」

4本目の赫子が生えたと同時に、飛び出していた赫子がジヨゼの体に纏わり付いた。赤黒い装甲が身体にまとわりつくも、その状態はどことなく小さな竜に見えた。

とく赫子が並び、先端が尖った尾が生えた。

「赫者・・・」

「赫者? 何だそれは」

エルザが冷静に聞き返してくれたおかげか、俺の中の焦りも少し消えた。

唾を飲み込み、忘れたかのようにしていなかつた呼吸を何度も繰り返して言葉を返す。

「赫子っていうのは一人一つなんだけど、共食いをした喰種が喰らつた喰種の赫子をそのまま身体に取り込むことが出来る。そして取り込みすぎてアイツのように身体に赫子をまとうやつのことを赫者っていうんだけど・・・」

この世界に喰種は存在しない。

赫者になるためには共食いが必要なのだが、共食いをするにもこの世界に喰種はいため出来ない。となるとサクラのいう黒フードが最低でも4つの赫包を埋め込んないことになるが・・・

「本当、やつてくれるわ」

「シャアアアアアアアアア!!!」

赤黒い竜の腕が伸びた。赫子によつてリーチを伸ばした腕は蛇のごとく揺らめきな

がら俺とエルザを追いかけ回す。幾ら身体強化しているとは言えども、赫子に掴まれたら骨が折れるか、最悪引きちぎられる。

「そうはさせん!!」

マカロフの腕が動く。1秒足らずで全ての工程を終了させ竜を象った巨石が、伸びる赫子を地面に陥没させた。武器も魔法も使い手次第で名刀や、超のつく魔法と化す。それを体現しているかのように巨石が更に地面にめり込み、赫子を制止させようとした。

「行くんじや——！」

「よつしやああ！！」

「ナツ!! 乗れ!!」

エルザの鎧が光に包まれた次の瞬間には別の鎧に切り替わっていた。

黄色に塗装された鎧は、腕の部分が肥大化しており、まるで小さな巨人。

巨人の鎧と言われるそれは近距離戦で使われることはあまりなく、投擲専用の鎧といつてもいい。その威力は名の通り巨人が投げたかの如く。エルザの小さな手にナツ片足を乗せる。一瞬の溜めが入り、足元を陥没させながら全力で投擲した。

「滅竜奥義——!!!!」

ナツの体に炎が奔る。

そこに更にナツ自身が回転することにより烈火が渦巻く。ジヨゼは莫大な魔力を感じたのか、瞬時に逃げようとしたが、そこにマカロフからの拘束魔法をかけられ地面に縛り付けられた。直撃はするだろう。だが赫者となつたジヨゼを倒すにはまだ足りない。

ならば

「——付け足せばいいだけの話だ!!!」

**×
真空の翔破。** 手から突風を放つというシンプルな魔法であるがそれを一点集中で前方に放つことで木をへし折る威力となる。そんな風が巨人の投擲で加速されたナツにぶち当たるとどうなるか?

そんなの聞くまでもないが更なる加速を生む。二重の加速はもはや目では捉えれなかつた。臨界点突破時の俺より数段は早い。

「——紅蓮鳳凰剣!!!」

赤よりも紅い炎が一本の剣と化した一撃は、巨大な爆煙を引き起こした。

L V. 32 再確認

「グレイ!! 足場!!」

「おう!!」

爆風の中から飛び出したナツが下にいるグレイに叫ぶ。それにグレイは応え、広げた掌に拳を落とす。

「アイスマスク——」

冷たい風が吹いた。グレイの魔力が氷へと置換し、技が発動された。

「——^{フロア}床」

「——ぶじやあ!!」

ただし地面であるが。確かに足場ではあるがここでいう足場とは決して床的な足場ではない。

「お前・・・!! ぶつ飛ばすぞゴラア!! あいつもろともお前も燃やしてやろうか!?」

「悪いい悪い。水が滑つた」

ニヤニヤと、してやつたりと言つた顔。

そんなグレイの顔はBOMB!!という爆破音とともに焼け、髪はよく見るチリチリアフロと化していた。そしてテンプレと言わんばかりに口からボフンと黒煙を吐き出す。

「悪いな。思わず手と炎が滑つた」

「あはは。そんなこともたまにあるよな」

「アハハハ」

「・・・」

「あつ、悪いい肘が」

「おつと、危ないぞ☆」パシツ

「足がよろけて回し蹴りが！」

「大丈夫か？」パシツ

「・・・」

「「ぶつ殺す!!」「やめなさいよ!!」

ルーシーの白い手が二人の頭に添えられると同時に、地面に向けて振り抜く。その華奢な腕から一体何処からその力が出る?と言わんばかりに地面にめり込み、死体が2人完成した。

「あー・・・ルーシーも染まってきたな」

それを側から見てため息なのか、苦笑いなのかよく分からぬ声を出した。

疲れたのかジョニイもどつと地面に座り込み大きく息を吸つた。

「お疲れさまだな」

「そつちこそ。アリ・・・アリなんたらさんとジョゼを相手にしたんだろう?よくやるよ本

当」

「ギルドを守るためにだつたからな・・・と言つてもそのギルドが倒壊しているが」

エルザの目を向けた先には崩れた木材が散らばり、「F A I R Y T A I L」と刻まれた看板だけが元はギルドであつたと言うことを証明していた。

「大丈夫だろ。いつつも壊れるか壊れないかのところだつたんだからな」「ああ、あの馬鹿たちのせいでな」

「火竜の——！」

「アイスマイク——！」

「ちよつとあんた達イイイイ!!??」

「やめんか!!!」

「ひでぶつ!!」

エルザ、あんたも壊している一員に入つてゐるんだよ。ニッコリと笑みを浮かべながらジョニイはそう思つた。ふと思い出したのはエルザと会つてからの日々。ナツとグレイが喧嘩するたびプロボクサーも思わず惚れ惚れするジャブ、右ストレート、アツパーが炸裂しその度に天井や壁に穴が空いたのだ。エルザの破壊力も凄いが、二人の耐久力も異常なのだ。クルクルと旋回しながら吹き飛び頭から崩れたギルドの木片に突き刺さつた。

「まあ、何はともあれこれで無事完結だな」「よくねえよ！」

「俺たち頭から血吹き出してんじゃねえか！」
「いつものことだろ」

テメエと言つて殴りかかつてきた二人を写輪眼を発動し避ける。魔力もまだ余つて
いるし一人ぐらい躱すのは余裕——

「——な」

写輪眼の力により殴りかかろうとした二人の先、未だ煙が立ち上るその中心地に赤黒い魔力が立ち上つているのを捉えた。気絶や死んだ場合は魔力の流れが一時的に止まる。つまりそれがないと言うことは、まだ起きていると言うことの証明なのだ。そこからの行動は早かつた。刀を呼び出し、万力の力を込めて柄を蹴り穿つ。二人の驚く顔がゆっくりに見えるほど刀は黒線を残し、煙の中を突き進んだ。間に合うか!? そう祈りながらも煙の中から飛び出したのは黒刀。「ナツ、グレイ。構えろ」

「マジかよ・・・あれで倒れねえのか」

「いや、倒れたんだろうな。その後復活しただけで」

喰種の再生力の早さは、人間と比べると何百倍も早く、優れている。赫子と言い再生力も赫包の量に依存するが、ジョゼのように4つ取り込んでいるだけで致命傷の一撃も即座に回復する。もつと赫包がある場合は上半身と下半身が別れても赫子で繋ぎ合わせたり、手足切られても即座に伸びるのだ。念には念を入れて赫包まで抉り取るべきだつたと今更ながら後悔した。だが俺は魔力が残っている。再生したことで力を使つたジョゼならば――

「なあ、あいつデカくなつてないか?」

「まさか……」

写輪眼を使いジョゼを見ると、赫包に似たものと判断されているのか纏つている魔力が大きくなつていた。それと比例して先までは小型のドラゴンのサイズだつたというのに全長3メートルを越すドラゴンになつていた。これも黒フードの男やらの仕業なのだろうか。

「せ、制御が……!!」

身にまとう赫子が体にめり込んでいるのか、ぼとりぼとりと決して少なくはない血液が地面に滴り落ちる。喰種の特徴でもある赤い目は侵食され、目の前にいたのは龍を象つただの肉塊。

「ウ、ウオオオオオオオオ!!」

痛みによる叫びなのか、ただ発狂しているだけなのかはもう分からなかつた。あまりの絶叫か、音が衝撃波となり体の中**でビリビリ**と響く。それでも必死に耐え刀を回収**ジョゼ**の元に走る。

咆哮と共に放たれたのは12本の赫子。出せる量が3倍以上にもなつていて。しか気にしてはならない。元より無茶な戦いをしているのは百も承知。それに魔力的に一番余裕があるのは俺なのだ。

「そこを、どけええええ!!」

写輪眼で軌道を見切り、その隙間を縫つて移動する。しかし早い。1秒ごとに進化している。最初は当たらなかつた赫子も肌を掠め始め、遠回しだつた攻撃も最短距離をキープしている。避けても避けてもまた次の攻撃が迫り来る。

「貫つた——！」

念には念を入れ赫子を全て切り飛ばし、間合いの中に入り確実に一太刀浴びせる。傷を再生している間に、背後から腕をねじ込み赫包を全て抜き取る。そうすれば再生力も赫子も出せない！

だが、その考えは甘いものだとすぐ知らされた。

足元。力チと、まるで地雷を踏み抜いたかのような音が聞こえた。

「は？」

視線を下に落とした時にはもう遅い。

地面を引き裂き、鋭く尖った赫子が樹木のように生えた。写輪眼で動きを見切つても、それを動かす体がなければ回避は不可能。それでも体が捩じ切らんばかりに捻り致命傷は回避したが、細棘のようなものが腕を突き抜けた。

「いってええ・・・！」

貫かれる。サクラに散々実践をイメージしろと言つておきながら何かが突き刺さるというのはこの人生において初めてだつた。貫かれた腕から血が滴り少し暖かい。傷口は熱した鉄を押さえつけられたかのように熱い。が動く。アドレナリンが過剰分泌されているおかげなのだろう。傷を負つたが行ける。赫子を断ち切り、解放された腕で突きを顔めがけて放つ。

「??!!??」

感情は読み取れないが、ニヤリと笑われた気がした。竜の口が開き、開いた口に赤黒い霧が集まり一つの玉と化す。無理矢理押さえつけているのか玉からは赤い稻妻が一

「まず――」

防御をするのにも遅い。

まさか赫子をこの短期間でここまで使いこなすとは思つてもいなかつた。完全に油断していた。死のイメージが脳裏に広がる。走馬灯と呼ばれるものは見えなくただ死を受け入れる準備だけが着々と進む。

「させるかああああああああああ!!!」

顔の横を桜色の刀身が通り竜の頭に突き刺さり、血が溢れる。竜の体が一瞬揺らぐも狙いは定まつてゐる。そこを狙うかのように綺麗なアッパーが頸にぶち当たり、顔の向きを変えた。その瞬間、溜められた一撃が空へと飛んだ。赫子玉と名付けるべきなんか、竜のブレスに似た一撃は、真つ直ぐ空へと飛び爆発。その威力を表すように地が揺れた。

「何で一人で突つ込むんですか」

「いや、お前ら疲れているから俺がいかないと」

「馬鹿ですか!?」

弟子に怒られる。思わず目がパチクリしてしまった。胸ぐらを掴まれ無理矢理立たされた。

「一人で倒せないのに一人で倒そうとして馬鹿ですか!?」

「いや、ちょっと待つ——」

「いいえ、待ちません。謝るまでずっとこうします」

始めて見たサクラの怒り。女というのは怒ると怖いというがこんな感じなのか!とまた別の所でそんなことを考えていた。

「わ、悪かつた悪かつた! 攻めすぎたよ! 申し訳ない!」

「分かればいいんです」

掴まれた服が離される。

サクラの顔を見ると気のせいなのか、少し涙が滲んでいるような気がした。

「死んだら、終わりなんですから」

「ああ……悪かつた」

軽率すぎた。知つてからと意氣揚々に突撃したらこのザマだ。恥ずかしいったらありやしない。

「全くだ。誰が疲れているだつて?」

「俺はまだまだ動けるぜ！」

「お前ら……」

腕も折れて、血も流れているのにそれでも戦う。一人ではないと思うと力が自然に湧いてくるのを感じた。

「指揮はお前に任せろぞジョニイ。アレの正体について一番知っているのはお前だからな」

「了解……」

赫子の竜は成長し続ける。このままでは赫者を通り越して、赤黒の竜となるだろう。制限時間はおよそ10分と言ったところだろう。

「悪いな皆んな。あとちょっとだけ付き合ってくれ」

L V. 33 決着

「10分で倒しきりたい！持てる力全て出しつてくれ！」

「任せろ！」

ナツ、グレイ、エルザ、そしてサクラが走る。俺も後について走ろうとしたが貫かれた腕が今更ながら痛み始めた。刀を持つ手が震えて上手く握れない。利き手ではないが逆に持つかと考えた時、傷口を抑えるように包帯を巻いてくれる影が。

「ルーシイか。ありがとな」

「感謝しなくちやいけないのはこっちの方よ。私にはこれぐらいしか出来ないし」

痛みを与えないように優しく巻いてくれているルーシイの顔は少し寂しそうだった。

戦いたいが逆に邪魔になるという考えが頭にあるのだろう。

「ああ、何だ・・・俺たち仲間だろ？」

だつたらそんなこと気にすんなよ」

自分から仲間と言うのは何だかんだ小つ恥ずかしい気分になつた。これにはルーシもポカンとした顔をしていた。そもそもついさつき言われたことを他人に言うなんて自分でもどうかと思う。

「やめだ、やめ。今の取り消し

「遅いわよ。でもありがとう。元氣でた」

包帯が結び終わる。流れる血も止まり幾分かマシになつた。

「そうだルーシ。頼みがあるんだがいいか?」

「え? 何?」

「アイスメイク——槍!」

氷の槍が8本。蛇のように唸りながらジョゼの元にまつすぐに突き進む。更にその氷の槍の一本ずつにサクラ、エルザ、ナツが乗つていた。

「??？」

ジョゼも同じように背部から8本の赫子を生やし、迫り来る氷の軌道上に沿うように

伸ばした。氷と赫子であれば耐久力だけでみれば明らかに赫子の方が上ではあるが、この攻撃は3人を出来る限りジョゼの元に近づけるためだ。

「ナツ！ 倒すつもりで目くらましを頼む！」

サクラはそれを拡大させろ！ エルザはいつも通りで！」

「私だけ扱いが雑なのが癪だがいいだろう！」

遅れて合流したジョニイの言葉ば響く。

氷の槍と赫子が激突。氷の槍はいとも簡単に破壊される。破壊される前にあらかじめ槍の上に乗っていた3人は飛び上がり回避。

「火竜の咆哮!!」

「武源解放——炎天！」

ナツは肺に溜め込んだ空気の全てを炎として吐き出し、サクラは刀を振るう際に発生した熱と風を組み合わせ巨大な炎の竜巻を作り出す。合体魔法とは行かなかつたが、同じ属性の魔法による相乗効果でより巨大な炎を引き起こしじョゼに叩きつけた。生身の人間であれば骨すらも残らない熱。しかし効かない。炎の竜巻の中心にいると言うのに、身に纏う竜の赫子は少し足りとも減らない。だがこれで終わりではない。

「ハアアアアアアアア!!」

炎の竜巻を突き破り、数えるのも馬鹿らしい剣が真っ直ぐに突き刺さる。天輪の鎧に

よる剣の投擲。本来喰種を倒すために必要な特殊な武器がなければ赫子はおろか、喰種の体に弾かるのに、投擲のスピード、そして剣の鋭さだけで硬い鎧に剣がわ突き刺さる。「エルザ！使わせてもらうぞ！」

走る。ジヨゼに命中しなかつた剣を地面から引き抜く。炎の竜巻は消え、ほんの少しだけ焼けた鎧が露わになる。剣に魔力を通し雷を帯びさせる。赫子に対する手段として今のところ一番有効。限界突破で身体の上限を引き上げ加速。ジヨゼが動く前に剣を突き刺す。すぐに手放しました地面に突き刺さつた剣を引き抜きまた突き刺す。それも地面に剣が落ちている限り繰り返す。

「?????」

「?????だが同じことを許してくれるほど甘くはない。損傷無視で赫子を伸ばす。行く手を遮るように赫子が枝分かれし、選択肢を狭べる。

「だがそれでも進む。きっとやつてくれるはずだ。」

「武源解放——閃」
アガートラム

横薙ぎに一太刀。それが超スピードで行われたことで剣の威力が飛んだ。俺の目前にあつた赫子に留まらず、辺り一帯の赫子を排除した。
「サクラ！手伝ってくれ！」

「はい！」

剣を取る。突き刺す。走る。剣を取る。突き刺す。この工程を刺す場所がなくなるまで繰り返す。サクラも同じように剣を手に取り突き刺す。地面から剣がなくなつたときにはジヨゼの体が見えなくなり、まるでハリネズミのようだつた。だが致命傷にはならない。鋼鉄の鎧を着ているものに突き刺すのは無駄。ならば内部に直接衝撃を与えるしかない。

「グレイ・ナツ！道を作ってくれ！」

「おう！！」

刀を捨て、体勢を低くし地を叩き蹴る。赫子が迫り来るが止まらない。ここで止まることはあるいらの信頼を裏切ることに等しい。今はただ、仲間を信じる。

「合わせろよナツ！！

「それはこっちのセリフだアアアアア！！」

横並びに立つ二人は片腕をそれぞれ前方に向けた。ナツからは燃え盛る炎が体から漏れ出し、グレイは凍てつく冷気を。相反する二つの属性は混ざり合う。青い炎、もしくはブリザードを思い浮かばず魔力が迸る。

合体魔法。確か原作にはなかつたはずだが今この状況ではなんと嬉しいことか。

——炎水竜閃牙！！

言葉が紡がれた途端。身震いする冷たい炎が前方に走る。俺だけを綺麗に避け、突き進む衝撃波は赫子を絶対零度により瞬間凍結され、碎け散る。恐ろしい力だ。まだ物語が始まつて序盤というのに、技の名前が完全に中盤に出てくる光と闇の滅竜魔導師そつくりである。

?????・・・！」

体が凍りついて動かないのか、赫子の出が遅い。この瞬間ならば行ける。

拳を握りこみ、大きく引く。腰の捻り、足の踏み出しすら力に変えて拳を鳩尾めがけて撃ち放つ。だがこれでは内部にまでは届かない。俺の技の一つでもある三頭龍は超スピードで3回拳を撃ち放つため同時に3発飛んでくるように見える。ならば同じ箇所に3回ならば？

かの有名な漫画、なんとか剣心では体内に直接ダメージを与えるフタエノキワミ、アーツ！という技や、また別の漫画になるが美食を追い求めるグルメ漫画では突きを同時に打ち付けて放つことで、威力が奥まで浸透し内部から標的を破壊する釘パンチというものがある。結局の所俺の三頭龍も同じではないのか？

「——三龍牙」

超高速の3連撃が鳩尾に突き刺さる。響く音は一度。だが一度後ろに弾き飛ぶと二回、三回と何かに打たれたかのように後ろへと下がる。龍の口から血液が大量に漏れ出す。やはり今の一撃は効いたみたいだ。

「三・・・四・・・五・・・六！」

効くと分かればもう一発。

さつきの倍。喰種であれど臓器の3つ4つの破壊は免れないだろう。

「——六龍牙!!」

アツパー気味の一撃を6度叩き込む。ドドドドドド!!とマシンガンのような音が鳴り響き空中に持ち上がる。今ので右腕にほとんど力が入らなくなつたがこれで詰めだ。

「頼んだぞルーシイ！」

「任せて！開け、宝瓶宮の扉『アクエリアス』！」

鐘の音が鳴り響くと同時にルーシイの手に持つ金色の鍵が輝く。呼び出すのは現時点でルーシイの持つ鍵の中でもトップクラスの星霊。ギルドのすぐ正面は港になつており、アクエリアスは水辺のみで召喚出来る。呼び出されたアクエリアスはクールな目

つきをしており、空を飛ぶジヨゼを見て目を見開いた。

『気持ち悪いんだよ！とつと天國まで流されろ！』

アクエリアスは口が悪い。しかしその威力は折り紙つき。時に味方ごと流してしまった激流はピンポイントでジヨゼに当たる。流石王道12門の星靈という所だろう。ジヨゼは俺の攻撃がかなり効いていたのか再生の方に力を入れており、赫子は伸びて来なかつた。

「次はグレイ！頼んだぞ！」

「全く、無茶押し付けやがるなお前！」

グレイが作つたのは銀に光り輝く一本の槍。

初めて見る氷魔法であるが、練られている魔力の量からグレイの奥義であることが分かつた。

「俺の全魔力を込めた一撃だ！喰らいやがれ！銀の**バルバロ**方舟！」

槍が銀の光を残し、ジヨゼを飲み込む激流へと突き進む。いつジヨゼが回復するか分からないがこれは決まる。

激流に銀槍の穂先が当たつた直後、激流が光り輝き凍りついた。思わず口が開いてし

まう。まさか原作ではない技でここまで威力を持つとは。

「後は……頼んだぞ……！」

「ああ、任せろ！」

ここで決めなければ全てが終わる。

ポーリュシカにあれほど使うなと言われた臨界点突破を使い、限界を更に超える。

「サクラ！」

「はい！」

サクラの手を掴みジョゼのいる方向に遠慮せず投げる。直線に飛んだサクラは凍りついた激流の上に降り立ち、ジョゼのいる元まで走る。

ピシリと氷にヒビが入る音がした。回復が想定した以上に早い。龍の雄叫びを響かせながら人の口に似た赫子を視界を覆い尽くすほど伸ばしてきた。

「くっ」

「そのまま走れ」

サクラの横を緋色の影が通り抜けて行く。

エルザは天輪の鎧の力をフルに使い剣を浮かせる。10、20と空に浮かぶ剣の数は10区切りで増えていく。計75本。1本ずつそれぞれ赫子にぶつける。75本の個別での操作なんて極限の集中力がなければ出来ないというのにこなしてみせた。エル

ザのおかげで飛来する赫子の数はかなり減った。俺もサクラの元まで追いつき片手一本で持つた刀を前に構えた。

「アガートラム
武源解放——鉄塊斬！」

迫り来る赫子を一刀両断し、ジヨゼの体を袈裟に斬った。鮮血が漏れ出したがまるで時間が戻るかのように傷がふさがる。だけど、もう遅い。俺の、いやこの戦い俺たちの勝ちだ。

「そこだああああああああああああ!!!」

背中に一太刀浴びせると同時に、傷口に手をねじ込み、赤黒い臓器を抉り出した。こ

れこそが赫子の元になる赫包。これがなければもう再生も赫子も伸ばせない。

龍は呻きをあげながら、ようやくその体を地面上に落とした。

L V. ∞ キヤラクター説明の会！

ジョニイ・アルバート

言わずと知れた主人公。身長170cmぐらい。体重65kg。何らかの事情によりFAIRY TAILの世界に転生したのだが、本来消されるはずの記憶が残っている。神様から与えられた能力は3つで、写輪眼（三つ巴ではない）、頑丈な体（だけど骨とか折れたりする）、神様から貰った刀（切れ味〇）である。大ハズレもいいところである。更に追い討ちをかけるように生まれ持った魔力量が少なかつたためナツやグレイのように豪快な戦い方が出来ず、チビチビ戦うことになり残念がっている。名前にジョニイとついていることに希望をかけて、某奇妙な冒険の主人公のように爪を飛ばそうとしたが無意味だった。これではまずいと思つたジョニイは近くの道場に通い始めたが超スバルタ教育だった。何度も逃げ出そうとしたがその度、何処からともなく現れる師

に首根っこを掴まれ回収される。だがそのスバルタ教育を生き抜いただけあつて、魔力なしの肉弾戦であればナツとガジルを同時に相手にしても勝てるぐらい強い。

ステータス（？）

A～Eの5段階評価

筋力：B

敏捷：A

魔力：C

耐久：C

テクニック：A

使用した技

無流：型、技がない流派としてはかなり異端。技を模範するのでは体に合わない。故に自らにあつた技を生み出せという師の謎の言葉に困惑しながらも無事流派を収めた。

限界突破：例えるならナルトの八門遁甲の第三門、またはヒロアカの20%フルカウル
リミット・オーバー

状態。使用後に筋肉痛になつてしまふが身体能力を向上させる。

臨界点突破：限界突破の更に上。八門の第五門、40%フルカウル状態。使うと筋肉が

断裂することもある。がその分身体向上は飛躍する。

刀身変化：刀を変化させる魔法。槍や、盾、籠手など。これを使うことによりリーチの長さも変更でき、相手は何がくるかわからない状態に陥るので愛用している。

三頭龍：超高速3連撃。早すぎて3つの拳が同時に迫つてくるように見えるぞ！ただしこの技を使うときは限界突破を使うことが前提。あまり多用はしてはいけない。

三龍牙：例えるならフタエノキワミ、アーツ！、および釘パンチ。三頭龍が3箇所の弱点部位を殴る攻撃であるならば、三龍牙は一箇所に3発叩き込むことで内部に威力を浸透させる。こちらも多用はしてはいけない。

サクラ

ジョニイがクエストに行つた際に弟子入りした少女。村全体での洗脳により村人が盗賊団のことを村長と思つていたにもかかわらず、一人だけ洗脳にかかることがなかつた。村での横暴が激しくなり、飯すらもまともにない状態だつたため、盗賊団の基地に侵入し、食料品を強奪していくこともあり剣や体の使い方は上手い。捨て子だつたらしいが、正確な過去は明らかになつていない。現在はジョニイの元で修練に励んでいる。覚える早さに思わずジョニイも「お前は吸水スポンジか？」と言わせたほど。使用して

いる武器は刀。魂を汲み取る鉱石で作られたこの刀は持ち主の心の強度で、硬さや鋭さが増す。刀身はサクラを表したかのように薄い桜色に染まっている。

筋力：D

敏捷：B

魔力：A

耐久：D

テクニック：C

使用した技

武源解放アガートラム・・・使用する際には腕に紋章が浮かび上がる。魔法に一番詳しそうなマカロフに聞いても分からなかつたほど謎に包まれている。これを使うと身体能力が向上し、使えないはずの技が使える。

バトル・オブ・フェアリー・テイル 編

L V. 34 小休憩

「このつ——大馬鹿者があ!!」

唯一無傷だつた頭に、拳が叩き落される。拳骨。頭の上から足先まで痺れた腰の入つた一撃だ。視界がグラグラして目眩がする。きっと側から見たら俺の頭の上にはお星様がグルグルと回つているのだろう。そんな俺を無視し、拳骨をかましてくれたボーリュシカはマシンガンのように言葉を放つ。

「やるなやるなど言つたことをすぐにやるとは……本当に必要だつたのは頭の治療だつたのかい？」

「のおおおおお！アイアンクローはダメええええ！」

ミシミシと音を立てて頭が圧縮される。齡80を超えてそうなのに一体どこからそんな力が出てるのかと思わずほど頭に指がめり込む。臨界点突破を使つた影響で筋肉

が少し断裂してしまい、動かない手では抵抗出来ず、体をじたばたさせるしかない。そんな俺を見かねたのか、マカロフが冷や汗を垂らし、引きつった笑みを浮かべて俺とポーリュシカの間に入った。

「ま、まあそこまでしてくれんかのお？」

「これは不可抗力というやつで——」

「な　に　か　い　つ　た　か　い　?」

「ナニモ」

すっと視線を外したマカロフ。その際、俺の方に一瞬だけ目を向け「ごめんね☆ワシ何もできないやテヘペロ☆」みたいな顔をしてた。俺の救いの願いは届かず、マカロフはブリキのロボットのようなぎごちない動きで医務室を後にした。残されたのは俺とポーリュシカのみ。そして俺はガジルとやつた時ほどではないがそれでも怪我は怪我である。今日やつと帰つて落ち着けると思つたら、ギルドに連れて来させられて治療させられるとは、ポーリュシカも激おこ案件だろう。

「さて、これがなんだか分かるかい?」

ポーリュシカの右手に収まっているのは注射。そう、ごく一般的な注射なのだが中に

入っている液体が青色ということからヤバ そうな匂いが漂つて来た。

「う、打てば体力全回復とか？」

「惜しいね。確かに体力は回復するが時間がかかる」

モン○ンの回復薬や、ド○クエのベホマみたいに瞬間に回復するものではない。まあ時間をかけたら治るものだろう。ならそれでよくね？ そう思つた俺に絶望が降りかかる。

「アンタの魔力を再生力に回す。その間魔力は奪われるし、激しい筋肉痛にもなるけど……アンタには丁度いいね」

ままままま待つて！せめてそれ以が——」

3日後。なんとか激痛を乗り越え完全復活をなした俺。ポーリュシカに「次同じよう

なことをしたらもつとキツイのぶち込んでやるぜっ！」と言われた時は思わず鳥肌が立つてしまつた。ベッド上で激しく悶えていた間にナツ達は旅行に行つたらしい。まだギルドも完全復興していないというのに羨ましいやつらめ。まあ樂園の塔編は俺が行かなくても何とかなるだろう。多分転生者出てきてもエルザがボコつてくれるだろうしな！

とまあ俺はギルド建築の休憩中、いつものサクラとの修練場である広場に来ていた。目の前にあるのは大木とは言わないが、それでも折るのは難しい木である。

木との距離を1メートルほどあけ呼吸を整える。拳を引き余分な力を抜く。筋肉が弛緩し、一気に跳躍。ゴムのように弾け飛び1メートルの間をつめ、拳を抜き放つ。木に拳が当たり音が響く。それを一撃にみせかけて三連撃。威力が内部に浸透し、木の幹を破壊していく。見た目は何も変わつてないというのに、木はミシミシと音を立てた。

「折るまでは・・・まだ無理か」

人差し指で軽く木を押す。するとポツキーのように簡単に折れた。
ジヨゼとの戦いで生み出した三龍牙を使ってみたがまだまだだ。ここからのストー

リーは難易度があがる。強化なしで三・・・いや、四龍牙までは息をするようにしたいものだ。

しかしボーリュシカのあの薬が効いたのか、以前までは魔力なしでは二頭龍が限界だったのに、復活したことで筋肉の量でも増えたのだろうか今では三頭龍まで行ける。つまりもう一度結構な怪我をしてボーリュシカにあの薬を打つてもらつたら？？？やめよう。嫌な予感しかしない。

「ま、しばらくは自己鍛錬だな。ここ最近やつてなかつたしな」

あの地獄の修行までとは言わないが、いい加減自分から学ぶことも大事だろう。樂園の塔編が終わるまで時間もあるし、少しぐらいは成長出来るであろう。

それから1週間ほど経つた。

いい加減樂園の塔終わるやろwとか思っていたら向こうは向こうで中々まつたりしているらしい！くそ、羨ましい！俺も連れて行け！リゾートだけ（樂園の塔へは行かない）！

と脳内で叫びながら復活したサクラとの修行である。赫者状態のジョゼと戦つている際に気づいたがサクラの動きがよくなっている。正攻法をしかけることもあればト

リツキーな動きも見せる。対処は難しいがまだ届かない。

「そこ」

「つつ——!?」

サクラの踏み込みに合わせて、足を払う。

足払い。極めれば相手を空中で回転させて落とすことが出来る奥が深い技だ。パアンと足を一閃。サクラの体が前によろけり、近づいた顔に渾身のデコピンをくらわせる。いつもならこれで終わり。なのだがなんと地に着いていた片足に万力の力を込めて飛び上がった。

「武源解放——閃！」
アガートラム

桜色の刀身から、白く光る閃光が放たれた。予想外の一撃であつたが放つ前に刀身をパリイし、見当違いの方に撃たせた。空中で動きが取れないと分かつているならあとは楽なものだ。手のひらに魔力を集め、それを放散する。属性は風。暴風が吹き荒れサクラの体を弾き飛ばした。

「お前俺を殺す気か!?」

「え？でも前に『殺す氣でかかつてこい（キリツ）』って言つてたじやないですか」「限度つてもんがあるだろ……あとキリツはやめろ」

相変わらずサクラの飲み込みの早さは異常である。吸水スポンジかな、と本氣でそう

思つてしまふことが度々ある。抜かれるのも時間の問題になりそうだ。その時はこいつが俺のことを踏んづけていると考えたら……なんだろう。凄く嫌。

「ところでアルさん」

「何だ？」

「一つ相談があるんですけど、ミスコンに出ようと思うんですけどどんな服がいいんですかね……？」

「ミスコンつてことは……ギルドのやつに出るのか」

「出るのは恥ずかしいんですけど、家賃の問題が……」

「なるほどな」

確かに先日ルーシイと話した時も同じようなことを言つてた気がする。俺は極悪人二人の賞金で一先ずは落ち着いて暮らせるが、サクラはそうではない。だから優勝したら賞金が貰えるミスコンというわけだ。しかし、俺の記憶通りだとエルザがエロい服を着て優勝してたような気がする……あれ、エロい服だけ？まあそこら辺はいいとしよう。

「我ながら酷なことを言うが、やっぱ露出度とか高い方がいいんじゃないかな？」

「うつ……な、納得は出来ますけど」

少し頬を赤く染め自分の腕を体に押し当て、一方後ろに引き下がる。なんだろう

な・・・こういう漫画みたいな展開前世で見たことがなかつたから・・・萌える。

「ルーシイは確かチアガールだつた気がするから最低限そこぐらいまではな」

「ち、チアガール・・・」

「むむむ、と頭を悩ますサクラ。仕方がない。ここは師匠としてビシツと言つてやる
か。」

「サクラ、絶対に優勝できる服装がある」

「!? 何ですかそれは！」

「用意するのもただ一つ！だが、シンプルが故強い！」

「おお！ それは一体何なんですか!?」

大きく息を吸い、目をカツ！と見開く。

お腹の底から声を出し、耳を通り越え脳内に直接響くように俺は言うのだった。

「裸エプロ――！」

次の瞬間、俺の意識は途切れていた。

L V. 35 サボリ魔

「聞いてくださいよミラさん！サクラが『ミスコンで出る服何がいいですか？』って聞い
てきたから裸エプロンって言つたら俺の顔面殴つてきたんすよ！？酷くないっすか！？」

「当たり前だバカ」

カウンターにてコーラもどきが入つたジョッキを机に叩きつけて顔を伏せる。しか
し帰つてきた声は隣にいたゴツい男。エルフマンである。こいつはもしかして裸エプ
ロンのよさが分からぬのか・・・？

「俺を頭がおかしいやつを見るような顔で見るな。お前がおかしいんだ」

「何・・・だと」

俺の頭がおかしい？いや、そんなことはない。裸エプロンは最強なんだ！

「そういうことじゃない」

「くそお、ミラさんはどう思いますか？」

「そういうのはよくないわ」

「何故だ!?」

「やはりポーリュシカさんに頭の治療を頼んでおくべきだつたな」

「俺が間違つて いるのか?」

「裸エプロンではダメだというのか! ならもう全 r——

「どうか・・・前より明らかにギルドがデカくなつてません?」

「完成するまで内緒にしようと思つたんだけど・・・実はギルドの評判が良くなつてね、壊れた分のお金と『ぶつ壊れたのならいつそのこともつと豪華なやつ作ろうぜ!』ってことで改装料を凄く上乗せして・・・」

「タワー○ブトライみたいなデカさつすね」

修理開始して1週間とちよつとだというのにギルドの7割が完成しているとか建築会社はどれだけブラック企業なんだ。

「へえ、初めて知つた」

「どうかエルフマン。お前毎日ギルドいるのに何で気づかないんだよ?」

「毎日来ているからな。変化が分からなかつた」

「いや、明らかに大きいよね?」

コーラを一口飲む。このギルドのコーラは炭酸が効いてるので喉を越えてまで

シユワシユワと音を立てるため、一口飲むのにも苦労する。

「まあ話を戻すが結局サクラになんて伝えたらよかつたんだ?」

「少なくとも裸エプロンとかちょっと・・・エッチなものはやめた方がいいと思うわ」

「なるほど」

となると・・・

「――全裸か」

「お前は何を聞いていたんだ?」

次の話であるバトルオブフェアリーテイル編はぶつちやけた話俺は何もしなくていい。この話はS級魔道士ラクサスがギルド改変のためにケンカを始めるのだが、なんやかんやラクサスは今のギルドも悪くないと思つてているので特に被害はない。上空に雷爆弾が設置されるがささいな問題だろう。

しかしこの話、ラクサス親衛隊ともいえる雷神衆に見つかり次第ボコられるため、なんとしても見つからないようにしたい。というわけで見つからない場所十その間時間

を潰せるものを用意したいわけだ。

「とりあえず・・・本でも買つていくか」

そして来てしまつた収穫祭。色々キング・クリムゾン現象のように時間が飛んだが特に書くことはないから以下略ということだ。ミスコンではサクラが侍コスプレをしていた。なんか新撰組の隊長（女 v e r）でC V が悠木「自主規制」さんで宝具が一発の突きに三発をぶちこめるような気がする。俺が昨日サクラの家にわざわざ訪ねて裸サラシを教えてやつたというのに・・・全く、危うく首の骨が720度回転するところだったぜ。

とまあ原作通りに進んでいるとエバーグリーン登場でミスコンに出ていた全員が石化。そして始まるバトルオブフェアリー・テイル。味方同士の争いもある中一人駆け抜ける俺。駆け抜けた先は修練場でもあるいつもの公園である。木の下にサッと入り、先日図書館でなんとか覚えた結界魔法なるものを使いドーム状に俺を囲む。そして予め用意しておいた本を地中から取り出し寝転がる。

元璧だ

今の俺の顔は某新世界の神になろうとした男の計画通りという顔なのだろう。我ながら完璧すぎる。この話は1日で終わるので本を読むなり寝るなりしたらそれで終わりなのだ！

わーっはつはつはつ！

「何ででれねえんだよお・・・！」

「俺にもやらせろお・・・！」

その頃ギルドの入り口では2人の滅竜魔道士が見えない障壁により、顔を歪ませていた。バトルオブフェアリー・テイルのルールの一つ。年齢が85歳以上はギルドから出れないというルールが課せられているのだが、どう見ても10代半ばに見えるナツとガジルはなぜか分からぬがそのルールにより出れなかつた。

『おいおい！まだ開始して1時間も経つてないのにもう半分を切つたぞ！ジジイの信じてた仲間の絆とやらは脆いもんだなア！』

「ラクサス・・・！」

ギルド内に電気が走り、一つの大画面を生み出した。その中には嘲笑うラクサスの

姿。現状何も出来ないマカロフはただ拳を握り、睨みつけるのが精一杯である。

「まだだ！まだグレイやルーシイ・・・それにジョニイだつて残つとるわ！」

『ジョニイ？ああ、あのアホヅラの事か。それだつたら残念だつたな』

ザザザと画面が砂嵐に一瞬包まる。

直後画面が切り替わり映し出したのは気が生い茂る公園。

画面が一本の木に近づき、搔き分けて映し出したのは――

「Z Z Z Z Z Z Z Z」

爆睡してゐるジョニイ・アルバート本人だつた。これにはナツやマカロフ、そしてガジルも驚きを隠せなかつた。マカロフはあまりのショックで自分の腰が異様な音を立てたのにも気がつかなかつた。

「何やつてるんだこいつは!?」

「いや、もしかしたら眠らされてゐるだけかもしけねえぞ！」

『残念ながら俺たちの仕業じやない。こいつは自分の意思で眠りにつきやがつた。まあそれじゃゲームに参加出来ないつてことで不平等だよなア？』ということでこの馬鹿の

元に一人派遣してやつた』

「ら、ラクサス・・・まさか』

『そう、ジジイの思つてゐる通りだらうな。せいぜい期待しどきな』

ブツン！と音を立てて画面は消え去つた。マカロフは顔を青ざめ、マズイと口にした。

「誰を派遣するんだ？」

「・・・ナツ達には黙つとつたんだが・・・この際仕方がない。実はな、妖精の尻尾のS級魔道士は3人ではなく4人いるんじや」

「・・・ハア!?」

L v. 36 竜に愛された少女

それは突然のことだった。

騒がしいギルドに久しくラクサスが訪れ、真っ直ぐにマカロフの元へと歩いてきたのだ。
そしてラクサスの傍にはブカブカのフードつきのコートを被つた小さな人影。ラクサスの身長の高さと相まって身長の小ささが強調されていた。
「こいつをS級にしてくれ」

開口一番ラクサスはそんなことを口にした。

その時ギルド内は騒がしく、また看板娘であるミラもいなかつたので、ラクサスの言葉はマカロフ以外には誰も聞こえなかつた。

しかしギルドにも入っていない誰とも分からぬ子をいきなりS級にしろと言われても納得出来るわけがない。

それにS級魔道士になるには正当な手順を踏む必要がある。だがしかし、フードの中の顔をちらりと確認しその考えを変えた。

——ワシに一発でも攻撃を当てたら考へんでもない

ラクサスの口角が上がった。ここじゃ危ないと外に出て被害が大きくなることを見越し少し離れた、周りに誰もいない場所を選んだ。

審判員としてラクサスが開始を宣言。

途端、爆発爆音雷撃音速etc etc…聖十魔導師のマカロフも油断していたこともあつたが、それでも尚凄まじい魔法。

攻撃を食らってしまい、約束は守れよと言うことでS級魔道士が非公式に誕生したのだ――

「ちょっと待てよ。なんで顔見てやろうと思つたんだ」「・・・からじや」

「ん？」

「女の子だつたからじや」

「・・・」「

「ええい！そんな顔でワシを見るな！孫が女子を連れてきたんじやぞ!? つい甘やかしてしまうのは当然じや!!」

「あ・・・まあいい。それでその女の力はどの程度なんだ？あんたに攻撃入れれるって時点でかなりの力を持つているようと思えるが・・・」

「ワシも正確なことは分かつてはおらんのがな・・・本人曰く全ての竜の原点にして頂点」といつとつたわ

「待てよ。まさかそいつ・・・」

「そうじや。竜の原点の力を持つ——」

——祖竜の滅竜魔道士じや

「 Z Z Z Z Z z z z z m . . .」

ザツザツ、と草を踏む音が聞こえた。

睡眠してまだ時間が経っていないこともあつてかすぐ目が覚めた。ぼやける視界で上体を起こし、一つあくびをする。冴えない頭で左右を見渡すと、隣にちょこんと座り込む小さな人影。白に少し紫がかつた髪の毛をツインテールにまとめ、青い瞳を持つ小さな女の子は手に持つたりんご飴らしきものを俺が隣にいるにも関わらずペロペロと舐めていた。

と冷静に頭で判断するものも・・・

――この子誰よ？

目が覚めて隣を見たら白髪幼女が座っていた件について、な○うの小説でも見たことねえなおい。とりあえず話さないことには何も始まらない。

「えつと、誰？」

「・・・カンナ」

反応が少し遅れていたが名前はカンナと言うらしい。その顔はひたすら真つ直ぐを見て、りんご飴を変わらず機械のように舐め続けている。

「そ、そうか。それでカンナ……ちゃん（？）は何でここに？迷子かな？」

我ながら口リコンストーカーみたいな話し方になつてている気がするが今俺の胸中はパニック状態なのだ。仕方がないだろう。

「……仕事」

「仕事？」

はて、仕事とは一体？

こんな何もない公園で出来る仕事なんて何もないはずだ。少なくとも俺はそう思う。「へえ、誰に頼まれたの？」

「ラクサス」

「ふーんラクサスねえ……えつ、ラクサス？」

「うん」

ラクサスと言うとウチのギルドのS級魔道士の気がするんですけど……いや、もしかしたら同じ名前の人かもしれないという可能性に俺はかける。

「ラクサスってあの雷神衆のボス？」

「うん」

「雷使う人？」

「うん」

「・・・」

もしかしたら・・・いや、もしかしたらの話だけども・・・

「し、仕事の内容つて『ジョニー・アルバートをぶちのめしてこい』とかじゃないよ・・・
ね？」

「その通りだよ」

バリ！とりんご飴の半分以上が砕けた。

硬い飴、その厚さ1cm程あると言うのに噛み碎いてみせた。余談だが俺がやれば歯
が折れる自信がある。一口二口と噛み碎いてあつという間にりんご飴は支えの棒を残
してカンナの小さな胃へと吸い込まれた。

俺は少し離れたところで立ち、全身の力を抜き何が起きてもいいように写輪眼を発動
させた。

「それじゃあ・・・始めるよ？」

——来るツ!!

カンナが拳を組み合わせ空に高く掲げた。白い小さな手が手首から指先かけて変化し始める。火山岩のように黒くゴツゴツとした石そのもの。写輪眼で流れる魔力量を見ると、掲げた手に莫大な魔力が流れていた。

「——爆槌竜の大地崩壊」

掲げられた手が地面に叩きつけられる。

途端視界が揺らいだ。いや違う! 視界が揺れているのではなく大地そのものが揺れている! この世界に生きてきてまだ地震というものに出会つたことがなかつたがまさかこんな所で人工的な地震を体験できるとは思つてもいなかつた。

「う、おお・・・!」

大地が捲り上がる。カンナを中心に蜘蛛の巣状に地面にヒビが入り、衝撃で大小様々な石が宙を舞い上がる。俺の立つ足場も宙に浮き上がりまるで無重力を体験しているようだつた。

「くそつ、何でこんなことになつたんだ!」

爆槌竜つてことは滅竜魔道士ということになるがバトルオブフェアリー・テイル編に出てくる滅竜魔道士はナツ、ガジル、そして今は隠しているがラクサスだけだ。となるとこいつは何者だ? という話になるが何となく察しがつく。

「また誰かが変えやがったな・・・!」

おそらくだがファンタムの時に邪魔をしてきたという黒フードの男の仕業だろう。しかしバトルオブフェアリー・テイル編では死人は出ない。ここで改変しても無駄なのではないだろうか?

いや、考えるのは後だ。今はカンナちゃんを撃退しなければならない。

「・・・ツ!」

未だ浮かび上がる岩に乗りながら辺りを見渡す。この一瞬の思考の間に元いた場所から離れていた。写輪眼が一つの影を捉える。

黒い影が蛇のように伸びる。岩影の裏を回りながら接近してくるカンナの手から肘にかけて黒に染まり鋭い爪を輝かせた。

「——迅竜の銳爪」

写輪眼で見抜いていたこともありジョニーの対応は早かつた。無刀の状態で手を腰に当て、もう片方の手でない鞘を抑えた。

呼吸を吐き切り、丹田に力を込める。

居合。俺は生前居合や空手といった武術の経験はなく、実際武術を始めたのはこの世界に来てからだ。だがやつたことはないだけで知識はある。前世で読んだ漫画が思いもよらぬ所で活躍するものだと内心笑った。

(腰を切る、腰で抜く――！)

かつて見た漫画の言葉を繰り返すこと10年。かの剣豪である宮本武蔵には遠く及ばないものも、イメージを反復させた。

腰に捻りを与え、ない刀をない鞘で加速させた。

「うおおおおお！」

換装。空間から取り出された刀は実態化しながらジョニーの手に收まり刀身を加速

させる。影のごとき黒爪と、神の打つた黒の刀がぶつかり合い甲高い音を響かせた。

(クソつ・・・重い!)

刀身を上に振り上げる。黒爪はジョニイのすぐ横を通り服をかすめていった。肉体には当たらなかつた。しかし黒爪の早さが風の刃を発生させ皮膚を切り裂いていた。「爆槌竜・・・それに迅竜。記憶が曖昧だから分からぬがモンハン関連の力だな」「・・・モンハン?」

「記憶はないんだな」

ララバイ編に出てきた銃を持つ男は俺と同じく転生者であり特典をもらつていた。おそらくカンナちゃんも同じなのだろう。特典はモンハンの竜の力。全て覚えているわけではないがモンハンに出てきた竜の種類は50を超えていたような気がする。「よく分からぬけど・・・結構強いんだね」

「そりやどうも」

重力に逆らい浮き上がつた岩石が、ようやく落下した。黒刀を前方に構え、換装で小道具が入つたポーチを腰に設置する。

ナツやガジルと違い複数の力を持つとなれば何を使うか分からぬ。かなり不利な

戦いになる。というかそもそも何で俺が狙われたのかが分からぬ。

「——モード 雷狼竜」

電気が走る。雷狼竜ジンオウガ——森に生息する雷光虫の電気を蓄えることにより、超帶電状態という分かりやすく言えば超サイヤ人みたいになる。この世界には雷光虫はいないが魔力は空气中に流れている。それら全てを雷へと変換し体内に蓄積する。他の滅竜魔道士が知れば軽く泣いてしまいそうだ。

「これは……参ったな」

思わず片手で頭を抑えてしまう。

先程もやつたように写輪眼は魔力の流れを目に捉えることができる。だが時に真実を見るということは残酷というものを見いだされた。

緑の電子を纏い、真っ直ぐに伸びた絹のごとき白髪は所々に跳ね、狼そのもの。

体は小さいが相手にするのは本物の竜と言わんばかりに体からだだ漏れの魔力はかつてゲームで見たジンオウガそのものの形となっていた。漏れ出した電子が地面を叩き土を焦がす。

どうやつたら逃げることが出来るのだろうか?と必死に考えたがどうやっても逃げ

出せそうじゃなさそうという結論に至った。

「仕方がねえ……こうなつたら出来る限りコピーさせてもらつてからくたばるぜ！」

「そう……？」

「それじや——」

カンナは腕を前方に伸ばし、人差し指、中指、薬指の三指をクイツと軽く曲げた。ただそれだけ。それだけなのに緑の電気が地面を引き裂きながら3つ迫り来る。

「うおおおおお!!??」

とつさに反応出来たのは幸運だつたと言えよう。刀身を即座に変形させ薄く縦に伸ばして壁にする。ジンオウガの雷撃ともなれば剣が二、三本あつても足りないが俺の刀はそこら辺の刀とは一味違う。雷撃の爪であろうと防ぐ。緑の雷撃が盾に衝突し煙を上げた。が、刃は折れず。すぐさま刀に戻し手に収めた。

「——雷光弾」

漏れ出した緑の電子から、雷光の槍が疾る。空を裂きながら迫り来る雷光の数は10。

倒しにかかるどころか殺しにかかつて来ている。直撃でもすれば体に風穴が開くだろう。

そんなのもちろんお断りだ。背にあるポーチから一つ十字型の飛び道具、手裏剣を取り出し魔力を込め投げつける。

「弾けろ——！」

回転しながら飛ぶ手裏剣が分裂し始め、極小の針となつた。サクラの刀を作りに行つた際に買っておいたものが役に立つた。一つ一つの針は雷撃を打ち消すには足りないが魔力を込めてある。一つがダメなら数で消すだけだ。宙で激しく雷撃と魔力がぶつかり合う音が響く。10の雷槍を消した時には針は全て溶かされていた。

「雷狼竜の——」

攻撃の際に移動していたのか背後に回られていた。緑の電子を纏つた一撃は早く重い。生身で受けたら軽く吹き飛ばされ木をへし折るだろう。だが、見せてもらつたおかげで何とか出来そうだ。

「モード 雷狼竜——！」

写輪眼の能力として技のコピーがある。本来であれば特別な力、例えば滅竜魔法や失

われた魔法などは再現できなはずなのだがこの世界ではそれが出来る。ただ魔力の消費が半端じやない。体に電気が走るのが分かる。それに伴い体の動きが良くなるのが身に染みてわかる。本来ならば間に合わない防御もこれなら――！

「――雷印」
「――雷月ツ!!」

L v. 37 力の差

前世でモンハンをやっていた甲斐あつてか、寸分違わず雷狼竜のコピーが出来た。超スピードの回し蹴りと、爪を立てた一撃がぶつかり合い雷光が弾ける。

「力強つ……！」

一際大きく雷光が弾け俺は大きく後ろに吹き飛ばされた。カンナちゃんは雷神衆の一人なのだろうが単純な力だけを見てもラクサス以上あるのではないかと疑つてしまふ。何でラクサスの後ろについているのが謎であるが、もしかすると前世でラクサス好きであり、記憶は失つたものも魂は覚えているみたいなあれなのだろうか？

「——雷包弾」

考えるのは後だ。思考を切り離し即座に戦闘の思考へと戻る。体から電子を切り離

し空中に待機させ、カンナちゃんを囮う。

腕を交差する動きに合わせ、待機させていた電子が全て槍となりカンナちゃんを貫こうとしたが――

「無理だよな・・・」

効かず。偽物が本物に勝てるわけがない。

土煙すらあげることなく全ての槍はカンナちゃんに吸収された。コピ―が通用しない以上勝ち目がない。土下座でもしたら許してくれないだろうか?と本気で考えてしまう。

「だつたら――!」

限界突破を発動させ地面を滑走する。10メートルの間合いを一気に詰め足に万力の力を込め静止し、止まつた時に生まれた威力をそのまま拳に乗せる。三竜牙――相手が何だろうが内部にまで威力を浸透させるこの技ならば勝機があるかもしねれない。

空気の壁を叩き拳を叩き込む。が、そこにあつたのは柔らかい皮膚の感触ではなく、岩。

「鎧竜——グラビモス」

一度二度三度と衝撃が伝わるが、全て岩石に受け止められた。一応衝撃は伝わつていいのかカンナちゃんの纏つた岩石には一部ヒビが入つた。

「くそおおおお!!!」

圧倒的な差。もしかするとエルザと戦つた時以上に絶望を感じている。水に移つた月を切れと言われているような感覚に陥る。

逆の手で同じ一撃を放つ。結果は同じ。ただ腕が痺れただけだ。

「・・・終わらせるね」

情けなのか、そう言つたカンナちゃんは鎧竜グラビモスの外殻を外し、黒い鱗粉を撒き散らした。ゼロ距離だつたことから逃げるのに一瞬遅れ、ほんの少しだけ鱗粉を体内に取り込んでしまつた。

「うっ、おお・・・！」

視界が歪む。毒ではないのか麻痺や激痛は起きないが体の感覚、というよりかは魔力の操作が出来ない。

歪む視界でこちらを見るカンナちゃんは無関心を表したかのような目。ただ顔はそうであつて中身はどう思つているかは分からぬ。ただ、その無関心な目が怒りを生ん

だ。

「そんな強い能力持つてたらそりゃ強いよなあ・・・！」

ただの言い訳に過ぎないとは分かつている。だがはつきりと言つてしまえば幼女にこてんぱんにされているという事実が男としてのプライドを傷つけられた。女がなんだ？ 絶対一発はぶち込んでやる。

「こつからが本番だ・・・！」

鱗粉でかかる状態異常といえば覚えている限りゴアマガラというモンスターだ。ヤケになつていたのか幻術に引っかかつたわけでもないのに写輪眼を発動させ、自分にかかる幻術を解いた。

「あれ？」

暗い。一面真っ暗の世界。そこに俺だけが立つてゐる。つい一秒前までカンナちゃんにフルボツコにされていたはず。気絶した覚えでもないし一体ここは――

『――よう』

俺を呼びかける声。だが体が後ろを向こうにも全身をセメントで固められたかのように一ミリたりとも動かない。背後から近づく何かは暗い世界にやけに響く靴音を鳴らしながら俺の近くへと移動した。

『まさかこんな解き方をするとはな・・・もうちょっと時間がかかるかと思つたが、思わぬ拾い物だな』

「お前は・・・誰だ？」

何かヤバイ。そう脳が、体が警鐘を響かせるが動けない。体の宿主である俺ではなく、今動いているこいつが宿主だと言われているような気がした。俺の背後にピタリと立ち、笑みを含んだ声でゆっくりと言う。

『俺はお前だ。お前が辛くて辛くて蓋をしたもう一人の自分だ』

ピキリ、脳にヒビが入る。言葉にすればそなだけで実際にヒビが入ったわけではないが何かが決壊しようとしていた。

『お前の恨みや怨恨、殺意、憎悪その他諸々だけが集まつた結果が俺だ』

「う・・・おお」

頭が痛い。ヒビが入り続ける。

『さあ選手交代だ。溜まつた18年分——』

「——思う存分発散させてもらう」

俺の横を通り抜けた瞬間、俺の意識は何処かへと消えた。

鱗粉の中立ち続けるジョニイは5秒程その動きを停止させた。ゴアマガラの鱗粉は命を奪うものではなく魔力の操作が一時的に出来なくなり目眩や麻痺を発生させるものだ。しかしその中に気絶は含まれていない。だからこそカンナは警戒態勢を解かず次なる手をすでに用意していた。緊張感が漂う中、ふとジョニイの指先がピクリと動いた。それを視認した直後、カンナは魔力を稼働させ、最速の雷の槍を放つた。

「——ハハ」

赤く光る目が、更に紅く。

手を横に薙ぎ払う。雷の槍と何の魔力も帶びていない手刀がぶつかり合う。あまりに無謀にも見える一撃。電流が体内を流れるのが目に見える。しかし――

「・・・ツ!」

雷槍が霧散する。正しく言えば霧散したわけではない。消えたのだ。
存在を殺された。

「いいねえ、馴染む」

口角を上げてケタケタと笑うジョニイは鱗粉を未だ吸い続けているというのに、倒れる気配はなかった。ゆっくりと顔を上げ、こちらを見る目は先程と異なる。東洋に伝わる万華鏡の如き美しく、妖しい。

内に宿る竜達が唸りをあげるのを感じた。

「あなたは・・・誰?」

「俺? おいおい、さつきまでフルボッコにしていた相手を忘れたのか?」

肌を刺す魔力が痛い。つい先ほどまでのジョニイの魔力の色が白だとすれば、今は完全な黒。それに何故か少ないはずの魔力のジョニイから溢れ出す魔力。
「まあ、いいや。どうせ名前なんて覚えたって意味ないだろ? どうせ片方は死ぬんだか

「・・・
ら」

本気だ、とカンナは分かつた。気絶させるつもりだったがもうそんなことは言つてられないような気がする。ここからは全開で――

カンナの体から魔力の奔流が逆る。

天まで伸びる魔力はマグノリア全体から見て取れ、圧倒的な力を語つていた。
が、ジヨニイは笑みを崩さず。むしろ更に笑みは増し、爛々と目を輝かせていた。
「トカゲ野郎の分際で調子に乗りやがつて。今から美味しく調理してやるよ」

L
v.
38
天災

「——風翔竜の旋刃」

暴風が吹き荒れる。

カンナの体を包み込むように竜巻が展開される。似たような魔法ではあるがララバイの事件での鉄の森のマスターであるエリゴールと同じような魔法。だがその威力は圧倒的なまでに異なる。近くのすら難しいほどの暴風。もはや小さな台風と言つても

過言ではないだろう。そこから放たれる風の刃。薄く鋭く放たれた刃は、本来見えるはずもない風が何層にも密集することで白い斬撃となつて襲いかかる。肉体はおろか、铁すらも容易に切り裂くだろう。しかし、ジヨニイは動かず、赤く輝く双眸だけが風の刃を捉えていた。

手に持つていた刀を放り、右腕を弓を引くか如き大きく後ろへと下げ、それとは逆に左腕を前方に伸ばす。風の刃との距離5メートルに達した瞬間、ボツ!!と空気が破裂したかのような音とともに右腕が伸ばされた。

親指以外の4指が伸ばされた状態で放たれた拳は、威力をそのままに飛ぶ。

それが一瞬の間に8つ。迫り来る風の刃と同じ数。

(力が増してゐる・・・)

ジヨニイの得意とする頭龍、龍牙の最大回数は魔力によるブーストを含めても6、7が限界だろう。だというのに簡単に限界を超えて、それを飛ばしてきた。

ジヨニイの放つた8つの砲撃は、風の刃と直撃し爆風を引き起こす。だがカンナは更に攻撃を続けた。

「風翔竜——炎帝竜」

右手には竜巻、左手には太陽の如き輝きを見せる猛炎。それらを一つにし、更に力を増大させた。それを躊躇もなく前方に放つ。炎の竜巻が荒れ狂い、木々を燃やす。自然

現象として引き起こされる火災旋風が人に向けられる。火災旋風の内部は1000度に達し秒速100メートルにもなる。かするだけでも灰塵になるだろう。火竜の力を持つナツであれば食らうことが出来るだろうがジョニイは写輪眼を除いては特異な能力は持たない。だというのに動かない。

(防御・・・？でも幾ら何でもこの威力だと――)

「――須佐能乎^{スサノオ}」

巨大な骸の腕が炎の竜巻を薙ぎ払つた。

禍々しい、黒い腕だ。ジョニイの周囲には魔力で精製された12対の肋骨が、脊髄と結ばれており、脊髄からはボルトで固定された腕が伸びていた。魔力の荒れ狂う音のせいか、骸が叫んでいるように聞こえた。

「元より条件は満たしていたけどな・・・ロックがかかっていたから出来なかつたんだわ。と言つてもわかんねえだろうけどよ」

「・・・！」

黒い骸はジョニイの動きに関係なしに動く。

腕を払うだけで周囲が荒れ狂い、吹き飛ぶ。カンナは懸命に攻撃を仕掛けるが全てジョニイの纏う須佐能乎に防御された。

「ま、第3形態まで進化させたら余裕なんだけど……それじゃ面白くない」

黒い骸が空中に霧散した。一体どういうことなのかとカンナがジョニイを見ると――

「来いよ、死なない程度で遊んでやるよ」

圧縮された空気圧が放たれた。

霸竜アカムトルムの持つ一撃必殺。ソニックブラストとも言われるその一撃を放つた理由は煽られた怒りからではない。この油断を逃すわけにはいかない、と察知したからだ。風翔竜クシヤルダオラと空気を放つという点は同じではあるが、ソニックブラストの正体は音である。ただ防御するだけでは吹き飛ぶことはなくとも、音が内部の組織をズタズタにするだろう。

「そりやちよつとまずいな」

そう言つてジョニイはポーチから一本のナイフを取り出し、迫り来る破戒の竜巻に向けて無造作に投げた。普通に考えればただのナイフが竜巻に敵うわけなどない。しかし――

「やつぱり……」

竜巻が殺されたかの如く消えた。あの眼の能力なのだろうか？ そう一瞬で考え、手を直線に伸ばし距離を狭める。

「斬竜——迅竜」

もはや視認することが出来ない。空中に一本の赤い線だけを残し白熱する刃となつた腕を振り払う。間一髪ジョニイもタイミングを合わせることが出来、蹴りを腹部に叩き込んだが、カンナの炎の斬撃もジョニイの肩を袈裟に斬りつけていた。

「いいねえ！ そうこなくつちやなあ……！」

決して浅くはない傷だ。だとうのに笑う。

一体何がジョニイを動かすのかは分からぬ。

「目はもう使わねえ。だからお前の能力見せてくれ……！」

「……ツ！」

これ以上見せるのはマズイ。しかし現状のままでは倒せない。それに時間もあまり長くは残っていない。

「迅竜——雷狼」

声が重なる。まさかと思いジョニーを見上げると、緑の電子を纏い、黒く染まつた腕を向けてきた。

「……ツ！」

駆ける。雷の残光が消えるよりも早く。

空中で緑の電電子が弾け合う。視認なんて出来るものではなかつた。

「角竜——！」

一本の角と化した腕が、ジョニーの体に突き刺さる。臓器が圧迫され、骨は砕けた。血を口から吐き出すも笑みは変わらず。痛がる様子のかけらもなく、寧ろ突き刺さつた腕を握り、拳を叩きつけた。

「もつとだ……！」

もつと見せろおお！！

魔力の過剰使用によるせいなのか、ジョニーの体から血管が浮き上がり、血が噴出していた。

(止めなきや……死んじやう)

生半可な一撃ではダメだ。殺すぐらいで丁度いい。カンナは両手を下に向け、クロスさせた。バチリ、と赤い雷が迸る。

「モード——天舞竜」

ジエット機じみた轟音が響き渡る。掌から噴出された魔力は地面を叩きつけ、カンナの体を浮かした。放出される魔力は更に引き上げられ、一瞬にしてカンナは空高く舞い上がった。赤い軌跡が宙に残り、空に赤い帯が広がる。最初は点でしかない赤が、今では世界の終わりを表すかのごとく赤い雲が広がる。

「これは……いいねえ」

赤雲の中心が一際大きく輝く。

赤い剣、もしくは隕石と呼ぶべきか、音速の速さで地に迫り来る。

——滅竜奥義 竜星刀

迫り来る天災にジョニーは笑つた。

ニルヴァーナ編

L V・39 次の始まり

赤く光る剣が、地上から上空にかけて100メートルほど伸びた。カンナの放った滅竜奥義は音速に達し、それに込められた威力は滅竜魔法の名の通り、竜すらも貫く一撃だつたと言えよう。二人の戦いの舞台であつた公園は、元が公園であつたと思わせないほど地形が崩壊しており、木々など一本たりとも残つていなかつた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・・！」

白い肌に汗が滴る。カンナの持つ能力、転生特典と言うべきか、能力は「竜の力」である。詳細は名の通り竜に関する力であれば何でもできるというものだ。更にカンナはもう一つの特典を貰つており「膨大な魔力」を持つ。このおかげで滅竜魔法を難なく使えているのであるが、強大な力にはデメリットがつくものだ。

(なんとか・・・10分以内には倒せた)

そう。時間制限だ。滅竜魔法というものは人間が竜に対抗するために、竜の特性を体内に宿すものだ。しかし人間と竜は体格は元よりDNAの構造が異なる。そんなものを体内に組み込み、使い続ければ侵食され人間には戻れないだろう。ナツやガジルはある理由によりそのデメリットがないのだが、カンナは違う。過度な使用は体に毒である。その上、宿している竜種は凶暴な竜が揃いに揃っている。故に使えるのは10分が限界。これは膨大な魔力とは関係がない。10分以上の使用となると体の変身が上手くできなかつたり、解除出来ない。

「死んでないよね・・・？」

天彗竜バルファルク。体外から龍気と呼ばれる特殊なエネルギーを取り込み、それを翼から放出することが可能な古龍の一体である。飛行速度は音速に達しており、その力を直接ではないにしろ、受けたジョニイが死ぬことだつてありえる。須佐能乎と呼ばれる絶対防衛があるため死んでいないとは思うが――

「今のは・・・ちょっと死にかけたぜ・・・！」

視界を埋め尽くす砂埃をかき消す黒い腕が現れた。砂塵が晴れ、視界がクリアとなつ

た中心に黒い骸、いや骸ではない。鬼のような角が鋭い角が生え、着物を着ていた巨大な須佐能乎が現れた。薙ぎ払った方とは違う腕には刀身が分厚い刀が握られている。

「須佐能乎第3形態だ。使わねえとは言つたがありやなしだ」

「そんな……」

まるで効いていない。それほどまでに須佐能乎の防御性能が高かつた。カンナは魔力は有り余つているが竜の力を使えない。そんなデメリットに気がついているのか、纏させていた須佐能乎を消し、ゆっくりとした足取りで近づく。

「さて、お返しの時間だ」

片腕を掲げる。手を剣を握るような形にすると、何処からともなく黒いオーラが集まり、須佐能乎の持つていたような刀身の分厚い刀が握られた。

「——じゃあな」

赤く万華鏡のように輝く目で睨まれながら断頭台が振り落とされ——

「チツ、ここで時間切れか」

パリン、とガラス細工が碎けるような破碎音を残して手に握られていた刀は消えた。それどころか吐き気を感じさせる dus 黒い魔力が消え始めた。

「全く、タイミングの悪いこと……だ……」

赤い目が、元の黒い目へと戻り、ジョニーの体はゆっくりと地面に倒れこんだ。

最近目を開けたら全身包帯グルグル巻きで、天井を見上げることが多いような気がした。

「これはいつも通りの……」

「ギルドの2階です」

横を見るとミラさんではなくサクラが椅子に座っていた。着替える暇もなかつたのか某聖杯戦争に出てくる沖○コスである。眼福眼福。

「それで容態はどうなんだ？どうせ肋骨とか折れてんだろう？そこでポーリュシカさんの所に輸送だろ？」

「いえ、今回は行かなくて済みそうですよ？」

「へ？」

そう言われ手足を動かしてみると、確かにまだマシな方だ。筋肉痛も少ないし、魔力が吸い取られたわけでもなさそうだ。珍しいことがあるもんだ。「しかし凄かつたんですね。私その時は石になつて意識がなかつたんですけどアルさんの戦っていた人はS級の魔道士らしいですよ？」

「マジかよ!？」

思わず起き上がりつてしまふ。名前だけしか聞いていなかつたがS級とは・・・まあ今思うと普通にS級の強さだつたわ。というか俺よく耐えたな。途中からの記憶全くな稠だ。

「そうだ。アルさんあと2時間後にパレードが始まるから準備してくださいね！」

「え？俺怪我人――」

「ダメです」

ブリブリ以下略

黄金の流れ星が山奥に落ちた。

その時夜だつたこともあり、目撃されることはなかつたが、一つ落ちるたびに大きな爆発が起き、木々が粉微塵になりクレーターを無数に生み出していた。

「興醒めだな。覚醒したというのにこの体たらくとは……」

クレーターまみれの地に足をつくのは黄金を体現したような男。匠が作り上げたと思われる黄金の鎧。美しい金の髪。それに全てを見通すかのような赤い瞳は、目前に倒れている人影を見下すように捉えていた。

「な、何者だ……お前のような魔道士がいたなんて聞いたことがないぞ……！」

「魔道士……魔道士ねえ……お前には俺がそう見えるのか？」

倒れていた男。闇ギルドの頂点に君臨する3つの一つ六魔将軍オラシオンセイスのリーダーであるブレイン。しかしブレインにはもう一つの人格があり、凶悪な性格ゆえ封印していたゼロがいる。この封印を解くためには他のギルドメンバーである5人を倒さなければいけないので、その5人は白目をむいた状態でクレーターの中に埋まっていた。

「クソがあああああ！」

人間性の闇とも言える波動が放たれた。全方位から放たれた怨嗟の魔法は叫びをあげながら黄金の男へと近づく。黄金の男は手を額に当て呟いた。

「——つまらん」

黄金の波動が円状に展開された。水滴を落とした水面のように揺らめきながら出現したのは、金銀無数の武器。見るのが見ればそれらが全て一級品だと分かるだろう。本来武器とは手に持つて扱うものだ。しかし黄金の男は出現した武器を手に取ることなく、黄金の波動から大砲の如く武器を放った。

黄金の残光が怨嗟をいとも簡単に引き裂いた。怒りや嫉妬で歪んだ顔をしたゼロは自身の持つ魔力を全て注ぎ込み魔法を発動した。

「ジエネシス・ゼロオオオオオオオオオオ!!!!」

魔力によつて作られた怨嗟の声が、夜空をかき消した。最大魔力によつて作られたジエネシス・ゼロは人工的に引き起こされた津波と言つても過言ではない。それでもだ。それでも黄金の男は一步たりとも動かない。元より、ここに来た時から一步だつて動いていなかつた。

「雑魚だなあ・・・面白くないなあ」

死の嵐が吹き荒れた。その一撃はゼロの持つ最大最強のジエネシス・ゼロを全てかき消し、そのままゼロを飲み込んだ。怨嗟の津波はなくなり、残つたのは素の煌めく夜空と、それと対比するよう輝く黄金の男。

「さて、そろそろかな」

黄金の男は口元を歪ませ、次の興を楽しみに待つ。

L V. 40 夢

「――！」

夢を、見ている。体を動かすことは出来ず、音は聞こえない。ただ目の機能だけは生きているのか、目の前で起きている事を第三者視点で捉えることが出来た。

一人の少年が倒れており、その周りをまた少年が取り囲む。俺は助けに入ることは出来ない。そもそも不思議なことに助けるという気が起きなかつた。

ただ目の前の光景を見て、自分のことではないのに、内からマグマのように煮えたぎる怒りが込み上げて来て――

「んつ・・・ああ」

起き上がる。込み上がる眠気を抑え立ち上がった。

「またこの夢か・・・」

カンナちゃんと戦った日から、俺は不思議な夢を見る事が多くなった。

——闇ギルド

解放令を出されたにも拘らず、それを守らずに裏で活動し続けているギルド。クエストの内容は正規のギルドでは許されない殺しや盗みの事が多いため、ほとんど犯罪者軍団アイゼンガルトと言つてもいいだろ。今まで妖精の尻尾に関連したのはララバイ編で登場した鉄の森アイゼンガルトが代表例だろう。そして闇ギルドは中心的な3つの存在があり、その派閥にそ

それぞれの闇ギルドが属しておりバラム同盟とも呼ばれている。

オラシオンセイス

その1つが次の章で関わる六魔将軍。
ギルドの総人数が6人（厳密には8人）しかいないのだが、数の差を補うほど各個人の力が強い。

次に悪魔の心臓。

バラム同盟最強の一角。かなりのネタバレだがギルドマスターはなんと妖精の尻尾の2代目マスターであるプレヒト。闇ギルドに行つてからはハーデス。煉獄の七眷属と呼ばれる7人の失われた魔法手がいる。

もし写輪眼で失われた魔法がコピー出来るのなら是非会つておきたい……がまずそ

れにはS級昇格試験に受けなければならない。

しかもこのS級昇格試験に受けたら最後、約7年（？）の間死ぬことになる。

そして冥府の門。

タルタロス
ギルドメンバー全員がゼレフの書から生まれた悪魔。

魔法とは違う系統の呪法を用いる。

触れたものを爆弾に変える某変態殺人鬼を思い出させるような敵キャラがいる。

この3つがバラム同盟である。

——しかしこのバラム同盟を統括する更に上の存在がある。

——「0」

結成期不明。構成員不明。移動方法不明。使用魔法不明。

ギルドに関する情報が1ミリたりともない正体不明の闇ギルド。だがこの闇ギルドが動く場所には何も残らない。元々何も存在してなかつたかのように何も残らないと言われている。

「以上が闇ギルドについての情報ね」

魔法のペンにキヤップをして机の上に置いたミラさんの顔は妙な達成感が溢れ出し

ていた。俺は前世の知識があるので分かるが「〇」だけは全く知らなかつた。

「グレイは〈〇〉つてギルドについて何も知らないのか？」

「名前だけだな…なり潜めてるんじやねえのか？」

「てか何があつてこのギルドは名前が好評されたんだ？」

「よくよく考えればそうだな…つていうか何でこんな正体不明の闇ギルドに興味持つてんだよ？」

「それは…まあ正体不明だから」

原作にはなかつたからとは言えるわけもなく適当に誤魔化した。

「〈〇〉が表に名前が上がつたのは…これね」

ミラさんが俺の話を聞いていたみたいである一枚の写真を見せてくれた。

写真の中にはボロボロの紙が写つており目を凝らさないとよく見えない。
「我、全てを終わらせる者…？」

「何だこの厨二病が必死こいて考えた痛いセリフは？」

「破壊された街に唯一残つていたものよ」

この闇ギルドの構成にはもしかしたら転生者が関わつているのかもしれない。だとすると街一つを容易に破壊することができる能力を身につけているというわけだ。いつか分からぬがこいつらと戦うとなつたら恐ろしいことだ。

「しかし今更闇ギルドの説明なんかしてどうしたんだ?」
「それは——」

「ワシらが六魔将軍を打つことになつたからじや」

ギルドの入り口から険しい顔をしてマスターであるマカロフが歩いて來た。

普段の陽気な様子はなく、眞面目な態度……正直な事を言えば似合つてない……。

「嘘だろ……いや、でも6人だからいけるのか……?」

「バカ、6人で最大勢力の1つを担つているのよ」

マカロフが足で地を鳴らす。なんの魔力も籠つていないので、ギルド内に反射した音は皆んなを黙らせた。

「先日の定例会で何やら六魔将軍^{オラシオンセイズ}が動いていると議題に上がつたのでな……何処かのギ

ルドがヤツらが派手に動く前に叩こうと言ふことになつたのじや」「しかし我々だけでは残つた2つのバラム同盟に狙われるのでは?」

幾ら精銳揃いの妖精の尻尾とは言えどゼレフ大好き軍団とロストマジック大好き軍

団が攻め込まれたらひとたまりも無い。

原作ではプレヒトの魔法で天狼島は半壊するし、タルタロスはタルタロスで爆弾1つでギルドが吹っ飛んだ。

「そこでじゃ……我々は連合を組むことになった」

ザワザワとまた騒ぎ立つ。

普段から暴れまくりのギルドが他のギルドと手を組むという異常さ。最近は評判も上がったのだが、それでも信じられないという顔をしていた。

「妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗、化け猫の宿からそれぞれ何人か選出する」

「何人つて……誰が行くのか決まっているのか？」

「おお、もう決まつておる」

この話では何時ものナツ、ルーシイ、グレイ、エルザが行くことが確定している。

だから俺が行く必要性は無いっていうか選ばれない。まあこの話で盗む価値がある技がないしな……。

「まずはナツ。あまり建造物を壊さないように」

「よっしゃあああああ！！」

「言つてるそばから屋根を燃やすな」

ナツの口から炎が噴出され軽く天井が焼けた（この後エルフマンが修理しました）

「次にグレイ。全裸にならないように」

「はつ、なるかよ」

「いやなつてるから」

「嘘オリ?」

もはやいつも通りなのでスルー。

「次、ルーシイ。頑張って来なさい」

「私?!? 何で?!?」

ルーシイは普通だから言うことなし。

だつてルーシイだし。

「そしてエルザ。リーダーとして頼むぞ」

「了解ですマスター」

ここまで原作通りだ。あいつらが向かつた先でまた転生者や謎の怪物に会う事が心配もあるが、エルザがいればなんとかなるだろう。

「そしてジョニイとサクラ」

「・・・へ?」

「ねえ、サクラって普段どんな修行してるの？」

「ずっとアルさんとの組手ですね……この人手加減とか知らないから青アザだらけで……」

「うわあ……」

「おい、その冷たい目やめろ」

目的地である青い天馬の別荘地までは馬車で行くことになつたが、4人乗りの馬車に無理やり詰め込み6人で入つているためギュウギュウ詰めのため寝ることも出来ず、俺は失礼な事を言う弟子に対し文句を返す。

「うつぶ……」

「吐くなよ？」

馬車の位置はグレイ、俺、ナツと向かい合うようにルーシイ、サクラ、エルザが座つてている。というか真ん中に座ることにより、ナツのゲロがかかりそうなのが怖い。

「どうか何で俺とサクラが付いてくる必要あるんだよ？ エルザいればよくない？」

「私にだつて出来ることと出来ないことがある。それに今回2人を連れていくように言つたのはマスターだ」

「そうですよアルさん。そんな文句ばっかり言つてないで前向きになりましようよ」

「とは言えども・・・六魔将軍つてめちゃくちや強いやん。前向きになりたくてもなれねえよ。」

「それにはナツとグレイのストッパーになつてもらわなければならん」「あ、俺の仕事そういうやつなのね」

嫌だなあ、と思つても馬車は問題なく進むのであつた。

L V. 41 結集

「あなたのための一'y 「おつと足が滑って落ちていた俺の刀を全力で蹴飛ばしてしまつたアー！」ひでぶつ！？」

別荘に到着するなり、ちよつときついものを見せられそうになつたので俺は刀を一夜にシユーツ☆した。柄の部分が額に直撃し、一夜がメエーンと叫び声をあげながら後ろに倒れた。

「今のは・・・あれだ、素直に助かつた」

「どうも」

エルザは一夜の事を苦手としている。青い天馬に所属しているのは美男美女が多数占めている中、一夜だけが・・・失礼だがブサイクなのだ。単にブサイクなだけならいいのかもしれないが、グイグイ近づいてくるのだ。鋼のような意思を持つエルザでも生理的に無理だったのだろう。

「貴様ア！兄貴になんて事を！」

「そうだ！親分にこんな卑劣な事を・・・！」

「我が師に向かい・・・恥を知れ！」

「呼び方統一しろよ」

イケメン軍団が涙で濡れた顔を俺に向けてきた。キッと睨みつけた後やられた仕返しと言わんばかりに一夜を手のひらで掴み、人間大砲として俺に向かつて投げてきた。メーンと空を切る音の代わりに飛んでくる一夜を普通に避ける。

「いきなり物騒な挨拶だな」

投げられた一夜が空中で氷漬けとなり、地面に掘られた。刀ぶつけた俺がいうのもあれだが扱いが酷すぎて涙が出そうだ。氷づけにした人物は蛇姫の鱗のリオン。グレイの兄弟子である。俺はガルナ島へは行つてないためこれが初対面になる。すげえ、グレイと違つて服を脱いでねえ！

「君達・・・少し失礼とは思わないのかい？」

流石にやり過ぎたのか、イケメン君が怒りを露わにした。まあ俺は先に何が起きるか分かつてからなんとも思はないのだが、怒りというのはウチのギルドの馬鹿が・・・
「お？ やるか？」

ほらね。ゴゴゴゴと一触即発の危機。頼みのエルザは氷から抜け出した一夜に絡まれてとてもこちらまで手が回るようではなかつた。というかどうやつて一夜逃げ出した?

「ジョニイ！ ちょっと止めてきなさいよ！」

「ストッパー係ですよ！」

「でえじょうぶでえじょうぶ」

「あの！ すいません！」

タツタツと軽い足音。背後を振り返ると背の低い女の子が息を漏らしながら別荘内に入ってきた。数歩歩くと何があるわけでもないのに転び、可愛らしい悲鳴とともに床に倒れた。

「何だ？ 迷子か？」

「ああ、君は化け猫の宿の……」

「そうです……ウエンディ・マーブルです」

ウエンディが来た直後、案の定イケメン軍団が連れ去つていった。相変わらずホスト並みの手早さだ。俺じやなきや見逃しちゃうね。

5分ほど経つた頃、折り合いを見たのか一夜がゴホンとわざとらしく一度咳払いをし

た。

「さて… 皆知つてゐると思うが今回集まつたのは他でもない。闇ギルド、バラム同盟の一角六魔将軍の撃退だ… ヒビキ君、アレを」

「ハツ、我が主よ」

「もう偉い言葉だつたら何でもいいのかよ…」

古代書アーカイブが発動し、ヒビキの手元に量子化されたキーボードのようなものが出現した。それを素早く操作すると俺たちに見えるような配置で6枚の人物の画像が出てきた。

毒蛇を操り、毒竜の力を持つコブラ。

一定範囲の体感を遅らせる魔法を使うレーサー。

地面を溶解させ、千里眼を持つホットトイ。

星霊使いのエンジェル。

物質を捻じ曲げる力と幻術を見せる能力を持つミッドナイト。

司令塔のブレイン。

ただし六魔将軍が全て倒されるともう1つの人格であるゼロが出てくる。

「… と言う事だ。更に今回は奴らが封印された魔法を封印させようとするのを阻止しなければならない」

「封印された魔法とは……？」

「ニルヴァーナ……強大過ぎる力を持つため封印された……が魔法の持つ力が何かは分からぬ」

ニルヴァーナ。俺の記憶だと古代の人々が争いをなくすために、危険な思考を持つ者達の反転させる者であつたが、逆もまた然りというのか善良な思考を考えを持つ者達の思考も反転してしまい争いが起きてしまつたという悲しい魔法だつたはずだ。

「知らねエ魔法だな」

「関係ねえよ！ 封印を解かれる前に奴らを倒せばいいだけだろ？」

「どうかそんな相手にどうするのよ!?」

正直私頭数に入れて欲しくないんだけど……

「私も戦うのは苦手です……」

「ウエンディ！ 弱音はかないの！」

「それについては大丈夫だ。君達はヤツらがいる拠点を見つけさえすればいい。そうすれば後は我がギルドの誇る空中要塞……クリステイナーで吹き飛ばす！」

その空中要塞後10分もしないうちに壊されるとは口が裂けても言えない。

「てか……数人相手にそこまでやる？」

「そういう相手なのだ。仕方がない」

ボフツと炎がナツの拳から漏れ出した。

振り向くと既にいつもみたいに一人で爆走していた。

「オレが6人まとめて倒してやるぜエエエエエエ!!」

「話聞けよ。」

ナツに引き続き一夜、ジユラ、俺を除いたメンバーが飛び出したこと、数秒前まで騒がしかつた別荘が嘘みたいに静かになつた。

それを確認してから俺は目に魔力を込め写輪眼にし、一夜の方に振り向いた。

「むつ、その目が全てを見抜くと言ふ噂の——」

「オラアアア！」

「メエエエン!?」

一夜の顔に向かつて全力で拳を叩き込む。床をゴロゴロと転がりながら10メートルほど飛び壁に衝突した。

「ジョニイ!? 何をしている!? ?」

「さあ……色々喋つて貰おうかジエミニ……？」

「何を言つているんだね君は!? ?」

「写輪眼は魔力を色で識別できる……さつきトイレ行つた時にすり替わつたな?」
嘘である。写輪眼は確かに魔力の流れや、相手の動きの予知などは出来るがジエミニ

のよう魔力まで瓜二つにされたら見抜けない。

「ジョニー… どういうことだ？」

「これは偽物ですよ。コピーする魔法でも使つたのでしょうか」

「いやいや！ 偽物も何も私は本物だ！ このイケメンな顔を見て分からぬのか？！」

「… イケメンかどうかは置いておいて… ジュラさん、お願ひがあるんですけど男子トイレを見て来てくませんか？」

「ん？ まあその程度ならば…」

流石ジュラさん。超良い人。

蛇姫の鱗に入つておけばよかつたかな？ と今更ながら後悔してしまう。

「君が何を誤解しているかは知らないが私は本物だ！」

「偽物は大体そう言うんだよ」

ロープで天井から吊るす。

ここでエンジェルのやつも出てくるはず…

「すまない。何もなかつたのだが

「へ…？」

L V. 42 黄金の男

「ジョニイ・・・一体どうし——」

言葉を言い終わる直前、ジュラが体を一度大きく跳ねさせ、床に倒れた。何か思われる前に写輪眼の幻術により少しばかり寝てもらう。

「しかし、どういうことだ・・・?」

原作であれば一夜がトイレに行つた際に星靈の一体であるジエミニが入れ替わり情報を取りっていたはずなのだが、俺が殴った一夜は魔法が解ける気配がない。

「まさかとは思うが・・・」

また転生者の仕業か?と俺の考えた途端、世界から大正解と言わされたかのように地が揺れた。

「何……これ？」

ルーシイがその光景を見た時思わず、声を漏らしてしまったのだ。ナツが何処に何が分からぬまま突っ走つた結果山頂に到着したのだが、そこにはクレーターまみれの地面と、金銀煌めく様々な武器が突き立つてているという不思議な光景だつた。

「クレーターも凄いが……」

エルザが一番近くにあつた、宝石で装飾された剣に近づく。手に触れることがなくても刀身の美しさや漂う魔力で一級品であることが分かつた。

「これだけの武器……どうやって揃えた？」

見渡す限りでざつと200本あたり散乱する武器。それらが全て一級品であるとするなら当然それだけお金もかかつてくる。

「どういかこれ使つてないですかね？」

「使つてない？ 使つてないってどういうことだよ？」

「スゲエー！ この剣炎出るゴバババ」

「テメエ、ナツ！ 遊んでんじやねえよ！」

ナツは話を聞くばかりか、落ちている剣を振つて何が出るかで遊んでいる。やはり男のロマンというのか武器には憧れるせいか、リオン達も剣を手に取つていた。

「全くあいつらは……で、使つてないって結局どういうことだ?」

「クレーターの跡を見る限り手に持ち、振るうのではなく、投げ飛ばしたと言つた方が正しいんでしょうか……?」

「そうだな。こんな一級品の武器を投げ飛ばすとは少し癪ではあるがな」

ジョニイの持つ刀も神が作つた一級品どころの騒ぎではない治らないほどよ武器を持つているが容赦なく投げ飛ばしたりしているがそれはまた例外だろう。

「ん? お前は何を熱心に調べているんだ?」

「いや、僕の古代魔法は皆んなに情報を送るだけじゃなく、過去の使用者のデータも呼び出すことが出来るんだけど……」

「けど?」

「……にある全ての武器の使用者どころか、いつ鍛えられたのかすら分からないんだ……!」

「みんな、アレを!」

少し幼いイヴ声が響いた。この場にいる全てがイヴの方へと振り返り、次いで彼が指

差す方向を凝視した。

「・・・――」

そこには、黄金を体現したかのようないい男が立っていた。太陽の光にすら負けない黄金は、男が只者ではないことを証明していた。

(凄い・・・魔力だな・・・)

男は何もしていない。魔力を放出しているわけでもないのに、睨まれるという行為で全身に何か重りでもつけられたかのような圧迫感を感じた。

「・・・」

男は何も語らない。しかし、真紅に染まる瞳がこの場にいる全ての人物を一瞥する。

「・・・！」

「ウエンデイ？どうしたの？」

ウエンデイの体が異常なほど体が震えていた。いつも隣にいるシャルルはウエンデイが臆病で、泣き虫なことを知っているが、それを差し置いても異常だった。

「あの人・・・すごく嫌な臭いがする・・・

！」

「ああ、俺もだ・・・あいつはヤベエ」

人より五感が優れている滅竜魔道士の二人は、黄金の男が危険であることを感じた。

緊迫状態が続く中、ついに黄金の男が動いた。

「お前と、お前……それとお前だ」

黄金の男がそう言いながら指差したのは3人。エルザ、ルーシイ、そしてウェンディだ。

「なんで私は省かれてるのよ！」

同じ女でありながら選ばれなかつたシェリーは勇敢にも言葉を荒げた。黄金の男は怒るシェリーに眼を向けず、3人が誰一人として反応しないのを見て、口角を上げた。

「どうした？ 何故来ない？ 僕が選んでやつたんだぞ？」

「何……言つてるのよ？」

「貴様も選んでやろうと思つたが……存在が異質が故にやめておこう」

「……」

サクラは言葉を立てず、師であるジョニイに言われたことを思い出していた。『怪きは疑え』、言葉を脳で何度も繰り返し、すぐ武器が手に取れるように手を構えていた。

「私達に何の用がある？」

「用件？ そんなものはない。付いて来いと行つたのだ。ならば付いてくるのが当たり前だろう？」

何を行つてているのだコイツは？ そう思うのも不思議ではないだろう。付いて来いと

も言われていない。用件がなければ早く立ち去ればいいだけの話だろう。

(――ヒビキ)

(ああ、調べているんだが出てこない。今むやみに動くのは得策ではな――)
カタリ、静かすぎるこの状況ではやけにその音が響いた。レンが自然と後ずさりした
時に背後にあつた剣に軽くあたり、武器が倒れたのだ。ただそれだけ。ほんの少しの接
触。だが空気が変わったのが分かつた。

「雑種ごときが俺の武具に触れるとは・・・身の程を知れ」

——
アガートラム
武源解放 風切り

消えたと思つたら目の前にいた。

その速さは瞬間移動じみているが、純粹な歩行術だ。魔力による感知など不可能。刀
身すら見る間もなくその首元を――

「無駄だ」

黄金の波紋が空中に4つ現れると同時に、そこから鎖が飛び出した。サクラの風の速
さで放たれた刃の切つ先よりも鎖が絡みつくのが一瞬早かつた。力を込めればなんと

か引き裂けそうである鎖であるが、見た目に反して恐ろしい硬さで身動き一つ取れない。

「サクラ！」

「テメエ！何しやがる！？」

少し遅れてエルザ達も動く。が動き出せたのは一歩だけであつた。

「ぐつ・・・重いツ・・・！」

「動けない・・・！」

激流に打たれたかのような重さが全身にのしかかり地べたに倒れこむ。黄金の男の手元を見ればついさつきまで何もなかつたというのに、細微な装飾が施された槌を振り下ろしていた。

「さて、返事を聞いていいないな・・・元より選択肢は一つしかないのだが」

「貴様のようなやつに着いていくものか！」

地面に落ちる。圧迫感が更に増し、体が地面にめり込み体全体がビキビキと体内で鳴り響く。指一本たりとも言えない中、ただ一人だけ、ナツが重力に抗いゆつくりと、だ

が着実に立ち上がった。

「名前もしらねえやつに俺の仲間を渡すかよ！」

「氷魔法^{アイスマイク}——！」

氷の道が夏の足元から黄金の男まで続き、動けないナツをサポートするかのようにリオンの腕から二体の氷の鳥が現れ、ナツの背を押した。これならば動けなくとも問題ない。囚われているサクラを救うには充分。

「火竜の——！
——王の財宝^{ゲート・オブ・パビロン}」

その言葉は全てが集つた宝物庫への鍵となり、空中に無数の黄金の波紋が浮かび上がつた。波紋の中から現れ出るのは強い魔力を放出する魔剣や、聖剣。黄金の男が手を振り落とすのが合図となり、波紋から武器が弾丸のように放たれた。

(そうか……これで武器を飛ばしていたのか……！)

今更ながらクレーターの正体が分かつたエルザだつたが、それが分かつたところで今は仕方がない。頼みの綱であるナツに希望するしかない。

「おおおおおおおお!!」

飛来する武具は輝きによって、まるで流星群のように光って見えた。飛び交う武器の隙間を縫い、何とか避けるものも完全に避けることが出来ず、いくつもの傷跡が体に残つた。だがその甲斐あつて黄金の男との距離は1メートルの地点にまで達していた。

「——鉄拳!!」

熱を纏つた竜の一撃が放たれた。黄金の男の顔にめり込むまさにその直前、黄金の波紋が再び現れ、銀に輝く盾が現れた。

(こいつ盾も——!?)

「せっかくの策も崩れたな」

鈍い音が響き渡る。ナツの炎を纏つた拳は銀の盾と衝突し何事もなかつたかのようになに消火された。だがそれで終わらなかつた。ナツの体がいきなり地面に倒れ落ちたのだ。

「体が・・・！」

「お前に向けて投げた武器は全て対魔の武器だ……貴様にとつては擦り傷でも痛むだろう?」

今から遙か遠く未来の話であるが黄金の男の瞳は確かにナツの正体を見破っていた。絶体絶命の危機。もはや誰も動けるものはいない——

「——天照四二式 幻霧」

声が響くと同時に黄金の男の周囲に白い煙が充満した。1メートル先すら見えない程濃い霧は数秒程展開された後消えたが、黄金の男の一番近くにいたナツとサクラの姿が消えていた。

「ほう・・・面白い奴がいるな」

黄金の笑みを浮かべた方向の先にいるのは、赤く染まつた目の持ち主、ジョニイであつた。

L V. 43 撤退

ありえない。仮にありえたとしても何でこいつなのか。目の前に立ちはだかる黄金の男の正体を俺は知っている。いや、知つてしまつていてるが故に恐ろしいのだ。敵うはずがないどころか、そもそも立つ次元が違う。生身で太陽に打ち勝てと言われているようなのだ。

「ジョニイ・・・助かつたぞ・・・」

「ああ、けど今は黙つとけ。傷が痛むんだろ?」

「すまねえ・・・」

ナツを肩に担ぎ、以前変わらず仁王立ちを続ける黄金の男を睨みつける。

「お前は・・・もしかしなくともギルガメッシュだな?」

「ほう、異物」ときが俺の名を呼んだだけでも不敬ではあるが許してやろう。俺は寛大だからな」

英雄王ギルガメッシュ。ギルガメッシュと言う名前自体は、ゲームなどでよく登場するがこのギルガメッシュは F a t e と呼ばれる作品に出てくるギルガメッシュだ。詳しい説明は省くが、こいつの能力は大きく分けて二つ。一つは過去現在未来を見渡し、相手の隠された真実であろうと見破る全知なるや全能の星と呼ばれる瞳。そしてもう一つがこの山をクレーターまみれにした武器を放つための蔵である王の財宝である。この能力がかなりやつかいであり、古今東西全ての英雄達が使った武器や盾、はたまた毒まで入っている。これにより、竜ならば竜を倒したとされる剣を、魔物と対峙するのであれば退魔の力を持つ剣が使え、おおよそ全てに対してカウンターが出来るチートといつても過言ではない能力だ。さらに恐ろしいことに、この宝物庫には本人が数えるのが馬鹿らしい程の武器が収まっている、主な能力は二つといつたが、蔵の中身を合わせると万は下らない。

「一体どうしてお前のようなやつがここに来ている？」

「はっ、分かつてることを聞くとは・・・流石異物の脳みそということか」

嘲笑わう英雄王。それが俺を苛立たせた。が、ここで向かっていくのは簡単だが何の策略もなしに奴に挑むのはただの自殺行為だ。それにナツの治療だつてある。そんな馬鹿は出来ない。

「ニルヴァーナか・・・？」

「如何にも。この世界の宝は収まつていなからな。だから貰いに来てやつたのだ」

やはりといふか何といふか、俺はやつが英雄王の殻を被つた全くの偽物であると氣付いた。俺は本物のギルガメッシュにあつたことなど一度たりともないが、この喋り方、仕草はただの真似だ。もはや見慣れたとも言える転生者ではあるが今回は一番酷いと言つてもいいだろう。

「貰いに来ただと・・・ふざけるな！あれは負の遺産だ！そんなものを手に入れてどうするというんだ!?」

「宝である以上俺の所有物だ。貴様ごとき下郎が考へることではない。それに俺が許可をしたわけでもないのになぜ貴様は喋る？」

肌にゾワリと鳥肌が立つた。魂こそ違えど器は本物の英雄王。やつが何の動作もしていられないというのに来るということが分かつた。

黄金の波紋がやつの頭上に現れ、そこから無造作に剣をヒビキ目掛けて放出したのだ。足に魔力を回し、ヒビキに剣が突き刺さる前に、飛来する剣の前に立ち刀で弾き飛ばしたものもありの威力の重さに大きく後ろに吹き飛ばされてしまった。

「ぐつ・・・すまねえナツ」

手放す時間ももつたないのでナツを抱えたまま、走つたわけだが返事がない。一体どういうことかと見てみるとナツは完全に気絶していたのだ。様子がおかしいと

写輪眼で見てみると、白い魔力がナツの体を蝕んでいたのだ。

「まさか……」

「気付いたか。そいつに放つたのは退魔の力が施された剣でな……気付かず突っ走りおったわ」

それはマズイ。ナツの傷に関しても言えることだが、今そのことをここで言うべきではない。まさか英雄王の眼はそこまで見れるとは思わなかつた。

「……！」

「逃げる気か？まあ、せんがな」

黄金の波紋が無数に現れた。ここで逃げなければナツが死んでしまう。だから――

「全員!!死ぬ氣で逃げろオオ!!!」

数えるのも馬鹿らしい剣が放たれた。飛び交う武器は夜空をかける流星群のように煌びやかであつたが、1ミリでも掠つたら死ぬ可能性がある。重力の影響下で一步ずつの歩みが遅いグレイ達を必死にジヨニイやジユラが防御するがそれでも数が多く、捌き切れなくなつていた。

「ぐつ・・・ああああああ!!」

ジヨニイの刀の隙間に入つた剣が一本突き刺さると、そこから面白いように突き刺さりハリネズミのように全身から剣を生やして地面に倒れ落ちた。そこから更に一人、も

う一人と次第に倒れていき残つたのは英雄王ただ一人。なのだが――

「はつ、小細工を成したか。まあよい・・・どうせ止めざるを得ないからな」

血を流した遺体が幻影のように景色に溶け込み、残つたのは無数に刺さつた剣のみであつた。

「虚栄の香り・・・少しの間だがあの金ピカは幻に酔つているだろう」
バーファム

メエーンとカツコつけてる一夜がこれほどカツコよく見えるとは思いもしなかつた。

「いや、助かつた・・・本当感謝している」

「そうだとも。もつと感謝したまえ」

まあ逃げる時はジユラの土の魔法による移動で素早く戦線離脱出来たことが大きいが、一夜のおかげで助かつたところもある。ドヤ顔でそんなこと言われたら感謝の気持ちが削がれてしまうところもあるが。

「ねえ、ナツは大丈夫なの？死はないよね？」

「大丈夫です。もう毒も抜けました」

傍ではナツの治療を行なつてゐるウエンディの裾を掴み涙を零してゐるハッピーの

姿が目に入つた。ウエンディはナツの体内に入つたものが毒と認識しているがそうではない。むしろその逆とも取れる聖なる力だ。これは後に分かることであるがナツは人工的に作り出された悪魔だ。そのことを黙つていたのだが無事治療が出来て良かつた。しかしことの重さは重大だ。今まで転生者達と何度も戦つたが今回は格が違う。人の数という点では勝つてはいるが、武器の数や、威力など桁違いだ。よほどの策でもない限り突破は難しい。

「ジョニー……君はある男のことを知つてゐるそぶりだつたがどうなのだ」

聞かれると思った。むしろやつのことを知つてゐる俺に効くのは当たり前だ。しかし何と答えればいい？ 素直に「奴は fate のギルガメッシュです」と答えて分かるわけでもないし、「やつは宝物庫の伝説級の武器を投擲武器のように放ちます」と言つたところで何故それを知つてゐるかと聞かれるのがオチだ。あまり怪しがられたくはない。さつきみたいに全員を幻術で眠させて認識を変えるか？ だが、全員にかける暇はない。

「古い文献に出てきた英雄の特徴とそつくりだつたからピンと來たんだ。黄金の鎧を纏つた赤目の男の話だ」

「私結構本見てるつもりなんだけど……読んだことないわ」「か、かなり古い文献だからな」

かなり際どい言葉選びであつたとは自覚している。こんな話、図書館で少し本を見たらすぐ嘘だと分かつてしまふが馬鹿な俺はそんな言い訳しか思いつかなかつた。

「しかし……その話が本当だとすると厄介にも程があるぞ」

「伝説級の武器を石ころみたいに放り投げるんだろう？罰当たりにも程があるよ……」
それでも、俺たちはやつに挑まなければならぬのは避けようもない事実だ。きつとあいつは英雄王の力を貰つて俺スゲエー状態なのだ。そんなやつの次に取る行動は手に取るように分かる。

「文献だとやつの使う武器は万を超える。罰当たりとか言う話じゃなくなりそうだな」「そんなにか……何か弱点はないのか？」

「……」

英雄王ギルガメッシュの宝物庫にはほとんど全てのものが入つていると言つてもいい。ナツに致命傷を負わせた退魔の剣は勿論、全てを防ぐ盾、死人すら復活させる靈薬、挙げ句の果てには温泉すら入つており、敵の属性に対するカウンターも出来、自分の治療すら行える。弱点という弱点がない。

「一様ある……というか奴を倒すにはそこに賭けるしかない」

「勿体ぶるなよ。何だよ弱点？」

「ああ、それは——」

L V. 44 目的

王の財宝

この名こそが英雄王ギルガメッシュの切り札だ。王の財宝とは英雄王の宝具……生前に築み上げてきた伝説や偉業が形となつたものである。宮本武蔵と対決した事で有名な佐々木小次郎であれば『燕返し』を、円卓の王であるアーサー・ペンドラゴンであるならばもつとも有名と言つても過言ではない聖剣『エクスカリバー』が宝具となる。英雄王の場合は地上全ての宝を集め、これを収めるための宝物庫を作り上げたという偉業が宝具として結晶化したものが王の財宝だ。後に生まれる英雄達の扱う様々な武器の原典が詰まつた蔵の中は数を数えることが馬鹿らしい。蔵の中の武器を上げると、北欧神話最大の英雄シグルドの持つ最強の魔剣であるグラム。アーサー王が引き抜いた選定の剣の原点である原罪。^{メロダック}その他にも斧や槍、はたまた盾。更には若返りの薬や移

動式温泉などというものはやふざけているとしか思えないものまで入っている。つまるところ何が言いたいかと言うと――

「ここか……」
欲しいものを探す宝具と封印を解く宝具もあつて当然だと言うことだ。

ギルガメッシュは自身の手に持つ古びた羅針盤を見ながら呟いた。北を指すはずの針は、時計の秒針のようにゆっくりと回転しており、壊れているかと思うがそうではない。この羅針盤の指す向きは自身の目的物。とある海賊が宝を見つけるために使つていたものの原典である。厳重な封印をかけられ感知するのも不可能なはずだと言うのにその宝具はいとも容易くニルヴァーナの位置を当てた。

「なるほどな。それなりに強い封印ではあるが……」

用済みとなつた羅針盤が黄金の波紋の中に落ちていく。それと入れ替わるようになってきたのは歪な形をした禍々しい紫の短剣。武器に使うにはあまりにも歪。かと言つて飾るものかと言われば禍々しい。しかしこの短剣は敵を倒すためでも飾るものでもない。宝具名『破戒すべし全ての符』。ギリシャ神話に登場するコルキスの王女の運命、裏切りに遭い続け結果、自身が人を裏切る立場へと陥つたことから、後天的に生み出された宝具。その能力は術理、摂理、世の理、万象すらも無力化させる。とある世界

では英雄を隸属させる強力な魔法すらも解除した。

「我的前では無力なものよ」

英雄王の手から垂直に落下する短剣。特別な詠唱も、術式も書く必要もない。ただ刺すだけで全てが原初へと変えるのだ。ゆっくりと、ただ重力による加速をほんの少しだけ得た短剣は地に刺さると同時に、短剣の音ではない何か碎ける音がした。短剣の刺さつた場所から黒い奔流が溢れ出すのには1秒もいらなかつた。

動く城塞を見るのは移動要塞ファントムという前例があるため初めてではないが、大きさは何十倍、いや何百倍と言つてもいいだろう。タコの足のような多脚、そしてそれに乗つかるように鎮座する街が一つ空中に浮かんでいた。

「あれがニルヴァーナか……」

「そんな馬鹿な……封印はまだ溶けていないはずだ！」

「あいつはこの世の宝全部持つてゐるんだ。そん中に欲しいものを探すアイテムと、封印破りのアイテムぐらいあるだろ」

「そんなめちゃくちやな……」

イヴが疲れ混じりの言葉を残し、地面に座り込んだ。めちゃくちや、やつを表現するにはふさわしい言葉だと思う。万象を見通す目、敵の弱点を的確に放てる武器。チートもいい加減にしろと言いたくなるぐらいだ。

「そんなやつに本当に勝てるのか？」

「馬鹿野郎。勝てるとかそんなんじやねえよ。勝つしかないんだ」

そう、勝つしかないのだ。あの偽ギルガメッシュの企みが何であるかは知らないが、あんな成金野郎を野に放り出していいことなんてあるわけない。逆らう者は皆殺し、自分を褒め称えるものだけを残すクソみみたいな国だけが完成する。本来の英雄王ならばどうなつていたかは分からぬ。頭脳明晰、見通す慧眼でウルクと呼ばれる古代都市が生み出された。しかしヤツは偽物だ。ただ英雄王の力を使つていわゆる「俺TUEE E E！」をしたいだけの人間なのだ。そんな事が分かる程喋つていないので、分かる。強すぎる力を持つたら見せびらかしたいから。

「しかしジョニーの策で勝てるのか？ 私には信じられないのだから……」

「それに関しては問題ないと言わせてもらおう。この弱点は絶対につける」

太陽が照りつける大地の中を悠々と歩く移動城塞。どこへ向かうかは分からぬが、一步一歩が大きいため着実に前に進んでいた。

「よし、具体的な作戦を考え——」

よう、と言おうとした矢先近くの茂みの中からボロボロの服を着た巨大な男が出現した。驚きのあまり一瞬脳が思考停止したが、特徴的過ぎるあまりにも角張った顔はすぐ

「ホツトアイ!? 何故ここに!?」

逃げたのか!?自力で脱出を!?なんて考える間もない。あんまりにも急すぎたのか戦闘に意識が移行するのが数秒遅れた。奴に一番近いのは俺だ。確実に一発をもらつてしまふことになるがそこから反撃して――

「い、とは素晴らしいもののデスネ！」

「・・・は?」

「助かりました。私見ての通りボロボロだつたので……他者から受け取る愛。やはり素晴らしいデス」

キチンと正座して慈愛に満ちた笑みを浮かべるホットアイの服は、神父が着るようなカソック服ではなく、チャーミングなハートやフリフリとしたおしゃれな服。これ以上

までに似合つていなければ、何故か似合う。

「なあ、ルーシイ。これ以外はなかつたのか……？」

「私に言われても……バルゴが作つたんだし、似合つてるからいいんじやない？……多分」

「多分つて言つたよおい」

まあ本人が何も言わないならいいのだろう。原作であれば何処かで戦つている最中にニルヴァーナが起動したタイミングで性格が逆転してはづなのだが、今は原作の面影がないためかストーリー自体歪められている。

「この人……六魔将軍の一人なんだよね？それが何でこうなつてているのさ」

「……もう隠し通すのも無理かな。これがニルヴァーナという魔法なんだ」

ニルヴァーナの説明が始まる。最初から知つていた俺を覗き、各自驚愕の表情を表していた。

「そんな魔法が……」

「成る程な。悪い奴が良い奴に変わるつてのは正にこの通りというわけか」

「私は金に目が眩んでいました。確かにお金は大切なもののデス。しかしそれ以上に人の信頼……つまり愛こそが大事だと気付かされたのデス」

仮とは正にこれこの通り。この人元々闇ギルドの人なんですよと言つても誰も信じ

ちやくれないだろう。

「どういか何故私たちの前に姿を現した。確かにお前は良い奴なのだが……その、言いくらいのだが……お前は六魔将軍の一人だ。私達はお前を捕らえる必要がある」

エルザの言う通りだ。確かに良い奴にはなつたがそれでも過去に人を殺していることには変わりはないのだ。初めて会つた奴が物凄く良い奴なのに、捕まえなければならないとは辛い話だ。しかし、悲しい現実に付けつけられて喚き、暴れ出すこともなく変わらない笑みで答えた。

「それは構いません。どうせ自首しようと思つていたのデスから。しかし……あの金色の男だけは命に変えても倒さなければならないのデス」

「やつの目的を知つているのか？」

「私もその時気絶して起き上がつた直後であまり聞き取れなかつたのデスがやつは——」

「いやー、やつぱコレめつちや強いな」

ホットアイが目覚めて聞いた言葉はそれだつた。自身と敵対した時と態度が別人のようだ。自信過剰の王から、おもちゃを自慢する子供。疑問に思うほどの力は残つていなかつたが、それが幸いして自身が起きているということに気づかれなかつた。バレないよう視線だけを上げると奇妙な形の剣、というかもはや剣ではなく赤と黒の層が三層に重なつたドリルのように見えた。それを見て黄金の男は笑つていた。しばらく鑑賞した後に黄金の波紋へと戻し、ホットアイの近くにあつたちようど良い椅子代わりの石に座り一人つぶやいたのだ。

「あーあ、強すぎて話になんないなー。こんななんじや世界征服なんて1日経たずで出来るよ。ま、いいか。王様になつたらやりたいことも見つかるだろ」

そう言い残して彼は何処かへと歩いて行つた。

「世界征服？なんだか子供みたいな夢だな」

「私もそう思いました。しかし彼はそう言つたのデス」

「あいつが王になるつてことは・・・」

「ルーシイ含め、自分の気に入った女は全て手の中つてことだな」

これにはドン引きの女性陣。まあ俺も引く。やつてみたีけど。男の欲望というやつだ。

「けど実際そうさせるわけにはいかねえよなあ？」

「当たり前だ。あの野郎に現実つてやつを教えなくちゃな」

ニルヴァーナの話が始まつてまだ数時間も立つていなが、話は大詰めに向かつてい
た。

L v. 45 決死決戦

「——ほう、来たか」

山を歩く城塞の中心にいた英雄王は、全てを見通す目を持つて敵対者の姿を確認した。つい先程遊んでやつた13人と、昨晩殺したと思ったやつが1人。まあ一人増えただけでは変わらない、そもそも存在の次元が違う。魔力を持つただけの人間と、原初の王だ。圧倒的な戦力差で殲滅することが出来るが、気に入った女を手に入れるには少しばかり調教も必要だろうと考え、こちらから先に手を出す事はやめた。

「いいか、作戦は伝えた通りだ。一つしくじれば終わりと思え……ミスつたらマジでごめん」

「不穏な事言つてんじやねえよ！」

冷や汗を垂らしながらそういうジョニイの片腕には黒い神の刀が握られていた。英雄王と遭遇して1日も経っていないのに何故最初からクライマックス状態なのかとかそんなこと思つてゐる暇もない。ただあの英雄王を止める。それ一点のみ。

「それじゃあ——行こう」

地面が歪む。地震ではない。スライムのような流動体を保ち、跳ねる。六魔将軍ホットアイの魔法だ。そして歪んだ大地だけを切り取るように浮かせた。

「まさか六魔将軍と共闘するとは思わんかつたが……ハア!!」

大地が射出された。ジユラとホットアイは使う魔法は違うものも、大地を利用すると言う点では系統が同じだ。火と火がより強大な炎となるように、同じ系統の魔法を組み合わせることは相性がいい。しかしなルヴァーナの城塞に近づくだけならジユラの魔法だけでいいはずだ。ならば何故ホットアイの大地を流動体にする魔法が必要なのかな?

「猪口才が——」

英雄王は笑う。目先100メートルを蛇のように舞い上がる動く岩石に目掛けて宝物庫から適当に選んだ武器を構えた。無軌道で飛ぶ蛇に投擲物をぶつけるのは至難の

技ではあるが、赤く光る目が軌道を捉えた。

射出。放たれた武器の光は宙にかける流星と言つてもいい輝き。100メートルを1秒もせずに駆け抜ける。

「オオオオオオオ!!」

蛇が縫いとめられるその瞬間、流星を弾く一筋の黒閃。ジョニーの持つ写輪眼は英雄王の持つ眼に比べれば見劣りするかもしれない。しかしその差は技によつて埋めればいい。

落ちてくる流星を弾き飛ばし、自身が乗る土の蛇に当たらないようにする。少しでもミスが起きたら土の蛇に直撃し、へし折られてしまう。

「ならば、これはどうだ？」

門から顔を出したのは剣や槍とは大きく異なる金剛棍。狙うそぶりすら見せずに射出された。

「あれは……ヴァジユラだつたか？」

古代インド神話に伝わる雷神インドラの神格象徴の一つとされるそれは、一度きりと いう制限があるが、使用者の魔力とは関係なく一定した攻撃を与える。ようは爆弾なよ うなものだ。

「ちょっと遠いけど……ジュラさん！」

「任された!!」

同系統の魔法の相乗効果が今果たされる。歪んだ地面を操作し、俺たちが載っているところを窪ませて、そこから反動で押し上げる。土のトランポリンだ。ニルヴァーナの城塞までの高さおよそ50メートルまで簡単に浮き上げた直後、地面でヴァージュラが黄金の閃光を撒き散らし、半径10メートルのクレーターを生み出した。

「あれ直撃してたら死んでたわよね!?」

「喋つてたら舌噛むぞルーシイ！」

ジユラの微調整により、無駄に飛び上がらずにニルヴァーナに着陸した。滅竜魔道士特有の乗り物酔いはウエンディの魔法によつて一時的だが無効化されている。

「乗り上げてきたか。ならばこれだ——」

轟、と空が唸りを上げた。巨大な門から現れたのは、同じく巨大な燃え盛る剣。シユメールの戦さの神ザババが使つた「水平線」の概念を持つ巨刀。振るまでもなく、その質量だけで一帯が炎と化すだろう。しかし、こちらには炎を喰らうものがいる。

「美味そおおおおおお!!」

ハッピーの翼により炎の剣に接近したナツは、落ちてくる巨剣にしがみつき、炎を吸い込む。燃え盛る炎が面白いように吸い込まれ残つたのは巨剣のみ。その大きさにより十分な脅威はあるが炎がない分マシだ。

「面白いやつだ。炎を喰らうとはな」

「お返しの——火竜の咆哮!!」

炎を喰らうことによつて力を得たナツは、今溜まつた分の力をそのまま吐き出した。普段の何倍もの規模でありながら、その熱も500度を軽く超えている。しかし、黄金の波紋から打ち出された剣によつて無に帰つた。

「ナイス陽動！ 置み掛けるぞ！」

ニルヴァーナの端から、英雄王のいる城塞の中心までは直線距離で150メートルと行つたところ。近い距離だが、遠い。

「精々足搔けよ。雑魚どもが」

流れ落ちる武器の数は1秒に約30発。それが毎秒ともなれば4秒もしないうちに100を超える。ジョニイの黒刀がなんとかして弾くが時間の問題だろう。一人であれば、の話ではあるが。

「エルザアアアアアアア!!!」

ギヤリン！と甲高い音を響かせ、黄金の柄を持つ剣が黒刀に弾かれ後方に吹き飛んだ。剣が落ちる直前手が伸び掴み上げる！

「ハアアアアア!!」

一閃——!! 瞬間暴風が吹き荒れ、飛来していた武器が吹き飛ばされた。エルザの武器は優れものではあるが、神代の物と比べるとやはり劣ってしまう。だがそれも神代の武器を手にすることによつて解決。本来であれば武器を使いこなすのに長年の月日が必要であるがエルザの天才的なまでの直感が正しい使い方を瞬時に把握した。

(成る程……これはいい)

背後から放たれた斧を、その場で回転すると同時に空いているもう片方の手で握り、前方に迫つていた刀に投げつけた。

(死角を取つたはずだが……はて)

人間の視覚の範囲は広いが、やはり背後というのは見えない。探知する暇も与えないほど早く撃つたというのに逆に掴まるとは思つてもいなかつた。偽の英雄王が目を上げると空中に浮かぶボートに高速で何かを入力しているヒビキの姿が。

「視覚の共有化か……なるほど、雑種にしてはよい判断だが所詮は雑種だ」

流星の矛先がヒビキへと向き放たれる。

今から動いては間に合わない。しかし、ここにはエルザやジヨニイ以外にもいるのだ。

「——サジタリウス！」

一本の弦につがえられた無数の銀の楔が流れ落ちる流星と同じ数だけ放たれる。そこにレンの使う空気魔法が入り混じり、本来の数倍にもなる威力の矢となつた。しかし、それでも矢だけが無様に破壊され、飛んでくる流星の軌道をほんの少しだけ変えるのが精一杯だつた。

「おいおい！いいのかそつちばっかり見てよオ！！」

英雄王が眼下を見下ろすと150メートルあつた距離は100メートルを切つていた。思わず苛立ち歯軋りが鳴る。怒りを表したかのように空に砲門が無数に設置された。

「屑どもめ・・・いい氣になるなア！！」

かなりの武器の使い手であるジョニイとエルザでも対処出来ない数。砲門から武器が放たれるその瞬間、腹に響く豪快な音が響いた。偽の英雄王が空を見上げるとすぐ目前には神代の武器でもなんでもない、黒い塊が迫つていた。

「くつ!? 盾よ!!」

宝物庫から無数に盾が降り注ぎ、壁となる。

放たれた大砲の玉は巨大な爆炎を引き起こしたが、盾に一つ足りとも傷は入つていな。しかし、これは偽の英雄王に攻撃を与えるためではない。

「撃て！撃てえ！時間稼稼 「あんたも手伝え！」 メエーン！」

魔導爆撃艇クリスティーナ。青い天馬の誇る空中戦艦が積まれてゐる限りの砲台を活かし、決死の攻撃を仕掛ける。偽の英雄王は盾の隙間から忌々しそうに空中戦艦を睨みつけ、砲門を一つ開け剣を放つた。俊敏性が皆無と言つてもいいクリスティーナは魔力によるバリアを発生させたがそんなものはなかつたと言わんばかりに突き破られ、いつも簡単に戦艦に穴が開いた。

「構うな！ 壊れるまで撃ち続けろ！」

号砲が空から何度も響き渡る。しかし地上から放たれる流星の前では何の力もなさず戦艦だけが破壊され続ける。時間でいうと5秒。戦艦から勢いよく炎が溢れ出し地上へとゆっくり落ちて行つた。

「屑は大人しく地でも舐めておけばいいものを・・・！」

クリスティーナはあくまでも囮だ。たつた5秒。しかしこの5秒はとてつもなく大きい。偽の英雄王が目を前に向けた時迫りくる剣士達は既に50メートルの距離にいた。

L V. 46 開闢の星

残り50メートル。ここまで来れたのが奇跡みたいな話だ。クリステイーナを囮に使う作戦を言つたのは俺だつたが、高い金を払つてまで作り上げた戦艦を俺のために使つてくれるとは流石に申し訳なかつた。しかし、そのおかげで奴の目前まで辿り着いた。ここでしくじる訳にはいかない。

「雑種共めえ・・・!!」

砲門の数が倍に増えていく。空の景色よりも黄金の波紋の方が多く目に入る。刀を握り直し魔力を体内で練り上げる。制限突破——身体強化された体から青い魔力を炎のように漏れ出した。

「ジョニー、行けるな?」

「上等ツ!!」

足に力を込め跳ねる。地が碎ける音より先に前へと飛ぶ。残り40メートル。

「団に乗るなあああ！」

一際大きな黄金の波紋が現れ、緑の宝石で装飾された巨剣が現れた。千山切り拓く翠の地平と呼ばれるその剣は、ナツが食べた万海灼き祓う暁の水平の対となる「地平線」の概念を持つ。名の通り山を切り拓くことすら可能であろう巨剣は振り払うのではなく、今までと同じように射出された。刀で払うには大きすぎ、剣で受け止めるには大きすぎる。

「なら避けるしかないよな！」

前方へと飛び上がり、射出され斜めに突き刺さったイガリマの上へと着地し走り続ける。

「おのれえ・・・！」

「バーカ！自分で道作つてどうすんだよ！」

そう、イガリマの全長は50メートル近くあり、それが地面に突き刺さったことで偽の英雄王までの道が出来てしまつた。美貌を歪ませ怒りを露わにし砲門から武器を解き放つ。逃げ場のないよう全方向から放たれる剣撃は一度当たるだけで弾け死ぬ。余計なことなど考えず目の前に迫りくる武器を全て払い退ける。

「ハアア!!」

エルザと背中合わせになり互いの背を守り合う。更にヒビキの古代魔法により第三視点による死角の防御。手だけ動かしていたのでは間に合わない。脳を、体を、身体全てを活用する。

「クソ……こんなはずじゃ……！」

偽の英雄王は自分の手を頭に当てる苛立てる。英雄王の力を持つ自分こそが最強無敵のはずなのにこんなクソ雑魚に手間がかかるなんて。だがアレがある限り勝ちは譲らない。苛立ち混じりの中、勝つ自信がある。美貌に相応しくない邪悪な笑みを浮かべて変わらず武器を放ち続けた。

「やつぱり多いな……！」

ここ最近は無茶な行いをよくしてたせいで自然と体力が上がったのか、制限突破の活動時間にはまだ余裕はある。しかし、切り抜けられない。この剣群さえ突破できれば、やつの顔面に拳を叩き込むことが出来るのに。

「死ね死ね死ねえ!!」

黄金の波紋がドーム状になり、完全に周りの景色が見えなくなる。外と中とで区切られた今ヒビキの古代魔法による支援は不可能。左右上下ともに逃げ場なし。「ジョニイ！」

「分かつてる！」

オーバー・エッジ

刀身変化。 右手で持っていた刀がどろりと溶け、拳にまとわりつく。弓を引くかのように大きく後ろへと振りかぶり、腰の捻り、拳を振るスピードを活かし地面を殴りつけた。

「――三龍牙!!」

籠手とかした刀は強度は変わらず、太陽に入れても溶けないとのお墨付きを貰った強度を持つてして殴りつけた地面は3度の衝撃を持つて大穴を作り出した。

「死にやがれえええ!!」

英雄王になりきる事すら忘れた偽の英雄王は絶叫と共に、構えていた全ての武器を射出した。一瞬、金色の閃光が輝いて見えた次の瞬間巨大な爆発が起きた。放つたものは全て武器であるにも関わらず起きた巨大な爆発。逃げ場もない2人が生き残る術などない。

「勝った……！」

「いや、まだだ」

背後から声が聞こえたと同時に振り返る。視界に入つたのは鈍く光り輝く黒刀。顔に直撃することはなかつたが、少しだけ掠めていつた。

「――痛ツ！」

熱した鉄で直に焼かれたかのような鋭い痛みが奔った。咄嗟に手で押さえると、刀が当たつた肌から温かい血液が漏れ出すのを感じた。英雄王となつて初めて見る自分の血。

「体は英雄王でも……中身はまるでなつてないな」「お前ツツ……！」

神経が千切れぐらい、内から湧き出る怒りが止まらない。偽の英雄王はもはやなりきる事すら忘れそうになつた。だが――

「何を勝つた気になつてゐるんだアアアアアアア!!!!」

切札がある。黄金の波紋が一際大きく輝く。ジョニイはそれが来るのを分かつていたかのように走り出したが、その行動阻害するかのように剣がいやらしい位置で射出された。

「――原初を語る！天地は分かれ、無は開闢を言祝ぐ！世界を裂くは我が乖離剣！」

波紋から取り出されたのは剣と言う割にはあまりそうは見えない、円柱状の刀身が三

段に重なつているドリルのようなものであつた。

本来の英雄王であれば本当に認めたものにしか使わないとされるその剣は偽物によって矜持を踏まれ使用される。

「アイスマスク——槍騎兵！」

「火竜の咆哮!!」

そうはさせないと炎と氷が外から襲いかかるが、刀身が高速回転した途端溶けて消えた。

円柱状になつてゐる刀身はそれぞれ右左右と別方向に回転しており、そこから発生した赤より禍々しい何かは竜巻を発生させた。

「星々を廻す臼、天上の地獄とは創世前夜の終着よ！」

乖離剣エアと呼ばれるその剣は宝物庫の最奥に収められており、「剣」という概念が生まれる以前に星に鍛え上げられた神造兵器であります。天と地を分け、星の原初であるあらゆる生物の存在を許さない地獄が今ここに降臨する——!!

「天地乖離ス——！」

とある世界。贋作者と英雄王の戦いを知つてゐるだろうか？

異なる世界線にて運命に巻き込まれた少年は自身の心象風景である無限の剣の世界に引き込み、英雄王の放つ神代の武器を複製し、相殺する事でなんとか戦つていたのだ

がそれでも圧倒的な差があった。しかしそれでも少年は勝つことが出来た。それは何故か――？

『やつにはとつておきの弱点がある』

『弱点？ そんなものなさそうだったのだがあるのか？』

戦いの前。ジョニイは皆に告げていた。

それは彼だから分かる致命的な弱点。

『あいつ自身大した力は持つてないけど、蔵に収められている武器がほとんど最強だ。だからあいつは自分の力に過信しているところがあるんだ。だからそこを突いたら勝機がある』

『・・・そこまで言うからには何かしらの作戦があるのか？』

『ええ、とつておきのが』

「開闢のほり——！」

「待つてたぜ。それ使うの——！」

上空に掲げられた死を体現する赤い竜巻が振り落とされる正にその時、偽の英雄王の乖離剣の持つ手が急に姿を現した人影に動きを止められた。

「貴様!? 何故・・・! ?」

「俺の後ろ見てみな」

剣撃を弾け続けるもう一人のジョニイが白く染まり、碎けた。地に落ちたのは青く輝く氷の結晶。

「さつき潜った時に入れ替わったんだよ」

押し止められた死の竜巻が上空に向かって放たれた。三層からなる刀身は「天」、「地」、「冥界」を現し、それらを合わせ宇宙を体現する。放たれた一撃は上空に浮かぶ雲を容易に引き裂き更に伸び続ける。空間すらも破壊するそれは宙にヒビすら発生させた。

「さあ仕置の時間だ。本物の英雄王に変わつて代わりに俺がその根性叩き直してやる」

「王の——！」

「ゲート・オブ

リミテッド・オーバー

臨界点突破——六龍牙。

音に迫る速さで放たれた6の拳撃は的確に鎧の上を撃ち抜く。

「ぐ、おおおおおおおお!!」

鎧の上から拳による攻撃など意味もないが、あいにくと六龍牙は内に響く攻撃だ。鎧に振動が伝わり、それが内部に浸透していく。限界を超えたことで骨が軋む音が内から響いたがそんなもの御構い無し。ただ全力で――!!

ラスト6発目。全ての衝撃が中に伝わり偽の英雄王は宇宙で5度のバウンドを繰り返し、最後の6発目で地に叩きつけられた。

ハア・・・ハア・・・!

殴り抜いた右腕が震えて動かない。がやり遂げた。格上相手に死なずに済んだだけで大いに結構。安心したのは強張った体から緊張が消え、力が抜けてしまい未だ突き刺さつたままのイガリマの上で転ぶかと思いきや、倒れる動きは停止した。

「凄かつたです・・・本当に」

「そう語ってくれてどーも・・・」

戦艦からの砲撃をしていたサクラや一夜達はいつの間に降りてきたのか既にニルヴァーナの城塞にいた。土煙は浴びていてが怪我はなさそうでよかつた。

「私も強くならなきやいけないですね」

「本当・・・俺が楽出来るようにもつと強くなつてくれよ」

自分の為ですかと笑うサクラに肩を担がれイガリマを足場にし地上へと戻る。原作

と乖離しすぎには程があるがこれで一安心だ。あとはニルヴァーナを動かす核さえ壊せば——

「離れろツツ!!」

「きやつ！」

サクラの体を押し出す。こういうことを直感というのは何か背後から感じ、見てみれば何か黒い物体が放たれていたのだ。放たれた先には黄金のクロスボウを手に持つ血反吐を吐いた偽の英雄王の姿。もし体力が残っているのであればサクラを抱えたまま回避できただが、もうそれが出来るほど体力は残っていなかつた。

「アルさん!!」

「クソッタレが！しぶといやつだ」

飛んでくる黒い物体に残りカスほどの魔力を注ぎ込んだ拳を放つた。英雄王の持つ武器にこんなもので対抗できるとは思わないがやらないだけマシだ。

「うおおおお!!」

拳と黒い物体がぶつかる。が、空振りしたのかまるで当たった感覚がない。確かに捉えた筈なのに黒い物体は視界のどこにも

「があ?!」

黒い物体を殴った右腕から激痛が疾る。何事かと見てみれば黒い物体が俺の拳に付

着しており、どんどん俺の体内に侵入してきていたのだ。一向に止まる気配はなく黒い物体は俺の中で脈打つ。

「アルさん！」

こちらに向かって駆け寄つてくるサクラ。心配そうな顔をしてこちらに近づいて来る姿を見ると――無性に殺したくなってきた。

「く、来るな・・・！

これはヤバイ!!

意識が朦朧とする。自分ではない誰かに体が侵食され殺意が無限に湧いて来る。それと比例するかのように黒い魔力が俺の中に募つて來た。

「離れろ・・・！」

サクラの肩を少し押しただけだつた。だが俺の意識とは裏腹に体が動き、黒い魔力がサクラを払つた。10メートル以上吹き飛びようやく動きを止めたサクラはゴホゴホと息苦しそうに呼吸をしていた。

「くそ・・・もう無理だ・・・」

視界が黒色に染まり、意識は消えた。

L V. 47 黒閃

話はエルザとジョニイが戦つた日に戻る。

エルザとの接戦をしたものも惜しくも破れてしまつたジョニイはギルドの2階で休息しておりエルザ、ルーシイ、サクラの3人はギルド1階のカウンターで話し合つていた。

「やっぱりS級って強いわね。ジョニイが負けちやつたんだから」

「そうですよね。アルさんが強いことは身にしみて分かつてたんですけどそれを更に超えてくるとは」

マグカップに入ったコーヒーを持ち上げるのをやめたエルザが苦笑い気味で二人に言葉を返した。

「いや、あれは実際には私の負けだつた」

「え?」

エルザの言葉に思わず驚きを隠せない二人。

あの戦いはどう見てもエルザの勝ちだったのにどうしてそんなことを言うのだろうか。

「えっと、どうして？」

「これは戦つた私にしか分からぬと思うのだが……確かに形式上では私の勝ちだつた。が——」

エルザが強張つた顔でマグカップを持ち上げようとするがソーサーから持ち上がりない。正確には持ち上げようとしているのだが震えているのかカタカタと音を立てていた。

「恐ろしいキレと重さだつた……！」

未だに痺れが残つてゐる……！」

ふう、と一呼吸置き、マグカップから手を離すエルザ。

「私はほんと魔力を体の強化に注ぎ込んでいたのに対し、あいつは限られた一瞬だけ強化して私とほぼ同等の技量だつた。魔法なしの戦いか、あいつが私と同じだけど魔力を持つていればおそらく——……」

言葉は続かない。しかしその言葉の真意を2人は理解していた。

「ああああああああああああアアアア!!!」

叫び声が反響する。痛みに神経が集中し過ぎてはいるのか涎は口から垂れ、目が充血していく。黒い魔力がジョニイの中に集まり、それらが体外へと放出され形作る。

「アルさん!?」

「やめろ！今行つたら巻き込まれるぞ！」

「けど・・・！」

自分は何の助けにもなれない。自分の無力さを思わず恥じてしまう。

黒い魔力はジョニイを取り囲み、姿を隠させた。離れていても分かる魔力の量。ただ魔力そのものが感情でも持っているのか、肌に突き刺さるような感覚が残る。

「ジョニイ！」

「待て！ナツ！ああ、クソッタレが！」

ナツについてグレイが飛び出した。ジョニイを球状に囲う黒い魔力に向かつて、炎を纏つた拳や蹴りが何度も何度も炸裂するが壊れる気配がまるでない。

「くそつ！何でだよ！」

「やめろナツ！腕が壊れるぞ！」

「うるせえ！」

静止するナツをグレイは必死に止めるがそれでも止めない。黒い魔力に拳が当たるたびに裂けた肌から痛々しい血が吹き出す。

「ジョニーを・・・離しやがれええええええ!!!」

祈りが届いたのか、ナツが再び拳を放った時、黒い魔力にヒビが入つた。ピキピキと

「ちよつと待てよ・・・幾ら何でもこんなのあるか・・・!?」

漏れ出す白い光は聖なる光ではなく、反転の光。白なのに闇という矛盾を抱えた光は周りから吸収した魔力を自分の中へと溜め込み、蛹から蝶へと生まれ変わるように、今それが降臨する。

「三人ともすぐに離れ——」

ジョニイを囲んでいた黒い魔力、いや殻が内側から爆発し極光を辺り一帯に放つた。爆発の影響は凄まじく、離れたところにいたエルザ達の視界すらも埋め尽くした。

むんつ！

ジユラは爆発で飛んだ二人を器用に土を操作して滑り台のようなものを作り二人を地面に戻した。

「どうなつた・・・?」

「おい、アレは何なんだ・・・?」

レンが指差した方向は未だ煙が舞い上がり視界良好とは言えなかつたが、黒い何かの姿を微かに捉えた。

「まさかとは思うがニルヴァーナの核を体内に取り入れたのか・・・!?

「どういう事?」

「ルヴァーナの魔法は説明したね? ホットアイ程の魔道士が反転したんだ。そんなものを体内に直接打ち込まれたりでもしたら・・・」

!!!!

獣のような咆哮が轟いた。巻き上がつていていた煙は咆哮によつて搔き消され、うつすらと見えた黒い影の正体が分かつた。

足が地面につけられ、仮面から飛び出た鈍く光る黒い角が体が動くたびユラユラと動く。

「あれがジヨニイなのか……？」

「見る影もないがおそらくは……」

黒い獣はサクラ達のいる方向を何をするわけでもなくじつと見つめている。

「こっちに来ないな」

「意識があるんじゃない？」

「いや……どちらかと言うとアレは」

エルザは自身が行つたクエストで対峙した獣達を思い出していた。じつと見つめる
目は興味がないということではなく――

「こちらを品定めしているような……」

3人、空中に飛んでいた。

「は？」

目は一瞬たりとも離していなかつた。しかし、動く瞬間も動いたという認識すら全く出来なかつた。音もなく静かにレンとイヴ、そしてシェリーガ空中に舞い上げられ意識も奪われているのか地に落ちる音だけを残して動かなくなつた。そこまでしてようやく黒い獣が元いた場所が陥没した。

「ジヨニイ何を——！」

?????・・・

エルザの問いかけに反応すらせす黒い右腕が伸びる。エルザの顔のすぐ横を通り過ぎた腕はエルザの後ろにいた一夜を正確に掴みそのまま伸び続け壁に叩きつけた。伸縮自在の腕なのか伸びた腕はシユルシユルと元の長さに戻る。約5秒。5秒しか経つていないので既に4人がやられた。

「お前・・・！」

何をしている！』

ここまで来てようやくリオンが動いた。思考が停止していたが直ぐに拳を掌に乗せ魔法を放つ。リオンとグレイは同じ氷の造形魔道士であるがグレイが剣や、斧といった武器を作る「静」という性質を持つていてのに対し、リオンは鳥や虎のような「動」と性質を持っている。同じ魔法ではあるがリオンの魔法の方が機動性がよく追尾、操作が出来る。それを使い黒い獣の左右上下に氷の鳥を放つ。まともに受けければ大ダメージ

が期待出来るが黒い獣は逃げない。

(何故逃げない？！?)

当たれば致命傷だぞ!)

青い残光を残して、氷の鳥は黒い獣に直撃した。氷の爆風は離れた所にまで届き地面の上に氷の結晶がパラパラと落ちる。狙つた箇所は首の裏、心臓を前と後ろ、そして腹。一箇所でも当たると後に響く痛みを追うはず。だというのに――

????? · · ·

無傷。

黒い魔力が体全体に纏つていているせいだろうか。それとも目に捉えることが出来ない超高速によつて迎撃したのかは分からぬ。しかしまるで効いていないということには変わりはない。

「アイスマイク——ブリズン牢獄！」

氷の牢獄が降り、黒い獣を閉じ込めた。次いで格子と格子の隙間に打ち込まれた氷の剣や斧が直撃する。

「リオン！しつかりしろ！やられるぞ！」

「あ・・・」

考えることが静止していた。あの黒い獣は人間の本能的な所で敵わないと理解してしまう。だから恐怖しないように考える事を自然とやめていたのだ。取り戻した意識を使い氷の魔法を再び放つ。

????????!!!!

例えるなら音の爆弾。巨大な咆哮は氷の牢獄をいとも簡単に粉碎し、次いで降り注ぐ剣や鳥を無残に破壊した。あまりの音で耳を塞ぐ。塞いでしまった。

グチャツ！と、音にすればそんな風になるのか。体の臓器を保持する骨など容易に碎き、そのまま内蔵を貫いていた。

L V . 4 8 黒獣の咆哮

「リオン！」

喉が裂ける程の絶叫がグレイの口から出た。黒い獣と化したジョニーの一撃は骨を碎き内臓を貫いた。リオンは派手に空中を飛んだ後、受け身を取らず地に落ちた。腹部からはあり得ないほどの血が溢れ出し、直ぐにでも治療しないと死んでしまうのは明らかだつた。

「ウエンディー・・・私達が時間を稼ぐ。その間に彼らを治療してくれないか？」
「わ、分かりました・・・けど」

怯えた瞳で黒い獣を見る。1分も経たないうちに半数が倒されたのだ。S級魔道士や、聖十魔道士がいてもとても危険だと。
「頼む。ウエンディーにしか出来ないことだ」

眼に迷いがない。絶対に食い止めるという意志が心に伝わった。ウエンディーはコク

リと大きく頷き、一番近くにいるリオンの所に行こうとした。

「――」

が、そうはさせない。黒い獣は赤い目を輝かせ、ウエンディに黒爪を振り下ろそうとしていた。ウエンディが存在に気付いた時にはもう黒爪は目の前に迫っている。恐怖という感情すら置き去りにして爪が華奢な腹部を貫通する。

「ハアア!!」

ウエンディの頭上で黒と対比するよう銀閃が輝き、黒爪の行く手を塞いだ。ウエンディが銀閃の元を辿るといつの間に移動していたのか。サクラが剣先で黒爪を止めていた。

「早く・・・行つてください」

「は、はい！」

再びウエンディは走り出す。黒い獣は当然逃がすわけがなく目の前にいる障害を避けようと黒爪を振るう。サクラがその一撃を止められるかというと止められない。今自分には止められない。ならば――

アガートラム
「——武源解放!!」

紋章が輝く。未熟だった剣士は今だけは歴戦の剣士に匹敵する技量を得た。力ではなく技で爪をいなす。剣戟は1秒に10を超えており空中にぶつかり合った火花が何度も飛び散る。

(まさかアルさんとこんな時に初めて本気で戦うなんて……!)

理性が狂っているように見えるその動きも、僅かながらジョニーの癖が出ている。それは側から見れば何事でもないだろうが、毎日鍛えてもらっているサクラだから分かつことなのだろう。だからこそ――

「ツツ!!

黒爪をいなすと同時に一步前に出れた。黒い獣相手に進めることが自体は凄いことだ。しかし黒い獣は爪を使つて攻撃し、サクラは刀を使つている。リーチ内に入り刀が振れないサクラに対し黒い獣は狙いすましたかのようにその爪を首に落とそうとしていた。絶体絶命のピンチ。そんな時サクラの中では走馬灯が駆けるのではなく、一つの教え。『敵が体術、自分が武器を使うとした時は――』

「相手を押し込む!!」

それはジョニーの教える一つ。間の取り方だ。足に万力の力を込め体ごと黒い獣にぶつかる。爪は空を切り裂き、黒い獣は後ろにバランスが崩れ、伸びた爪が戻るまでの

0. 1秒は無抵抗だつた。

その隙があれば充分だと返事をするようにサクラの腕に描かれた紋章が呼応し、より輝きを増す。銀閃が一つ、二つ、三つと振り抜かれる。銀閃が消える前に更に次、それが消える前に出て更にもう一つ。重なり合った銀閃はまるで白い彗星のようだつた。

アアアアアアア
!!!

三

黒い獣も爪を伸ばし抵抗するが、振り抜かれる剣閃がサクラを包むように放たれるので触れるたびに弾かれた。グレイやリオンの氷の造形魔法を食らつても無傷でいた黒い獣が、地に着いた足をようやく浮かした。

「無限刃!!」

重なり合つた剣閃が飛翔する。銀の閃きは黒い獣の体を完全に浮かせ、真っ直ぐ前方へと吹き飛ばし、壁へと着弾すると圧縮された斬撃が一瞬白い光を散らし、爆発を引き起こしたかのように爆裂した。

綺麗な断面図を残した瓦礫が積み重なる。その中から黒い獣が見えたが身体的ダメージはなさそうではあるが、呪詛のような呻き声を出していた。

「分からぬことの方が多いが、ニルヴァーナとジョニーは深く結び付き合つてゐる。だから氣絶させたら自然とニルヴァーナも解除されるはずだ！」

「言うには簡単だけどな……！」

ヒビキの横で、グレイが掌に拳を乗せ魔法を放つ。質より量を選んだグレイは脆いが当たれば擦り傷ぐらいは与えられるそれを無限に複製し、放ち続ける。銃弾のように放たれる氷の短剣は30メートルの間合いを2秒で詰め次々と短剣が突き刺さる。中には魔力の渦にかかり消されましたがあくまでこれは攻撃では妨害。その役目は充分に果たしている。

「火竜の――!!」

上空から迫る影。その手に宿るのはもはや火ではなく太陽の輝きに似た灼熱だつた。黒い獣も黒い魔力を腕に収束させ、膨張させる。体に対して約3倍近くなつた右腕を、躊躇いなく放つた。

「——鉄拳!!」

燃え盛る拳と、黒い奔流がぶつかり合う。混ざり合った魔力は大地に亀裂を走らせ、荒れ狂う暴風は巨石を舞い上げた。その中心地にいる二人はそれぞれ炎と純粹な力のみで拮抗している。

「ナツが押されてる……!?」

「何て魔力をしてるんだアイツは……！」

攻撃する機会を狙っているルーシイの鍵を握る力が思わず強くなつた。ナツは押されてるのが分かり、顔が一瞬強張つたが、次の瞬間にはやんちゃな笑み浮かべていた。「こうやって戦うのは初めて会つた時以来だなジョニイ！でも今のお前じやねえ！早く……戻つてきやがれ！！」

太陽が、二つ灯る。両腕に火炎を纏つたナツは一撃二撃と肥大化した黒い腕に叩きつける。滅竜魔道士は感情によつて魔力が増大することがある。ナツの中にあるのは本気のジョニイとどこまで戦えるのかという好奇心。その感情そのものが魔力へと変換され人の腕から竜の腕へと変貌を遂げる。

腕に宿る炎が、さらに燃え上がる。その熱気は黒い獣の背後にある建物すら溶解させてしまうほど強力。それを何度も叩きつける——！！

「——紅蓮!!火竜拳!!」

火山の噴火を思わせる爆発。黒い獣は何度も地面をバウンドして地面を滑る。体勢整つてない今の状況に岩の柱が何本も突き刺さった。

!!

ここまでやつたのだ。もうこれを振りほどく力もなかろう

「よし、あとは氣絶させるだけだ——！」

黒い獣が絶叫を上げた。聖十魔道士にもなるとその分力は上がり、黒い獣は必死にもぐくが背中から抑えられているため動くことは容易ではなく、更には指先に至るまでに岩によつて束縛されていた。

!!

黒い獣が、咆哮を放つた。

夢を見ている。一人の少年が複数の少年達に囲まれている夢だ。俺はそれに干渉できず、ただ少し離れたところから見つめるだけだ。囲まれている少年はその場でうすくることしか出来ず、囲んでいる少年達に笑われていた。その光景を見て関係がないはずの俺の胸も痛くなつた。だが人に囲まれ暗闇だつた視界に一筋の希望が見えた。少年はその光に手を伸ばす――

視界が、赤色になつた。

なんで、どうして、意味がわからない、俺が何をした?
何でそんな目で見る?おかしいおかしいおかしい
俺はただ伝えたかつただけなのに何故何故何故?

「「「????」」」

大勢の子供が、大人が、冷めた瞳で俺を見てコソコソと何かを話す
何故そんな目で俺を見る?俺はただ――

「そう、お前は悪くない」

背後から迫る声。頭が破裂しそうなほど情報の波に飲まれているというのにその声はやけに誘惑的だつた。振り返ることは出来ない。それとは決別したのだ。もう忘れたのだ。だから振り返らない。やなことは全部忘れてまた始めから

「無理に決まつてゐるだろ。忘れないことはどうやつても忘れるることは出来ない。一種の罪だな」

声がすぐ後ろで聞こえた。

「見ろよ。あいつらを、また俺たちをあの日みたいに攻撃してくるんだぜ？このままでいいのか？」

このままでいい？あいつらって誰のことを言つてるか分からぬけど俺には何も出来ない

「出来る。何のための魔法なんだ？不可能を実現させるのが魔法だろ？あいつらを見返せ。冷めた瞳をするならその目玉を抉り落とせ」

真っ暗な世界の中に映像が現れる。何かに押しつぶされた俺は目前に迫る誰かから剣で切られようとしている。

「どうする？無抵抗で受けるか？」

冷めた瞳が俺を見つめていた。その瞳をするな。何もわかつていないくせに。お前達に何がわかる?

「そう。戦わなきやな。だからこそ——」

肩に手が触れた

「俺と変わりな」

L V. 49 覚醒

俺はただ伝えたかつただけだつた

一筋の光は俺を照らしてくれ生きるための目的を教えてくれた

なのに何でやつらはそんな目を向ける

そんな目をするな

何も分かつてないくせに

そんな目をするな

「ジョニイ！すまん！」

身に迫る大剣を担ぎ、石柱に押さえつけられている黒い獣めがけて疾走するエルザ。黒い獣は敗北を受け入れたかのように大人しくしている。エルザの腕力にスピードが加わった一撃は巨石すらも容易に塵となるだろう。しかし使るのは側面だ。仲間思いのエルザの優しさであると言えるだろう。

?????/?
· · · · ·
」

距離は残り2メートル。空気の層を裂きながら迫る大剣は、無抵抗な胴体に振り落とされる。これで終われ、と心で願い落ちた刃は――

「
?????
」

赤い噴流によつて掬だけを残して消えていた。

「——な!?

その技は、彼ではない彼が見た技の一つ。竜の力を持つ少女が用いた滅竜魔法。天彗龍。字のごとく天をかける彗星のような速さで飛ぶ竜の力が今具現化した。

エルザがそんなことを知つてゐるわけがなく驚きのあまり反応が遅れ空中に吹き飛んだが、バランスを立て直し両足で静かに着地し正面を睨みつけた。

〔〕

赤い噴流は縛り付けていた岩石を跳ねどけ、降り注ぐ雨のように碎けた石が空から落ちる。その中心に立つ黒い獣は今までの四足歩行の体勢から、二足歩行に移行し、その振る舞いは人間そのものであつた。

黒い獣は顔に張り付いたツノの生えた仮面に手を当てて、引き剥がす。ガラスが砕け散るような音が響くと同時に、纏わりついていた黒い魔力が弾けた。

(荒れ狂っていた魔力が収まつた・・・安定している)

そこに立つていたのはジョニイ・アルバートそのものであつたが、肌は褐色に染まり、髪色も真っ白へと変貌している。その二つの点さえ除けば違ひはないのだが第六感というやつなのか、エルザはさらに気を引き締めた。

「誰だ――？」

最初に発した言葉は安堵の声ではなく、緊張に包まれた確認だつた。剣を持つ手が強張るエルザに対して、ジョニイはおちやらけた声で言葉を返した。

「おいおい、仲間の顔を忘れたつていうのか？」

正面を向いたジョニイの目は赤色に染まつており、瞳孔は万華鏡のように美しく、しかしどこか狂気を感じさせるような紋様が描かれていた。自身の体を確かめるように手を握つては開きを繰り返し、つま先を地面に軽く打ち付けた。

「そんな警戒するなよ。戦う気はないからさ）・・・」

ニタニタと笑うその姿はピエロのように見えた。黒い獣よりも穏やかで、理性があるというのに何故か冷や汗が止まらない。

来る、と確信し正体が分からぬがそれ以上に何か恐ろしい気配を感じ取つたエルザは最大量の魔力を体に流し大地を踏みつけて前に出た。

「ハアアアアアアアア!!!」

「大振りだな。そんなんじややられたい放題だ」

エルザが大剣を振り上げて打ち降ろすまでにかかる時間は1秒もからない。人間が何かに反応するまでにかかる時間はどんな超人でも0・1秒を超えることはできない。故にエルザのこの一撃は目に入つた瞬間に既に刃が体に迫つている。仮に防御姿勢を取つていたとしても弾き飛ばされるのが精々だ。

「六龍牙」

神速とは正にコレを意味するだろう、と言わせるかのごとく放たれた六連打は全て同じ箇所に撃ち込まれた。六発全て鎧の上。剣や斧による斬撃から守るためのプロテクターにはダメージは無くとも衝撃が伝わる。それが奥に差し込まれる釘のごとく奥に奥へと衝撃が伝わり背中で反射して前から来た衝撃とぶつかり体内で爆発が起きる。

力ハツ

エルザの口から外傷とは不似合いな血液が溢れ出した。打ち込まれた6撃で空中に

浮かんだエルザの軌道に合わせて技を撃ち終わったジョニイの体が回転する。鞭のようにしなる足は体ごと空中で一回転しエルザの背中に蹴落とし地面へと叩きつけた。しかし地面が途端に湾曲し柔らかいソファに落ちたように叩きつけられた衝撃が分散された。

「——ん？」

「地面を柔らかくしました···そして今デス！」

いつのまにかぬかるんだ地面がジョニイの足首を噛み付いた蛇のように絡めとりグイッと空中に引っ張り上げる。いかに化け物じみた強さとは言えど空中では身動きは取れない。そこに四方八方から迫る炎弾、氷の剣、更には石柱が迫り来る。過剰とも言える攻撃。しかしジョニイは焦ることなく飛来する攻撃を万華鏡の瞳で全て目視しかもむろに右手を横に伸ばした。

「——來い」

その一言がトリガードとなり地面に刺さっていたジョニイの黒刀がひとりでに抜け、弧を描きながらジョニイの掌に収まつた。その瞬間黒い竜巻のようなものが刀身上に現れ絡みつく。細く鋭い刀身が、鋭さは変わらず刀身の幅が増大していく。

「オオラア！」

力任せに振り抜かれた太刀は風の刃を無数に発生させ飛来する攻撃を切り裂いた。余波により暴風が吹き荒れ目を開けるのすら困難な状況でもジョニイは変わらず次の獲物を定めた。足に絡みついた土を切り裂き、掌から風を噴出させ一気にヒビキの懷へと潜り込み太刀を大きく後ろに引いた。

「お前は何かと面倒だからな。先にやらせて貰う」

防御の姿勢も取れないままヒビキの胸に吸い込まれるように黒い太刀が迫る。死の覚悟をした瞬間、銀閃がジョニイとヒビキの間を通り過ぎた。閃光のように真っ直ぐ伸びる物の正体は白銀に光る刀。

一瞬気を取られたジョニイ。顔を戻した時には目の前には魔力を帯びた蹴りが飛んできていた。

「ハアアアアアアアア！」

裂帛の声を乗せた一撃はサクラによるものだつた。太刀を戻すには遅すぎるし、手放しても対処は間に合わない。ならばと万華鏡の如き美しい瞳を脈動させる。

「——須佐能乎^{スサノオ}」

地獄からの使者のように地から現れた、人間の骨格の形をした化け物はジョニイを守るように包み込み人間の5倍に匹敵する巨腕を持つて蹴りの威力を殺した。そのまま薙ぎ払うように腕を払いヒビキとサクラを吹き飛ばす。

「こいつはいい。力が溢れてやがる……！」

体から外に放出される黒い魔力が、左半身しかない黒い骸骨の空の手に収束される。轟と唸らせるそれはまるで炎の剣のようではあるが、黒を飲み込む闇を思わせるその色が炎でないことを明らかにしていた。

「おいおい……いくらなんでもあればやばいんじゃねえのか……！？」

「グレイ！ 合わせろ！」

体から流れる冷や汗が止まらない。しかし、それが諦める理由にはならない。前へと疾走したナツの意図を即座に読み取り、掌に拳を勢いよく乗せた。

「アイスメイク——氷聖剣！」
コールドエクスカリバー

白い冷気が凝縮され、生み出されたのは身の丈に迫る巨大な氷の剣。それが2本、グレイの背後で放たれるのを今か今かと待ちわびる。

「オオオラアアアアアアアア!!」

グレイの手が前方へと伸びると同時に一本、そして二本目が数秒遅れで飛翔する。地を凍らせながら真っ直ぐ飛翔する氷の大剣はどういうことかジョニイの直線上にいるナツにも当たるような軌道。

「ナイスパスだなグレイ!」

ボツ!!と勢いよく炎がナツの足から放出され軽く宙に飛び上がる。更に炎の噴出が続きナツの体は独楽のように早く回り、炎の残光が円を形作る。

氷の大剣が紙一重でナツの横を通り過ぎたその時、飛翔する大剣の柄を加速された足で蹴り抜く――！

「――オマケにもう一つだア!」

倍の加速となつた氷の大剣は青の閃光を残してジョニイとの距離を一瞬で詰める。あの黒い骸骨の耐久力は異常とも言える。現時点で放てる最大の魔法。

「——無駄だ」

いとも簡単に、服に絡みついた蜘蛛の巣を手で取ると同じように飛んでくる氷の大剣を、須佐能乎の刀で簡単に弾いて見せた。

これで終わりだとジョニーは笑みを浮かべたがナツ達の表情がおかしい。笑つている。

まるでこうなるのが予定通りだと言わんばかりに——

「お前目エいいもんな・・・けど見えないところからなら目は関係ねえ！」

——後ろ！

と思つた時には緋色の髪をたなびかせ氷の大剣を振り下ろす姿が目に入つた。

いつのまに復帰したのだろうか。それにいつのまに連携を取つていたのか。そんなことはジョニイには分からぬ。しかし、彼らの絆は言葉がなくても伝わる。仲間を救うためならばこんなことは朝飯前だと。

「目を覚ませジョニイー！」

驚きはしなかつた。だが別の感情が腹の底から沸々と沸く。羨望や嫉妬ではなく憤

怒。

仲間との絆？そんな目に見えないものを信じてどうする？信じられるのは己のみ。それ以外は利用価値のあるやつか敵のみ。それを信じるなんて馬鹿らしい。

だがそれを顔に出さず。嘲笑う。

万華鏡の瞳が胎動する。それが無価値だと証明するために彼は口を開いた。

「——レベルアップだ」

瞳が、紅く輝く。

L V. 50 再び

背後から迫り来る冰の大剣はいかに耐久力が優れている須佐能乎でも無傷ではいる
れないだろう。それを見てジョニイは焦るわけでも、驚くわけでもない。心の底から溢
れ出す怒りを魔力へと変換し、万華鏡の瞳へと魔力を流す。

「——レベルアップだ」

瞳がより紅く輝く。

骨のみで形成された須佐能乎に纖維のようなものが無数に絡み合う。

それは肋骨、腕、そして頭部へと絡み絡み合い、骨を支える筋繊維となる。空洞だつた眼球から光が散つた。氷の大剣を片腕で防ぐ。ミシミシと音を立てたが骨を碎くには届かず、覆われた筋繊維によつて衝撃が吸收された。

「こいつ……化け物か——!?」

氷の大剣が半ばから碎けた。それはあまりにも致命的な隙だつた。ナツ達が助けるまでには距離が開きすぎた。そして武器や鎧を呼び出そうとしても間に合わない。

「終わりだ——」

須佐能乎の拳が唸りを上げる。力の分散も、抵抗も何もない一撃は人間の何倍もの拳を持つてエルザの体全体を撃ち抜いていた。

まるで投げられたボールように空中に打ち上げられたエルザは最高点にまで到達し、そのまま地に向かつて落ちた。間一髪のところでナツが自身の身を滑り込ませたことによつて間一髪は間逃れたが、それでも須佐能乎の一撃はあまりにも重すぎた。

「お前……仲間を……!!」

ナツがジョニイを睨みつけるがまるで氣にも留めない。エルザを倒したということにすら無関心。

「仲間とか敵とかどうでもいいんだよ。どうせ——」

「——お前らも同じなんだろ?」

ただ、その顔だけは少し寂しそうに見えた。思えばナツはジョニイの過去なんて殆ど知らない。転生前のことだなんてそれこそ知らない。だからその顔が何を伝えたかつたかは知らないが、それでも——

「だからそうならないようにお前達を殺す」

手を伸ばせない。立っている地面が心臓の鼓動のように大きく跳ねた。それは1回、2回では済まず、回数を増すごとに揺れ幅が増えていく。

「仲間だなんて信じられるか。なんかあつたらすぐにその繋がりを消すんだろ?」「違う!仲間を捨てたりするわけがねえだろ!」

ハツ、とジョニイは蔑むように笑った。そして万華鏡の瞳がナツを見つめた。

「そういうのが嫌なんだよ」

足場が崩れた。タコのように無数の足が支えとなつてゐる城塞そのものが崩れ落ちたのだ。しかしただ地面に向かつて落ちるのではない。落ちた瓦礫が吸い込まれるように一点に集まり縦へと伸びる。空中に放り出されたナツ達はそれを見上げることしか出来ない。

「俺にとつてお前らはただの道具に過ぎない。そしてお前らの使い道もここで終わりなんだよ」

ニルヴァーナが分解され、その瓦礫で形成されたのは全長50メートルを越す巨人。人間など蟻に見えるであろうその巨躯が手に持つのは同じ瓦礫で出来た剣。というより棍棒に近い武器には風が纏わり付いており、龍巻を引き起こしていた。

「——じゃあな」

ジョニイが手元に発生させていた火が龍巻に注がれる。根元から上へ上へと登つた火は火災旋風となり、辺りを破滅の光で照らし出す。それを巨人の頭上へと掲げ、手に持つ厄災を躊躇いもなく振り落とした。

「・・・うう」

目を開く。午前中は陽光が差し照らしていたが、今はその影はなく、曇天とした空が森を薄気味悪くしていた。サクラは体にのしかかる負担を押しどけゆつくりと体を起こした。

「あ、起きたんですね。よかつた」

上体を後ろに向けると、ウエンディがにこりと笑っていた。幼く、このようなクエストが初めてであろう彼女の身には不似合いな擦過傷や土埃が無数にあった。しかし、それを気にせずウエンディは治癒魔法を施しながら話しかけていた。

「その方は・・・？」

「この人は・・・私の恩人なんです」

少し寂しげそうに言つたウエンディの目線の先には青髪で、目元に赤い刺青が入つた青年であつた。

「ジエラール・・・評議院に指名手配されていたがまさかこんな所にいたとはな」

「ジエラール……って、確かエルザの」

「そうだ。兄妹のように過ごし、先日の楽園の塔での出来事の主犯とも言える」

今日の前で眠る青年がそんな事を引き起こすようには見えないがエルザの目が本當である事を証明していた。

そして、狙いましたかのように閉じていた青年の目がゆっくりと開いた。

「ここは……？」

「ジエラール——」

まだ体も起き上がつてないジエラールにウエンディは抱きしめた。しかしジエラールは何が何だかという顔で、ゆっくりと一度周りを見渡し最後に自分の胸の中で泣いて喜んでいるウエンディを見た。

「君は……誰だい？」

「え？」

「記憶がないのか……？」

長年の付き合いがあるからこそ、その言葉が嘘ではないと分かつたエルザ。その言葉を受けジエラールは自分の手をまじまじと見つめた。

「自分でも分からない。ただ、エルザ……君のことは何故か分かる。そして君は……すまないが覚えていないんだ」

「そんな……」

ジエラールがウエンディを知っているわけがない。何故ならウエンディがあつたジエラールとはここではない、別のジエラールだからだ。そして今それを確かめる証拠はない。

「あなたは何をしに来たんですか。助けてくれたのはありがたいですが……評議院から指名手配されているあなたを放置しておく訳にはいけません」

分かつていて、とジエラールが自分の罪を後悔するように目を瞑る。

「けど俺はエルザを守りたい……少しでもいい。君達に協力させてもらえないか?」「……仕方がないか。現状少しでも戦力が欲しいぐらいだ。だが言葉だけでは証明にならないため制約をかけさせてもらう」

「ああ、構わない」

ジエラールは自身にかかる制約を気にせず、ジュラの制約の魔法を受け入れた。だが

この魔法は無意味だろうということはなんとなくだが心の中で分かつた。

「それでどうする? あいつは……」

「——俺たちが……やる」

今まで意識のなかつたナツの声が響いた。まだ体力も全開ではなく、敵ともいえるジエラールが認識出来てないのにも関わらずその体は動き出そうとしていた。

「あいつは……ジョニーは俺たちの仲間だ……なら馬鹿やつてるあいつを止めるのは……俺たち……」

再び動きが止まる。地面に接触するのをジエラールが支えることで止め、木に背を預けさせた。

「あいつの動きに慣れている私達が適任とも言える。ここは任せさせてくれないか」「……そんな目で言われたら返答は一つしかないか。なら君達に彼のことは任せる。どちみちまだ意識の戻つてない彼らを放つておうわけにはいかないしな」

ジユラが諦めようく笑う。

曇天の空は少しずつ薄暗くなっていく。希望は見えないが望みはある。身に背負つた傷を度外視して、妖精達は歩き出した。

L V. 51 何度でも

ザクザクと靴が土を踏む音が響く。その度に生い茂る草木が恐れるように腐り、枯れる。

彼はそんなこと気にせず進む。内で殺せ殺せと何かが囁くが彼にとつては只の子守唄にしか聞こえない。曇天の空にうつすらと星が輝き始めた時、ようやく彼は足を止めた。

「懲りずにまた来たのか？」

その言葉に対する返事はない。ただ曇天の空に描かれた7つの紋章から放たれた星が彼への返答となつた。

『そもそもあいつの弱点つてなんだ』

『ジョニーの一番近くにいたのはサクラだ。何かわからないか?』

うーん、とサクラが顔をひねる。普段相手にしてもらっている時は手を抜いてもらつていると言つてもいい。その時の隙を話しても仕方がない。他に何かあつたかと考え、赤く光る目のことについて思い出した。

『あの赤い目・・・確かシャリンガンつていう目のことなんですけど』

『ああ・・・確かジョニーが遺伝子が狂つたことで何とかつて言つてたあの目か』

『あの目つて技や魔法のコピーが出来るんですけど――』

『自分の目でちゃんと魔法が発動する所を見てなければコピーが出来ないんですよ』

白金に輝く星は一つ一つが必殺。躲きなればならないというのにジョニーは落ちてくる星をただ見上げる。

「なるほど・・・写輪眼対策か。けど――」

万華鏡の瞳が変貌する。青い宝石のような瞳が見定めるのは死の点。あらゆる生物物体に存在する寿命を視覚的に捉え、そこを神速の速さを持つて正確に射抜いた。する

と脅威であつた7つの星がまるで元々なかつたかのように消えさつた。

「無駄なんだよなあ・・・！」

右腕に持つ刀に黒い魔力が収束し、刀身が膨れ上がる。それに合わせ柄も巨大化し、両手で振り回す。360度全方位に放たれた斬撃は止まることを知らず木々を簡単に両断した。

「ジョニイイイイイイイイイ!!!」

見上げると地を照らす太陽が浮かんでいた。あまりの眩しさに思わず目を細める。だがそれがどうしたと笑いを浮かべ自らも空へと飛び上がろうと膝を曲げた直後、足に極度の冷感。ふと視線を落とせば自分の膝下まで氷漬けにされていた。

「悪いが大人しくして貰うぜ」

「そう言われて大人しくする奴はいねえんだよ！」

ジョニイイが刀を持つていらない腕を掲げる。人肌だつた拳が白銀へと変わり、それをコートeingするように黒が侵食した。

「爆槌竜――！」

「滅竜魔法だと・・・!?」

大地崩壊――！

地に叩きつけられた拳はもはや隕石に匹敵する威力。自身を縛り付ける氷、そして岩盤もろともめくり上げた。

浮かび上がった岩盤をジョニイはボールのように蹴り抜く。猛スピードで飛翔する岩盤は上空にいるナツへと向かう。

「あいつ……！」

ジョニイにぶつけるためであつた巨大な火の玉を投げつける。太陽の光を思わせる火は岩盤を簡単に消し炭へと変化させたが、その太陽を貫き黒い棘がナツの体を貫こうとしていた。

「天翔ける脚を――バーニア！」

影が迫る速度がグンと遅く見えた。少し目を横に向いていれば、そこにはまだ震えているウエンディが魔法をかけてくれていたのだ。

妖精の尻尾のメンバーのみですると言つたこの作戦にウエンディは進んで行つた。勿論親友であるシャルルには止められたものも、彼らの勇気に押されたのだ。自分にも

何かが出来るはずだと。その為にも――！

「サンキユーウエンディ!!」

「更に――^{ミーティア}流星」

速さの3乗。この瞬間ににおいて最も早いのはナツだ。伸びてきた黒い影を足場とし、自身の脚とターボのように放たれる火の奔流、そしてかけられた魔法によつて光の残像だけを残してジョニイへと迫る。写輪眼でいかに動きを捉えようとも体は動かせない速さだ。ただしそれが写輪眼の場合の速さだ。

「なつ――!?」

先ほどまで赤だつた瞳が、美しい青へと変貌していた。まるで神様が作つたかのような精巧さ。幾何学模様を描くその瞳は何であろうと見抜く。故にその名前は

「――神々の義眼」

例え超高速の移動、一瞬でビルを12等分する半神の斬撃も、果ては因果律だらうと捉えるだらう。本来であれば顔を撃ち抜いていた必殺の拳もジョニイの掌にすっぽりと収まつている。

「何だよそれ!? 見たことねえぞ!」

「だろうな。俺も今初めて使つたからな」

青い眼が赤へと戻る。彼の目のことはあまりよく知つていなかつたのだ。ましてやその上位である万華鏡写輪眼のことなんて知るわけがない。

「ここでくたばつとけ——」

ブン、と音を立てて拳が迫り来る。その拳を避けず、寧ろ頭からぶつかる。脳内に甲高い音が響くような感覚が伝わり視界が眩むがそれに構つてはいられない。頭をぶつけると同じタイミングで自身の脚を上げる。

軋む音が響き、いつのまにか放たれていたジョニイの蹴りをしつかりと止めていた。
「お前前に言つてたもんなあ・・・！」

『敵倒すんだつたら一番手つ取り早くするために急所を狙う』つて！

言われてみればジョニイの蹴りはナツの、しいては全世界の男性の弱点である金的。どんなに体を鍛えようと筋肉がつかない以上耐性が出来ない。忌々しげに舌打ちをし、ナツと距離を取つた。そこに逃がさんと言わんばかりの灼熱の炎。目前に迫る炎を一

一つ丁寧に避け、最後に来た巨大な火炎を飛んで回避した。

「換装——天輪の鎧」

空に浮かばない月の代わりに、白銀の鎧を来たエルザが輝く。呼び出された50の剣の向きは全てジョニイへと向き、放たれるのを今か今かと待ちわびる。

「——行け！」

手を振り落とされる。さながら指揮者のように振られた手の命令を受け、剣が舞う。空中にいるジョニイの体は死に体。避けられるはずはないが、焦らずに手を横に伸ばす。途端、地面に刺さっていた黒刀が飼い主の元に戻るように真っ直ぐに飛翔し、手に収まる。

そこから放たれる斬撃は重なり、壁となり銀閃を描く剣を地に叩き落とした。

(あの骸骨を出さなかつた……?)

絶対防御といつてもいいであろう須佐能乎を出さなかつたことに疑問を持った。そもそもの話、須佐能乎さえ出していれば勝てる勝負なのだ。ならば何故出さない?い

や、出さないのでない。出せないのでないか？

そう思いジョニイの目をよく見ると、万華鏡の瞳を宿している右目が閉じられていたのだ。

「なるほど・・・メリットの分だけやはりデメリットもあるものか・・・今ジョニイはあの骸骨を出せない！今がチャンスだ！」

炎が、氷が、剣が、絶え間なくジョニイに襲う。しかし背中から魔力で形成された尻尾のようなものが撃ち落とす。それでも抜けて来たものは刀で迎撃する。ならばとサクラは手の刻印を輝かせる。

「アガートラム
武源解放 蛇斬 ――！」

刀を宙で3振り。風の層で白く見える斬撃が蛇のようにうねる。3体いる蛇はジョニイを囲い込み、斬撃の牙を食い込ませようと口を開く。

「あぶねえ・・・なあ！」

尾が高速で動く。3方向から迫る蛇を尾がかき消す。空中にいてもこの機動力。恐ろしいとしか言えない。蛇をかき消した尾は次へと狙いを定める。一瞬の溜めが入り、直後に伸びる。咄嗟の判断で大きく後ろに下がると、先程立っていた場所に黒い尾が地面を抉り突き刺さつていた。

「ツツ・・・！」

砂埃をかけ上げながら尚も狙い続ける。鋭い一撃がサクラの腹を貫こうとするが、直前に刀を入れることで弾き飛ばす。上へ弾き飛ばされた尾は、すぐに下へと矛先を向けサクラを狙う。

「サクラさんにも・・・バーニア　！」

白いオーラがサクラを包むと同時に、身軽さを感じた。まるで羽のよう。これならばと自信を貫こうとする尾に刀身を向ける。刻印は輝かない。アガートラム武源解放は一度使う度魔力の消費が激しい。自分の力量のみで――

「――ハアア!!」

裂帛の声と同時に放たれたのは2つの斬撃。左右から放たれた斬撃は同じ箇所を正

確に打ち抜き、刃のついた尾は両断された。

「——雷狼竜」

緑の電気が宿つた蹴りがいつのまにか胸に突き刺さっていた。気付いた時にはサクラは気に叩きつけられようやく自分が攻撃されたと認識した。

「当たるギリギリの所でアーマーをかけたんですけどこれは···」

防御力なんて無視されたかのような一撃。気絶するような一撃ではないにしろ、ダメージを負つたことには変わりはない。ジョニイは体から緑の電子を放出させて、次の一撃へと構える。

「雷狼竜の——」

緑の電子だけが宙に残り、ジョニイの姿が消える。一番近かつたエルザがサクラの力バーに入り、最高防御力を持つ金剛の鎧を纏うがどれだけ軽減出来るか。足に力を込め、腕を自身の前で組み最大限の防御を——

「——飛脚!!」

「火竜の鉤爪!!」

赤と緑が交わる。魔力の衝突により爆風が吹き荒れ、視界が塞がれる。バーニアと流星の魔法が持続しているとは言えあの雷の速さで放たれた蹴りを相殺するとは中々の至難であるはず。

「その動き……ラクサスに似ているな……！」

パチッ、まるで火花が散るかのような音。残光だけを残し、ナツの背後に回り込んだジョニイは既に腕を鞭のようにしならせ、獣の尾に似た一撃を叩き込もうとしていた。

「そして……それはお前の動きだ!!」

認識は出来ていながら予想は出来る。その場でしゃがむことで、頭上を通る雷撃の尾を避け、そして屈み込んだ際に残っている足の力でガラ空きになつていた腹に蹴りを叩き込んだ。

「——これで一発だ」

木を背にしてもたれかかっているジョニイの口は傷を負つたにも関わらず笑みを浮

532 L v. 51 何度も

かべていた。

L V. 52 狂乱の宴

痛
い

とある村に一人の赤子が生まれた。しかし何故かすぐには泣かなかつた。目が閉じて何も見えないはずなのに一度左右を確認するような動きをし、まるで生まれたことが不幸であるかのように、生まれたくなかったと思わせるような泣き声をあげた。

火を宿した蹴りが腹を抉るように突き刺さる。魔力で身体を強化していても臓器は揺れ、胃液が逆流する。威力を逃すように、ほんの少しだけ足に踏ん張りを付けて勢いを止めようとするが止まらない。その結果派手に木にぶつかる。

——痛い痛い痛い

腹部を見ると写輪眼なんて使わなくても分かる傷が見える。皮膚は少し焦げ、軽く撫でただけでめぐれそうだ。しかし、何故なのか。痛みではない何か温かいものが蹴られた腹部を中心に広がっていく。これが俗に言う仲間との信頼から生まれた何かなのだろうか？

——痛い痛い痛い痛い

敵以外真っ暗に映る視界に光明が指す。そこからまるで導かれるように伸びる手が見えた。あれは誰だろうか？ナツではない。もっと別の、俺を救ってくれた人？

——痛い痛い痛い憎い痛い痛い

君もこつちにおいでよ、と幻聴が聞こえる。その手を握るのは簡単だ。だけど

「——ハツ」

払いどける。触れた瞬間、伸びてきた手は真っ黒に染められ、闇の中へと溶け落ちる。それは光明へと続き、視界は再び真っ黒に。闇一色。希望も未来もないただただ闇。

——憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

ああ、それでいい。人との関わり合いなんてもうごめんだ。それが本物の人ではなく、仮想に満ちた人だとしても、本当のことを伝えればきっと幻滅するだろう。そんなものはもう嫌だ。一人で、誰にも分からぬように——

ジョニイの口から血が吹き出す。決して少なくはない量。立ち上がるのもやつとの
はずだ。

「アルさん……」

ハアハア、と呼吸が乱れる音が聞こえる。口周りについた血を服の袖で拭う。

「お前に教えてもらつたことだ。どうだ、思い出したか？」

髪で顔が隠れてその表情は分からぬ。苦悶の表情なのだろうか。それとも――

「ハハ――」

嘲笑う。きっと苦しい筈なのに、口から血をこぼしながら笑い続ける。俯いていた顔
がようやくあげられる。

「ああ、これだ。この痛みだ。この痛みこそが存在の証明だ！」

闇が広がる。ジョニイの体から放出される黒い魔力は底が見えない。髪の隙間から血に似た赤い瞳を捉えた瞬間サクラは寒気を感じた。人間がこんな目を出来るのか。そもそも一体狗がジョニイを突き動かすのか。分からぬ。

「？」

?????????????

何かが聞こえた気がした。背後を振り返つても何もいない。気のせいなのだろうか、そう思い前に向き直す。すると30メートル先にいたはずのジョニイは消えており、サクラとジョニイを除くこの場にいる全員がサクラを見ていた。

「え？ どうしたんですか？」

「さ、サクラ・・・お前」

自分の背後に、何かおぞましい、黒い獣よりも何百倍も恐ろしい何かが刀を振り抜いた状態で立っていた。まず最初に服が袈裟に敗れた。そしてツツリと血が皮膚に浮かび上がる。限界まで留められたマグマが噴出するように、多量の血液が噴出した。

(斬られたことに・・・後から気づいた)

自分が生み出した血溜まりに倒れこんだ。体の向きを変えていたのが幸いだったのか致命傷は斬られていないが、ドンドン意識が遠のく。

「一人目だ……次を、早く、お前達を、俺は……！」

その目は狂気に染まつておりながらも身についた動きは洗練された剣士そのものだつた。彼は転生者だ。そしてこの世界を、人を知つてゐる。だから弱点も分かる。そもそもの話、対集団戦において重要なものは何なのか？この中でトップであるエルザを倒すことだろうか？

——断じて違う

よく集団の中のボスを倒すと逃げていくシーンを見かけるがこれはあまり有効打にならない。この手段が使えるのはボスを一発で倒せる時だ。一発で倒せなければ取り巻きに囮まれてリンクにされるのがオチだ。

だからこそ一人一人、弱い順に戦うことが重要になる。

そしてサクラが倒れたこの場合、一番残しておいて面倒になる中距離からの敵。つまるところグレイが標的となつた。

「アイスマイ——」

正確に両手首を打つ。アイスマイクを発動させる際にする条件として、広げた掌に、拳を置くという動作が必要である。片手でも出来るが、その場合威力が半減したりする。そしてグレイは師のウルに従い両手での発動を基本としている。だからこそ対処が出来ない。癖をいきなり変えるのは誰であろうとすぐには出来ないものである。

「クソツ……何て速さしてるんだ!?」

闇が絡まりついた刀が振り落とされる。

が、奇跡的に間に合ったエルザが金剛の鎧の籠手をグレイと刀の隙間に潜り込ませ、ガードする。

「ジョニイ！ 話を聞け！ 私達は——」

「うるせえええ！」

魂からの悲鳴のようだつた。刀を引き戻し、その力で蹴りを放つ。過剰ともいえる魔力が乗せられた蹴りは金剛の鎧の装甲を軽々と破壊する。エルザの体は浮き上がり、かばつたグレイと一緒に吹き飛ばされた。

「いちいち頭に入る声だ……纏めて消えろよ……！」

ジョニイの掌に魔力が収束する。純粋な魔力砲撃。シンプルだが強力であるその攻

撃は無慈悲に放たれた。

「エルザ――！」

魔力砲が着弾する寸前、流星が地を駆けた。エルザとグレイの腕を掴み、なんとか魔力砲を避ける。放たれた魔力砲は当たらなかつた二人を通り越し、木々を薙ぎ倒し、やがて放たれた所で巨大な爆発を引き起こした。

『聞こえるかい！みんな！』

「ヒビキか!? 今こつちは話す余裕もないんだが・・・！」

『分かつていてる。だから端的に言うよ。

——このままだとジヨニイ君は死ぬ』

襲われているエルザ達ではなくジヨニイが？という疑問が浮かび上がり、問い合わせようとするがそんな暇はないと追撃が飛来する。

『人の精神と魔力は絡みついている。ニルヴァーナの魔法によつて魔力を周囲から取り寄せていくんだけど、その際憎悪や憎しみ・・・言わば呪いのようなものが蓄積しているんだよ。人の器には限界がある。魔力は常時放出しているから関係ないけど、このままだと魂の器が呪いで壊される』

「とは言つても正直止めようがないぞ!」

『一度隙を作ってくれ。無茶を言つていると承知しているが、倒す策はある』

「そんなこと言われなくても分かつてんだよオ!!」

炎が噴出する。宙に紅の尾を引き空を縦横無尽に駆ける。空から地に落ちる落下速度、そして回転による遠心力が加えられた蹴りはジョニイの頭に落ちようとしていた。

「——角竜……!!」

刻まれた傷から分かる、鍛え上げられた腕が肘から指先にかけて変形する。無骨で、美しくもない、純粹な角。だからこそ生まれる純粹な力。それを更に――

「リミテッドオーバー
臨界点突破——塵魔デイアブロス」

超える。変形した角が腕を保護するかのように、濃紺な青が角を覆う。そして一本の角であつた腕が三叉に分かれた。ナツはその時、ジョニイの背後に巨大な何かが見えた。巨大で、ジョニイと変形した手と似た角を持つ、暴君。狂ったような赤い瞳で敵である自身を睨みつけた。

「滅竜奥義——!!」

溢出する炎で——だがそれが逃げる言い訳にはならない。角竜が睨みつける。その目を見ないように

龍王であろうと関係ない。放たれた音の咆哮の源は変形した腕から打ち出された角。全てを塵にする。地面であろうと、空気であろうと塵魔の名の下に粉碎する。だからこの音は空気が悲鳴を上げている音なのだろう。

滅竜奥義——塵魔破碎角

暴君が迫る。足をアンカー代わりに地に打ち込んだのは、衝撃を逃さないようにするためだろう。自身が蟻のように見える巨大な敵の角は、塵魔の異名どおりに腹を貫いていた。

L V. 53 希望の炎は闇へと潜る

暴威の顕現。塵魔はその全容を出さずとも恐怖を植え付けた。悪魔の角は火竜を易々と貫き、生贊を神へと捧げるかのように天へと舞い上げた。

「ナツ——！」

弧を描きながら落下するナツの体の下にルーシイは自分を潜り込ませクッショーン代わりにする。しかし何故かあまり重たくないのだ。細身であるナツはその分筋力で上乗せされており、更に空中から地面に落ちる落下速度でかなりの重圧を受けてもいいはずなのだがそれがない。そう思った時にはルーシイの手や服に何か生暖かい液体が付着していた。

「ちよつと、ナツ！しつかりしなさい！」
「う・・・ジヨニイ・・・カハツ」

咳き込むと同時に大量の血液が溢れ出した。それだけではない。腹部に巨大な穴が空いている。そこから血が噴水のように漏れ出していた。致命傷どころではない。死の一歩手前だ。

「私が時間をなんとか稼ぐ。その間にサクラとナツを任せる」「でも……！」

ルーシイの先に見えるのは人間ではない。竜だ。そこにいなるのは分かつているが巨大な角を持つた赤目の竜が再び暴虐を尽くそうとしている。蟻が恐竜には勝てないよう、人間もまた竜には勝てない。

「俺が安全地帯まで連れて行こう。早く」

「でも！ それだとエルザが！」

「いいから行け！ 聞こえないのか？！」

決死の判断なのだろう。もう止められない。ルーシイはナツの腹部に自身の服の袖を破いて作った即席の包帯をキツく結びつけ、手を伸ばすジエラールの手を掴んだ。

「ウェンディ、君もだ」

「は、はい！」

ウェンディがジエラールの手を掴む。それを確認し流星を発動し、光の残像を生み出

しジョニイが追いつかない所へと逃げる。しかし――

「う・・・おおおおおおおおおおおおおお!!!」

逃さない。三叉に割れた角の矛先を流星へと狙いをつける。万力の力を足へと叩き込み、流星すら叩き落とそうと踏み出す。

「アイスマスク　氷壁――！」
ランバード

氷の壁がそとはさせないと立ちふさがる。エルザは背後を振り返るとやはりとか何というか、絶対絶命の危機だというのに口元に笑みを浮かべているグレイが立っていた。

「全く、私の声が聞こえなかつたのか？」

「生憎と素直に言うことを聞くいい子には育つてないからな」

エルザの隣に立つ。リンと綺麗な音を響かせ作り出したのは銀と見間違えるほど美しい槍。

「お前はどう思う?」

「ああ、ありや誰がどう見ても魔法に呑まれてるだろ」

目の前で敵意を向けるジョニイは苦しそうに変形していない腕で頭を抑えていた。何かを抑えているのに必死なのか口から溢れる唾液にも気づかない。三叉に割れた腕が元の腕へと戻ろうとしているのか徐々に角が解けて行くがそれでもかなり遅い。

「死ぬなよ」

「誰に向かって言っているんだ？」

「血が……止まりません……！」

一方戦線から離脱したルーシイ、ウエンディ、そしてジエラールは致命傷を負ったナツを治癒していたのだが、傷が深過ぎたせいで血が止まらなかつた。

「ナツ！ しつかりしなさい！」

ルーシイが軽くナツの頬を叩く。こうでもしないと意識が消えてしまうのだ。呼吸はもはや虫の息。ここで気を失つたらもう戻らないだろうと言うことがなんとなくだが分かつた。

「俺がなんとかしよう」

「で、でもジエラールは治癒の魔法は……」

「ああ、使えない。だが他のやり方がある」

そう言うなりジエラールは自分の手に魔力を流す。ボツ、と炎のような青い魔力がゆらゆらと揺れていた。

「先に聞いておくが、今の傷の半分だつたら治癒出来るか?」

「でしたら多分……いや、します!」

「それは良かつた」

笑みを微かに浮かべ、穴が空いた腹部の上に軽く手をかざす。一段と青の光が灯ると

同時に時間が巻き戻るように穴が空いた腹部が修復されていく。

「時間の操る魔法だなんて……古代魔法じやないの!?」

「いや、これはそんなに便利なものではない」

ナツの傷が3分の1程になり、青い光が消えると同時にジエラールの片腕に亀裂が入つた。瞬間、血が溢れ出す。ドクドクと流れ出す血は腕を真っ赤に染め上げ、肌色を探す方が難しかつた。

「ナツの傷を俺に移植した……！」

「これでなんとかなるだろう……」

疲れた様子で木にもたれかかる。ルーシィは余った布を取り出し、ジエラールの傷ついた腕を強く結び上げた。

「あんた……何でここまで……」

「記憶がぼんやりとしかないからはつきりとは言えないが……一つはエルザのためだ。そして……」

揺らぐ瞳で顔色に僅かな生気が戻ったナツを見た。

「ナツは希望だ。どんな暗闇であろうと照らして見せる……そんな輝きが見えたからな」
傷を負っていない手にジエラールは炎を宿した。ゆらゆらと揺れる炎は敵を燃やすものではなく、光。人の心を照らすかのように美しい炎だつた。

「俺に出来るのはこれぐらいだ。後はナツに託すとしよう」

氷の城壁に穴が空いた。氷の破片は地に舞い落ち、飛び出た人影も弧を描くように地に墜落した。

「あいつ、加減なしで殴りやがつて……」

上半身裸のグレイはそう言い残し地に倒れ伏した。鍛え抜かれた体には擦過傷、切傷、打撲痕とおおよその怪我が刻まれていた。最後までその手に持ち続けた銀槍は役目を終えたかのように空へと消えて行つた。

何分稼げたかは分からぬ。が、体を包む暖かな火は確かに自分たちの役目を果たしたもの語つていた。

「つたく、来るのが遅エんだよ」

自らの意志を託し終えたように眠りについた。きっと彼ならば大丈夫だろうと。そんな祈りを込めて。

そこを形容するには何といえばいいんだろう。そこら中から生えた氷の塊。そして折れた剣群と碎かれた細微な装飾が施された鎧。その中で躁闘するのは黒い魔王とも言えばいいのだろうか。元に戻った腕で華奢とも言える首を驚掴みにし、空中にぶら下げる。

「がつ・・・あつ・・・！」

「ちつ、手こずらせやがつて。面倒かけさせるんじやねえよ」

手足をばたつかせるが、それも虚しい抵抗だつた。それ程まで圧倒的だつた。S級のエルザと頭のキレるグレイがいながらも完璧にいなされ、弾かれ、避けられ今こうして死にかけていた。

「じゃあな」

空いた片手で、血濡れて神刀から妖刀へと成り下がつた刀の先を心臓へと狙いを付け、躊躇いなく放つた。

今にも碎け散りそうな鎧に剣先が刺さり、心臓を突き破るまで5cm。エルザ自身諦めかけたその時、オレンジの光が駆け抜けた。本来であれば心臓を貫いていたはずの刀は空を引き裂く音だけを残していた。しかし、ジョニーは焦らず、馬鹿にするような笑みを浮かべ通りすぎた光の方を見た。

「死に損ないが何をしに来たんだ?」

薄れゆく意識の中、エルザは笑みを浮かべた。この絶望に囚われた少年をきつと——

「——お前を助けに来た」

L V. 54 竜は踊り星は瞬く

炎が揺らぐ。蔓延る闇を打ち消し前へと進んだ。

「ナツ・・・」

「任せろエルザ。俺が絶対戻してくるからよ」

ゆつくりと、だが着実に前へと進む。ジョニーはその自殺行為とも言えるそれにあって手を出さず歩かせた。そうして二人の距離は5メートルになつたところでナツは歩みを止めた。

「俺を助ける、ね。そんなこと俺の口が言つたか？」

「言つてねえよ。けど分かるんだよ。だから殴つても助ける」

「答えになつてねえな。まあいい。どうせ何も変わらないんだからな。だから――」

「——来いよ」

黄金に似た色を持つ炎が放たれる。真っ直ぐに伸びる炎は竜そのものであり、獲物を喰らおうとしたが、次の瞬間にはナツの顔には拳がめり込んでいた。

『この力は強大だ。とは言えど今のあいつに勝てるかと言われば良くて引き分け、最悪は負ける』

ジエラールが苦しそうに話す言葉をナツは背を向けて聞いていた。そんなことは分かつている。ジエラールの魔力でニルヴァーナの魔法を受けたジョニイの魔力量では殆ど同じだろう。しかし技量はどうだろうか？

『あいつは単に強いとか速いとかではない・・・そう、あいつは巧い』

避けられると分かつていた。それを承知で会えて殴らせた。頬骨からピキッと嫌な音が出たのを感じた。そこからジワジワと痛みが広がるがそれを無視し、腕を万力の力

で掴んだ。

「これだつたら関係ねえだろ・・・！」

0距離。そして腕を掴んことで行動の抑制。口内に灼熱の炎を溜め、解き放つ。「その考えが甘いんだよ」

掴んだ腕とは逆の腕が揺らぐ。そしてボツ!!と空気を置き去りにした一撃が心臓部分を上から叩く。普通であれば血を吐いてもおかしくない一撃。しかしそれすらもナツは甘んじて身に受けた。

「なつ――!?」

「火竜の咆哮!!!!」

0距離から放たれた炎は人間一人に向けるものではなかつた。それこそ竜が竜に向けて放つドラゴンブレス。ジョニイもろとも背後にそびえ立つ木々を煤塵とさせる一撃は割つて入り込むかのように現れた黒い骨に阻まれた。

「火竜の鉄拳!!!」

即座に切り替える。猛炎を纏つた拳は骨に突き刺さるが傷は入らない。

「火竜の鉄拳!!!」

もう一度。さらに膨れ上がつた炎で骨を叩く。小規模な爆発を引き起こし、周りに草木一本とも生えていないほどの火力だつたが傷つかない。

ならば、と更に炎を燃えさせる。ジョニイは手を振りほどこうとするが力という点ではナツが勝っていたため振り解けなかつた。

「紅蓮火竜拳————!!!!」

連打連打連打連打連打連打!!

爆発を引き起こし続ける竜の炎は、神の名を借りた鎧にヒビを入れた。

「オオオオオオオオオオオオ!!!!」

ジョニイの腕をつかむことで伸びきつていた自身の腕をグイッと引きつけ、外に逃げる力を無くし、最後の一撃を叩き込んだ。

ピキッ!!と碎ける音がすると同時に黒い骨か崩れ落ちる。須佐能乎が碎かれたことに思わず驚いたジョニイはその一瞬だけ停止した。

「火竜の————!!!!」

自らも炎となるように燃え上がる。炎の波が押し寄せてくる錯覚すら見える程の規模の一撃はジョニイの腹を的確に撃ち抜いていた。

「鉄拳

!!!!

地から放たれるロケットのように巨大な爆発を引き起こし、ジョニーの体は後ろへと吹き飛んだ。直線所にある木々は全て当たった衝撃で半ばから折れる。ようやく停止すると口の中に溜まつた血を吐き出し前を見据える。次はこちらからと踏み込みを開始しようとした時、離れた場所から何かが急速に近づいてきた。

「火竜の鉤爪

!!

逃がさないと言わせんばかりに火竜の爪が空を舞う。

「そう何度もくらうかよ」

息を吸い、吐く。腹の中心に力を込め、手をゆっくりと大きく開ける。すぐ目の前まで迫つた火竜の爪にそつと添わせるように腕を置き、廻す。その瞬間ナツの視界が縦に360度回転した。何が起きたか認識する間もなく無防備になつた体に目掛けてジョニーがだらりと力を抜き、構える。

〔三頭龍〕

脱力。ジョニイの体内にある筋肉が一瞬にして稼働する。溜めが一瞬あればそれでいい。黒い線を描くほどの速さで放たれた拳は認識すら難しい。だから目だけに頼らない。嗅覚や直感すら利用しなければこの技の化け物には勝てない。

「ツツツ——!!」

空中で身を限界まで捻る。体があつた場所に黒閃が通り過ぎた。そして体全体をそのまま回転させ足に火を灯した。

「鉤爪——!!」

頭にクリーンヒットした。脳が揺られ氣絶してもおかしくはない。しかしジョニイは口に笑みを浮かべていた。

「その程度か?」

足に力を込め、走る。未だ宙にいるナツに体全体で当たる。そのまま駆け抜け更に木々を薙ぎ倒した。

「オオオオオオオオオオ!!!」

ナツの掌から炎がタツクルされている逆方向に噴出される。タツクルの勢いが削がれ、そのまま空中へと抜け出す。掌から放たれる炎はそのままナツを空中で踊るように

空を舞う。

——天彗童——

ナツの炎とはまた違うエネルギーのようなものがジョニイの掌から放たれ、空を舞う。だが違うのはそのスピード。ジェット機じみた速さで飛んでいるためか離れるナツにまで空気が破裂するかのような音が断続的に聞こえた。

そこから始まるのは乱舞。急停止、急ターンを繰り返しナツの身体を少しづつ抉る。予測不可能なその動きをナツは自身の直感に従い手を伸ばす。すると吸い込まれるかのようにジョニイの腕がすっぽりと収まつた。

「さつきから身体の動きが鈍くなつてゐるぞジョニイ……！」

連戦のせいか、それとも体内に溜まつた呪いなのかは分からない。が、この機を逃すわけにはいかない。掴んだ手をそのままに回転し、地面に向けて投げつけた。ヒュツ、と音を立てると同時に地面上に着弾し、砂埃をあげる。

そこにダメ押しと言わんばかりにナツは自身を一本の剣とし地に落ちる。

——紅蓮鳳凰剣——

静かに紡がれたその一撃は地に伏せる悪魔に突き刺さつた。

ナツがジョニイ見下す形で立っている。ジョニイは滅竜奥義を受けたことで身体が動かず、またナツも魔力の使用過多によることで立っているのもやつとの状態だつた。
「これで終わりだ……いい加減戻つてこいよ」

「・・・」

ジョニイの目は虚ろだつた。ナツではなく、別の何かを見ているようだ。

「おい！ジョニイ！」

今にも倒れそうな体を駆使し、ジョニイの胸ぐらを掴み振り上げた。

（ああ・・・また同じか）

ジョニイは目の前のナツが見えていなかつた。取り込みすぎた呪いによつて目の前は暗く、一寸の光もない。また声も同じ。怨嗟の声が響くばかりで自分の名前を呼ぶのにも気がつかない。怨嗟の声は徐々に変わり「お前のせいだ」と自分を責める言葉ばかりが発せられる。

「あ・・・は・・」

掠れた口から言葉が漏れた。胸倉を掴むナツの手に自分の腕を重ねた。

「何で俺が……！」

人間の形をした悪魔だつた。呪いが体全体に回り体を凄まじい速さで侵食していた。ただその呪いすら力に変えてナツの手を掴んだ。

「アアアアアアアア!!!」

「グツ・・・！」

悲鳴のような声を上げ殴りつける。後ろに体重をかけていたナツは殴られたことで後ろによろけてしまい、ジョニイは馬乗りになつて殴りつけた。

「何でッ!!俺だけがッ!!」

お前のせいだ。と言葉が消えない。違う違うと否定しても消えない。殴りつけているのはただの八つ当たりだ。

「ジョ・・・ニイ・・・」

「ハア・・・ハア・・・・!!」

呪いが体に回る。エルザと同じように首を吊り上げる。ミシミシと肉が潰れる音を立て、その圧によりまた骨も碎そうになる。

「？」
？？？」

もはや言葉ではなかつたが、そう言つたのは伝わつた。首を持つ手に力が入り、骨をへし折る瞬間――

「もうやめましょよ」

ジョニーを背後から抱きしめる姿があつた。

「サク・・ラ・・・」

ナツは途絶えそうになる意識を必死に繋ぎ止め名前を呼んだ。傷跡はウエンデイーによつてなくなつていたが、まだ万全ではないためか息が切れている。そんな状態でこの化け物とつたジョニーを倒せるわけがない。逃げろと伝えたいが喉を掴まれるため声が出なかつた。

「アルさんがニルヴァーナの魔法だけで暴走しているわけではないということは分かりました」

化け物の手が伸びる。

「私はアルさんの過去のことを知りません。でも強い復讐心でこうなつていることは何となくわかりました。でも分からないんです——」

「どうして君はそんな寂しそうな目をしているの？」

その言葉はサクラが言おうとしていた言葉だが、別の誰かが自身のうちから語つていいようだつた。それを意識する前にジョニイを見ると、驚いたような顔をして誰かを呼ぶかのように口を動かしていた。

「ああああああああああああああアアアアアアア!!!!」

絶叫。ナツから手を放し自身の頭を抑えるのに使う。

頭が割れるような痛みが襲う。ノイズがかつた脳内に映像が流れた。顔の見えない少女が手を伸ばす。

???????????

「うおオオオオオオアアア!!」

見境なく暴れる。自身を中心にして暴れるジョニーはもはや何も見えていなかつた。
——そして、これこそが絶好の機会。

「——天を測り天を開きあまねく全ての星々」

『君には戦闘に参加しないで欲しい』

『何で!? 私が強くないから···?』

『いや、そういうことじやないんだ』

戦いが始まる前ヒビキはルーシイにそう言つた。

『彼の力···というより技のキレは先程充分すぎるほど味わつたけど、体の強度は僕達
とそう変わらないはずだ。だからそこを狙う』

『···その話と私つて関係あるの?』

『星靈魔導師しか使えなくて、心が清いものでしか使えない魔法がある。けどこの魔法はかなりの魔力を消費するから魔法の使用は控えて欲しいんだ』

「がああああああアアアアアアア!!!!」

頭の痛みで狂乱したジョニイは手当たり次第に暴虐を尽くす。その狙いになつたルーシイの方へと死の嵐の体現したかのように突撃を仕掛けた。

「させるかあアアアアアア!!!!」

破壊の嵐が生まれた。死の嵐と光の炎がルーシイの目の前で爆発し続けた。

「全天88星——光る」

「うおおおおおおおおお!!!!」

ナツの手から血が溢れ出ると同時にジョニイが空へと打ち上げられた。これで無防備。されど悪魔は止まらない。手からもはや何か分からぬ何かを噴出し血に戻ろうとする。しかし――

「天竜の咆哮――――!!」

そうはさせない、と震えた勇気を持つてそれを防ぐ。ウェンディは臆病な少女であるが、ナツ達と関わることで勇気を貰った。彼らを助けたいという強い気持ちが天竜の力を今引き出したのだ。そして――

「ウラノ・メトリア――!!」

星屑が集うかのように空中に光が凝縮し、星の誕生を祝うような美しい花火がジョニイを中心に爆発した。

L V. 55 罪

曇りがかった夜空が晴れ、空には満点の星空が写った。星靈魔導師最強の一撃とも言える魔法を防御も何もせずに受けたジョニイは受け身も取らず地面に落ちた。完全に意識を失っているのか体は動いていないが、ニルヴァーナの魔法が未だジョニイの体を動かそうと周囲から憎悪を集めていた。

——さあ、今だよ

サクラの内からそんな言葉が聞こえた。残った体力を使い切るように走り、横たわるジョニイの横に座り、刀の柄を両手で持ち上げた。
〔アガートラム
武源解放 心渡り〕

静かに紡がれたその一撃はするりとジョニイの心臓の上を貫いた。本来であれば血が噴き出すはずだが、何故か吹き出さない。その代わり銀に輝く刀身上に一際輝く一点の光がゆっくりと刃先に向けて落ちて行き、そしてジョニイの体内へと入つていった。

精神世界とも言えるそこにあつたのは人の暗黒面だけであつた。その中心に立つサクラは怯えずに刀を構えて振るう。ビュツ、と辺りを黒に染める憎悪が切り払われる。

拓けた道を通り前へ前へと進むたび、再び黒に埋め尽くそうと奥から呪いが湧いて来る。

「邪魔——！」

それでも前へと。何度も目かられない刃を振るい続け、ようやく見えたのは黑白の円環。そこから呪いが漏れ続けていた。それこそがニルヴァーナであると理解したサクラは覚悟を決め呪いの中を走った。

「ハアアアアアアアア!!」

呪いが「来るな」と言つているように、体内に刃が刺さり続ける。痛みではない何かに耐え続けサクラはその円環に刀を刺した。

直後、強い光が放たれると同時に呪いの排出が中止された。

「……」

終わつたはずだ、と安堵するが暗闇は晴れない。静寂にして無。存在としてあるのは自身の肉体だけであつた。人の心というのは喜びや悲しみ。愛情や憎しみと言つた複雑な感情が網羅しているはずだ。だと言うのに――

「何もない・・・」

ジョニイ・アルバートという人間の心には何もなかつた。普段ナツ達と笑つている喜びも、暴走した時のような憎しみもない。諦観したかのような悲しさだけがあつた。

――・・た・・い

「――!?

聞こえた。微かにだが確かに聞こえた。それは繰り返し発せられる。何を言つているかは分からぬが声の元が分かつてるのであれば向かうことは出来る。サクラは一寸の光もない暗闇を闇雲に走る。

死にたい

そう呟く少年は何もない暗闇の中で一人蹲っていた。後悔するように、求めるように。それがジョニイ・アルバートだと言うことは顔を見ずとも分かつた。

「アルさん・・・」

手を伸ばす。仲間であり、そして師であるジョニイを放つておくわけにはいかない。その手がジョニイの肩に触れようとした瞬間、暗闇の中から突如現れた手により防がれた。

「やめとけ。お前じや無理だ」

「なっ!」

反射的に手が伸びた先を見る。そこには髪が真っ白に染まり、肌が浅黒く染まつたジョニイがこの精神世界に似た暗闇のような瞳を向けていた。

「貴方は・・・」

「分かつてるだろ？俺はアイツだよ」

見たくないものを見るようにもう一人のジョニイは座り込んだジョニイを見た。

「自分に幻術をかけ忘れようとした者の余り物さ」

「余り物・・・？」

言葉の意味が分からなかつた。ジョニイは諦観した瞳で何も見えない空を見上げた。

「どれだけ過去の罪を忘れたくても、許されたとしても、罪つてやつ死ぬまで一生付いてくるんだよ」

自嘲する笑みを浮かべた。

「だから主人公やヒロインが話しかけようと、ましてや俺たちみたいな存在に俺自身が救えるわけがない」

体が後ろに引っ張られる。異物を排除しようとジョニイの精神世界から追い出され
そうになるのを必死に留まる。

「そんなことさせません！貴方が望まなくとも私は貴方を救います！」
「ハツ、口では何とだつて言えるんだよ」

体が空中に浮かび上がり後ろへと吹き飛び続ける。手を伸ばしても、ジョニイはまる
で見もしれない。そして――

「アルさん――!!」

俯いた少年の顔は最後までサクラの方を見なかつた。

「うつ・・・あ・・?」
ジョニイが目を覚ました時、空には満点の星空が写つていた。それを綺麗だとと思う前
にある一つの疑念を抱いた。

「何があつたんだ……？」

自分は偽ギルガメッシュを倒し、そして——そこからの記憶がない。

「……ま、今は気の仕方ないか」

そうしてジョニーは眠気に誘われるがままに寝た。ただ起きた事象は変わらない。自身が暴走したこと、切り捨てたことが帰ってきたことにも。それを示すようにジョニーの人差し指に黒い円環の痣が刻まれていた。

エドラス編

L V. 56 次へと向かうその前に

後日談、というか今回のオチ。

なんてどこかの物語シリーズをやつてみたものも語るべきものはそうさしてない。

そうだな。まず一つ目の話をするならルーシイの手元には原作通り星靈のアリエス、ジエミニ、スコーピオンが仲間になつた。本来であればルーシイと六魔將軍のエンジェルが戦い、その果てに手に入れることになるのだが、偽の英雄王によつて六魔將軍は消滅。一時はどうかるもんかと思つたが何でも星靈界でスコーピオンが彼女であるアクエリアスに「オーノー！俺たちのマスターが捕まつちまつたぜ！」と話したところ「じゃあウチくる？」みたいな流れで手元に来たらしい。それでいいのか星靈界。

次に六魔将軍。こいつらは地中に突き刺さっていたが回収、収容。ホットアイも例外ではない。いいやつだつたが仕方ないだろう。そしてジエラールも例外ではなかつた。ナツやグレイ達が止めにかかつたがそれをエルザが一喝。ジエラールは口元に微かに笑みを浮かべて去つた。

あとは原作と同じだろう。ウェンデイがいたギルドも消えてしまい、妖精の尻尾へ・・・とまあこんな感じだろう。

いや、ただ一つ異なる点としては・・・

「いだだだだだだだだ!!!」

もはや定番となつたポーリュシカの家。手足を固定され、情けない悲鳴を上げながら必死に痛みを耐えること早5回。ポーリュシカも諦めような顔をして俺を縛り付けている道具を取つた。

「ダメだね。神経にまで絡みついている。下手に取ろうと神経が切れちまう」
ニルヴァーナ。光と闇を入れ替える魔法は偽ギルガメッシュによつて体内に埋め込

まれてしまつた。その印として俺の人差し指には黒い円環が指輪のようになに描かれている。

体全体と結びついているため取り出すことは不可能らしい。死ぬまで付きまとが使おうとしなければ無害であるらしい。もしそれがおかしくなつたりするんなら手遅れになる前にさつさと来な。まあ人嫌いだからあんまし来んな。とツンデレみたいなこと言われた。それに一瞬トーンクする俺。べ、別にあんたのことなんて好きでもなんでもないんだからね！・・・ごめんなさい。

これでニルヴァーナ編は終わり。

そして次は空に浮かぶ島の話へとなる。が始まる合図としてはギルド周辺が消える前に、ウエンディが雨の中をダッシュすることだけである。そもそもこの話というか、全てに言えることではあるが何もしなくてもいい。しかしこれにだけは参加しなければならない理由があるがそれは省略するとしよう。そして今日も雨ではなくいつも通り来るサクラの相手をすることとなるのだ。

「ハアアアアアアアアア！」

ビュツ！と風を切り木刀が迫る。それを俺も木刀の側面を使い弾き返す。がそれを読んでいたサクラは弾かれた衝撃を使い回転し、逆方向から空いた腕を狙い澄ます。サクラも授業開始した時と比べてかなり強くなっている。教えたことを吸水スponジみたいにどんどん吸いとつて行くのだ。初めは片腕で捌けたものが、今となつては結構本気でやらなくては押されてしまう。が――

「まだ甘い――！」

木刀を躊躇し、腕を掴む。足を軸にその場で回転し投げる。木刀から手がすっぽ抜け飛ぶサクラはなぜか面白かつた。地面をゴロゴロと転がり大の字で倒れ、大きく深呼吸しているサクラに俺は近づいた。

「はじき返してからの選択はいいが大振りだな。もう少しコンパクトでやれ」

「そ、そんなこと言われたつて・・・ハアハア・・・キツイですよ・・・！」

「言い訳すんな」

まあ、あの攻撃が当たつたら氣を失う可能性があるのでやめて欲しいものだが・・・。

「ジョニイイイイ!!俺と戦いやがれえええ!!」

「うわ、また来た」

最近ナツがよく来る。それはナツだけではなくグレイやルーシィにも言える。ナツやグレイは俺に戦いを挑みに、そしてルーシィは暇だから見学しに来るとの事。俺たちは暇つぶしの道具かッ。

「相変わらずやつてるわね。はい、これ差し入れ」

「わああ、ありがとうございます!」

先ほどまでの疲れは何処に行つたのかサクラはガバッと起き上がり、キラキラした笑みでルーシィからの差し入れを受け取った。

「ほう、まだそんな元気があるならもう一本やつてやろうか?」

「げつ、それはまた後で・・・」

「その前に俺だ!」

「げつ、それはまた後で・・・」

「同じ反応すんじやねえ!」

「という事で急遽始まつた魔法なし模擬戦。「魔法を使わなくてもいいのか?」と聞いたところ「へつ、魔法なんて使わなくても余裕だぜ」と言われたのでオラ本気出すぜ。

・・・ 3分後

「私初めて人が地面に縦で埋まる図を見たわ・・・」

「そんなこと言う前に早く助けろよ！」

魔法なしだと俺の方がかなり有利だったためトドメに地面に体をぶち込んでやつた。気分爽快。しかし体術のみであれば俺はナツを圧倒できるのか・・・。我ながらすげえなオイ。まあ魔法使われたら瞬殺されるんだけど。

「おいおいナツ。これだつたらまだサクラの方が動けるぜ？」

「何い？」

「ちよ、アルさん」

キュピーンとナツの目がサクラへと向き地中から飛び出す。獲物を狙う鷹のように空中へと身を乗り出したナツはそのままサクラへとダイブ。

「次はサクラだああ！」

「いやあああああ！」

と、こんな感じで始まつた模擬戦は接戦の末ナツの勝利で終わつた。ナツ相手によくサクラも耐えたものだ。マジで成長速度異常なんですが・・・。

偶にクエストをやりつつ、平凡な日常を送る日々がそれなりに続いた日。
——そして雨は降り、あたらな物語が幕を開く。

L v. 57 逃亡作戦

「貴方達は終わりを考えたことがありますか？」

フードを被つた男は玉座に座る王に向けてそう言つた。王は狂い枯れた化のような目を男に注ぐ。天空に浮かぶ陸、エドラス。その地の王であるファウストはフードの男に警戒しつつも、終わりの意味を考えた。

「命が尽きることが終わり、魔力がこの世界からなくなるのも終わり。けれども——」

ザザツ—————

視界が揺らぐ。時間を一瞬奪われたかのようだ。フードの男は立ち位置をずらした

だけであつたが、魔法という理由だけでは証明できない何かが引き起こされた。

「例えは一つの物語があり、その中で鏡合わせの世界に行く話があつたと仮定しよう。そこで主人公達は戦い鏡合わせの世界から元の世界へと帰つてめでたしめでたし。主人公達はそのまま元の世界で楽しく暮らすだろう・・・だけど鏡合わせの世界は？その章が終われば用済みだ。もう要らないって消されてしまう」

「――そして、このエドラスこそ鏡合わせの世界だ」

「物語の主人公が訪れ、この世界は平和になる。が、その後は名称も何も出てこない。ならばそれは死んだと同じ」

「貴方はそれを許しますか？」

カアン、と広い部屋に杖が地に叩き落とされた感高い音が響いた。

「断じてならぬ。この世界には永遠こそが相応しい」

その目は妄執に取り憑かれながらも、確かな決意があつた。フードの男はニヤリと口角を上げると、おもむろに手を横に伸ばした。

「そう言うと思つた」

世界が一度揺らぐと同時にフードを被つた男の手の中にあつたのは一本の杖。色煌びやかな宝石で施されたその杖は見ただけで優れたものと分かつた。

「強力な杖を用意した。それを貴方に授ける、といえばすることは分かつてゐるよな?」

ファウストは手を伸ばした。黒よりも更に深い黒が輝く黒の宝石の杖へと。闇へと手を伸ばす。

——それを扉の背後で聞いていた少年は何を思つていたか。

今はまだ誰も知らない

「この間バレンタインだつただろ？そしたらビスカが僕にチョコレートをくれたんだ」

「うん」

「そのチョコレートはハートマークで手紙にも『いつもありがとう 大好き』って……」

「うんうん」

「これつて僕とビスカが両想いってことじや……！」

「うんうんうんうんうんうん……」

「ところでアルザック。お前海と山どつちが好きだ？」

「え？・・・ そうだな。山かな・・・ はつ！そこにデートを誘えって事か！ そんなの恥ず

かしくて——

「いや、違う」

「お前の死に場所だ」

「ひい!? 刀を出すな!」

問答無用とばかりに机越しにアルザツクを狙う。過去最高の一撃と言つても過言ではない突きだつたがギリギリのところで避けられてしまった。チツ、勘のいいやつめ。「今本気だつたよな!? 死ぬところだつたぞ!?

「? そりややるつもりだつたからな。当然だろ?」

「怖いわ! お前何が——ヒイイ!!」

リア充死すべし、慈悲は無し。オラは怒つたぞ——!! 髪が思わず金髪になりそうな程刀を振るうがギャグ補正的なサムシングが働いて当たらねえ!!

「テメエ大人しく切られやがれエエ——!!」

「誰が切られるか——!!」

「シャルルが帰つてこない・・・」

「さつきハッピーを手酷く振つたから来にくいんじやない？」

一方ジョニイから3席程離れた所にいるルーシイとウエンディ。ハッピーの猛烈な愛のアピールを無視し、外へと行つたシャルルを心配するようウエンディは曇り空が見える窓の外を眺めていた。

「うーん・・・でもシャルルはあまりそう言うことを気にしないから」「言われてみれば・・・」

「私心配だからちよつと探しに行つてきます！」

「あ、雨降るから傘を——」

「すぐ戻つてきます！」

そう言うとタツタツ、と素早く走りギルドを出ていった。

「アルザック待てやゴラアアアアアアアア!!」

「誰かああああ!!こいつを止めてくれえええええ!!」

「ジェット！ドロイ！お前らまたヘマやらかしたのか！」

「すいません・・・！」

「エルフマン。そろそろ行くわよ」

「聞いてくれよ姉ちゃん。こいつらまたクエスト先で気絶して結局レビイが一人でクエスト終わらせたんだぜ!?お前ら本当に漢か!?」

チームシャドウギアのジェットとドロイはエルフマンを前に正座をし、ガミガミと怒られていた。それを前にすみませんとしか言えないジェットとドロイである。まあ言われてみれば男が気絶して、その間に女の子一人でクリアするのは何と頗りないことがある。

「ジェットとドロイも頑張つてるわよ」

「ミラさん!!」

思わず号泣する2人。

それに対してもミラさんは笑みを浮かべて言うのだった。

「多少は・・・」

「えっ!!??」

現実は残酷なのである。枯れた木のように倒れこんだ2人をその場に放置しミラさんとエルフマンもギルドの外へと足を向けた。

「捕まえたぞアルザアアアアアツク・・・切り刻んだあと山に埋めてやるから安心しろ
オオオオオオオオ」

「何処に安心の要素があるって言うんだ!?」

「あの2人は何処へいったの?」

「あー・・・そろそろリサーナの命日だからねえ」

カナは赤く染まつた頬で懐かしむように空を見上げた。そこには過去の思い出と会えない辛さが混じつたような顔をしていた。

「リサーナ?」

「ミラとエルフマンの妹なの。2年前の事故でね・・・命日が近づくと教会へと通い出す

んだ

いつもは元気なはずの2人も心なしか寂しそうに見えた。母親が死んでしまったルーシイには大事な人がなくなる辛さが分かつていた。

「そう言えばルーシイはリサーナに似てるところがあるわね」

「そうなの？」

「ナツと仲良い所とかね」

「死にやがれアルザック!!あの世でコサックダンスでも踊つときな!!」

「て言うか誰か助けろよ!!!」

ギヤグ補正という壁を通り越しアルザックに刃を向けた。リア充は朽ち果てる。

「ふーん。ナツが昔女の子とねえ・・・」

力チリ、と歯車があつた音がした。俺の記憶ではウェンディが雨の中走ると言うことしか覚えてなかつたが・・・!!

思い・・・出した!!

ウェンディが走るつて分かるのは3人称視点から見ていたからであり、俺は見えない！が大事な親友のシャルルを探すにはきっと走る！そして今思い出したがリサーナの墓参り！これもエドラス開始前の会話だ！！

「おいおいおいおい・・・！」

窓にへばりつき空を見上げる。曇つた空に目視できるぐらい大きな渦が逆巻いていた。もう時間ねえぞこれ……！

「洗濯物取り込み忘れた――!!」

アルザツク暗殺（忍気配ゼロ）を放置しギルドを飛び出し外へ飛び出す。あの場で急に飛び出したら怪しいと思われる為適当な嘘をついたが、あと時間が何分あるから分からぬが取り敢えず策はある。その為に全力で帰宅しなければ。

雨が体全体余すことなく降り注ぎ、体温が低下するがそれを無視した。魔力を体に流し驚異の帰宅をすると同時に事前に用意していた道具を設置した。

「よし！これで――」

「アルサーん！忘れも――」

頭上にビックリマークが浮かぶと同時に視界が突如揺らいだ。天に開いた渦に吸い込まれるように全てが歪み、地上から消えていった。

L V. 58 空の世界へ

——マグノリアはまもなく消滅する

先日捕まつたジエラールと全く同じ顔をしたミストガンは力なさそうにそう言つた。
もう一つの世界やアニマという単語は聞いたことがないが、このままだとギルド諸共消滅してしまうことは伝わり、踵を返してギルドへと向かつた。疲れや冷えた体を無視し、走る。

「みんなー！ 空が——」

ギルドに入るまであと少しだつた。

——視界が歪んだ。

違う。歪んでいるのはウエンディ以外の全てだった。建物も、地面も、木々も容赦なく天に開いた穴に吸い込まれる。突風が吹き荒れたせいで思わず目を閉じた。時間にして約5秒間だった。だそれだけの時間で何もかもが消えて無くなっていた。世界という絵に白の絵の具を一滴垂らしたかのように真っ白であり、降り積もった雪のような静けさが包んでいた。

「嘘……本当に何も……」

呟いた声は誰にも聞こえず、全てがなくなつた街でウエンディは瞳を濡らした。何故自分が残っているのか。何故急にこんなことが起るのか分からぬ。だからどうしようもなかつた。頼る人もいない。ここからどうすれば――

——ボコつ

「ひつ」

真っ白な平野に一つ盛り上がりが出来ていた。ボコボコと膨れ上がり降り積もった雪のような何かを払い退けると中から盛大な呼吸音が聞こえた。

「いきなり何が起きたんだ!?」

「ナツさん！」

ナツは埋もれた下半身を引きずり出し、体全体に降り積もった何かを払い退けた。

「無事だつたんですね！」

「寝てたからな。起きたら何が起きてんだこれは？」

「滅竜魔道士の特殊な魔力で地上に残つたのね」

「シャルル！」

ウエンディがシャルルに駆け寄ると同時に背中に生えていた翼を消し、足元に降り立つた。

「おーーい！ナツーーーー！」

「おお!? ハッピーじゃねえか！」

そしてほぼ同じタイミングでハッピーのナツを見つけて足元に降り立つた。喜ばしい光景であるはずなのに、シャルルは忌々しい物を見るかのようだった。

「オスネコも残つてたのね……」

「オイラ……シャルルを探しに行つてたら急に街が空に吸い込まれて……それで今に至る、ということですね」

「あい」

ハッピーもウエンディとほとんど同じ境遇だつた。シャルルは「本当に何も知らない

のね」と周りに聞こえないように咳き、ワザとらしく一度咳をした。

「この街は、遙か上空にあるエド拉斯によつて吸い取られたわ」

「エド拉斯？ 何だそれ？」

「そうね。私やオスネコの生まれ故郷つて所かしら」

「ええ!? シャルルはオイラの故郷を知つてるの!?」

ナツがハッピー、正確にはハッピーが生まれた卵を拾つたのは森の中だつた。深くは考えていいなかつたが捨てられた可能性もあつたし、故郷がどこかも分からぬ。それを知つているシャルルに驚いたのだが、一方のシャルルはストレスを收めるようにこめかみを押していた。

「エド拉斯は魔力が有限。その為定期的にアニマ……あの空に開いていた穴から地上の魔力を魔力^{ラクリマ}結晶として回収するのよ……だけど」

シャルルの脳裏に現れたのはミストガンと呼ばれていた男。

「何者かによつて地上に開いていた小さなアニマは全て閉じられた。その結果エドラスの魔力は日々減少。それを解消するため——」

「巨大なアニマを作つて街一つを吸い取つたつてこと……？」

「何だそれ!? 随分と勝手な奴らだなコノヤロー！」

ナツは上空に向かつて叫ぶが帰つてくる言葉はなく、シャルルは分かつていたかのように続きを話し始めた。

「私やオスネコが残つているのはエドラス出身のため、そして貴方達は繰り返すようだけど滅竜魔道士だつたからね」

「そう言えばシャルルは何でそんなこと知つているの?」

「・・・ 私やオスネコには使命があるのよ。だからきっと知つてているのね。だと言うのに・・・！」

キツ、と冷たい目を向け溜まつていたストレスを吐き出すように言った。

「何であんたは何も知らないのよ!」

ハッピーは立ち尽くすだけだ。知らないものは知らないのだ。仕方がない反応だろう。ピリピリとした空気が周りを支配する中、それを壊すようにナツは自身の掌に拳を軽く叩きつけた。

「それじゃ、そのエドラスつて所に行くか！」

「あなた本気!?」

何の前触れもなく、敵の正体すらあやふやだというのにこの判断。ナツらしい選択だ。

「おう。仲間を取られてはいそうですかつて見逃せるわけねえしな」

「どうしようナツ。オイラ考えただけでお腹がすいてきたよ」

ぎゅるるるる、と場に不相応な音が響いたが、ナツは元気の証拠だと笑って答えた。シャルルはこうなる事が分かつていたかのような顔を浮かべた。

「分かったわ。でもいい？私やここにいるオスネコがエドラスに立ち向かうつてことは使命を放棄すること。それでも私達が裏切るような行為をしたなら——」

「——躊躇わざ殺しなさい」

エドラスからの使命が何なのかはシャルル以外分からぬ。ただその使命が自分の命に関わる程重大な事だと分かつた。それでもウエンデイは笑つて答えた。

「殺さないよ。だつて大切な友達だもん」

呆れたようにシャルルは笑つた。

「よし！ そんじや行くか！」

「あいさ！ ・・・ でもどうやつて？」

「・・・ 殴るか？」

「殴つて行ける場所じゃないわよ。そもそも何を殴るのよ」

シャルルは翼^{エーラ}の魔法を使い、ナツ達の顔と同じ高さまで飛びあがり、蔑むような目でハッピーを見て、翼を出しなさいと冷徹に言つた。その無言の圧力とでもいう何かに背を押されたハッピーは敬礼をしながら翼を出し、シャルルと同じように顔元まで飛んだ。

「私達の翼はエドラスに帰る為にあるのよ。残ったアニマからエドラスへと渡るわ」「燃えてきたな……！」

シャルルとハッピーがそれぞれナツとウエンディの背中に引っ付き、体を浮かした。「それじゃ……行くか！」

「あいさ!!」

背中に生えた翼が輝き、槍の如く真っ直ぐ空へと伸びた。それに次いでシャルルも同じように槍となり空へと羽ばたいた。冷たい空気が肌を刺すが、それを気にすることもなくさらりと高く高く。

「魔力を全開放しなさい！突つ切るわよ！」

「あい！」

一条の流星が空高く舞い上がる。何もない空に歪みが出来た。取り込むように空間が湾曲し――

——ボコつ

ボコボコボコボコボコ・・・！

「ふつはあー死ぬかと思つた——！」

そして、こゝにもアニマに巻き込まれなかつた姿があつた。

L v. 59 ミストガン

サクラの剣を作りに行つた際に訪れた武器の街、パンクストリート。これは使えるのではないかと思つて買った短剣4本セット。勿論ただの短剣ではない。

なんとこの短剣、4箇所に設置し、魔力を流すと刺した短剣を軸にバリアが張れるのだ。

何？アニマは魔力を吸い取るから意味がない？

ノンノンノン、この短剣は單なるバリアではないのだ。空間を固定するバリアなのである。ルーシイアがアニマに巻き込まれそうになつた時星靈のホロロギウムの助けにより別空間へと逃げていた為助かつたらしい。

ならば空間を隔離してしまえば巻き込まれないんじやね？と思つた俺。無駄に高い

金を払つて買った甲斐があつた。

「とは言えども、ここからどうするか……？」

服に付着した雪のような何かを取り払いながら周りを見渡す。面白いぐらい何もなく、真っ白な景色が視界を覆い尽くしていた。ここからどうにかしてエドラスに行くための手段である彼探さなければならない。歩いていればその内見つかるか、と楽観しながら一步進む。

——ボコつ

「ん？」

すぐ足元から奇妙な音がした。ふと見てみるとなんの凹凸もない地面に一つの盛り上がりが出来ていた。こんなものあつたか？と疑問に思うと同時にもう一度ボコつ、と音がした。

——ボコボコボコボコツ

「ふはあーー!! 一体何が起きたんですかこれ!?」

降り積もつた何かから首を出したサクラが現れた。自然と合う目と目。

にげる
さける
よける
むしする◀?

「あつ!? なんで助けてくれないんですか!?」
「俺に首だけの知り合いはいない」

躊躇わざ歩く。ナツ達を見かけていないことはすでにエドラスに行つた事なのだろうか? こちらにもエクシードがいたら翼でエドラスに行けるものなら残念ながらない。

「ちょつ、助けてください!」
「・・・はあ」

助けないわけにも行かず一度離れたサクラの方へと向かう。先日俺がナツにして

やつたように首から下が埋まっているサクラは助けを今か今かと待ちわびる。

そんなサクラの頭の両側を掴んだ。

「え？」

「引っこ抜くから力入れろよー」

「いやいやいや！ もうちょっといい方法がありますよね！？」

「え？ 腕が出るまで掘れと？ 嫌だよ面倒くさい」

「酷い！」

5分後・・・

「頭ではなかつたからまだいいものも肩でやります？ 危うく脱臼する所でしたよ？」
「でえじょうぶだ。骨はくつつく」

「うわあ、鬼」

サクラのドン引きしたかのような目をスルーし、改めて周りを見渡す。物影がなれば人影もない。さて、ここからどうしたものか――

「お前達は巻き込まれなかつたのか？」

聞き覚えのある声が聞こえた。さつきまで足音もなかつたのに振り返つてみると目元だけを残して後はバンダナで顔をグルグル巻きにした男が立つていた。足音とか何もしなかつたけど音を殺して歩くのがクセにでもなつているのだろうか。

「ミストガン……」

「ミストガンつて……確かS級の!? 私初めて見ました」

「まあお前ミストガン来た時爆睡してたもんな」

ミストガン遭遇イベントとも呼べるそれ。クエストを受注する際見られないようにマスターを除いたギルド全員に催眠をかけて眠らせるのだが、俺は写輪眼を使う事で眠らなかつたのだ。ミストガンはその時しくじつたみたいな目をして、二、三度頭をボリボリとかいたあと、「この事は内密に」とだけ言い残して去つて行つた。とまあ会話自体は少ないものも、顔を見れば分かる知り合い程度の仲である。

「ここにいるつて事は何か事情でも知つていいのか？」

「ああ、今回の件は私の責任もあるからな」

ミストガンは己の顔を隠していたバンダナを掴み、剥ぎ取つた。俺は前世で知つてい

たものも、何も知らなかつたサクラは驚愕を顔に表した。青髪に、右目にタトゥーが刻まれた青年。つい先日一緒に行動し、捕まつた彼の顔はまだ新しい。

「ジエラール……!?

で、でも捕まつたはずじゃ……」

「まあ待て、俺は捕まつた所は見てないがしつかり護送車の中に叩き込まれたんだろ。そう楽に脱獄出来る所でもないようだしな……この世には自分と似たやつが3人いるらしいしそれだろ」

刀を抜いて構えるサクラを手を横に伸ばして抑制する。ミストガンは話が早くて助かると言い、自分の指を空へと向けた。

「端的に言おう。この街は遙か上空に存在する都市、エドラスによつて消滅した」

はつきり言つて訳がわからない。

思わずサクラは脳内が？マークで埋め尽くされたが、ジエラールと全く同じ姿の青年に気を抜かず、いつでも攻撃出来るよう身構えていた。だと言うのに、ジョニイは身構えてもない。ジョニイは少し考えるそぶりを入れ話した。

「そのエドラスっていう所は何の目的があつてこの街を消したんだ？後なぜお前はそん

「な事を知つてゐる?」

「エドラスという場所は魔力が有限。その為アーニマと呼ばれる魔力転送装置をこちらの世界に向けて開き、魔力結晶^{ラクリマ}として抽出しているんだ。そして今回その狙いとされたのが——」

「この街だった、ということか」

「ちよ、ちよつと待つてください。そのエドラスつて所が魔力が有限なら、そのアーニマつてやつを何度もこちらの世界に作つてたんですか?」

だとすると大問題だ。見知らぬ世界からの攻撃なんて防ぎようがない。街一つを秒で吸収する魔法が何度も発動されたら地上が漂白されてしまう。

「ああ。魔力を抽出しようと何度もアーニマを作つていたさ。だがそれらは全て私が閉じていた・・・だが魔力を取れないことに苛立つたエドラス側の人間は・・・」

悔やむように目を閉じるミストガン。言葉の先は何となくだが分かつた。人間では閉じられない程の巨大なアーニマを作り一つの街を消した。

「そして私がこの事態を知つているのは私がエドラスから来た人間だからだ」

「成る程な・・・」

ジョニイは一度曇りがかった空を見上げた。そしてゆっくりと顔をミストガンに向けてさも当たり前のように言った。

「で、俺たちは何をすればいい?」

「・・・信じるのが早いなお前は」

「こんな状況で嘘をつくのも馬鹿らしいだろ。それにお前は本当に悔しそうな顔をしていた。ならそれが偽物である訳じゃねえ」

それに、と言葉を続けた。

「お前だつてこのギルドのこと好きなんだろ?」

ミストガンは一瞬、驚いたような顔を浮かべやれやれと呟いた。そして背中に何本も背負われている杖のうち5本を無造作に掴み、それらを宙に投げた。

「お前は不思議なやつだ。まるで全部分かっているようだ」

「そう見えるか?」

重力によつて落ちてきた杖がジョニイとサクラを囲うように突き刺さり、5本の杖を支点に魔法陣が刻まれた。

「お前達にやつて貰いたいのは2つだ。まずはナツやウエンディのような滅竜魔道士を

見つけて欲しい。きっと体内の特殊な魔力でアニマに巻き込まれなかつたはずだ。それにエドラスでラクリマにされた者達に滅竜魔法をぶつけると元の姿に戻せるミストガンが自身のズボンのポケットを漁り、黒い丸薬が入つたガラスのボトルをジヨニイへと投げた。

「それはエクスボールという。エドラスでは体内の魔力は外へと逃げ、魔法が使えなくなる。それを防ぐ薬だ。それを飲ませてくれ。勿論お前らもな」

そして――

――王の野望を防いでくれ――

魔法陣が起動した。一際輝く視界。世界が無になるかのような光が視界に入り目を瞑つた。そして――

L V. 60 トランスフォーム

まるで御伽噺のような世界。見たことのない鳥、空に浮かぶ川、様々な花が入り混じり鼻孔をくすぐる美しい花々。そして何より空に浮かぶ大地――

とは言えども地上にた時から魔法が使える時点で御伽噺みたいなもんだな。

天空に存在するもう一つの世界、エドラス。そこにミストガンの魔法でやつて来たものも――

「……？」

ストーリーの流れは知つていても流石に場所までは分からぬ。取り敢えず王都を目指さなければならぬが、方向すら分からぬ。ミストガンぬ。送るなら王都に近いところにして欲しかつたものだ。

「アルサーん。見たことない生き物が居ますよー！」

「遠足じやないんだぞ・・・」

サクラは4枚耳のウサギと追いかけっこしていた。思わず頭を抑える。てつきりナツ達と同じでエドラスの妖精の尻尾に辿り着くものだと思ったがそうではない。

「うわー。モフモフしますー」

キュー・キューとまるで助けを求める鳴き声を上げるウサギもどきを無視し、サクラは顔を真っ白なお腹にダイブさせていた。こいつは現状を考える力はないのか・・・？

「おいサクラ。遊ぶ暇があるならもう少し頭を使つてこの状況をなんとかしてくれ」「そんなこと言われてもですねー・・・」

まあ何をどうすればここから先に行けるのか俺にも分からない。

「はあ、タクシーでも来ないかなあ」

「こんな大自然に囮まれた場所に来るわけがないですよねー」

思わず地べたに大の字に寝転がる。意気揚々として来たはいいが、まさかここで食え死に……？

「あれ？ 何か聞こえません?」

サクラが抱いていたウサギもどきから手を離した。ウサギはキュー！と叫びながら颯爽と茂みの中に入り何処に行つたのか分からなくなつた。俺は耳を地面に当て、音を調べる。何かが唸るような断続音。しかもかなり早い。

「これは……本当に車なんじやないのか？」

「いやいや、まさか……」

音が近づく。期待の眼差しを音のする方向へと向けた。聞き慣れたエンジン音。地面を滑走する4つの車輪。

「タクシー來たアーネー！」

「アルさん！」

「応よ!!」

車体の上にTAXIの文字はないが、現地人に会えるだけ嬉しい。俺は車の行く手を遮るように正面へと立ち、運転手に見えるように親指を立てヘイタクシー！と叫んだ。

後になつて恥ずかしいと気づいたがそれだけテンションが上がつていたのだ。仕方ないだろう。

「よかつたですね。これで話が聞けそうです」
「ああ、あの車も止まつてくれそう——ん?」

赤い車体が急ブレーキをかけた。その勢いで空中へと飛び上がる。そして——

——車体が変形し始めた

「え?」

サクラと思わずシンクロしてしまう程の驚愕。車体はそれこそ口ボツトアニメのようにガキンガキン!と鉄の擦り合せる音を響かせ変形する。4つのタイヤはそれぞれ拳と足に、立方体に近い車体は細長く変形し、胴体へと。ナツが見れば目をキラキラと輝かせるのだろうが俺は思考が停止してしまつた。

——ズンツツ!!

地上に降り立つた衝撃で足元が揺れた。何の特徴もない車が突如トランスフォーム

し、ロボットへと。頭部であるヘッドライトが輝き、俺とサクラに向かって叫んだ。

「こんな所で何してんのか分からねえけど……倒す！」

俺はただ一言しか話せなかつた。

「なあにこれえ？」

ジヨニイとサクラが突如のトランスマードに驚いているその頃――

「ジュビアちゃん！俺もクエストに着いて行つていいかな……？」

「嫌よ。熱苦しい」

「そんなあ……」

「なつ……!!??」

顎からガコツと嫌な音がした。明らかに顎が外れた音だが戻すこともせずナツは窓

の外から見る妖精の尻尾の様子に驚きを隠せなかつた。ハッピーも似た様子だつたが、意識はそのままに、ごく自然にナツの顎を押し込み、元の位置に戻した。

「エルフマン！お前また失敗したのか！これで何度目だ！」

「お前は本当にダメだな！」

「すみません・・・！」

「ど、どうなつてゐるの・・・？」

ウエンディは顎の関節を外すことはなかつたが同じく驚きを隠せなかつた。地上で見た光景と真逆のことが起きていたのだ。

次第にどうなつてゐるのかとギルドに入るためのドアについているガラスに近づこうと体重が前に前に傾いた結果転ぶのは当たり前だつた。ズシャアと転ぶ2人に巻き添えになつたハッピー。シャルルは1人離れていたので巻き込まれなかつた。痛くててて、と呌く2人の前にしゃがみ込む影――

「おい、何者だテメエら」

その声に聞き覚えはある。ただ話し方はかけ離れているが。何だか嫌な予感がする

と直感が囁くも、ゆっくりと顔を上げるとそこにはファンキーな服装をしたルーシイが中々にドスの効いた目をこちらに向けていた。

「せんなんなんなん
!!」

普段とのギャップのせいか、思わずさん付けしたハツピー。ファンキーなルーシイはナツの顔をジロジロと見つめ、ハツとした顔でナツに抱きついた。

「ナツ・・・お前何処に行つてたんだ・・・心配してたんだぞ・・・

話し方が違えど心配する気持ちは同じだつた。取り敢えず歓迎されているようだと
思うと同時にルーシイの拳がナツの頭の両側に押し当てられた。

「人に心配させやがつて……お仕置きだ！」

「ギヤアアアア!! 何時ものルーシイじやねえええ!!」

「はあ？ 何言つてんだ？」

いつもであればナツに付き合わされルーシイが泣くのが当たり前のようになっていたが、ここでは逆になっていた。何時ものルーシイっぽくない。それだけではない。寒がりで服を重ねて雪だるまのように横へと肥大したグレイ、いつもの酒豪は宇宙の彼方へと吹き飛んだのか大人しいカナ。男らしくないエルフマン。目を点にするのが限界

である。しかしそんなナツ達の前に1人の少女が2階から降りてきた。
 「ジエット、ドロイあんまりお兄ちゃんをいじめないで。これでもお兄ちゃん頑張つて
 いるから」

白のショートヘアを揺らしながら、諫める声に聞き覚えがあった。もう二度と聞けな
 いはずだった声。ミラジエーンとよく似た顔の少女にナツはルーシイのグリグリから
 素早く逃げ飛び込んだ。

「リサーナーーーー！」

「何しとんじやワフレエ！」

「へぶつ！」

ルーシイの回し蹴りがナツの頬に突き刺さった。随分とアクロバティックになつた
 ルーシイにハッピーはカチカチと歯を鳴らした。恐るべしルーシイさん。

「だつてよ・・・リサーナがよお・・・」

「だつてもクソもあるか。全く、リサーナ見るなり飛び込んだりして・・・」

「どうして・・・みんな変わつてる」

「違うのよ。この妖精の尻尾は私たちの探しているものではないわ・・・エドラスの妖精
 の尻尾なのよ・・・！」

シャルルが思い立つたかのようにギルドを出る扉へと向かつた。何だ何だ?と言葉の波が広がり外へと飛び出そうとした時――

「――妖精狩りが来たぞ!!!」

それは悲鳴であり叫びだつた。ほんの数秒前まで笑いあつていたのに、皆が皆顔を蒼白とさせ頭を抱えた。

「あいつら・・・もう見つけたのか・・・!」

「幾ら何でも早すぎるだろ・・・!」

止まることのない絶望を前に、怒りを吐き出す。しかし、それをしても時間の無駄と分かつていたルーシイは顔を歪ませながら、操縦席にいる、レビイへと、溜め込んだ怒りを吐き出すように叫んだ。

「おい!クソレビイ!早くしやがれ!」

「分かつてるよクソルーシイ!」

何も分からぬいウエンデイは「あ、性格の良さも逆転しているんだな」と内心思つた。遠くから何かの咆哮が聞こえた。

ナツは顔を窓へと押し付け空を見上げた。

空を見上げら地を照らす太陽が何かによつて遮られた。最初は点であつた何かが近づく。その度、点は徐々に形を表し――

翼の生えた魔物だった。一本の木の中に作られたギルドを優に超える巨体。人間な
くてそれこそ直視しただけで固めることができるように魔物がギルドに向かって突撃
しようとしていた。

「転送するよ！みんな何かに捕まりな！」

レバーが引かれた。

魔物の爪がギルドへと突き刺さるその直前、ギルドが地面へと沈んだ。ギルド内が大きく揺れる。何も捕まつてなかつたナツはその衝撃で体が浮き上がり地面に叩きつけられた。

「いってえ・・・何で急に襲われたんだ?」

「久しぶりに帰ってきて頭おかしくなつたの？」

「あ、もう1人の私」

地上のウェンディと比べて、身長も高く何がとは言わないが何かが大きい、グラマラスなウェンディは呆れた目でナツを見た。

「私達はこの世界最後のギルドにして——」

「闇ギルドじゃない」

当たり前のように放たれた言葉に、ナツは本日2度目になる顎の脱臼を経験することになつた。

L V. 61 羅刹

「はあ!? 何で俺たちのギルドが闇ギルドになつてんだよ!」

「この世界の魔力は有限。それを独占しようとした王にギルドは猛反発。結果闇ギルド認定したってわけ・・・どう? これで少しは思い出した?」

鈍器で頭を殴られたかのようだつた。

鉄の森や六魔将軍と同じ立場になつてゐるのだ。人殺しに加担をしているわけではなさそうだが、闇ギルドであるという衝撃はなかなか消えなかつた。それを心配したグレイはナツと肩を組み、椅子に座らせた。

「まあまあ、何があつたかは分からんが今は語り合おうぜ友よ」

「服脱げよグレイ・・・」

地上の2人の関係が犬猿の仲だとすると、エドラスの2人の関係は大親友。厚着の究極系に存在するエドラスのグレイの服に挟まれながらナツは流されて行つた。

「抵抗はしたんですか?」

「したよ。それこそ必死さ。なんせこちらは魔法で稼ぎを得てるんだ。全魔導師ギルドが直談判したよ……でも」

思い出したくない物を思い出したような顔を浮かべ、それと同時にほんの少し顔が青ざめた。

「王都の魔戦部隊のあるヤツが皆殺しさ……マスター達が身を呈して守っている間に私達は逃げれた」

「ああ……忘れようとしたのに思い出しちまつた。アレはやばかつたな。魔導師500人に対しても向こうは1人だぜ?」

「アレは人間の動きではなかつた」

エドラスにおいては最強の2人であるジェットとドロイが悔しそうに酒が入ったジョッキを机に叩きつけた。

500対1。圧倒的な数の差なんてものじやない。勝ち目すらないはずの戦いを勝つた程の人は一体何者なのか。

「あの……魔戦部隊ってさつきギルドに攻撃してきた人ですか?」

「あんた……本当に何も知らないんだね。その答えはYES。さつき来たやつは『妖精狩り』の異名を持つエルザ・ナイトウォーカー……そしてあんたもこの名前だけは覚

えときな」

「——一夜にして魔導師ギルドを妖精の尻尾以外を刈り尽くした《羅刹》の異名を持つ

つ」

「——ジョニイ・ナイトウォーカー」

聞き慣れた二つの名前。只でさえ頭がキャパオーバーしそうな2人に、更なる問題が詰め込まれた。

轟！機械仕掛けの拳を空を裂く甲高い音を盛大に響かせる。見た目とは裏腹にかなり機敏な車のロボットは俺との距離を詰めると同時に掬い上げるように拳を放った。俺は身体に魔力を流し強化すると同時に虚空に手をかざす。抜刀の動きに合わせ呼び

出された黒の刀。反応出来ない速さではなかつたが、それでも少しの遅れがあった。

「グツ——」

重たい金属音が響く。耐えたのはほんの一瞬。機械の拳が振り抜かれた。地面を滑るように後ろへと体が移動する。万力の力を足に込めなんとか最小限の移動に保つ。「アルさん！」

「構うな！ 来るぞ！」

ロボットの上半身のみが回る。両腕を真横へと伸ばし回転する様は独楽のようだ。サクラはその場で屈み込み自分の顔を殴る独楽を避け、距離を詰める。人が乗つてゐるであろう胴体部分に銀に輝く刀身を向けた。今更避けれるものではないだろう。しかし俺は敢えて声を出した。

「待てサクラ！ あまりそれを傷つけるな！」

「——ツツ！」

ギリギリで止まつた切つ先。ロボットは足についているタイヤを唸らせ、俺たちと距離を取つた。サクラも何故という目で俺の場所まで一度後退した。

「何故止めたんですか・・・!?」

その疑問に俺はなんと答えるか考えた。赤の車体、炎のエンブレム。そして何処か聞き慣れた声。知つてゐるからこそ分かる。アレはエドラスのナツだ。何故俺たちに攻

撃を仕掛けるのかは分からぬが、あの車体を傷つけることは物語の構成上地上から来たナツの移動手段がなくなつてしまふ。だから無傷で、そして出来るなら説得してなんとかするしかない。

「あの声に聞き覚えがある。誰が乗つてゐるか確認したいし、アレをうまいこと奪い取れたら移動手段が取れる」

我ながら下衆な考え方だと笑う。サクラは不服そうに納得してくれた。

「いいか？出来るだけあの車に傷をつけるな」

「アレ相手にそれが出来ますかねえ・・・」

サクラがため息をつく。俺もため息をつきそうになつた。車体が駆動音を響かせ距離を詰める。

『何で攻撃をしない』

憎しみや戸惑いが混ざつた声だつた。そしてやはりというかその声はナツと同じだつた。俺は警戒心を埋めさせるために刀を地面に突き刺してに何も持つてない状態にした。

「俺は今ここに来たばかりだ。何も知らない。逆に聞きたいんだが何故俺たちを攻撃したんだ？」

『何でだと？お前らは俺たちから大切なものを全部奪つたんだ。ならその怒りをぶつけ

るのは当たり前だろうがツツ!!』

キユルルルル!!地面に接触しているタイヤが物凄い速さで回転する。土を舞い上げ、迫り来る巨体には思わず恐怖を感じた。

というかエドラスの俺は何かやらかしたのだろうか。いや、ナツの言葉の意味を考えると俺は王都側の人間でギルドを壊して回ったのだろうか?疑問は尽きない。だが今は――

「クソつ。話聞けっての」

悪態をつく。地面に刺しておいた刀を抜き、構える。だからあの時刺しておいた方が良かつたんですよ、と同じように構えるサクラ。

ロボットが迫る。2人同時に引き下がる。元いた場所に拳が突き刺さった。元いた場所には小さなクレータ―が出来ており、まともにくらつていれば身体を強化してあるとは言えども骨の1本2本は簡単に砕けていただろう。

『逃すか!』

ギリギリと音が響く。放たれるのを今か今かと待ちわびているようだ。3秒間溜められた拳はロケットじみた一撃。

「サクラ――」

「武源解放」

流水の陣』

アガートラム

言葉よりも先に理解していたサクラ。銀の刀身が川のように緩やかに揺れる。

川の中に巨石があれば、水の流れは石を避けるようになる。ならばそれと同じ。人を巨石と例え、迫り来る拳は水。揺らぐ刀身は川の流れ。ロボットの拳が揺らぐ刀身に当たる。本来であれば真っ直ぐに伸びるはずだつた拳がグニヤリとその軌道を変えた。

『なつ!』

「ナイス――！」

目を起動させる。ロボットの動く軌跡が確かに目に見える。それと同時に魔力を感知する。サーモグラフィーのように世界が色づく。灰色で描かれるロボットに一箇所虹色で描かれる。ここだ、足に魔力を叩き込む。ゴウッ！と風を浴び一瞬で迫る。足で首を挟み込むように体を固定し、頭部に刃先を向けた。

「こ」にラクリマがあるんだろう？もう一度言うが話を聞いてくれ

無言、これはどつちだという疑問。攻撃するのかしないのか。まあ、ナツが攻撃してきても俺はラクリマを壊さない。ただの脅しだからな。

ガタン、音が響く。俺はロボットから距離を取つた。攻撃体制は取らない。縦長だつたロボットが音を響かせるたびに、元の車へと変形していく。何とかなつたとため息をつき、俺は車の窓に近づいた。

「話を聞いてくれる気になつたか」

「ああ、アイツだつたら話すことなく殺しにきただろうからな。信じることにした
やはりとか何とか、窓から顔を出したのはナツそのものであつた。

L v. 62 第零魔戦部隊

——私の槍は何処だ

夜の闇と炎の赤が視界が覆う。見渡す限り赤赤赤。炎ではないもう一つの赤。全て人間の臓物から溢れ出した血。彼を止めるために真っ先に特攻した彼女だったが、ふと自分の槍がなくなっていることに気づいた。右腕を持ち上げ——

ない。右腕がない。サクリ、地に何かが刺さる音がした。見るな、と何かが警告する。だがもう遅かった。

槍を持つたままの腕があつた。ずるりずるり、と徐々に握る力がなくなり、ズチャと

血の沼に落ちた。

死体の山に立つその鬼を見る。人でありながらまさしくその姿は鬼。狙いを見つけたかのように歪んだ目を向け――

「夢か・・・」

最悪の目覚めだろう。暖かな陽光が部屋を照らす中、エルザ・ナイトウオーカーは冷や汗で濡れた服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びた。新たな服を着て、鎧を付ける。もはや身体の一部と化している鎧の重さは心地よかつた。ドアを開け少し開けると城下街が見えた。視線を上げる。空を流れる雲のようにプカプカと浮かぶ大地。その一角に青のラクリマが山のように鎮座していた。

「おはようエルザ。相変わらず早起きだねえ」

「シユガーボーイか。早起きというのならそちらもだろう」

エルザの反対側の通路からやつてきたシユガーボーイは確かにね、と爽やかな笑みを浮かながら、少し生えたヒゲをなぞる。リーゼントにケツアゴとかなり特徴的な彼だ

が、その実力は本物であり第四魔戦部隊長の位を持っている。その彼の後ろを少し遅れて来る少年は眠たいのか大きな欠伸をしていた。

「おいヒューズ。見てみろよ」

「なあに？俺昨日も遊園地で働き詰めで——つてスゲエ！なんかスゲエなおい！」

手すりに身を乗り出し、好きなおもちゃを見つけたようなキラキラした瞳でラクリマを見つめるのは第三魔戦部隊長のヒューズ。エルザよりも若く部隊長になつた彼は一見ただの少年に見えて頭脳明晰で冷静た判断を出せる男だ。ただ語彙力が崩壊するのが玉に瑕なのだが。

「なんかスゲエを通り越して……スゲエ！マジスゲエ！なあ、シユガーボーイ！」

「んー凄い凄い」

軽く受け流すシユガーボーイ。もはや慣れっこだつた。

「エルザよ……また逃したらしいな」

足音もなく近づいてきたのは加齢により腰が少し曲がつた初老の男バイロ。科学者でありながら幕僚長でもある彼はニタニタと醜態を笑うような引き攣つた笑みを浮かべた。

「んー……残つたギルドは妖精の尻尾だけとは言えども彼らは逃げ足がとんでもないくらい早いからねえ」

「でもそろそろ転送装置も切れるでしょ。時間はかかつてももうすぐヤレるよ」

妖精の尻尾の殲滅。エルザが王より直接言い渡されたその任務は中々上手く行かなかつた。その理由として他ギルドが持つてなかつた転送装置を持つていてこと。そして彼らが臆病が故に察せる危機感。この二つが重なりギルドを発見してもすぐさま逃げられてしまうのだ。

「ラクリマ抽出でヤツラもどう出るか分からんからのお・・・早く仕留めろ」

了解、と。ただ簡潔に述べる。自分のミスをどれだけ言い訳してもミスをしたことには変わりない。それにバイロは人の苦しむ様を見るのが好きなやつだ。だからあえて何も反応しない。

「・・・フン」

バイロの後ろに立つていた長身な獣。目元に傷が入つた歴戦の戦士を思わせる彼はパンサーリリー。神の国エクスタリアから追放されたエクシードの1人。王都に入つてしまもなくその腕が認められて第一魔戦部隊長に任命された彼は空に浮かぶラクリマを見ても何も思つてないのか一度見たきり、過ぎ去つて行つたバイロの後を付いて行つた。

その彼の後ろ姿を見てシユガーボーイとヒューズは呆れた目をしていた。

「なんだあいつ。興味なさそうだな。あんなスゲエのに」

「ううん。最近軍の強化が気にくわないらしいからそこで苛立つてているのかもねえ。それとも——」

「また彼女に負けたのが悔しかつたのかな?」

コツコツと、大理石の床を鳴らす音が2つ聞こえた。シユガーボーイが噂をすればと笑いながら言う。影を指していた全貌に光が差す。現れたのは紋が刻まれた純白のマントに煌びやかに輝く銀の鎧。サラサラとした絹のごとき白い髪が光によつて更に美しく見えた。天使のように見えどその目に宿す鋼のような冷めた瞳は死神。

——第零魔戦部隊長 サクラ・ナイトウォーカー

「流石<死を告げる天使>と呼ばれているだけあるねえ……様になつてる」

エルザの前で止まる。両者睨み合うような形だ。謎の緊迫感が生まれその場にいる全員が思わず黙り込んだ。ヒューズは何だこの緊迫感と内心ツッコミを入れた。

睨み合うこと約10秒。両者口がゆつくりと開く。

「何だか久しぶりだなサクラ。任務か？」

「ええ、レジスタンスの弾圧で……中々手こずりました」

（何だつたんださつきの緊迫感!）

ヒューズは自分の内にしたツッコミをもう一度己の内で行つた。ワザワザ黙り会う必要もないだろうと言いたいがガールズトークを邪魔するわけにもいかない。

「ラクリマの抽出も上手く行つたことですからね……反乱分子が何かと企てるんですよ」

「それは大変だつたな。そうだ……仕事終わりだ。この後暇か?」

「え?まあ時間はありますけど……」

「そうかそうか!…なら飯に行かないか?美味しい店を見つけたんだ」

ピクリ、とサクラの肩が少し上がつた。美味しい店。甘美な響きだ。美味しいものを食べるとは幸せなことだろう。ただし人によつて美味しいの定義は異なつてくるが。

「へ、へえ……それはぜひ行つてみたいですねえ……」

目が泳ぐ。サクラは知つていた。エルザ・ナイトウォーカーが狂つてているとしか言いうがないほどの辛いもの好き言うことに。初めてエルザに食事に誘われ楽しみにし

ていたのに、出てきたものは赤一色だった。まさに地獄だろう。

『さあ、今日は私の奢りだ！食え！』

何を、と聞き返さなかつたサクラは賢かつた。マグマのよう^にグツグツと何かが煮えたぎる何かを食べた。そのあとは何も覚えていなかつた。ただ記憶の中にポツカリと穴が空いたような気持ちになつたことは確かだつた。辛味は人を壊す。

「で、ですが任務の報告しに行かないと……ですからジョニイが代わりに……」
「隊長、もう報告し終えます」

——第零魔戦部副隊長 ジョニイ・ナイトウォーカー

サクラの後ろで待機していた彼が遠くを見ながらそう告げた。サクラはすぐに後ろに振り向きキッとエルザに見えない角度で睨みつけた。彼に背負われている大剣が体を表しているのか返事も無骨。ただ内心彼はパニック状態だつた。それはエルザと知り合つて間もない頃の話。エルザから飯に行かないか？と言う誘いを受けたサクラとジョニイ。彼は初めてエルザと食事に行くことになつたがサクラは冷や汗を垂らしながら報告があると言つて立ち去つていつたのだ。何だ？と彼は思つたが特には気にせずエルザに付いて行き——

後は語らなくても良いだろう。

故に押し付け合い。ヒューズとシュガーボーイはエルザの恐ろしさを知っているため我関せず。浮島のラクリマを見てあれ何年分だろうねー、と言った会話をしている。

「そうですか。でも武器の手入れをしなくては——」

「俺がダイヤモンド級に磨き上げて置きますからどうぞ行つてくださいよ。俺なんかほつといで」

「いえ、部下の仕事は私の仕事。代わりにやつておいてあげましょう」

「いやいや、隊長にそんな事させるのは我が一生の恥。死んでも死ねませんよ」

「・・・」「・・・

二人の視線の間に火花が散った。食事を誘ったエルザ以外がその熱線が可視化される。

(いいから行きなさい！隊長の代わりに死になさい！)

(部下の仕事は隊長の仕事つてさつき言つてました。だから代わりに行つてください)

そんなやり取りが簡単に読み取れてしまう。シュガーボーイは相変わらず仲がいい事と内心呆れつつ笑った。

「分かつた分かつた。二人とも来れば問題解決だ。さあ行くぞ」

「あ」

エルザの脇に抱えられて二人は連れ去られた。シユガーボーイとヒューズに向けられた視線はまさしく捨てられた子犬。助けてやりたい。だけど死にたくない。だからこそ二人は地獄に連れ去られる一人に敬礼をした。

(後で覚えてろチクショオオオオオ!!!)

そんなジョニーの呪いじみた心の声が二人に聞こえた気がした。・・・気がしたのだ。

L V. 63 再開

「ジョニイ・ナイトウォーカー？」

「サクラ・ナイトウォーカー？」

二人揃つておうむ返し。それ程までの驚愕をエドラスのナツ・・・ナツ・ドラギオンから聞かされた。揺れる車体の後部座席で心地よい揺れの中、ナツは顔色を変えずそう言つた。

「おう。王都の魔戦部隊の中でも飛び抜けたヤツが配属される零隊の中の隊長と副隊長がここでのお前らになるらしいな」

「マジかあ・・・」

俺のことだからてつきり妖精の尻尾でアホみたいなことしてるものかなあ、と思つていたら王都側の人間で？零隊とかいうなんかヤバそうなグループにいて？サクラの手下？

「あ、アルさん私の部下ですって……めちゃくちや見てみたいです……」「焼くぞ」

腹を押さえて笑いを何とか堪えるサクラに恐怖の一言。が、おさまりそうではない。こーんなチンチクリンの部下……恥ずかしくて穴があつたら入りたいわ！」

「む、チンチクリンつて……私のことどう思つてるんですか！というか心の声が漏れてるんですよ！」

「ああ、わざとだからな」

「なつ、言いましたねえ！」

「おいおい、車の中で暴れるなお前達！」

しかし、零隊とは……某オサレ漫画のブ○ーチだつたら最強の隊だし、どこぞの最期の冒険ゲーム零式でもトップクラスの証の番号である。まさかこんな怠けきつた俺が……いや、そんな俺だからこそエドラスでは優秀だつたのか……なんか悲しいなオイ。

「つたく……とにかくお前らはヤベエやつとして俺たちの間で有名だ。〈死を告げる天使〉サクラ・ナイトウォーカー。大剣と短剣を使つた予測不可能な剣戟を繰り出す特攻隊長。大剣を使いながら俊敏な機動力で敵を屠ってきた」

「〈死を告げる天使〉……」

「〈羅刹〉の異名を持つジョニイ・ナイトウォーカー。大剣、二刀流、弓を場面によつて使い分ける。500対1でも勝利を収めるヤベエやつだ」

「俺なんか恨みでもあんのか？」

「ないつて言えば嘘になるな、とナツは言つた。「いや、あるんかい」と声に出してツツコミたかつたが、何やら真剣な様子。サクラの頬を引っ張るのをやめて座り直した。

「全ギルドの撤廃はさつきしただろ？」

「ああ、全ギルドが同盟組んでレジスタンスとして活動して何とかつて話だろ？それが何だよ」

ナツは思い出したくないように顔を下に向けた。

「総勢500以上いた魔導師軍を虐殺したのはお前だ」

「500って・・・その中にはS級の人達もいたんですよね」

「500の内S級の魔導師は10人いた。その内生き残ったのはミラ姉だけだ」

「ええ・・・俺強すぎじゃない?」

「強いで済む問題じゃねえよ。俺はお前のことは理解したけど他の奴らがお前の顔見たら血相変えて襲つてくるぞ」

エド拉斯の俺・・・何しとんや。俺はS気のあるルーシイを見たかつただけなのによお・・・これじや見れねえじやねえか!

見れても殺されるわ!

「500対1つて・・・勝てるものなんですか?」

「普通は勝てねえよ。けどヤベエのが集まつている零隊だからな」

500対1。俺が経験した多數との戦闘は鉄の森だけで、その時もエルザの協力があつた上に、鉄の森自体の戦力もたいしたことがなかつた故の勝利だった。倒した数も50をいつたかいつてないか。その時の俺とはおそらく成長しているはずだが500を相手に出来るエド拉斯の俺は一体何者なのだろうか。

ブレーキのかかる音がした。慣性によつて体が前に飛び出すのを踏ん張つて耐えた。窓の外を覗くと大都市がすぐ目の前にあつた。

「俺が送れるのはここまでだ。ルーシイに帰つてくるように急かされてるしな」「ああ、すまないな。迷惑かけちまつて」

「怨敵に謝罪の声をかけられるとは変な気分だな・・・」

ナツはゴーグルをかけ直し再びハンドルを握り直した。

「あいつらがあんた達みたいなやつだつたらまた違つてたのかもな」

寂しげにそう言い残しナツは過ぎ去つて行つた。エドルーシイに呼び出されたといふことはナツ達もギルドから次の街ぐらいに行けたのだろうか・・・心配が胸によぎるがナツ達の心配をしてる場合じやない。俺達も王都に行くのだ。何が待つて居るか分からぬ。しかし――

「ナツ達が来るまで俺達は何をしたらいいんだ・・・？」

妖精の尻尾から歩くこと約半日。ルーエンの街という訪れていたナツとウエンディ、そしてエドラスのルーシイは喫茶店で持ち合わせていた話をしていたわけだが――

「私が本書いて!? 鍵の魔法を使って!? そんでお姫様つて……笑わせんじやねえよ!」

「やかましいところはそつくりだな」

「うるせえ!」

アースランドのルーシイと比べて男っ気が強いエドルーシイ。性格は違えどツッコミ力はほとんど同じだった。冷静に返事を返したルーシイの隣で困った顔で何かの筒を弄るウェンディが机の上にゴトンと落とした。

「これってどうやつて使うんですか?」

「馬鹿! 魔道具を公の場に見せるんじゃねえ!」

バツと伸びたルーシイの手が魔道具を手に取るといなや机の下に潜らせた。

「いいか? 魔道具の所持は法で禁止されてるんだ。禁止されてなかつたらあんな闇市でわざわざ買いに行く必要がないだろ?」

「この世界の魔力は有限……独占するために禁止したわけね」

「そういうこと」

「これはどんな風に使うんだ?」

「人の話を聞け!」

その時、喫茶店の外からガシャガシャと鎧の音を立てる騎士がナツ達を取り囲んだ。

ルーシイは苦虫を嚙んだ顔をして一度舌打ちをした。

「反逆者ルーシイ・アシュレイ！並びナツ・ドラギオン！魔道具の所持で貴様らを捕縛する！」

「何だいきなり!?」

「そりやあんだけ魔道具見せてれば嫌でも来る！」

50人からなる騎士が皆槍の穂先を向ける。逆らえば殺すと言つているようなものだ。50人を3人で相手にするには少しばかり厳しいが、エドラスのナツは中々のやり手。だつたらアースランドのナツも強いはずと僅かな望みを抱いたルーシイ。真っ先に騎士に飛び出し、手にした魔道具を掲げる。車から降りたら臆病になるナツとは大違ひ。これなら行ける！そう確信したルーシイであつたが――

「ファイヤア―――!!!」

剣の柄に似た魔道具を振るうとそこから炎の刀身が現れた。荒れ狂う炎はナツの使う火竜の咆哮に比べると劣るがそれでもなお高火力。ナツは決まつたと確信し、立ち昇る爆煙の中に倒れる騎士を見ようとしたが、城塞のごとく並ぶ兵達に変わりはない。半透明な何かが騎士の前に立ちふさがつており、それが火を打ち消したのだ。

「全然使えねえじゃねえかコレ！」

「出力考えればもう少し使えたわ！」

ジリジリと距離を詰める騎士達。ウェンディは筒の蓋が取れず、二人の背後で腕をプルプルと震わせながら必死に取ろうとしていた。

「おいルーシイ！何とかしてくれ！」

「何とかって・・・無茶言うな！」

指揮官の手が振り落とされる。それを合図に並んでいた騎士達は一斉に走り出し槍で貫こうとして来た。その時、ポンツ！と場に似合わない軽い音がした。

「へつ？」

筒の中には何もない。驚きのあまり変な声が出てしまった。しかし、突如として突風が開いた筒を中心に集まりだし小規模な嵐を生み出す。中心地にいたナツとルーシイは突風に足を浮かされ中へと舞い上がった。風は集まり続け天へと登る竜巻となつた3人の体を打ち上げた。

「うおおおおお！やべえ！楽しいぞ！」

「そんなこと言つてる場合か！ちっちゃいウェンディ！その筒下に向けろ！」

「は、はいいいい！」

豪快に下へと振り下ろす。命を受けた竜巻はその行動通り豪快に下へと落下した。

「いつてえ・・・どこだっこ？」

「運良く備蓄倉庫にでも落ちたようだな。一先ずはここでやり過ごすか」

倉庫の隙間から外を眺める。ザツザツと靴を鳴らしあたり一帯を探る騎士達。見つかつたらひとたまりもない、そう思い息を潜む。

「いたぞ！こつちだ！」

体が跳ね上がる。何故見つかつたのか不思議だが逃げ出さなければ命はないと一步踏み出したが様子がおかしい。

「こつちに来ない？」

「でも『いた』って言いましたよね？」

こつそりと外を眺めると、騎士達に挟まれた少女の姿が見えた。その姿は見覚えがある。というかすぐ真横にいるルーシイと瓜二つの少女。

「ちよつと離しなさいよ！何よいきなり！」

「黙れ！お前には反逆罪で指名手配されている。大人しくこい！」

「どういうことだ・・・あれは、私か？」

「俺たちの世界のルーシイだ！間違いねえ！」

「でもどうやつてここに……？」

「そんなもんは後だ！ルーシイも魔法が使えねえはずだ！助けに行くぞ！」

「あ!? 今出たらます——」

騎士の輪の中から光が溢れ出す。突如の光に驚いた騎士達は手で光に入るのを防いだ。光が收まりそこにいたの、機械仕掛けの尻尾を持った鋭い目つきの男だった。

「なつ!?

「派手に吹き飛ばしなさい！スコーピオン！」

「ウイーアー！」

その命令が放たれると同時に砂塵の竜巻が騎士を空に舞いあげた。

L V. 64 悪なのか正義なのか

「白羊宮の扉 アリエス!!」

「ごめんなさい」と謝罪をしながら現れたか弱そうな女の子から放たれる羊毛に騎士達は絡め取られ

「巨蟹宮の扉 キヤンサー!!」

蟹なのに「エビイ!」とキレのある声で叫んだワイルドな男のハサミによつて騎士達の兜は割かれ、その下にある髪の毛を全て切り裂き、その頭皮が対抗用によつて激しく輝く。

騎士達で溢れていた戦場が一人の少女によつて壊滅していく。見たことがないな

い魔法に驚き下手な手出しが出来ないのもあつたのだろう。最後に残つた騎士はルーシイの奥義とされているルーシイキックによつて地に伏した。

「ざつとこんなもんね」

「おおおおおお!!ルーシイやるじやねえか!!」

ドヤ顔をかましているルーシイの肩を掴み、全力でシェイクするナツ。赤ベこのように首が上下に移動することなんて関係なしだ。

「お前ら！再会の喜びの前に先に逃げるぞ！すぐ追手が来る！」

「お、そうだな。行くぞルーシイ！」

「あんた・・・散々人を振つておいてそれはないんじやない・・・？」

郊外の森へ逃げ込んだ4人と2匹は折れた樹木を椅子代わりにし、話し合いがてら休憩していた。

「ところで何でルーシイさんはアニマに巻き込まれなかつたんですか？」

「ホロロギウムが助けてくれたのよ。『異常な魔力を検知しました』って言つて私を少しの間星靈界に連れて行つたのよ」

「なるほどね。別の空間にいたから巻き込まれずに済んだのね」

名前の由来がラツキーダからだらうか、ルーシイは運が良い。

「それで戻つてみたら周りは人もいなければ何もなくて困つてた所にミストガンがいて……」

「ミストガン？ 何であいつがいるんだ？」

「時間がないくつて言われてあまり説明はされなかつたけど気づいたらさつきの場所にいたつてわけね」

私の話はこれで終わり、と言つて背もたれである木に体を預けた。

「でも何でルーシイさんだけが魔法を使えるんでしょう？」

「ああ、それはね……」

そう言つてポケットから取り出したのは黒い玉が入つたガラス瓶。

「それは？」

「エクスボール。アースランドの人間がエドラスで魔法を使えるようになる薬。ミストガンがアースランドの人間に渡せって——」

「本当か!？」

ルーシイが返答する間もなく、ナツはエクスボールの入ったガラス瓶から一つ取り出すと、直に飲み込んだ。直後顔つきが引き締まり「でろお・・でろお・・・」と呪詛のように自身の手を見つめながら小声で呟いていた。

「ほんつつどう、こつちのナツとはえらい違いだな」

「まあ私が言うのもなんだけど、こつちの私と性格とか真反対だしね」

「となるとエドラスのナツさんは——」

ボツ!!!と抑えられていた元栓が外れたように火が勢いよく空に舞い上がった。その数秒後に聞こえる遠くから聞こえる叫び声。

「うおおお!!でたああああ!!!」

「ちょ!? 何だよそれ?!てか今のでアイツらがまた来るぞ!」

「さつきのお返しだ。倍・・・いや100倍にして返してやる!!」

「うわ、悪魔みたいな顔してる」

「竜だけどね」

炎が打ち上がりつてまだ1分も経っていないといいうのに草木を掻き分ける鉄の足音が連続して聞こえた。ナツは前に立ち、肺に酸素を溜め込んだ。

「いたぞ！捕らえろ！！」

「もうお前らなんかに捕まんねえよ!! 火竜の——」

口から炎が溢れ出す。極度の高温により所々青く光る炎は敵意を持つて騎士を睨みつけるかのようだつた。視界を覆い尽くす騎士達が迫つた瞬間、一瞬の幻覚だつたのか竜が見えた。

「——咆哮ッ!!!」

解き放たれた炎はまさに竜の放つブレスそのもの。騎士達は成すすべもなく竜の炎に巻き込まれた空に舞い上がつた。幸いにも鎧が盾となり外傷はないが、火の勢いによって大半の騎士は地に伏した。

「ふう、溜まつてたもんが出てスッキリしたぜ」

「アースランドの魔法つてどうなつてんだよ・・・」

「ああ、アレは異常だから気にしない方がいいわよ」

そう語るルーシイの目ははるか遠方を覗くような目。幾度となく巻き込まれた炎と

地に伏した騎士達と同じ干渉に浸つて いるようだつた。

「さあ次はどいつだ・・・俺はまだまだ余力を余して るからよオ・・・！」

「「ヒイイイイイイ!!!」」

凶暴な顔つきを見て反対方向へと走り出した騎士達を見て豪快な笑みを浮かべるナ
ツは悪役なのではないだろうかという疑問を胸に残しつつ、エドルーシイは次の街へと
歩き出したのだった。